

新 朝 文 庫

英国寮生物語  
(3)

祥曲星祈/和海 共著

---

仔牛ともぐら舎版

## 目次

- 一 ある悪夢……………(三)
- 二 ある騒動……………(二三)
- 三 ある降誕節 (Side vision of Atolos) ……(七三)
- 四 ある降誕節 (Side vision of Saga) ……(九七)
- 五 ある失恋……………(一三三)

ある悪夢

その晩、アイオリア・エインズワースとカミュ・ルーファス・パロウは、心から彼らの友人に対する卑劣な行為に憤りを覚え、大事に至らなかつたことに胸を撫で下ろした。

しかしながら、このパブリック・スクールに入学して学科表には印刷されてないところある生態学を学び、理想的な冷静さでそれを働かせてもいたので、暫く呼吸が不自由だつた事で咳き込み、大きく肩で空気を求めて揺れる薄い肩が視界にクローズアップされても、駆けつけたハウス・マスターや他の少年たちのように『無闇に』友人の体の具合を気遣う言葉をかけたりはしなかつた。

そつと、体を戸口の側に移動させ、放擲された石のように友人がこの部屋から報復に飛び出していかないよう目の体を腹に見立てて次の動向に備える。

彼らの友人、ミロ・アーヴィン・フェアファックス、所謂『チビで貧弱』な少年の怒りは部屋中に充満し、なおも膨張する気配を二人は確然と察していたからだ。

ふ、とアイオリア・エインズワースとカミュ・ルーファスはお互いの存在に注意がそれて視線を合わせた。そしてきつかり四秒後、アイオリア・エインズワースはカミュ・パロウと

反対側に視線を滑らせて苦々しく盛大に息を吐き出し、カミュ・パロウはそんなアイオリア・エインズワースを見て淡く、困惑の色を覗かせた笑みを浮かべた。

「だから！ あの時、ハロウインの時に止めるつて言つただろうが！」

アイオリア・エインズワースは堪りかねて一言叫んだ。

明けて翌日の正午。十一月九日。くすんだフェルト生地が、だらんと被さっているような気持様だつた。

スミス・ハウスのバックヤード、静かな水場の一角に、ミロ・フェアファックスはアイオリア・エインズワースに連れ込まれた。

三つの蛇口を備えたレンガの壁脇には、整頓された園芸用品や適当に積み重ねられた腐葉土の袋、錆落しのスプレー、数個のタワシが転がっている他は、ガランとしてそつけない。

アイオリア・エインズワースは昨晚のRAD以降、カッカしっぱなしだつた。

「止めろつてお前があん時言つたのは、別にオレが布団蒸しにされるつて分かつてたから止めたわけじゃないだろー！」

ミロも負けじと怒鳴り返した。それを見て、カミュ・パロウは折角人氣の無い場所を選んだのに、それも時間の問題

で徒勞に終わるだろうな」と予測した。

朝、食堂で食事が終わつたら応接室に来るように、とハウス・マスターに呼び出されて一時間。ミロ・フェアアックスはハウス・マスター、チユーター、フェローの三人がかりで昨晚のRANの首謀者の割り出しや、ミロ自身の学校生活での障害について根掘り葉掘り吟味された。

それは、ミロにとつては非常に苦痛な時間で、やつとそれから開放されたと思つた矢先、アイオリア・エインズワースに襟首を捕まえられて『白状しろ』と詰め寄られたのだから気分が攻撃的になつてると自覚しつつも、有める努力はもはや積極的に放棄していた。

「大体、なんで犯人が分かつてゐるのに言つてこないんだよ、お前は！」

アイオリアが焦れて大地を蹴飛ばしながらミロ・フェアアックスに畳み掛けた。

「教習たちには関係ないじゃないか！」

ミロは間髪を容れずアイオリアに応酬し、ぐいっとアイオリアを睨み返した。大きな鉛玉のような青い瞳は、いつもは陽気に持ち前の好奇心や楽天的な思想を反映してきらきらしているのに、今はイライラと落ち着かなく剣のある色に染められていた。

大体彼は、故郷ではいつも一目置かれていたのだ。

成績は常に優秀であつたし、正義感で弱者や年下の面倒見も良く、運動能力にも長けていた。

村では、フェアアックスさんの家の長男は本当に優秀で……と感心され、しつかりした「お兄ちゃんだ」と思われ、そう扱われてきたのだ。

家でもそれは同じで、農場の繁忙期になると、彼は普段から頼りにされている歳の離れた二人の妹の世話から、家の事まで任されていた。そして、決まつて言われるのだ。

『ミロがお兄ちゃんです。本当に良かった』と。

両親は親戚の前でも、如何にミロが大人びて頼り申妻のある子供か事有れば語り、それは側で聞くミロの自尊心を挫つた。多少、早とちりでおつちよこちよいな面もあったが、それは彼の愛嬌のようなもので評価を下げるものではなかつた。

それが……人間の数より動物の頭数が勝る人口百数十人の村から二五〇マイルも南下し、ケント州のカントリーサイドとはいえ人口数万の都市に居を移し、下級生の居ない環境での学生生活は彼の予想を裏切る事の連続だつた。

ここでは、彼は華奢で子供っぽい少年と扱われ、殆どの人間から世話を『焼きたがられた』年寄りや目上の人間にはそれなりに可愛がられてきた彼ではあつたが、同学年の人間から『頼りない』子供として扱われるなど夢にも思つていなかった。

何がそうさせるのか。

次々と被るカルチャーショックの波に溺れそうになりながら、ミロ・フェアアックスは考えた。考えた末に、自分の平均より低い身長と、母の故国イタリアの血が混じつた幼顔と、

くるくると巻きながら跳ねる金髪がいけないのだ、と判断を下した。

つまり、ここには外見でしか自分を判断する人間が居ないのだ、と。

実情は、ミロ・フェアファックスの飾らない素直な心情の吐露や、少しばかり北の訛りの残る発音や、パネ仕掛けの人の形のような瞬発力の軌跡が、背伸びをしたい年頃の少年達にとつて都合のいい無意の優越感を与えてくれるからに過ぎないのだが……。一方、自分を自分以外に見せる事に積極的な情熱を抱かないミロ・フェアファックスにとつて、そこはさっぱり感知できない部分だった。

「怒鳴りあつていたつて話は進まないよ……」

なるべくどこちらの肩も持たないように、一步引いた立場で自分を役立てようとするカミュ・パローウの声が、肩を怒らせる二人の少年に届いた。

ミロとアイオリアが一齐に自分側の正当性をカミュに訴え、彼を味方に付けようとして口を開いた。そしてそれは、一瞬の差でアイオリアが勝った。

「こいつがロバ並みにバカで頑固なのがいけないんだ！　そもそも三〇ヤードも離れた場所、しかも違うハウスの上級生が吸つていける煙草の注意なんて、なんでわざわざするんだ？　後ろや前で人が歩いているつてのに鼓膜が破れるような大声出しやがつて！　それで昨日みたいに逆恨みされて、部屋に押し込まれて布団蒸しにされて同室の全員がそれに巻き込

まれて……！

すつげえ不名誉なことだろうが！　自分達の部屋に敵の侵入を許して、その上それらには一矢も報いれず、拳句に隣部屋の人間がハウス・マスターを呼びに行つて窮地を脱するなんて、冗談じゃねえ！　それでこれからこいつがあいつらに直談判して何が変わるんだよ！

俺だつたらこの際利用できるものは利用して二度とこんな気が相手が起きないようにしてやるつて言つてるんだ！　それのどこが間違つてるんだよ！」

「だから！　これはオレの問題で、リアやカミュには関係ないつて言つてるんだ。巻き添え食わした事で腹立ててるんだつたら謝るさ。悪かつたよ。でも、絶対に先生とかハウス・マスターとか、大人になんとかしてもらつていうのはイヤだ！」

「お前……！」

アイオリア・エインズワースは顔を真っ赤にしてミロ・フェアファックスに掴みかかった。言つても分からないなら、体で言うことを聞かせるぞ、と。

それまで静かに二人のやりとりを見ていたカミュ・パローウは、慌ててアイオリア・エインズワースの腕を押さえた。

ミロ・フェアファックスは、すつかりアイオリアの剣幕に臍を曲げている。そこに更に高圧的な力を掛けたところで事態は悪化するばかりだ。

「ミロ、今の言い方はないと思うよ？　アイオリアは君の事は本気で心配しているんだ。君が、善意で注意を促した事は

いいことだと思ふ。どんな人にもそういう注意を臆さず出来る所は君の長所だよ。でも、それで君が毎回不利益を被つていては見ている方は気が臭じやないだろう？」

ハロウインの掃り道、ウエルダン・ハウスの花壇の影で、数人の上級生が煙草を吸っていた。音や匂いに敏感なミロ・フェアファックスが、幽かに流れてきたその臭いに気付いた。

本当なら、嫌いな臭いにちよつと眉間にしわを寄せて通り過ぎる程度の事だった。が、夜目の利くミロは知覚してしまつたのだ。吸殻を、つま先で穿り返した花壇の土中に投げ捨てるといつた上級生の行為が。

その花壇を、ウエルダン・ハウスのハウス・マスターの母親であるミス・ヒルトンが丹精している事を知っていたミロ・フェアファックスは、それで一言怒鳴つたのだ。煙草を花壇に捨てるな、と。

彼自身はそれ以上の事はしなかつたが、後ろを歩いていたグループの誰かが教官を呼び、件の上級生達は校則に従つた処罰を受けた。そして、処罰を受けた生徒達が徒党を組んで『生意気な下級生』に報復として行つたのが昨晚の夜だだったのだ。

事前に調べてあつたのだろう。消灯後、一番体力も体もしつかりしたアイオリア・エインズワースが二人掛かりで押さえ込まれ、他の少年達は布団で目隠し、仕上げのミロ・フェアファックスは、布団の上から窺息寸前まで数人掛かりで押さえ込まれるという一幕が発生した。

それは、アイオリア・エインズワースがやつつとの思いで壁を蹴り上げ、隣の部屋で既に就寝していたカミュ・パロウがそれに気付いて跳ね起き、本来なら鍵のかからない第三学年の部屋の扉が開かない状態に身を翻してハウス・マスターを呼びに走るまで続いた。

そして、ハウス・マスターが到着した時には来襲した一回はとつづくに姿を消していた。

結局、殴り返す事はおろか最後まで視界を塞がれ、必死にもがくミロの気配を二段ベッドの下で感しているしかなかつたアイオリアは、容赦なくミロの無謀さを攻め立てつつも自分の不甲斐無さに腸をぐつぐつと者統けていたし、ミロの飾らない反応や時折垣間見える精神性の純度の高さに感嘆を覚えていたカミュは、ミロに与えられた陋劣な行為に表情の強張りを感じ、けれど当事者のミロを氣遣つてなるべく穏かに接していたつもりだったのだ。

二人にとつて、ミロ・フェアファックスという人間は、時折ワンダーランドの住人でアンピリーバブルなトラブルメーカーだったが、彼の弱者に対する優しさや、自然に対する豊かな知識と愛情、それを全く隠そうとしない行動、音楽に零れる繊細な感情、そういつたものが渾然一体となつて、ミロとの間に生ずる頭の痛い『ズレ』を『好意』に変えてしまふというこれまでにない体験を味あわせてくれる前代未聞の存在だった。

つまり、かなり比重の重い友人に分類されていたのだ。

ぐつ、と奥歯を噛み合わせて返事をしないミロ・フェアアックスに、カミュ・パロウは言った。

「君が、教官や鬼に角大人の助けを借りたくないのとは分かった。でも、このままにしておくのは良くないと思うよ。この手の嫌がらせはエスカレートする。今回は逆恨みだつたけど、そのうち理由もないのに君をターゲットにするようになるよ。今のうちに、毅然とした態度で臨んでおかないと……」

「だから！ それはオレが一人でやるって言ってるんだ！ リアやカミュには迷惑掛けないで言ってるだろう！」

普段は、カミュ・パロウの落ち着いた話し振りをかなり好ましく思っているミロだったが、この時は彼の言い聞かせのような、宥める様な話し方にさつきまで一緒にいた大人達と同じ匂いの作爲を感じて生理的に怒鳴り返してしまつた。

白髪交じりの大人に子供扱いされるのにはまた我慢出来るが、同学年のカミュ・パロウに、何故ここまで弟のような扱いをされなくてはならないんだ？

ミロは、終始穏かに接してくれているカミュ・パロウにまで過剰な勢いを返したことに、ちよつと後ろめたさを感じたが、言つてしまつた言葉は巻き戻して消せはしない。罪悪感にますます苛立ちながら、ミロはどうにかしてこの場を逃れることばかりを一心に考え始めた。

「お！ 居た居た。声がしたからこつちの方だとは思つたが……  
おい、お前ら、こいつ借りてくぞ」

突然、蛇口をくつつけたレンガ塀の後ろからひよいっと現

れたアイオロス・エインスワースは、勝手な事をアイオリイとカミュに宣告した。

「兄貴……」

なんでミロを『借り』に『来た』んだ？ と発生した疑問がアイオリイの中で纏まつた。

同じハウスだ。アックスの話が兄の耳に入り、大いにミロを気に入っているらしい兄もミロの報復に名乗りを上げた、そういう事なのだろう。

「今は俺達とミロが話しているんだ。兄貴は後から来たんだからあつちに行つててくれよ」

アイオリイはむすつとしながら手で二つ年上の兄弟を払う仕草をした。

ミロは、自分の友人であり、半分は被害を分け合つた仲だ。報復劇だつてミロと分け合う順位は兄ではなく自分に優先があるはずだつた。

「そうはいかないんだな。俺もしがらない使いつぱしりでね。お前らの話は後で話し合つてくれ」

さらりと笑顔で言つて、アイオロス・エインスワースはミロの横に立つと彼の腕を引つ張つた。

カミュは、アイオロスの『使いつぱしり』という微妙な表現に、誰かこの人をそんな風に使っている人がいるのだろうか、と訝しんだ。ミロとはまた違つた印象で、誰の下にも身を置かないで見えるオーケストラの先輩らしからぬ言葉だつたからだ。

一方ミロはどつちに行つても今の自分には居心地良くない



事態になりそうだと察し、勢い良く大地を蹴つて逃げるを試みた。が、長い腕がミロの腰に伸びて巻き付き、白か灰色か判別しにくい空が視界一杯に広がったかと思うと、枯れた芝生が目飛び込み、体が大きく揺れた。

「じゃ、借りて行くからな」

ミロ・フェアファックスを肩に担ぎ上げたアイオロスは、実に清々しく年少組に挨拶して大股で歩き始めた。

その歩みの先に、ちらつと柔らかに光を吸収する灰汁色の髪と銀色の光を見たように思つて、カミュ・パーロウは息を飲み込んだ。

ジタバタと下ろせと喚くミロは、今度はオーケストラの先輩達の尋問に会うのだ。そこでハウス・マスターや自分達に言わなかった事を吐き出すとはとうてい思えない。帰つてきたミロの口を割るには今以上の手間暇が掛かるだろう。

隣には、兄に対して雑言を投げかけるアイオリアが居て、アイオロスの姿はどんどん遠くなつていく。兎に角今後の建設的な対策を練ろう、とアイオリアに言葉かけをするために、カミュ・パーロウは自分の気持ちを切り替えた。

アイオロスの取巻物を待つていた人物は、オーケストラのコンマスであるシオン・ハーシエルと、ミロの属する第二バリオリンのトップであるサガ・チェトウインドだった。

サガ・チェトウインドは、ミロから酒肴と崇拜の思いを捧げられている人物だ。

ミロにとつてサガ・チェトウインドは、同じバリオリン弾きとしての彼の憧れの具現だったし、人間として、その冷静さ、他人から払われる敬意の高さ、常に洗練された立ち居振る舞いは、『いつか』と自分に理想する姿そのままだった。そして、これまでに経験したことのない高揚感を自分に与えてくれる人物だった。

サガ・チェトウインドの前に立つと、ミロは訳もなく心臓がマラソン並みに稼働し始め、体中に血が二倍三倍の量で行き渡り、顔が真っ赤になる。何度となくそんな状態の自分をアイオロスを始めとするコントラバスの先輩や、ドウコ・オルグレンなどにからかわれたが、その場では言い返せず、突風のようにサガの目前から自分の体を去らせるのにウイングミア湖を五周するぐらいのエネルギーを使つて果てるのが上等な部類で、悪くすればほそほそとした会話をしてみようか、必要以上の大声で答えて相手をびつくりさせてしまおうか、といった具合でねずみ火花より始末に終えない自分の状態を持つて余っていた。

そんなわけの分からない機能が自分の体に搭載されているなど、全く知らなかったミロ・フェアファックスは、いつの間にかサガ・チェトウインドの姿を見ると回れ右をするか、側に居る誰かを捕まえて会話を没頭している『フリ』をしてみよう、という不甲斐なさを自分に許し始めていた。

つまり、それなりに、彼なりに、ねじの外れた蒸気機関車のようにちんぷんかんぷんな迷走激走を起こさないように気

を付けていたのだ。実に抜本的な事態の解決に繋がらない対処療法だとしても、ミロ・フェアファックスは真剣だった。

それが、今、今日、この日、このタイミンで、がつちりとアイオロスの腕に挟まれて聞き分けのない子供か、悪くしたら犬猫のようにジタバタ暴れるしか出来ない自分が、どんどんサガ・チエトウインドの側に近付いている。事態に気付いたミロは、指の先まで真っ赤になつてピクリとも動けなくなった。

あまりにも恥ずかし過ぎる。

じつとした所でミロ・フェアファックスの存在が消えて無くなる訳でも、格好良くなる訳でもないのだが、この場合、一番マシに思える行動といつたらじつとすることぐらいだろう。

動かなくなったミロ・フェアファックスを見たシオン・ハーシェルは、無言でそのままのぼうが手間が掛からないと考へ教会に向かつて歩き出した。

進行されて三時間。シオン・ハーシェルはミロの黙秘に対して始めの十五分で席を立ち聴解室から姿を消した。

『言わない』の一点張りに、一時間後にはアイオロス・エインズワースがサガ・チエトウインドを下がらせ、その後全く関係ない話題をミロ・フェアファックスに振りながら、思いもかけないタイミングでミロの口から首謀者の名前を割り出そうと揺さぶりをかけ続ける。そうして、ミロの握った手にはびつしより汗が浮かび、ようやく椅子から立ち上がった時

には椅子の布も牛暖かく湿氣ていた。

アイオロス・エインズワースは、優に十インチは差がある高みからミロ・フェアファックスを見下ろして不敵な笑みを大きく刷いた唇で「これで終わりだと思ふなよ」と重石をズドンと落とし、まるで、ランブから消えたり現われたりする魔物（ジン）のようにミロの目前からやつと消えた。

疲労困憊の状態で帰寮したミロ・フェアファックスは、のろのろと所々皮の擦り切れたバイオリンケースを手に取つて音楽棟を目指して歩き始めた。十曜の夕刻はオーケストラの活動が組まれている。これで少なくとも暫くはアイオリアの顔を見なくて済む。

幾らかほつとしたが、オーケストラに行けば、オルガニストのカミュ・パロウ、つい先刻まで背中から手を突つ込まれてバクパクと口を開閉させられそうになつたアイオロス・エインズワース、ずつと心配そうな表情で自分を見ていたサガ・チエトウインド、果てはたつた十五分間だったが抜きん出た存在感を残して立ち去つたシオン・ハーシェルと顔を合わせる羽目になる事を思い出し、ミロの胃は忽ち臍の下まで急降下した。

こうなつたら笑つて誤魔化してやるしかない。自分がたいした事じゃない、とへらへら笑つていれば余計な手出しはされないだろう。ミロ・フェアファックスは、一部の人間の心配と善意だけを基準にそう考へて、頬の筋肉を盛んに上下さ

「ミロ、ちよつと来い」

せながら八角堂までの道を小走りに進んだ。

ところが、練習開始から十分を過ぎてもパートリーダーであるサガ・チェトウインドの姿は無かった。最前列の二つ並んだ椅子の右側がガランと空席で、その向うに明らかに困惑した学生指揮者の姿があった。彼の困惑は、サガ・チェトウインドの不在一つに対するものではない。見回せば、錚々たる顔ぶれが未だに空席のままなのである。

コントラバスのトップであるジョン・スチュアート、中堅のアイオロス・エインズワース、パーカッションのトップドウコ・オルグレン、トロンボーンのトップ ロバート・ワイズマン、ファゴットのフレデリック・マコーマック、トランペットのトップ ステファン・ブルックフィールド、ファースト・バイオリンでシオンの隣に座るリチャード・アードマン：おおよそそのパートのトップが居ない計算だが、ファゴットのマコーマック、コントラバスのアイオロスはトップではない。更に三分が経過し、個人練習をしていた面々もその手を止めて口を動かした頃、空席を埋める人物達が一気に八角堂に流れ込んで来た。その理由を、あちこちのパートで求める低い声が漣のように起こったが、一番最後に入ってきた厳しい顔つきのシオン・ハーシエルの雰囲気には一斉に静まり返り、二時間半の練習はいつもと同じようにあつという間に終了した。

にこにこしたドウコ・オルグレンに呼ばれてミロ・フェアファックスは、ほつとしながら黒髪の東洋人の側に寄った。

練習が終わってサガが伝える注意事項を書き留めた後、即効で楽器を仕舞って後片付けに入ろうとした所で、まずは以前のパート・リーダーであるスチュアートに捕まった。

ミロのびつくりした事に、昨夜の事件がもう彼の耳に入っていて、色々と慰められ労われたのだ。スチュアートはおそらくこのスクール・オーケストラでアイオロスの次にミロ・フェアファックスの信頼を勝ち得た人物だった。大柄でどこか熊を連想させる体つきの中に、心配性というミツバチを飼っている。

なんとかスチュアートのミツバチ攻撃をやり過ごし、一息ついた時、ミロ・フェアファックスは、今度はマコーマック上級生に呼ばれた。彼は、ミロ達スミス・ハウスの監督生なのでそれなりに、ミロの感想としてはかなりしつこく根掘り葉掘り昨晩の再現映像ならず再現状況説明を求められたが、我慢し続けてその要望に応えきつた。八回以上は『犯人の名前や顔、ハウスを自分は知らない』と言わなければならなかった。

ようやくマコーマックから開放された時、既に八角堂は綺麗に片付けられて『ガラン』としていた。片付けをサボったような小さな罪悪感がミロ・フェアファックスの鳩尾の皮膚を刺した。そんな時に、ドウコ・オルグレンがミロを呼ばわつた。

ドウコ・オルグレンは、同じ東洋人でもすうらりとして恰柄な剣を思わせるシオン・ハーシエルとはまた違った趣を纏っていた。太く真つ黒な髪をもしゃつと生やし、小柄だが程よい固い筋肉に覆われた澆刺とした体は、カンフー映画などに出てくる俳優をミロに思い起こさせる。大声で怒鳴る時も、ダークブラウンの目はいつも楽しそうにキラキラしていて、双壁と称され同郷のシオン・ハーシエルとは水と土くらしいに異なる雰囲気を出していた。

鷹揚としていて、あつげらんかんと明るい。

無条件にミロ・フェアファックスはこの人物が好きだった。それなので、疲れきった一日の最後に彼と話が出来るのは嬉しかった。

つられてニコニコとしながらドウコの隣に駆け寄ったミロ・フェアファックスに、ドウコは楽器庫に向かつて歩きながら大太鼓の撥を持たせて言った。

「ほれ、大太鼓叩かせてやるから犯人が誰か言ってみろ」

「はあ????」

ミロ・フェアファックスの瞳は真円に大きく見開かれた。ついでに、なんの意味も成さないが口も開かれた。

「なんで、この人までそんな事知ってるんだ?」

ドウコ・オルグレンは真つ青な瞳孔といくらか青みがかった白い眼球を見てあと五ミリ目蓋が引き上げられたらこの少年の目は間違ひなく床に落ちて転がっていつてしまふのでは無いだろうか? と考えた。西洋人の造詣は時々とても危な

つかしく見える、とも。

が、表面上は相変わらずニコニコしたままで、今度はミロ・フェアファックスの手にシンバルを持たせて言った。

「それを、バシッとした瞬間に言ってみるつというのはどうだ? 運がよければワシにも犯人が誰か聞こえない」

ミロ・フェアファックスは、漸く気を取り直して答えた。

「イヤです」

「なんだ。じゃ、こいつでどうだ?」

チューブラーベル、トライアングル、木琴、鉄琴、カスターネット、タンバリン、銅鑼、ティンパニ、次々と楽器を渡され、指差され、その度に「NO」と答えていたら、終いには非常に滑稽な気分になって、ミロ・フェアファックスは盛大に噴出した。

「困ったのー。これでダメならパイプオルガン、と言いたい所だが、流石に教会の鍵まではくすねておらんかった。また今度という事で言つちまわらないか?」

「聞いてどうするのか教えてくれたらオレも答えます」

「よし、コンニャクでどうだ?」

「だから、聞いてどうするのか教えてください」

ミロは、一瞬ぐらついた魅力的な申し出に、慌てて振り切りそうになった針を中心に戻して冷静に質問した。質問するまでに二秒ほど間が空いて、その間がミロにとって非常に効果的な申し出だった事をドウコ・オルグレンに伝えた。その葛藤を察したドウコはにやりとミロを笑ったが、その笑いは

ミロ・フェアファックスを不快にさせなかった。

言つてしまおうか？

一瞬、ミロ・フェアファックスの頭に浮かんだ思い付きは、同じくらい一瞬の間に打ち消された。

アイオリア・エインズワースとカミュ・パロウに、済まない事のように思えたからだ。ややこしい事になつてゐる。どうしてみんな自分をほつぽつておいてくれないのだろうか？

ミロ・フェアファックスが逡巡する間に、ドウコ・オルグレンは楽器庫に鍵をかけた。

「電気消すぞ？」

言われて、ミロは慌てて楽器と楽譜の詰つた袋を確認して八角堂から飛び出した。自分は、非常識な程頭迷な行為をしているのだろうか？ 誰かに否定して欲しい問いかけが、のど元まで競りあがつたが、ドウコに「余計な心配掛けて済みません」と、全く違つた言葉を出すことで押さえた。

ミロ・フェアファックスの中では、自らが所属するクラブの先輩や、同学年の友人に敵の名前を明かして報復の片棒担いでもらうという構想は、どう考えても『正しい』自己責任のカテゴリに収まらなかった。が、もしこれが、アイオリア・エインズワースやカミュ・パロウがやられた事であつたら、有無を言わさず自分がその片棒を担ぐ性格である事や、その協力の手を拒まれる可能性など塵ほども考えていないといった矛盾した利己主義であることには気が付かないでいた。

「まあ、頑固なのはお前だけじゃないからな」

笑いながら、だんまりになつたミロに、ドウコ・オルグレンが階段を降りきるかどうかと言ふタイミングで音楽棟の玄関にたすむ二人のひよる長い人影を示して言つた。

ドウコの示した場所には、アイオロス・エインズワースがむつつりと腕組みして壁に寄りかかつてゐる姿と、真つ直ぐ背筋を伸ばしてこちらを見つめるカミュ・パロウの姿があつた。

これは頑固つていうより、寧ろしつこいつて部類に入るんじゃないだろうか？

ミロは些か呆れかえる思いで二人を見詰めて顔を曇めた。すると、アイオロス・エインズワースの長い腕が伸びて、ミロの頭頂を乾いた音が上がるほど小気味良く弾いた。

「いいか？ 暫くこんな風に人氣がなくなつて目が利かないくらい暗くなつたら一人であらゆるするなよ！」

音楽棟からの帰り道、アイオロス・エインズワースは随分不機嫌にそう言つた。ミロ・フェアファックスは、アイオロスの気遣いを十分に感じてはいたが、それに対して感謝するような心持にはなれなかつた。カミュ・パロウまで待機していた事が、さらにその気分に拍車をかけた。

ザックザクと口を真一文字に横に引いて歩くアイオロスの歩調に、小走りで付いて行くうちに、こんな気詰まりさを抱えて、普段は心引かれる人たちと歩かなければいけない状況に、どんどん頭の中に綿綿の渦巻き模様が出来て回転速度も上り

つめ眩暈が起こり、飛び出してこの場を離れるか、いつそ彼らが望むこと全てを叶えてしまふか二つに一つの答えしかないように思えて肩の辺りがどんどん固く強張った。

自分が悪いのか、アイオリアやカミュ、アイオロス達が正しいのか。

どうにか交互に足を動かすうちに、三人はスミス・ハウスに到着した。アイオロス・エインズワースは、玄関でザッと靴の泥を落とすと、ちらつともミロ・フェアファックスを見ないで自分の部屋に向かうべく階段を上つて行つた。

アイオロスに嫌われたらどうか？

素直に彼の言うことを聞かない後輩は、彼にとつて友情に値しないか？

いや、違う。そうじゃない。そうじゃない筈だ。アイオロスはそんな人間じゃない。……だとしたら、時間をかけてやっぱりちゃんと自分の気持ちをつかつてもらふしかないんだろうな……。そうすると、交渉する相手は、ロウ・ハウスの例の四人組と、ウエルダン・ハウスのグループと、アイオロスか……。

想像した作業の精神的な重さに、ミロは何度目になるか分からない衝動を感じた。

全部投げ出してやろうか？

それでも、あまりにも『言わない』と繰り返した言葉に、自分自身が縛られて、深い溜息をついて甘い誘惑を断ち切つた。

翌、日曜日。

ミロの記憶に焼きついた真夜中の映像と、RADの晩に耳に届いた幾つかの会話の音が、ミロに犯人を教える。

ミロは一気にロウ・ハウスとウエルダン・ハウスを駆け回つて、彼が記憶する『犯人達』に言つて回つた。

学校側には今回の事件の犯人の事はバラしていないが、もしまた自分だけではなく、友人にも危害を加えたら、必ずそれ相応の報復をする、と。

一語一語、腹に力を込めて、精一杯の真剣と重さを込めて宣言したのだが、その言葉は相応の重さでは受け止められなかった。

言葉は、受け取る側の感性が鈍つていればただ言うだけでは心に働きかけない。

どんなに、相手の心に、記憶に残るように覇気を込めても、それは軽薄な思考で叩き落された。六回、散らばつて過ごしていた『犯人』に同じ事を言い、まともに取り合つてもらえないことに傷付き、倦んだ。

特に、最後に訪れたグループに居た一人の冷たい眼差しをした青年が、ミロの善意を抉つた。

彼は、ナイジェリアからの留学生で、ミロは知らなかったがスクールの歴史の中でも抜きん出て尊大なプライドと『白人』を蔑視する事で知られていた。

彼は、ミロの言葉を途中で「失礼」と完璧なキングス・イングリッシュで遮り、「白人は年長者に対する文化を持たない民族だと聞いていたが、まさしくそうらしい。思い込みと勘違いでこんなにも無礼な内容をしゃべりながら、まだ二本足で立っている」と冷たく言った。

ミロは、彼に付き従う三人の取り巻きに対して弾劾していたのだが、彼はそれを許さなかった。彼は、ミロの告発を全て無礼なものと片付けたが、彼の後ろに佇む三人の表情がそれを裏切っていた。堂々巡りも許されず、ミロは無実の罪を擦り付ける恥知らずと一方的に決め付けられ、対話は閉ざされた。そのあまりにも慇懃無礼な態度に、ミロは耳の奥にガングロンと血の流れを聞くほど悔しさを味わった。けれど、それを開放する術を、ミロは知らなかった。

結局、ミロが部屋に戻ったのは寮を離れてから五時間も経つてからだった。あんまりにも疲労困憊していたのでノロノロとベッドに登り体を投げ出した。

「どうだったんだよ？」

きしきしと小さな梯子を上つて、アイオリア・エインズワースがミロの様子を伺いがてら尋ねた。

「…なんか、うまくいかなかった気がする…」

枕に顔を押し付けたままミロは答えた。声がかくくもっている。

「…ぼつかなあ…。だから協力するつて言ったのに」

アイオリア・エインズワースは、にわかに頭に血を上らせるが、後を引かせる事はなく、大抵カッとした後はきまり悪

さも手伝つて自分から親身になって近寄るタイプ少年だった。ミロの頭をぐらぐらと揺すつて慰める。

「また巻き添え食わせたならごめん…」

「そんな時は奢れよ。それから、今度こそオレの意見も入れて反撃を考えろよな」

ミロは無言で頷いた。アイオリア・エインズワースは、よし、と納得すると梯子から飛び降り、上機嫌で隣部屋のカミュ・パードウにミロの失敗と確約を取り付けた報告に出掛けた。

その晩の事だった。

ミロは、ふつと真夜中に目を開けた。空気がしんと静む中、何故か意識が冴え冴えとする。暗い部屋には舐や深い呼吸音が規則的に響くだけだ。

すつきりしないものを感じつつ、明日に備えてもう一度深く眠ろうと目蓋を閉じる。すると、ミロの耳には『パンツ』という扉の開く音と複数の人間の足音が木霊して、うとうとして目を覚まし、それを繰り返して朝を迎えた。

着替えながら、ミロはほんやりと思つた。始めに起きた時間それはRADが部屋に傾れ込んできた時間ではなかったかと。

結局、そんな状態が一週間続き、ミロは毎日を寝不足で過ごした。

毎晩、きつちり同じ時刻に目が覚めて、その後はなかなか寝付けないのだ。

しょうがないので昼休みに今までにないスピードで食事を胃袋に収め、ミロはテーブルに突っ伏して熟睡して過ごす、というのが日課になった。日中に生欠伸を連発し、夜に目が冴えるところぼすミロに、アイオリアなどは、「どうとう人間やめるのか？ まるで猫みたいだぞ、それじゃ」と、半人半鬼に、半分本気で呆れて言った。

やっと訪れた休日の土曜。

ミロは明け方から本格的に訪れた睡魔に身を任せ、朝食も取らず爆睡していた。ラグビーの練習からアイオリアが戻って来た時間にもまだスースーと寝息を立てている状態だったので、同じく土曜の午前を今はまっついているクリケットに費やしていたカミュを誘って遅い昼食に降りる。

食堂は閑散としていた。二人はトレイを持って配膳口に立ち、ゆつくりと品を物色し来週の授業で提出する共通のレポートの進み具合や情報を交換しあつた後、まだ部屋で眠っているミロの事に話題が移つた。

「何か食べられるものを持って帰ってあげたほうがいいかな」

「そりゃ過保護じゃないか？」

「だって、これから夕方にはオーケストラの練習がある」

「あいつ、それまでに起きるのかな？」

「誰が起きるんだ？」

突然、上から声が割り込んで来た。

「随分中途半端な時間にメシ食つてんな」

アイオロス・エインズワースだ。体から、ツン、と薬品の匂いがする。

「一度いい。もつたないが、お前らに一番最初に分け前をやるわ」

そう言うのと、なにやら「そこそこ上着のポケットを探して一枚の写真を取り出した。臭いは、写真の現像液の独特の酢酸臭さだとカミュは察した。

アイオリアが手を伸ばし、写真を受け取った。そして、そこに移る画像を見て絶句した。遅れて覗き込んだカミュも同様だ。

そこには、下着一枚になつた年長の学生たちが、半裸の体にマジックで散々に落書きされている姿が写っていたからだ。

「これ、こないだのMEMOの逆襲結果だから。教えてやつたんだからお前らも言えよ。で、結局お前らは何をやつたんだ？」にやにやと笑いながらアイオロス・エインズワースは二人の少年に尋ねた。

アイオリアは、ぐつと咽喉に言葉を詰らせた。そして、カミュも、アイオロスの人の悪さに此か尖つた気分を感じる。アイオロスは、二人が何も成していないことと承知した上で聞き、その上自分達の戦勝経緯を自慢しているのだ。

なんとかこの上級生に一矢報いたい。そう思つてカミュが



唇を開いた矢先、つまらなそうに二人を見下ろしたアイオロスが、冷めた口調で言った。

「お前らつて、普段よくつるんでるくせに、いざつて時に全然踏み込みが足りないのな。それがポリシーなら構わないが、親友やりたいんだつたら、時に相手も自分も傷付く可能性覚悟で踏み込まなければ上辺だけの関係で五年間終わるぜ？」

ざくり、と特大の刺が心臓に刺さった。カミュは、開きかけた口を再び閉じた。

……悔しいけど、完敗だ。

からかう口調ならば、まだ反撃出来た。だが、アイオロスの口調は如何にも「つまんねえ奴ら」という失望が滲んでいて、カミュ自身、そうだなあ、と納得せざるを得ない説得力を持つていた。

何より、上級生の彼等でさえ何か行動を起こしたのに、結局自分達は何もしていないというのが悔しい。

「ご忠告ありがとう、と無念を言葉に滲ませつつ、カミュは次こそは、と胸にささった特大の刺を引っこ抜いた。

珍しい部訪問者に、ミロは起された。

ポロポロのジーンズに皮のジャケットを羽織ったアイオロスだった。お昼も大分過ぎ、夕方のオーケストラの練習にもまだ時間がある。中途半端な時間をベッドの上でゴロゴロし

ながら消費していたミロに、アイオロスは着替えて付き合えと言う。

急かされて仕方なく、ミロはパジャマの上からセーターとズボンを履き、アイオロスを見上げた。

「外に出るからコートも着ろ」

ミロはクローゼットからコートを取り出し振り返ろうとした時、髪が引っ張られて首がポキッと折れた。

「痛ッ」

「なんだ、ホントに鳥の巣だな。手癖も通らないじゃないか」

いきなり止めて欲しい…。

毛糸の帽子も被って、もうアイオロスの気まぐれの被害にあわないうよう蜂蜜色の髪を隠す。

ミロとアイオロスは、吐く息の白い表に出た。くすんだ芝の上をずんずん歩いて、三つのハウスの横を通り過ぎ、室内プールの建物も通り過ぎて、学校の敷地の一番東端にある馬場にまでやってきた。

ミロは、アイオロスの意図を掴めないままぼんやりとその光景を眺めた。すると、一人だけ別格に綺麗に馬を操っている事に気付いた。

顔は分からないけれど、身長も高そうだから第六学年くらいかな？

ミロは思った。隣で胸のうちポケットに手を突っ込んでいたアイオロスの腕が、にゅつと伸びて目の前に四角い封筒が現れた。

ちらつ、と横目でアイオロスを見ると、一言、開けてみる、と言われた。ミロは訳が分からないまま、それでも少し期待感をもちながら折られていた封を広げて中身を出した。

中身は、写真だった。それも、とても上品ではない分類に入る。はつきり言えば上げつない。ミロが思いつきり顔を曇めてアイオロスを見返すと、アイオロスは一言、楽しそうに言った。

「それ、落し前の報告な。一応、お前当事者だから」

は？？！

ミロは咄嗟に写真を見返した。確かに、写真に写る人間の体の特徴は RAID の犯人達を連想させる。

「十曜のうちにシオンが隣部屋の奴らからここ一ヶ月のお前の行動聞きだして、ある程度見当は付けてたんだ。でも、人違いじゃ申し訳ないからな。お前から確証を取りたかつたんだが、お前は一向に口を割らない。仕方がないから翌日最も信頼のおける人間に案内してもらって、実行策を練った。その結果がこれ」

「もつとも信頼のおける人間って、誰だよ……」

一瞬、カミュの事が頭を過ぎった。確か、カミュには口止めしてない。

「そりゃ、目の前にいるこいつ」

アイオロスの大な手が「こいつ」とミロの眉間を指差した。

「お前、二十寧にも日曜日に一人一人の所に回って啖呵切って歩いただろ？ ホント、抜けてるんだか考えてないんだか、ただ単にアホなんだか。ま、お陰でオレたちは別人かも、な

んて気兼ねしないで叩きのめせたから良かったけど……」

楽しそうに笑うアイオロスを前に、ミロの視界は真つ暗になった。

自分は、今まで気付かなかつたが、本当は世の中の平均より並外れてバカなのだろうか？ 最善の行動に出たつもりだったが、相手の心臓には全く堪えなかつた上に、夜毎 RAID のあつた時間に目が覚める。

ただバカなのではなくて、交渉能力の欠片もない、そのうえ実はとても気の小さい臆病な人間だったのだろうか？

頭の中の猛烈な自問自答にミロの体はゆらゆらと揺れ始めた。これが眩暈というものか、と必死で立っている肩を、アイオロスがポンつと叩いた。

「お前、今から二年もして、後輩が出来て、その後輩がちよつとばかしじやじや馬で目立つけれど、取り敢えず曲がつたこととはしていいのに寄つてたかつてスヤスヤ寝ている時間に空息まがいの悪戯を仕掛けられたと知つたらどうだよ？ 腹立たねえか？ 俺は例え自分のクラブの後輩じゃなくなつたって腹立つけどな」

あまりの高速回転の思考に酔いながら、ミロは反射で頷いた。そつという理屈は分かるのだ。

ただ、理屈と自分がどうするかは同じではない。いや、結果は同じになるかもしれないが、十分に自分で考え納得しなければ居ても立つてもいられない。どう説明したものか、とまた違う思考の渦を頭の中に作り必死で言葉を探す。

その間はたった数瞬なのだが距離にすれば軽く一マイルは走つてその先で考えているような感覚だ。先に進みすぎると今度は出発点から順を追つて理を積み上げていく作業が億劫で仕方が無い。来た道をもういっぺん引き返すなら、もつと先に進んでしまいたい。その欲求が、今度は「自分はバカであつたか、どうか」という疑問から、本当にバカであつたらそんなに面と向かつて人はバカとはいわれないものではないのか? いや、アイオロスは本当のことしか言わないだらうから、きつと自分はバカなのかもしれない。なら、どうやつたらバカじゃなくなるのか、など際限なく喜藤が続く。

「とまあ、さう言ひ訳で。お前にとつちや不意かもしれないけど勘弁しとけ」

とうとう、ミロが自分の考えを主張する機会のないまま、アイオロスの用件は済んでしまった。

じりじりと、それでも諦められず弁解の糸口を探るミロは、アイオロスが突然立てた鋭い口笛にびくりと体を振るわせた。馬場で駆けていた一組がまっすぐに二人に向かつて駆けてきた。その無理のない風と溶け込むような動きを見て、ミロは自分が一番上手だと思つたベアだと気付いた。見惚れているうちに、優美に人馬は二人の前で停止した。騎手は、長い馬の首を一撫で二撫ですると、ストンと馬から下りた。目深に被つていた乗馬帽を外す。銀色の髪が現れた。

サガ、だつたんだ! !

ミロは、驚愕のあまり縮こまつた。縮こまり過ぎて、アイ

オロスの足元に丸くしゃがみ込んでしまつたくらいだ。

「どうしたんだい? こんな所で。寒いんじゃないか?」

サガは、丸まつてビクリとも動かないミロに意表を突かれたが、ミロが時々特異な行動をする少年だとは認識していたので、まずは会話が成り立つアイオロスの方に話しかけた。

「連達の配達。ほい、これお前の分」

「……アイオロス: 悪趣味だよ、これは:」

「大丈夫。ワイズマンが現像室を借りて焼き付けたから部外者には漏れてないさ」

「でも君がこうして焼き増しをばら撒いていては同じだらう?」

毛糸の帽子に隠した耳に、年長組二人の会話が混線した電話の声のように届く。

結局誰が言うもんか、自分で何とかして見せる、と精一杯の事をしたつもりが、ガイドになつていたり、知らない間に報復は終わつていて、報復の内容がこれで、凄く綺麗で上手な乗り手だなんて思つた人が、どんな人より綺麗だと思つていたサガで……、綺麗なサガが二人分、いや、綺麗が二個集まつたらなんになるんだらう、綺麗より綺麗を現す言葉なんてあつただらうか?

ミロの体からへなへなと力が抜けていった。顔が猛烈に熱くなつて顔を上げる事が出来ない。

「お、何お前ロアスターになつているんだよ?」

アイオロスが、ミロの現状に気付き視線を止める。

ほつといて! とミロが叫びそうになつた時には既に遅く、

ミロは自分の腋の下に何かがぐいつとはいつて来たことを感じた。

アイオロス・エインズワースが、丸くなつていたミロをひよいと抱き上げたのだ。そして、宙ぶり人になつたミロの顔をサガの頬に近づけると、ぬいぐるみかペット、時には赤ん坊にさせるように、チュッ、とキスをさせた。

「今回の報復の作戦司令官にお礼しなきゃな」

ミロは、あまりの事に目に涙が溜まつた。

こんなのは酷すぎる。キスするんなら、自分はちゃんと自分の意志です。パペットみたいに扱うなんて、あんまりにもアイオロスは自分に対して思いやりが無過ぎる。こんな子供扱いするなんて……

「熱があるんじゃないか？ こんな寒い所にじつと立ってなんていたから……」

サガは、真つ赤な顔をして瞳を潤ませているミロの悄然とした様子に、手袋を外して右手をそつと額に当て熱を確かめた。

その一事で、哀れなミロの脳味噌は頭蓋骨を割つて飛び出してしまうのではないかと思うほど一斉に膨張し、目の奥でマツチが十本くらい束で擦られたように頭ががカツと燃えた。ミロは、必死になつて半分浮いた両足をバタつかせ、更に胴体を捻つたり後ろに足を蹴り上げたりしながら、なんとかアイオロスの支配下から逃れる。

逃れて、一心不乱に走り去つた。背中に、アイオロス・エインズワースの馬鹿笑いが津波のように押し寄せた。

ちつくしょー……！

絶対わがごとだ！ 絶対わかつててやつているんだ！

ああ、でも、分かつていてやつているって、何をわかつているんだらう？

何の気なしに自分に問いかけた問いが更に熱を煽つた。

ミロは、泣き出したいのを堪えて容赦なく全力で走つた。そして、誰かによつかつてその人ごと地面に倒れこんだ。

「カミュ！」

甲高い声、ポール・リッジウェイのソプラノ・ボイスが響いて、ミロはハッと正気に返つた。やつと周りが見え始め。目の前には、尻餅をついて驚いた顔をしてミロを見ているカミュ・パロウが居た。

「ミロ：今度は一体何事だ？」

「い、ごめん！ オレ、よく見てな……」

慌てて飛び起きて手を差し出したら、手の平が転倒する時に地面と石畳に擦れて血が出て真つ赤になつていた。

「僕の方より君の方が大変な事になつているよ？」

「オレは大丈夫。それよりカミュは？ 指とか怪我してない？」  
眉を擡めて手を取ろうとしたカミュに気付き、ミロは慌てて手を引つめた。

カミュ・パロウの後ろから、冷ややかに自分を見つめるポール・リッジウェイの視線が痛かつたからだ。

なにせたつた今、ミロは自分が一般より遙かに劣つて「バカ」な人間なのだと告知を受けた。その上こんなに冷ややか

な眼差しを注がれては、もう自分が末期的に「バカ」で「バカ」な事は公害なんじゃないだろうかと考えられ、公害だとしたら自分は随分色んな人に迷惑をかけたのだろうな、と歯止めの利かない想像のジェットコースターに飛び乗り、その執着地点に見当がつかない状態なのだ。

サツとボールの気配や、カミユの心配に気が行き、その事を受けて迷走がスタートするのだが、二人には終始ミロが自分の考えに没頭しきつているようにしか見えなかった

寮の医務室に駆け込んで、マダム・ベルリツジに見つかる前に退散しようと思つていたのにしつかり捕まり、止めて欲しいつて言つたのに両手にぐるぐると包帯を巻かれてしまつたミロは、とぼとぼと音楽棟への続く道を歩いてた。

転んで怪我するなんて、子供じゃあるまいし……!

しつかりしなまきや、しつかりしなまきや……!

何度も何度もミロは自分に命令した。

両手の傷は時間が経つ毎にすきすきと痛み出した。しかし、陰気な顔をしているのもイヤだつたので殊更平気な風にしていたら、しつかりオケの同級生やコントラバスパートの人間に包囲され、真つ白な木綿はたちまち落書きに汚された。

丁度、そんな風に盛り上がつていた場面に、コンサート・マスターのシオン・ハーシエルが練習室の扉を開いた。そして、彼はミロの両手に巻かれた包帯を一瞥すると、ミロを廊下に呼び出した。

「君は、確か一ヶ月前にも手を怪我して来なかつたかね？」  
ドウコと同じダークブラウンの瞳が、星の無い夜空に思える程冴え冴えとしている。

「オーケストラと言う団体に所属する上で、最低限のマナーである奏者としての自己管理をどうしてもまっとうできないというのなら、代々伝わる封印された罰則を私自身泥を被る覚悟で復活させてもいいが、フェアファックス、君の意見を述べたまえ」

ミロは、遠心力で頭の中身が偏るのではないかという勢いで首を横に振つた。必死で二度と首から下、お腹から上の怪我はしないと誓つて八角堂に戻つていいと許可を貰う。がっかりと項垂れつつ、ドアを引くと、シオンはその隙間から怒鳴声ではない、けれど鋭く威圧感のある声を飛ばした。

「チエトウインド！ 来たまえ！」

この時、一オンス太るのにも四苦八苦ししている自分の体重が、一気に千倍になつたようにミロは感じた。足が床にめり込んで浮かす事がままならない。

やっぱり自分は色々なところで、非常にお荷物な存在になつていてのではないか？ ニア・ソーリーでの賞賛の数々は過去の栄光か、井の中の蛙か、自分の勘違いか……これから自分は、どうしたらいいのだろうか？

傍目からは、ただで入り口でグズグズしているようにしか見えないミロを、セカンド・バイオリンの一つ上の学年のムウ・アリスンが腕を引いて足を動かさせ、廊下の向うに興味津々

の野次馬達を下がらせた。

この日の練習で、ミロは終始覇気がなかった。休み時間になるといそいそと席を離れ、コントラバスの林に埋もれて過ごし、練習が終わって、椅子を片付けようと張り切つて立ち上がった矢先、ムウに見咎められて大人しく帰るハメになる。

詳しくは分からないが、とにかく今日は落ち込む一日だったらしい、と一緒に寮まで歩きながら、カミュは思った。怒りも、喜びも全開で吐き出すミロは、落ち込み方も全開で、そうだろうとは思っていたがかなり感情の起伏の激しい子なんだな、感想を新たにした。

その夜、ミロはやはりいつもの時刻にドアの軋む音が頭に響いて目を覚ました。

どうやら半分は夢を見ているようで、ドスンと布団の上に乗つてきたのは今日見たサガの乗っていた白馬で、馬の背中には花壇があり、花壇の上をシオンがふわふわ飛回り、開いた扉の向うは廊下ではなくテラスに変わっていた。

テラスでは、アイオロス・エインズワースとサガ・チェトウインド、カミュ・パロウが楽しそうにお茶を飲みつつ談笑していた。

白馬の重みに呻きながら、ミロは今度こそ本当に目を覚まし、初めて見たサガ・チェトウインドの夢の無慈悲さに、がつく

りと突つ伏した。

夢の中でくらい、格好よくサガと会話をしてみたかった。

翌日、そう打ち明けられたアイオリア・エインズワースとカミュ・パロウは、ミロの奇天烈な想像力に呆れ返り、言つた。

「お前が格好いいなんてあり得ない。そんな幻想とつとと捨てる」

「そのうちいい夢がきつと見られるよ」

アイオリア・エインズワースとカミュ・パロウは互いを見合つた。

そして、アイオリアは目撃した。

カミュ・パロウの、やさしく慰めるような口調の向うに、細かく震える肩があつた事を。

ある騒動

「技術もなく、秩序もなく、音楽に対する誠意もない。一生に一度、学生生活最後の檜舞台に、このような集団のコンサートマスターとして立つのは私のプライドが許さない。私の熱意に、諸君は応えてはくれなかった——では、諸君の流儀に合うコンサートマスターを新たに選ばばよからう。私は今日限りで降りる！」

がたん、と椅子を蹴散らす音が続き、その椅子にひっつかかった譜面台が派手な音をたてて倒れた。第二ヴァイオリン席では、ミロ・フェアファックスが両の拳を握りしめて立ち、その隣で第四学年のサイモン・クレイが顔を真っ赤にしてうつぶわいている。怒れるコンサートマスターは無言のオーケストラをざつと見渡すと、手にしていたヴァイオリンをケースにたたき込み、もはや動揺する団員に一瞥もくれずに練習場の扉へと向かった。全員の視線が、その背中に集中する。扉のノブに手をかけた瞬間、息詰まるような沈黙を破つてサガ・チェトウインドの声が飛んだ。

「シオン！」

声は頑に振り返らない背にぶつかって弾け、後には再び居心地の悪い沈黙が残った。オーケストラの一番後方でオルガン席についていたカミュ・バローウは、そつと消えたコンサートマスターの親友、ドウコ・オルグレンの顔を盗み見た。カミュに

だけ見えたその顔——団員に背を向け、親友の去り行く姿を見つめていたもう一人の大黒柱の横顔は、飄々としてどこか笑みを含んでいた。

### 1. Monday, 1st December

しつかりしなくては。

サガは、今日何度目かわからぬ溜め息をつきつつ、鏡の中の自分を見た。まだツキツキと前頭葉に残る頭痛は、冷たい水で顔を洗った事で少し和らいだように思えた。

今日は十二月一日、彼が所属するオーケストラの本番二週間前の月曜日である。本来ならば最後の追い込みで気力も十分であるはずのところを、このような不名誉な事態に甘んじているのは、昨夜彼の居室で行われた乱痴気騒ぎのためである。彼の部屋で、というのには少々語弊があるかも知れない。ハウスマスターの目を潜り、大量の酒瓶を部屋に持ち込んだのは同室のアイオロスだった。昨日はアイオロスの十六歳の誕生日で、その祝いとして本人が調達したものだ。本来、誕生祝いなどというものは自分で持参するものではないだろう、と



サガは思うのだが、止めて聞くものでもないので、敢えて相伴にあずかったのだつた。ワインに始まり、未はジンとウォッカとブランドーの混合溶液で締めくくった飲み比べに最後まで付き合うつもりは毛頭なく、アイオロスが喜びそうだと以前から準備しておいたアルザスの白の八三年ボトルは、まだその存在を知らせぬまま本棚の下に隠してある。適当なところで眠い振りをして逃げたつもりが、そこに行き着くまでに些か酒量を過ごした。今朝、アイオロスの横で目を覚ましてみたら、生まれて初めての二日酔いに愕然とした、という訳なのだつた。

同じく同室のヴィオリスト、アンドリュウは昼食も削つて部屋のベッドに伸びていた。シュラは一見持ちこたえたように見えるが、黙つていても不機嫌に見えるいつもの表情が、もしかすると二日酔いのせいである可能性も皆無ではない。そして、昨夜の騒動の仕掛人——昼過ぎまで酒臭い息を吐いていたアイオロスは、事有るごとくにサガに近づいては満足げな笑いと共に一言残して去つて行く。

「よう、水牛の群れは去つたか？」  
周囲に人が居たのが幸いで、誰も居なければ確実にキスの一つや二つは見舞われていただろう。ただでさえ自分の息に辟易しているところに更に酒臭い顔を近づけられたのではたまらない。たつた二日前に告白した相手に響く面は見せたくない、必死で気遣っているのを知つていてやつているから、尚更に始末が悪い。また溜め息をひとつつき、サガは洗面所

を出て音楽棟の八角堂へ向かった。今日は、大事な日なのだ。土曜日にサザーク大聖堂の前で誓つた事——未だヴァイオリンパートに馴染めずにいる期待の新人生ミロ・フェアファックスを、残る二週間でセカンドヴァイオリンの人間にしてやらなければならぬのだ。こんな頭痛に振り回されている場合ではない。

力の入らない背中を無理矢理起こして階段を上り、最上階の八角堂へと向かう途中で、何やら歩みの遅いセカンドヴァイオリンの第六学年の集団に出会つた。あまりゆつくりとした歩みなので、こんにちは、と声をかけて横を抜けたが、一人がやあ、と歯切れの悪い返事を返したのみだつた。別の頭痛がサガの額を襲つたが、気を取り直して八角堂の扉を開け、壁に立てかけてある椅子を並べる。と、本日一回目のシャワーを浴びて来たらしいアイオロスがするりと寄つて来て、目も合わせずに囁いた。

「何、お前、相変わらず六年の連中にシカトこかれてんの？」  
先刻の階段での一事を見ていたらしい。全く、神出鬼没の上によく人の状態に気付くものだ。あまり格好の良い場面ではなかったもので、見られていた事にサガは若干動揺したが、口ではつとめて平静に応えた。  
「無視されているという程ではないよ。きちんと個人個人に話しかければ返事もしてもらえるし……きつと話の腰を折りたくなかつたんだろう」

「ふーん……。じゃ、そういう事にしといてやろう。貸し一つな」

アイオロスは、目を細めて背後に居る下級第六学年の集団をちろりと見ると、笑いながらサガを追い抜き、一息に椅子四つを抱えてベースバートに去って行った。

一つ貸し、とは何が『貸し』なのか、考えるとまた頭が痛い。

実のところ、セカンドヴァイオリンの抱える問題はミロだけに留まらないのだった。現在の最上学年の一つ下、下級第六学年のヴァイオリンにはもともと経験者として入団した人間が二人居る。そのうちの一人、ロナルド・リックは次期コンサートマスターに決まっており、現在はコンマスの仕事を学ぶべくファーストヴァイオリンのトップサイド（コンサートマスターの横で弾いている。もう一人がチャールズ・ウィットシャーで、先刻の遅い集団の中心にいた人物だった。彼は入団した時にはそれなりに経験者として他の初心者とは水をあけていたのだが、自分の好きなどころ以外は練習しない性格と一歩進んでいるという油断が祟って、今ではそれほど抜きん出て上手な訳でもない。それでも旋律が好きなのは断固ファーストヴァイオリンに拘り、昨年まではファーストの末席に席を連ねていたのだが、そういつたえり好みを極端に嫌うシオンによって今年初めてセカンドヴァイオリンに配置された。チャールズとしては、セカンドに来たからには当然セカンドで最年長の自分がトップになるものと信じていたに違いない。実際サガにセカンドトップの指令が下った時にはシオンやドウコに食ってかかったという噂もあったし、彼がサガを見る時の眼差しを見れば、今の状態が彼にとつて不本意

であることは一目瞭然だった。

いずれチャールズとはよく話さなければ、とサガは機会を伺ってきたが、現在までのところその目論見は成功していない。なるほど、話しかければ返事はする、とアイオロスにも先刻伝えた通りだが、その先の会話はほぼ一方的に断ち切られるのが常だった。

アイオロスなどに言わせれば、そこで逃げられるのが甘いという所なのだろうが……

己の不甲斐なさに若干沈みかけた思考の端で、サガの視線が明るい金色の巻き毛を視界の端に捉えた。ミロ・フェアファックスだ。いつもより若干遅い時間に現れた少年は、既に椅子並べが始まっていることに驚いたように、小走りに部屋の隅に寄り楽器を置いてそのまま倉庫へ駆け込んだ。その姿は入口でまだ喋り続けている六年生の集団と比べて清々しく、サガの口元を緩ませた。

ミロのこういう美点があつたと皆から見えるようになればいい、と思う。

その為には、矢張り彼と団員とのコミュニケーションがもう少し活発に進まなくてはならないのに違いない。

「こんにちは、ミロ」

と、サガは椅子を抱えてセカンドヴァイオリンの席を並べ始めたミロに声をかけた。

「アイオロスの誕生日プレゼントにコントラバスの弦を贈ったんだって？ 彼、とても喜んでたよ。ちゃんと彼が好きなら

弦を買って来たって。コントラバス弦は普通の楽器屋に置いていないのに、何処で手に入れたんだい？」

サガとしては、ミロがもつとも話しやすい話題を選んだつもりだった。ミロのアイオロスに対する信頼の程は衆目に明らかであったし、自分とアイオロスの仲もミロには明らかだろう。あの夕方のサザークで、自分がミロと話をすることしか思い宣言した割に、その話題がアイオロスに関することしか思いつかないというのは不甲斐ない気もしたが、これから会話の幅を広げていけばいい、とサガは考えていた。

ところが。ミロはサガの台詞を聞くなり、背筋を板のように伸ばし、頬を紅潮させて、サガの瞳をまっすぐに見上げて睨み付けてきたのだ。

「買ったのはロンドンの楽器屋で。弦の種類は：前に、ロスから好きな弦を聞いたから……」

そうして、小脇に抱えていた椅子を二つならべ、「失礼します」と大きく一礼してまた倉庫に駆け出して行った。

呆然とその後ろ姿を見送るサガの脳裏に、失敗、という一言が大きく点滅した。アイオロスからは一言も聞いていないが、この話題は彼とアイオロスとの秘密だったのだからか？ 追いかけた視線の先で、ミロがカミュ・パロウと言葉を交わしている。小さな体に三つの椅子をかかえた少年は何事かをカミュに告げて屈託なく笑い、そのことがサガの気鬱を更に重くした。それほどミロから嫌われるような言動をした覚えはないが、少なくとも現時点で、ミロの自分に対する印象は

決してよくないものの上だった。

どうして自分は、普通に会話が出来ないのだろう。

スクールに入学してからというもの、アイオロスや友人達のおかげで漸く払拭されようとしていたコンプレックスが、再び頭をもたげてサガに深い溜め息をつかせた。

気がつけば、初めはまばらだった団員も集まり始めて、椅子や譜面台のセッティングもほぼ完了している。サガは頭痛も手伝って果てしなく沈んで行きそうな思考を一振り首を振って追い払い、そのまま楽器庫へと足を運んだ。楽器庫には鍵付きのロッカーが所狭しと並び、サガを含む殆ど全員がここに楽器を保管している。授業中空になる寮の部屋より安全であるし、なにより楽器を運ぶ手間が省けていい。例外はミロくらいで、祖父の形見と言われるヴァイオリンをいつも寮の部屋から持参しているが、そんな行動の一つ一つが彼の存在を更に目立たせているという事実には本人は全く気付いていない。

サガは自分のロッカーからアマティを取り出すと、そのまま楽器庫の中にあるもう一つのドアに向かい、ズボンのポケットから鍵を取り出して開けた。

この楽器庫の中の部屋は広さ二十平米程度で、このスクールオーケストラの財産である楽譜が全て保管されている。団員に配布されるパート譜は現在ではコピーであることが殆どだが、十年前まだコピーが高価だった頃にはここに保管されている原譜をそのまま使っていた。なくすとフルセットを再

度購入するかフルスコアから自分で必要なパートを写譜するか、の二者択一になつてしまうので、この部屋の鍵の管理は厳しく数人に限定されている。具体的には、各パートのパートリーダーのみだ。

小部屋に入るとサガは中央の棚の奥に回り、サンⅡサロンの棚を探してフルスコアを取り出した。指揮者用の大判フルスコアで、コンサートマスターのシオンの手が空いていない時にはこれを準備するのはセカンドトップのサガの仕事になる。目的のものを手にいれて引き返そうとしたとき、サガは背後の気配に気付いた。慌てて振り返つた瞬間、自分より数インチ高い人影が上から覆い被さつて来て軽く唇にキスをした。

「…アイオロス！」

どうしたんだ、と言おうとした唇を、一瞬早くアイオロスの人差し指が塞いだ。

「いい事教えてやろうか？」

わざわざこんな人気のない部屋にまでついてきて教えるような「いいこと」とは何なのか、サガには皆目分からなかつたが、取り敢えず領いてアイオロスの返答を待つ。アイオロスは「貸し2つな」と愉しげに告げて、先を続けた。

「さつき、お前、ミロと話した後落ち込んだらどう？」

「ああ…！ その事なら、私も聞きたかつたんだ。実は君がミロから誕生日に貰つたコントラバス弦のことをミロに話してしまつただけけど…もしかして、あれはミロから口止めさ

れていたのか？」

アイオロスは、怪訝な顔をして首を振つた。

「いいや？ なんぞ？」

「そうなのか…。私の方を見ていたのなら、君も見ただろう？」

何故か、その話をしたらミロが急に不機嫌になつてしまつて…私には全く見当がつかないんだ。あの話題の何が彼の気に障つたのか…

心底困り果てた表情のサガを、アイオロスの笑みを含んだ視線が見下ろしている。サガが最後の一言を言い終える前に、その表情は笑いの衝動を堪えるものになり、ついに爆発した。

「何がおかしいんだ？」

驚いて問い返すサガに、そりやおかしいさ、とアイオロスは体を折り曲げて答え、背筋のびんと立つたサガの肩をぼんぼんと叩く。それからそのまま口をサガの耳元に寄せ、細い肩を本棚の方に押し付けて続けた。

「あいつが赤くなつたのは、怒つたからじゃなくてお前のことが気になつてるからさ。多分、いきなり声かけられてびくくりしたんだろ。睨むような目つきになつちまつたのは、あいつの背からお前の目を見上げようと思つたら仕方ないことで、多分恥ずかしくて目を逸らせたいのを堪えて必死で見上げてたから。お前、未だにあいつがお前の熱烈なファンだつてこと、分かつてないのか？」

確かに、ミロの態度も誤解を招くに十分な幼さで、あれではミロの将来の彼女が苦勞を強いられる事は想像に難くない。

だが、今時分になつてまだ気付かないお前もどうかしている、とアイオロスは呟き、それから深くサガの唇に口づけた。一瞬全身を凍らせたサガが、諦めてスコアを抱えた腕をアイオロスの背に回して甘く応え始めるまでそれは続き、折しも楽器庫に侵入したフアゴットパートの声で唇を離れたアイオロスは、「貸しひとつ回収」と笑つてサガの頭をひと撫でし、そのまま楽譜庫の外へ出てフアゴットの面々と話し始めた。

この間に、楽譜庫を閉めて外に出ろということか。

サガは、切り替えの早いアイオロスの性格を羨みつつ、深呼吸をして歩み出した。本当に、アイオロスに気を取られている場合ではないのだ。ミロの件が誤解だったとはいえ、ミロと上手に会話が来ないと言ふ意味では問題は何一つ解決していないのだから……。

休憩時間になると、サガはいつものようにパート員を集めて練習で受けた注意のまとめを述べ、各目の楽譜に記入させた。そして全員が書き終えて解散する前に、「ところで……」と話を打ちかけた。

「演奏会が終わった後に、打ち上げをやるだろう？ その時に、セカンドパートで出し物をやらないか？」

打ち上げの席では、毎回有志が集まつて何グループかが小

さなアンサンブルを披露する。ほとんどがぶつつけ本番なので途中で止まつたり全員一緒に終わらなかつたりと種々事件はあるのだが、木管パートなどはたまにパートで練習した曲を披露して喝采を浴びている。ところがヴァイオリンは人数が多すぎるのか協調性がないのか、これまでそのような企画に参加したことがなかった。そこでサガは、これをきつかけにしてパート内の親睦を深めようと考えたのだ。

本番前で難易度の高い曲を抱えているから、難しいものは出来ない。有名な曲で譜読みする必要がなく、聴衆にも受けがいいもの——サガは今日の昼休みに室内管弦楽団の知人と交渉し、パツヘルベルのカノンの楽譜を手にいれていた。これなら、ヴァイオリン三パートと通奏低音があれば良いし、アイオロスとシュラに通奏低音を頼むにしても負担を気にしなくて良い。あとは、チェンバロにカミュが加わってくれば文句なし、というところだった。

セカンドパートに、戸惑いの空気が満ちた。ただでさえ難曲を抱えているのに、この時期に何を言い出すのか、と無言の非難がサガの肌を刺す。例外は、びつくりしたような瞳を見開いているミロ・フェアファックスだけだ。

「出し物というのは……一体、どんな曲をやるつもりなんですか？」

沈黙に焦れたのか、第四学年のムウ・アリソンが声を上げた。彼は普段からシオンと親しいせい、か、上級生のサガにも臆する事なく意見する、セカンドヴァイオリンでは貴重な人材だ。

サガと同じ第五学年のアラン・モルグレンが、思慮深げに頷いてその後をついだ。

「そうだな。その場で弾ける程度ならいいけど……僕らはともかく、四年生には負担にならないか？」

「パツヘルベルあたりどうかと思つてはいるんだが……カノンなら皆耳で覚えてはいるし、テンポを遅くすればそれほど難しくないだろう？ 今年折角カミュがいるから、彼にチェンバロパートを頼めたら、と思つてはいるんだ」

サガは、不安げに顔を見合せているムウ以外の四年生の顔をそれぞれ見つめ、願いを込めて続けた。

「別に発表会というわけではないし、完璧に弾けなくてもかまわないよ。これから二週間、休み時間の何分かを使つて合わせて、出来るようになる程度でいいんだ」

「それ、面白い！ 乗つた！」

サガと同学年のスペイン人、ホセ・ナルバエスが膝を打った。彼は陽気で誰からも好かれるが、あまり根気の続かない質であることと、音程よりも情熱を優先してしまう性格のおかげでファーストヴァイオリンへの選に漏れ、セカンドに居座つている。そのことについて本人は全く気にしていないが、メロディ好きな性格の彼がパツヘルベルと聞いて乗らない訳はない、とサガは踏んでいた。

「お前もやるだろ？ アラン」

「そりゃだ……パツヘルベルならやつてもいいか……。サイモンやベンは？」

アランが初心者で入団してきた第四学年のサイモン・クレイ、ベンジャミン・オルコットの方向に直る。二人は小さくなつて顔を見合わせ、困つたように呟いた。

「でも……僕ら、まだサン＝サーンスもまともに弾けてないのに……」

「休み時間に他の曲の練習するなんて、まづくないですか？」

同時にサガを見上げた少年達の眼差しは、遠慮と、よく知つてはいる美しい曲を弾いてみたい気持ちの間で揺れていて、その素直な興味がサガの微笑を誘つた。大事なものは、弾いてみたい曲をまず楽しく弾けることだ。サン＝サーンス第二部以降のアクロバットは、ヴァイオリンを初めてまだ一年少しの少年達には確かに面白いエチュードに違いなかつた。

「もし他のパートに怒られたら、これは大事なパート練習だと私から断つておくよ。それでどうかな？」

サガの揺るぎなく落ち着いた視線を受けて、少年二人の眼差しが明るくなる。ミロは初めから興味津々の体でサガの方を見つめてはいるし、残る四年生の経験者、イヴンの反応も悪くなさそうだ。サガは下級生の支持を得られた事にほつしながら、その笑顔をこれまで黙つていた上級生、チャールズ・フィッシャーとケリー・ジーンズ、ゲオルグ・アーレンスの方に向けた。

「先輩方は如何ですか？」

ここが一番の正念場だ。サガは、祈るような心持ちで、三人の視線を仰いだ。

「一度三部なので、是非みなさんにそれぞれのトップをお願いしたいのですが……」

パツヘルベルを選んだ、もう一つの理由。

それは、三部であることだった。

下級第六学年のセカンドヴァイオリンは、三人いる。その三人に等しく花を持たせれば、少しは彼等の不機嫌も和らぐのではないかと考えたのだ。

最上級生を立てて、自分は後ろに引く。たとえ彼等にトップとしての実力が伴わなくとも、結局最後はそれが一番安定するのではないか——それが、かつてサガがセカンドパートのトップを申し渡された時にシオンと童虎に一度だけ告げた、団の人事に対する彼の意見だった。

「ぼっかじゃねえのか？ お前」

だが、サガの願いは、チャールズの至極礼儀を欠いた一言によつて断ち切られた。その場にいた全員がぎよつとする中、チャールズは小気味良さげにサガの強張つた表情を眺め、軽く鼻を鳴らして言った。「そんな素人の遊びに参加して何が面白い？」と。

「今更パートで仲良く親睦会か？ 学芸会じゃねえんだよ。そんなヒマあつたらパツセージの一つでもさくらえ」

明らかに不機嫌な一言と共に、チャールズが椅子を蹴つて立ち上がる。残る二人も無言でその後につき、慌てて立ち上がつ

たサガの耳に、敢えて隠そうともしないチャールズとケリーの怒りが届いた。

「……たく……冗談じゃないぜ！ 俺達にあんなお遊びのトップで満足しろつてか！」

「ナマ言うのもいい加減にしろつてな……むかつくぜ、あいつ！」  
「パツヘルベルがパート練だとは……あいつ、ファーストの連中を説得できるつもりだぜ……」

声はやがて届かなくなり、サガは思わず拳を固く握り締めていた自分に気付いた。……自分は、それほどチャールズの怒りを煽るような失礼を言つただろうか。かろうじて残つている冷静な頭脳で考える。ベンジャミンやサイモンらが希望を持つて参加しようとした企画を「素人の遊び」と一刀に切り捨てて許されるほどの？

胸中に沸き起こる強烈な怒りを、サガは己に許した。できるなら、今すぐチャールズを追いかけいつて訂正させてやりたかつたが、その結果置き去りにされるパート員の事を思い、やつとこのことで踏みとどまつた。今は、彼らの心ない台詞によつて傷つけられたパート員のケアの方が大事だ。深く息を吸い、気を落ち着けてパート員を振り返ると、ベンジャミンやサイモンの消沈はもとより、あれほど元気だつたホセまでがきまり悪げに宙に視線を泳がせていた。

何か言わなければ――。

サガの心は焦つたが、決してまだ動揺から立ち直つていない彼の中から、もつとも有効と思われる言葉を探し出すのは

それほど簡単ではなかった。

その時。

「オレ、パツヘルベル、やりたいです」

明るい、光の粉を集めたような声が、サガの鼓膜を打った。光の粉を集めたようなとは少々言い過ぎかも知れない。だが、少年の声はまだ声変わり前のソプラノであつたし、露骨な悪意に傷つけられたサガの心には確かに、それほど明るく力を持つて聞こえたのだ。

残るパート員も、驚いて声の主を見た。頬を紅潮させ、鮮やかな青の瞳にはつとするほどの力を込めてサガを見上げる少年は、サガに負けず強い力で両の拳を握りしめていた。

「ミロ……」

思わず、サガは少年の名を呟いた。：彼が、こんなに強い瞳をするのを見たのは初めてだったので。

「オレ、絶対。パツヘルベルやりたいです」

ミロは、もう一度、サガの瞳を見上げて言った。その決意は、世界の終わりをさへ彼を動かすことは適うまい、と思えるほどの迫力を持つていた。

「……そうだね……私もやりたいよ……」

つられて、自分の素直な希望が口をつくののを、サガは聞いた。そらだ、と思ひ当てる。私が、やりたいのだ。皆で楽しく、アンサンブルをやりたい。これまで、パートをまとめなくてはならない、とか、会話をしなければ、と氣負つていた自分が急に滑稽に思えた。

皆で、楽しく演奏すればいいのだ。

それ以外に、一体何が必要だというのだろうか？

それは、例えばアイオロスの選ぶアローチとは異なつているかも知れない。けれど、だからといつてアイオロスの真似をすることはしないのだ。

焦りと不安に浮つていた心が、漸く有るべき処へ落ち着いたのを感じ、サガは極めて自然な笑みが己の口元に上るのを知つた。

「フィッシャー先輩はあ言つたけれど、私はそういう遊びも大事だと思ふ。演奏会だけがオーケストラじゃないだろう？ 少々水を差されてしまつたけど、どうだろう、やつてみないか？ ここに楽譜があるから、参加してくれる人は持つて行つてほしい」

サガはもう一度パート員を見渡し、パート員一人一人の胸に響くことを願いつつ問いかけた。暫くの沈黙の後、ムウが、あそこまで言われて引き下がるのは性に合いませんね、と呟いて楽譜に手を伸ばす。ホセはオレはもともと遊びの方が好きだし、と囁き、アランは無言で一枚を手にとつた。イヴンはミロから強引に手渡され、残るのはベンジャミンとサイモンだけとなつた。

「君たちはどうかな……？ シオンにはよく頼んでおくから。やつてみないか？」

すっかり萎縮してしまつてゐる二人を、サガが勇氣づける。と、その時、ミロがサガと二人の四年生の間に立ちかはだかつ



た。ミロは両手に楽譜を一枚ずつ掴むと、それを突き出して二人の四年生に迫った。

「文句つける奴はオレがぶちのめしてやりますから。やりましようよ、先輩！」

「ぶちのめすって、君……！」

ミロの場合、ぶちのめすとは流血沙汰というのとはほぼ同義であることを既に噂で知っているサイモンが、怯えたように迫るミロを見上げる。しかし、ミロはかまわずに続けた。

「…お願いです。オレ、やりたいんです。手伝って下さい！」

八角堂の全てに響き渡るような大声だった。それからミロは、体が直角になるほど腰を折り曲げて、深々と礼をした。そのあまりにぎつぱりとした態度に、その場にいた全員が目を見張った。

生意気で、先輩に対しても堂々とタメ口をきき、練習前にはコントラバスケースに包まって寝る……

そのミロが、自分より明らかに技術で劣る二人に、これほど頭を下げて協力を頼んでいる。

セカンドヴァイオリンパートの最上級生を除くメンバーから、確かに、ミロに対する偏見の壁が取り払われつつあった。

そして、その波動は、その光景を見ていた他のパートの人間にも、ゆつくりと広がっていったのだった。

練習終了後、サイモンとベンジャミンから楽譜を見るだけ

は見てみる約束をとりつけたミロに、サガは個人的な礼を述べようとして振り返り、その言葉を再び喉の奥に仕舞い込んだ。彼が声をかけようとしたミロの後ろ姿は、楽しみにサイモンと会話を交わしていた。ミロは、彼の為に、自分自身の殻を破つ

たのだ。思わず微笑んだサガの肩に、指先に固いたこのある左手がかかる。耳元で、貸し三つ、と囁いた声にサガは笑って首を振り、声の主を振り返った。

「文句をつける人間には、ミロが仕返しをしてくれるさうだから。残念ながら君の出番はないよ、アイオロス」

## 2 Thursday, 4th December

童虎・オルグレンが隣のシオン・ハーシエルの部屋を訪ねたとき、部屋には微かなネパール・パーン（噛み煙草）の匂いが漂っていた。火をつける巻き煙草と違って、噛み煙草は口の中に噛んで服用するため煙も立たず、普通に服用してい

ればまずそれと知られることはない。特にシオンが愛用しているものはハーブの香りの強いもので、ガムを噛んでいたと言えば教官連中も疑わないという優れものだった。彼は実家に帰るとかならずいくらかの噛み煙草を鞆の底に忍ばせて戻るのが常だったが、決して煙草常習者というわけではなく、彼がこんな風に部屋をハーブの匂いで染めている時は決まって長時間に渡る考え事をしていて時だった。

童虎は親友の傍らに寄り、無言で掌をシオンの目前に差し出した。シオンが片方の眉だけを上げて客人を見上げ、その掌に小さな葉で包まれた固まりを載せる。童虎はそれをそのまま口に放り込み、しばらくもくもくと噛んでシオンが差し出したマグカップにその滓を吐き出した。パーンの噛み滓は、唾液と葉に包んだ成分とが反応して血のような赤い色になる。こっそり服用するには最適のこの煙草の、唯一の欠点といえれば欠点だった。

「で、今日はいくつやったんだ？」

童虎はシオンの目の前に置かれていた茶器を勝手にとると、中身を全部すすつてから言った。

「7つ。お前はこれをどう思う？」

無然とシオンが返す。シオンの手元には小さな携帯用カセットデッキがあり、繋がれたヘッドホンから聞き覚えのあるティンパニの音がかすかに零れてきていた。

「最高だな。音もいい。タイミンクも完璧だ」

「誰がお前のティンパニの話をした。セカンドヴァイオリンの

ことだ」

デッキにセットされているのは、今日の合奏練習の録音である。童虎はのんびりとした動作でヘッドホンをとり、福の神が七く八人はよつて来そうなる耳たぶをぶら下げた耳にセットした。丁度、サンサーンの第二部第一楽章に入つたところで、ティンパニが華麗に弦楽器との掛け合いを決めているところだった。

「すばらしい！」

「だからお前のティンパニはどうでもよい。セカンドはどうかと聞いている」

「今んと、悪くはないがな」

シオンは飄々とした体の童虎を睨み付け、手持ちのミニスコアのページを捲つた。既に何百回となくこの曲を聞いているシオンは、音を聞かなくとも今どこを演奏しているか大体の想像はつく。第二部第一楽章の後半、それぞれのパートが短いアクロバティックなフレーズを掛け合いする所までページを進めたとき、音をきいていた童虎の眉が大きく顰められた。

「なんじゃこりゃ？」

「わかつたか、私の言いたい事が」

「ああ……しかし、後から聞いていた分には問題なさそうだったんだがなあ……」

シオンはふん、とちいさく息を吐いて立ち上がり、童虎が空にした茶器にポットの残りの茶を注ぐべく立ち上がった。

「それは、いつもより早く離して、八角堂の一番後ろで録音し

たものだ」

シオンはいつも、自分の足下にカセットデッキを置いている。練習時間全てを録音に収めるのは無理なので、必要なところだけ録音するようボタンが手に届くところになくてはならぬいからだ。

だが、そろそろ全体の音量バランスが気になって、今日初めて遠くで録音してみた。そして、その録音に驚いた、という訳なのだった。

「…なるほど。つまりお前さんは、まともに音を遠くまで飛ばせているのはサガとミロだけだと、そう言いたいんだな？」

童虎も困ったように頬をひつかいた。彼がきいているその録音からは、よく通る澄んだサガの音色と、ミロの明るい華やかな響きしか聞こえてこなかった。

「まずいな…こりゃ。確かに、悪目立ちしすぎる。もう少しセカンドの連中には頑張ってもらわんと」

「同感だが、あと一週間少して何が出来る？ 四年はともかく、五、六年もちょっと難しいパッセージになると途端に元気がなくなる…しかも、この先の練習は合奏はかりでパート練習の時間はとれない」

シオンは無然としてもとの椅子に腰掛け、茶を一息で半分まで呷つて言った。

「手…私としたことが汗闊だった！ チェトウィンドをトップにした事がこんな風に裏目に出るとは！」

オーケストラ、もつと言えば音の世界というのは、いわゆ

る単純な足し算が通用しない。十人居れば十人並みの音が出るかといえば、必ずしもそうではないし、たつた一人芯になり得るプレイヤーが加わるだけでパート全体の完成度が格段に変わったりする。この場合、サガという一人際立つたプレイヤーが居たために、近い距離で聞けばパート全体の音の鳴りが増されて聞こえてしまっていたのだ。サガも普段はどちらかといえばパートの音に溶け込む弾き方をしている。今回はトップとして積極的に音を立てる弾き方をしている。指揮者の耳さえ誤摩化されるほどのその技量は感嘆に値するが、そのためにパート員がすつかりなまけてしまったのでは意味がない。

「サガも前で強く経験はあまりなかったからな…。気付けない方が無理だったか…」

さりげなく童虎が出したフォローを、シオンは鼻息ひとつで吹き飛ばした。

「ふん。あれの腰がひけているからいかんだ！ トップがパート員に注文を出すのは当たり前だというのに、あいつは未だに上級生にも下級生にも遠慮しているからな！」

サガには、彼の感性とパート員の耳とに大きな隔たりがあることを、必要以上に恐れているふしがあった。もし、サガが彼の納得出来るレヴェルをパート員に求めたら、それは無論無茶だということになるだろう。しかし、シオンの目から見れば、何もそこまで甘くしなくてもよいのではないかと感じる場面が多々あるのだ。それは、サガがパート員を見損

なっているわけではなく、彼は彼なりに鞭を振るう事なく、パートのレヴェルが向上する道を模索していると知った上での感想だった。

シオンは、パート員の尻を叩くことに躊躇しない。それは、性格も勿論あるだろうが、自分も上級生から尻を叩かれて上達したという記憶があるからだ。サガは、入団当時から文句なしに上手だった。サガにはその尻を叩かれるという経験が欠けているというのが、シオンの二年後のコンサートマスターに対する唯一の懸念だった。

「サガはお前さんとは違うさ。オレ達は彼を信じてセカンドヴァイオリンを任せた。今更口を挟むわけにもいかんだろうよ」「わかつてる。でなければどうに私が直々に喝を入れているところだ。……まあ、遅まきながら、彼もパート内の親密度を上げようと努力しているようだがな。少なくとも今週に入ってから、格段に雰囲気はよくなった……六年の三人を除けば、だが」

月曜日の休憩時間の一件を、勿論シオンも童虎も目撃している。ファーストヴァイオリンの反応は半々で、誰もがチャールズの言動は快く思っていないものの、サガの方針に疑問を唱える者も少なくはなかった。確かに、今のセカンドヴァイオリンに遊んでる暇はない。シオンはどちらかと言えばサガをサポートする立場だったが、この録音を聞いてしまうと「そもそも言っていない、という気分になってくるのだ。」

「音はたしかに月曜から変わったよ。少なくとも息が揃うよう

になった。大分進歩じゃないか」

「お前は少々気が長過ぎる。これがまだ一ヶ月前なら私も同じように構えていられるんだがな。泣いても笑つても我々の引退まで、あと十一日しかない。何かやるなら、その前だ」

大らかと言えば聞こえないが、殆ど気休めの域を出ていない童虎のコメントに応じたシオンの言葉は、後半から徐々に自分自身に語りかけるようなものになり、最後に彼は、「荒療治が必要だな」と一言呟いた。

「荒療治！」

「そうだ。セカンドの連中が死ぬ気で練習して第二部の構成を完全に頭に叩き込まない限り、この状況を打破する方法はない。奴等、サガとミロの音が立っている事をいい事に、自分で休符をカウントしていないんだ。トップを盗み見てこそこそ入るから、どうしても遅れるし、音もスカスカになる。全員とは言わんまでも五、六年が自分一人で弾ききれるようになれば、もう少しはましになるだろう」

「それはいいが、どうやって奴等にそこまでの練習をさせる？」再びシオンが注いで来た茶に手を伸ばした童虎に、シオンが自分の首を切る真似をしてみせる。童虎は一瞬目を丸くして、それからやりと笑い、ははあ、と呟いた。

「成程な。まあ、サガには気の毒だが、それが確かに彼を本気にさせるには一番の方法かも知れん」

「言っておくが、真似事をする気はないぞ？ もし失敗に終わったら、その時はお前が無事本番まで連中を率いてやってくれ」

「それは」免だから、精々あのチビっこいのを焼き付けておくことにするさ。意外にフェアファックスは、窮地に追い込まれれば働くかもしれない」

童虎は、あの月曜日の休憩時間、一人サガを庇って立ち上がった少年の姿を思い出して大らかに笑った。彼の目には、問題の突破口は実はサガではなく、あの小さな少年にあるのではないかと映っていた。

「しかし、お前さんも損な性格だな。なにも、残り一週間になって皆の恨みを買う事もあるまいに……」

「なに、安心しろ。事が起これば恨まれるのは私よりむしろ、黙って静観を決め込んでいるお前の方だろうさ」

私を恨む根性のある奴はそうそう居ないからな、とシオンは童虎の手から茶碗を奪い返し、童虎は困ったようにあごを撫で、少なくとも待望のオルガニストくらいは見方につけておくか、とぼやいたのだった。

「それで、結局サイモン先輩とベンジャミン先輩は乗ってくれそうなのか？」

一方、その「期待のオルガニスト」の方は、スミス・ホルの二階、最下級生の部屋が並ぶ廊下の手すりに寄りかかって、

隣部屋のミロと話し込んでいた。サガに対し、カミュへの協力依頼は自分がやる旨を申し出たミロは、月曜日のうちにカミュへの協力依頼を済ませ、快諾を得ていた。カミュの方も、自分の得意な鍵盤楽器でアンサンブルに参加出来る事が嬉しく、毎晩のようにこうしてミロからの報告を受けている。

誰か特定の人物と特に親しくなることを意図的に避けているカミュの、それはかなり特異な部類に入る行動だったが、ミロの方は勿論そんな事情には気付かず、その日のヴァイオリンパートについて語り続けるのだった。

「うん、なんとか。ベンの方は、出来ないところとぼしてもいいなら、つて今日は言ってた。サイモンはちよつと気が弱いなんだよな。もうちよつと度胸がつけば、もう少し弾けるはずなんだけどな。オレの隣じゃ結構弾いてるくせに、一人弾きにつかまると全然ダメなんだ」

曲がりなりにも一学年上の先輩を難しい顔で評価するミロを、カミュは愉しそうに眺めている。ミロには、どうやら、学年という名の区切りは存在しないらしい。彼の中の分類は、尊敬する人、気に入りの人、仲間、嫌いもしくは尊敬出来ない人、これらの何処にも所属しない人、といった形式であり、誰が何処に分類されたかは、ミロの反感を見れば一目瞭然なのだった。例えば、サガ・チエトウィンドは尊敬の対称であり、アイオロス・エインスワースは気に入りの部類に入る、というように。

サイモンとベンジャミンはどうやら仲間分類されたもの

のようだ。サイモンとベンジャミンの側に、それを受け入れる度量があればいいが、と、カミュは半ば真面目にミロを心配して思った。

「それにしても、君も随分積極的になつたじゃないか。先週末では、むしろセカンドヴァイオリンのメンバーを避けていただろう？ 何か心境の変化でもあつたのか？」

今週に入つて、ミロは休み時間にコントラバスパートを尋ねることもなく、暇つぶしにパーカッションを訪れることもなくなつた。理由を何の気なしに尋ねてみると、今まで白かつたミロの頬が、ふわりとピンク色に染まつた。

「……やめたんだ。そういうの。なんていうか、面倒臭がつて、自分の楽な方ばかり選んでたからさ、オレ。カミュやアイオロスと喋るの楽しいし、休み時間は自分のパートに居なくちゃいけないなんて決まりもないって自分に言い訳して、セカンドにいらなくてもいいや、つて思つた。……でもその間に、サガはパートをまとめるのに物凄く苦労してたんだ。ちゃんとセカンドに座つていて初めて気が付いた。六年の奴等は、サガみために練習も努力もしないでサガに文句ばかり言つてる。で、オレはセカンドに全然居なかつた。それで多分、こんな本番前にパツヘルベルをやらうなんて言い出したんだ……。それつてかなり凄い危機感を自分とこのボスに与えてたつて事だよな？ で、オレもその原因の一人だつて分かつてるけど……！」

ミロの真つすくな眼差しは次第に伏せられ、その声は段々

と何かを堪えるようなものに変わる。

「……みんなの居る前であんな言い方つてない！ チャールズの奴、サガが何を考えたかなんて想像もしないで、素人の遊びだつて……！ 本来、サガこそオレたちみたいな素人と一緒にやらなきゃいけない理由なんてある訳ないんだ。サガは室内楽の連中と出来るくらいの腕なんだから……。最上学年のあいつらが、本当なら率先してパートをまとめた心配したりサガを手助けするのが当然だろう？ それをあいづら、わざとサガに聞こえるような声で、まるでサガがあいつらを侮辱したみたいに言つたんだ……。上級生として威張りたいんなら、それに見合ふだけの態度と責任を果たすべきだ！ 一つ下のサガがあんなに一生懸命なのに……！」

悔しそうに両手を握りしめるミロを見下ろし、カミュは漸くここ数日のミロの熱意を理解した。ミロは、サガの力になりたいのだ。尊敬する先輩の苦境を救おうと、彼なりに必死なのだ。

そのくせ、ミロは、どうも彼のこの熱意をサガの前に表すことが苦手なようで、サガと話す時必要な事以外は絶対に喋らない寡黙な人物になる。そのためか、サガの方も、どうやらミロに気に入られていないと勘違いしているふしがあつて、カミュから見るサガはいつもミロとの会話の後溜息をついていた。先刻、サイモンのことを気が弱いとミロは評していたが、どうやら、ヴァイオリンを弾く度胸と、憧れの先輩の前で話す度胸は全く別物のようだった。

「そうだな。サガ先輩は優しいからね。シオン先輩みたいに、パート員を叱りとばせるような人なら、多分もう少し楽が出来るんだろうけど……」

カミュは笑い、就寝時間が迫っている事を思い出して、「そろそろ部屋に戻るよ」とミロに告げた。ミロも「わかった」と頷き、先程までの自分の熱を照れくさく思いながら「愚痴聞いてくれてありがとう」と札を言ってお礼を返した。

このとき、カミュの言った一言、シオンの一喝が翌週の頭にはオーケストラ全員の頭上に降り掛かる事になるとは、ミロもカミュも想像だにしていなかったのだ。

### 3. Saturday, 6th December

「そー！ 入りが遅れている！ もう一度、セカンドだけやり直し！」

学生指揮者が課外授業で練習を休んだ十曜日、オーケストラはシオンの容赦ないパート弾き、一人弾き攻撃に晒され戦々恐々としていた。パート弾きとは、あるパートだけがかまっ

て皆の前で演奏させられることで、一人弾きになるとそれが個人を対象としたものになる。管楽器は元来一人一パートだから、基本的に常日頃から一人吹きに慣れているが、弦楽器のように普段集団で演奏するパートには、極度の緊張を強いる練習方法だった。

こうなると、如何にパートリーダーが優秀であつても、怯えるパート員を助けることは適わない。サガはある意味パート員よりも緊張し、まだヴァイオリン歴の浅い四年生がせめて普段の実力を発揮出来るか否か気を揉んでいたが、シオンはそんなサガの顔をちらりと一度見やつたのみで、容赦なくセカンドヴァイオリンの面々を締め上げた。

誰もが、当初シオンが想像していたよりは善戦し、何とか無事第一部を終えて第二部に突入した時、その事件は起こった。第二部前半は、拍子が頻繁に変わり、各パートの複雑な掛け合いが続く。曲をしつかり理解していないと、正しい場所に入りそびれる、俗に「落ちる」と言われる現象に陥る。テナポも速いため、一度「落ちる」と次に何処で入つてよいのか分からず、延々数十小節の長きに渡つて落ち続けることになる。

管楽器は落ちると誰にでも分かつてしまうので、流石に本番まで一週間というこの時期に落ちる者はない。しかし、弦楽器のパート弾きを低音から順に回していくうちに、シオンの表情はみるみるうちに険しくなつた。

まず、コントラバスが一人弾きに捕まつた。もともとコン

トラバスは低学年がいなかったため、それほど問題のプレイヤーはいなかったのだが、本数が少ないのにさぼっている人間がいる、とシオンの目には映ったのだ。

さぼっている、と暗に言われたアイオロスは、一人弾きになると途端に張り切り、難なくシオンの合格点を勝ち取った。それだけ弾けるならさつさと真面目にやれ、とシオンの視線がアイオロスを睨んだが、勿論アイオロスは頓着する様子もない。

チェロは元々経験者が多いため、なんとか集団で合格点を稼いだが、四年生のダニエル・オーガストとシユラがブルト（弦楽器で隣に並ぶ二人組）弾きにつかまり、ダニエルとその他数名の音程の甘さを厳しく注意された。ヴィオラは迫り来る一人弾きに全員が震えており、普段の十分の一も実力を発揮出来ずにシオンの雷を食らう。とはいえ、元來拍を数えるのが仕事の一面もあって、弾けずとも落ちずに入ろうとする努力と、本来もう少し弾けているはずだ、というシオンのヴィオラ族一般の精神状態に対する理解もあって、何とかその場は通過した。ファーストヴァイオリンは普段からシオンに怒鳴られているため全員が基音をクリアし、残るはセカンドヴァイオリンのみとなった。

第六学年の三人組は、なんとか落ちずには弾いたものの、速いパッセージで音を抜かしたり臨時記号を落とす箇所が目立ち、この期に及んで何の調で弾いているのかと怒鳴られた。サガを除く五年生は比較的善戦したものの、後半の掛け合い

でアランとホセのカウントがずれ、崩壊。その後、復帰出来なかったことがシオンの怒りを誘い、真面目にカウントしろと怒られた。そして四年生は、ムウとベンジャミンのブルトがつかまり、たとえ難しくとも最初の音くらい弾くぐらいのやる気がなくてどうするのかと消極的な態度を非難された。そんなわけで、シオンの視線がミロとサイモンに向かって来た頃には、シオンの不快指数は軽く八十パーセントを超えていた。

しかし、このブルトには、ミロがいる。誰もが、ここにはそれほどの嵐は到来するまい、と考えたし、サガやカミュですらそれを信じて疑わなかった。

ところが、ミロは、あろうことか、ほとんど弾けなかったのだ。もともとミロは、サガの弓を食い入るように見詰め、その通りに弾く努力だけをしてきた。そのため、どこで入るのか、などというカウントなど、自分では全くしたことがなかったのだ。その上、管楽器やファーストヴァイオリンの音もなく、ミロは拍子を叩くシオンの手の音を訊きながら、呆然と弓を宙に泳がせることしか出来なかった。

「どうした？」

シオンの不機嫌な問いが、セカンドヴァイオリンの頭上を寒々と凍み渡った。

「もう一度、やり直し」

再び、乾いた拍手の音が響く。

じつとりと、手の平に汗がにじむのをミロは感じた。サイ



モンは、すっかり緊張しきってしまつて、弓を弦の上に置いておられるにもかかわらずともな音が出せない。何とかしなければ、と、ミロは焦り、その緊張の臨界に達した瞬間、いきなり腹を切つたように弾き始めた。

ただし、シオンのカウントを全く無視して。

シオンのカウントは揺るぐことなく続き、休符も全音符もシオートカットしまくつたミロの一人弾き（もはやサイモンはついてゆけずに弓を下ろしていた）と、まったく合っていない拍子との耳障りな響きが終了した頃には、決して狭くはない八角堂はシオンの無言の怒りで充満し、下級生のみならず最上学年の面々までが、上からのしかかる重い空気に頭を垂れていた。

「念のために尋ねるが」

と、シオンの不気味なほど静かな問いが全員の前を降り積もつた。

「今のは、一体サン・サーンスの何番のつもりか？」

「…第三番です」

ミロが、数秒の沈黙の後、無理矢理押し出すように、顔を上げて答えた。

「…ほう。何を弾いているかは少なくとも知っているのだな。それで、君は一体本番まであと何日あると思つているのか？」

「…十一日です」

「…では今日までに、自分一人でもとに弾き通したことは？」

「…ありません」

更に冷たい沈黙が八角堂に満ちる。どう聞いても不器用としか言いようのないミロの返答に、シオンを知る人間の顔には諦めの表情が浮かび、ミロの日常を知るカミュの唇からは焦れて息詰まつた吐息が漏れた。

あのような返答をしては、まるでミロが全く練習をしていないかのように受け取られても仕方がないではないか。

カミュの目には、ミロは人一倍練習をしていると映っていた。ほぼ毎日のように、ミロはサン・サーンスの楽譜を抱えて練習室に籠っている。その熱心さは、セカンドはおろかファーストヴァイオリンの面々と比べても十分群を抜いていると言える。

ただ、少々その練習の方法が間違っていただけで…。

実のところ、ミロは全てのパッセージを暗譜していたが、残念なことに、全ての休符をすつとばし、音のあるところだけを覚えていたのだ。

カミュには、ミロが効率を重視し、少しでも密度の濃い練習をしようとするのであろう事が容易に想像出来たが、同時にその方針が最もシオンを怒らせるものであることも瞬時に理解した。

個々のプレイヤーである前にオーケストラの一員であれ、最初にカミュに論じたシオンが、自分の音のない場所を軽んじるような練習方法を是とするはずがないのだ。

誰もが、次にミロの上に炸裂するであろう雷を予想した時、その矛先が僅かにミロの頭上を外れた。次の瞬間、落雷の大

音声はこの場で最も弾けなかつた人間ではなく、最も熱心に己の責務を果たそうと努力をしてきた人物の頭上に炸裂した。

即ちセカンドヴァイオリンのトップ奏者に。

「だからお前は甘いというのだ、チエトウィンド！」

一瞬、八角堂は水を打ったように静まり返った。シオンの友人達でさえ、何が起こったのか分からなかつた。言葉の余韻が消え、誰もが息を飲み見守る中、ただ一人サガだけがきつと頭を持ち上げてシオンを見つめ返した。

「自分さえ弾けていればメンバーの不足を補えるかと？ 一体今まで、お前はパート員の音をどれだけ聞いてきたのだ？」

サガは答ええない。両の拳を握りしめ、必死にシオンの怒りの圧力に抗つて立っている。最上学年の間に静かなさなわめきが広がり、数人かはシオンにしきりに目配せを送り、また数人かは困つたようにシオンの親友である童虎の顔色を伺い見た。セカンドのトップサイドに座るチャールズ・フィッシャーは、俯いてシオンから視線を外しつつ、一瞬口元に笑みを浮かべ、すぐ後ろに座るゲオルグ・アーレンスにちらりと視線を投げる。

全く予期しなかつた人物に落ちた雷に唖然としたミロの思考が、その品性を欠いたチャールズの笑みをきつかけに再び回り始めた。一体、何故自分ではなくサガが責められているのか？ 悪いのは、弾けないパート員であり、自分の怠惰を棚に上げてパートリーダーの窮地を楽しむ愚かな六年生ではないのか？

ミロは弾かれたように立ち上がり、横暴な専制君主を睨めつけた。

「ちょっと待てよ！ サガを非難する前にあなた自身はどうなんだ?! ここに居るみんながくだらない理由でサガが困っている事を知っている筈だ。それなのに、誰も手を貸そうとしない。パートの問題はパートで処理しろと言う。でも、いざとなつたらこんな風に一人の人間に責任をなすり付けようとする！ パート員の音をどれだけ聞いていたんだつてオケのリーダーのあなたが聞いたですなら、誰があなたにオケの音をどれだけ聞いていたんだつて聞くんだ？ それも本番十一日前になつて！ サガが責められるんなら、ここに居る全員が同じだけ自分自身を責めるべきだ。あなたも含めて！」

弾き出された言葉は弾丸の如く、一瞬の空白もなくシオンに向かつて降り注いだ。つい先日まで、明らかにそのサガの頭痛の種であつたに違いないミロだったが、あまりの怒りにそのような背景すら意識から吹き飛んだ。何故シオンはこんな横暴を平然と行うのか？ 何故、誰もシオンを咎めようとならないのか？

ミロの握りしめた両拳はあまりの力に真っ白になり、瞳はぎらついて相手を射殺さんばかりだったが、シオンはただ視線のみをちらりとミロの方に投げ、一言びりと言つた。

「生意気な口は、パッセージの一つもまともに弾いてから叩け、小僧」

「話をそらすなよ！ 悪いのはオレや他の連中で、サガじゃな

い！」

「違うな。サガはセカンドのトップだ。過程がどうあれ、パート員にまともな音を出させるのが仕事だ。困難があれば、協力を頼むなり自力で打破するなり、どんな手法を用いても目標を達成するのみ。そのためのトップの権限だ。……さて、お前を鍛え直すのはサガの仕事だが、そんなに責められたいなら言うてやろう。休符を『無』だと勘違いするような奴はオーケストラには要らぬ。顔を洗つて出直して来い！」

ミロの顔が朱に染まる。でも、と再度食い下がろうとしたミロの袖を、ムウが強く引いた。勢いでムウをも睨み付けたミロに、ムウが小声で告げる。

「今の君では何を言つても無駄です。むしろ驕が悪いとサガが怒られますよ」

「でも！ 何も全部サガのせいになくつたつて……！」

「それがトップというものです。厳しいですがね」

ミロは険しい表情でシオンを再度仰いだ。結局その次の台詞が噛み締められた唇を割つて出る事はなく、ただ鋭い歯ざしりの音だけが漏れ、周囲の人間をきよつとさせた。

その間にも、シオンの怒りは全パートの頭上に広がり、止まることを知らない。

「セカンドばかりではない。管はこの期に及んでまだミスを繰り返し、弦は他人の音に寄り掛かり、何処を向いても自分から音を出そうという気概が感じられない。あまつさえ、この時期に練習の手を抜く輩がいるとは、聴衆を馬鹿にするにも

程がある！」

コントラバスの一角で、いつの間にか他のパートの頭上にまで波及してきた叱責にアイオロスがしれつと舌を出す。シオンの席からは見えなかつた筈のその表情を知つてか知らずか、シオンは遂に最も破壊的な一言に行き着いた。

「技術もなく、秩序もなく、音楽に対する誠意もない。一生に一度、学生生活最後の檜舞台に、このような集団のコンサートマスターとして立つのは私のプライドが許さない。私の熱意に、諸君は応えてはくれなかつた——では、諸君の流儀に合うコンサートマスターを新たに選ばばよからう。私は今日限りで降りる！」

がたん、と椅子を蹴散らす音が続き、その椅子にひつかかつた譜面台が派手な音をたてて倒れた。シオンはざりつとオーケストラ全体を睨めまわし、手にしていたヴァイオリンをケースに取めるとそのまま足音も荒く八角堂の扉へと向かつた。かつて、この大オーケストラは、指揮者を激怒させ、指揮棒をへし折らせたことがある。脅しではあつたが、本番に振らないと断言された事もある。しかし、コンサートマスターが本番直前にポストを投げ出すなどというのは前代未聞である。しかも、歴代のコンサートマスターの中でも最も厳格に己の任務を遂行してきたシオン・ハーシェルその人が、である。

「シオン！」

サガの、危機迫つた声が飛んだ。シオンは振り返らない。今追うべきか、後でじっくり話し合うべきか。一瞬判断に迷

ううちに、サガは視界の中央に同じドアに向かつて失踪する金色の小さな人影を見た。ミロ・フェアファックスだ——我に返り、慌てて追いかけてしようとした瞬間、隣に座っていたアランが伸び上がって強い力でサガの右腕を捉えた。

「待てよサガ、ドウコ先輩が呼んでいる」

音楽棟から寮のある一角へ抜ける小道を、小さな少年が、金色の髪を逆立てる勢いで走っている。左腕には古びたヴァイオリンケースを抱え、右肩に藁藁の入った袋を下げている。その頬は上気し、時折、深い青の瞳に厳しい表情が浮かぶ。

シオンを追って、ローズハウスを目指すミロの姿だ。

ミロの脳裏には、先刻見たサガの表情があつた。いつも優しい優雅な笑みを浮かべている瞳が、目が離せないほどに真剣味を帯びて厳しく鋭く尖つていた。——そして、その切先は、真つ直ぐにサガ自身に向けられていた。

どうして、サガが責められなくてはならないのか。

どうして、サガが、あんなにも自分自身を責めなくてはならないのか——。

腹立たしくて、悔しくて、八角堂を出た途端に涙が滲んだ。シオンの言葉も、ムウの忠告も、確かに正論だった。だが、ミロにはどうしても納得出来ない。不公平だ、と、理屈で考

える以前に全身が承服することを拒絶する。

大体そもそも、セカンドヴァイオリンは人材が揃っていないのだ。最上学年は出来損ない、まだヴァイオリン歴の浅い下級生が多く、トップは若い。シオンは確かに優秀なパトリックでも知れないが、そこを判断する前にファーストとセカンドの人材の差を考慮すべきなのだ。選りすぐりをファーストヴァイオリンに連れ去り、問題児と初心者のみを若年のトップに押し付けてアフターケアも行わず、それでどうして公衆の面前であのような非難が出来るのか、と再び怒りが胃の底を焼いて、ミロは眉間に深い皺を寄せた。

せめて最上学年がああ出来損ない六年生を御せば、サガの苦勞も半減したかも知れないのに。

誰も、サガの力になろうとしなかった。最も腹立たしいことに、セカンドに居着かずふらふらしていた自分自身も含めて、くそつ、とミロは吐き捨て、前方に見えて来たローズハウスを睨んだ。

過ぎたことを悔やんでも仕方がない。今度こそ、サガの助けになるのだ。癩癩を起こしたコンサートマスターから、何が何でも譲歩を引き出してみせる。

ミロはローズハウスに辿り着き、ハウスカラーのローズビシオンに統一された談話室を突っ切り、驚く寮生への挨拶もそこそこにシオンの部屋に駆け上がった。四、五回、立て続けにノックを連発すると、漸くゆつくりと扉が開き、不機嫌な表情のシオンが現れた。

「ノックは、もつと間をあけてするものだ。入れ、と言つたのに、気付かなかつただろう。」

「話がある。」

ミロは、頭二つ分ほど上にあるシオンの両目を睨み上げた。シオンはちらりとミロの背後に見える廊下に視線を投げ、人影のないことを確認してから、顎をしゃくつて言つた。

「入れ。」

ミロが部屋に足を踏み入れたとき、一瞬、何かハープのよな香りがした。何の匂いかと推察する前に、ミロの視線はシオンのベッドの上に散乱した何本ものカセットテープと、ポケットスコアに釘付けになつた。

テープには、全字で日付が記入されている。ウオークマンにセットされているのは、最も新しいもの、すなわち今週の木曜日のものだ。開かれたスコアは、いくつもの書き込みがしてあり完全に一八〇度開いている。恐らくどのページを開いても、同じ状態なのだろう。

と、その時、テープやスコアがベッドの端へ寄せられ、シオンがその空いたベッドに腰掛けた。座れ、と短く向かい側の勉強机の椅子を指し示す。

今までミロの胸に突き上げていた激しい熱に、ひやりと一瞬外気が混入した。シオンが、今日に至るまでに人知れず行つて来た努力の破片が、今日の前にある。

「…いや、…」

そう言つてミロは一度口を閉ざしてシオンを見た。シオン

はじつとミロを見ていた。ミロは緊張して、一度失つた言葉をもう一度思い起こし、覚悟を決めて口を開いた。

「あんたが言つた事、つまり、オレが休符をまつたく無視して練習していた事に對し顔を洗つて出直して来い、つて言つた事に関してはまつたくその通りだと思つし、反省もしている。それは、絶対に本番までになんとかする。」

シオンの表情は変わらない。

「だけど、だからつて今痲癩を起こして何もかも投げ出すのはやつぱり納得出来ない。セカンドは確かに他のパートより出来てないかもしれないが、そういうメンツをセカンドに押し付けたあんたたちにも責任はあるんじゃないのか？ サガだつて、普通より一年早くトップについて、あんなに苦労してる。パートのことはパートで解決するのがオケの掟だなんて、オレは納得出来ない。困つたら助けるのが仲間だろう？ サガは確かに、セカンドを上手くまとめ切れなかつたかも知れないけど、痲癩起こす前に、あんただつて出来ることをやらなかつたことを思い出すべきだ。サガだけじゃない、まだ頑張る気であるメンバーを見捨てて、自分は出来損ない集団のコンマスが嫌だからつて逃げ出すなんて、そんなのは間違つてる！」

シオンは黙つてミロの弁舌を聞き終えると、ひとつ溜息をつき、手元のウオークマンを手繰り寄せた。中に入つていたテープを取り出し、プラスチックのケースに収め、ミロの方に差し出した。

「貸してやる。聞いてみる」

シオンの口調は、ミロの激昂に比べ不気味なほど静かで、抑揚がなかった。ミロがテープを受け取ると、シオンは今度はスコアを手にとり、ぱらぱらとページを捲つて言った。

「……この曲は無理だと、私は最後まで反対した。管の連中は、とにかくやりたいの一点張りだ。なるほど、何とか止まらず、一通りそれらしきものを流すだけなら出来るだろう。だが、それは聴衆を感動させる音楽ではない。本当に、金を払って聞かせる聴衆を満足させるものが出来るのか、その為の努力をする覚悟があるのか、と私は再三彼等に念を押しした」

シオンの台詞は、ミロの問いかけにまるで嘖み合わず、まるで独り言のようだった。ミロは奮い起こしたテンションの行き場を見失い、仕方なく黙つて次のシオンの言葉を待った。

「彼等は、出来ると言いつつ。一方、弦楽器の連中にも、スコアもろくに見ず、この曲の難しさも知らずに推した者は多かった。本当にやれるのか、無理なら一度白紙に戻すことも可能だったが、その時点で、全員が覚悟した。今年一年は、本気で練習に取り組み、と。だが……」

シオンはぱたん、と音をたててスコアを閉じ、漸くミロの方を見た。

「結果は、お前も今日見た通りだ。『やれる』と言えるのは、目標そのものが何処にあるのか分かっていないからである。ことが多い。一生懸命が何になる？ 行き着き先を見定めなければ、ただの空回りだ。……チェトウィンドは、その辿り着くべき場

所を知っている数少ない人間だ。だからこそ、このテープに記録されたセカンドの有様は、彼の失敗にほかならない。……私の言っている意味が分かるか？」

「……よくわからない。あんたは、サガの事を凄く買つてた。だけど、そのサガがしくじつた。だからもうやる気なくしたつてことか？ だとしたら、一番音楽に対する誠意がないのはオーケストラのメンバーでもなんでもない、あんた自身だろう！」

「私がセカンドヴァイオリンに留まらず全団員の尻を叩き、鞭をふるつて、体裁を整えればすむ話なら、とつくにそうしている。だがお前は、そんな個人が専制君主のように君臨するオーケストラで音楽をやりたいのか？」

はつと、ミロは息を飲んだ。

先刻、サガを怒鳴りつけるシオンは、まるで専制君主そのものだった。そしてそれは決して傍目にも気持ちのよいものではなかった。

「私が怒鳴らなければ事態は改善しないというのなら、それは皆が私に専制君主になれと望んでいるということだ。チェトウィンドに対しては、まだ第五学年の彼にトップを押し付けた責任もあるから、折あるごとに指導をしてきた。だが、もうそろそろ彼も私に口を挟まれずに仕事をこなすべきであるし、それ以外の他パートの人間にまで喧しく口を挟むつもり

はない。私は、そんな自立しない集團の、暇つぶしのような音楽に付き合う暇はない。尻を叩いてくれるコンマスが欲しいなら、他の人間を選べ。そう言いたいだけだ」

暫くの間、ミロは唇を固く引き結び、じつと拳を握りしめていた。シオンは暫くミロの言葉を待った後、窓辺に行き、すっかり日が落ちて青黒くひかる外の風景を眺めつつ、机に置いてあった瓶から何かを取って口に入れた。再び、ふわりとハーブの匂いが部屋に広がった。そのどこかほつとする清々しい香りに、ミロは眉間の皺を緩め、固めていた掌を開き、もう一度シオンを見た。

「…あなたの言いたいことは分かった。今なら、あなたのあのボロクソの言いようも少しは納得出来る。…だけど、一度だけ、チャンスが欲しい。また、サガは諦めてないんだ。オレだって、こんなところで諦めたくない」

「…それで、お前は どうする？ オーケストラはチームプレイだ。お前一人が弾けたところで意味がない。…チェトウインド一人が弾けていても仕方がないように」

「サガにアドバイスを貰って、セカンド全員ともに弾けるようにさせる！ 他のパートまでは手が回らないけど、今日のことと反省して自力でなんとかしようって考えるかもしれないし、一番ミソツカスだったパートがまともになればちよつとは全体の聞こえもましになるはずだ」

シオンは、少し驚いたようにミロを振り返った。学年でも

最も小さな部類に入るミロは、次の三月で十九歳を迎えるシオンとはまるで大人と子供ほどにも体格差がある。だが、巷に溢れかえる落ち着きのないミロの噂とは異なり、今彼の目に映る少年はなんと堂々として落ち着いていることか。

初めからこの小さな新入生に一目を置いていた童虎の観察眼に、シオンは感服した。

ただ一人、事態の打開の為に自分を追って来た行動力、上級生の尻を叩く事も厭わない覇気。

成程、鍵を握るのはトップのサガではなく、この小さなフェアファックスかも知れない…。

「期限は来週の木曜日だ。その日の合奏で、もしセカンドがあなたの合格をもぎ取れたら、あなたはもう一度コンマス席に戻って来るんだ」

ミロは瞬きもせずシオンの顔を凝視し続ける。シオンはふとこみ上げて来た笑いを噛み殺し、まるで熱のない声を造って言った。

「ああ、本当にセカンドヴァイオリンがまともに聞ける代物になるのなら、な」

「それで、本当にシオン先輩はコンマスを降りたのか？」

スミス・ハウスの談話室の一角、古びた暖炉の前で、四人

の三年生が小さな頭を寄せ合っていた。二十世紀も終わりに近づいた冬の夜、大理石張りの古式ゆかしい暖炉に火が入ることはなく、建物の中は全館セントラル・ヒーティングシステムになっていて、むしろ火の入らない暖炉の前は隙間風がさして寒いので、大声で話せない内容を話すにはもってこいの場所だった。誰も近づいて来ないからだ。

「そうなんだろう？ だって今上級生はローズハウスで次のコンマス選びしてるらしいからな」

「そう言えは、マコーマック先輩もチェトウインド先輩も帰ってきてないな……」

「団長が、招集かけたって話だ」

「実際どうだったんだ？ カミュ！ シオン先輩がキレて、ドウコ先輩もキレちゃったのさ？」

三人三様の、明らかに遠慮よりは好奇心の勝った視線を受けて、カミュはちらりと視線を他の上級生達に投げ、少し声のトーンを下げるようジェスチャーで示した。カミュが話している相手は同じオーケストラの三年生、トロンボーンのマックス・グルバーとヴィオラのアンソニー・スミス、ファゴットのウォルト・パーシーだ。いずれも初心者として入団して来たため、合奏時には別室で個人練習をしていて八角堂での騒動を見ていないので、より詳しい情報を求めてこの暖炉の前で合奏組の帰着を待ちわびていたのである。

カミュは慎重に言葉を選びつつ、興奮した同級生を宥めるように言った。

「起きた事を言えば、その通りだ。シオン先輩が各パートに一人弾きをやらせて、あまりに出来ない人間が多いことに怒って出て行ってしまった。その後すぐに、ドウコ先輩が新しいコンサートマスターを選出すると言って上級生に招集をかけた。……でも、少なくともドウコ先輩は怒ってはいなかったし、シオン先輩の怒り方も不自然だったような気がするんだ。いや、腹をたてていたのは確かだと思っただけ……それで即コンサートマスターの仕事を投げ出すような人ではないと思うんだ……」

「さうか？ オレには随分厳しいというか、キレやすい人のように見えるけどな」

マックスが練習で酷使した唇を無意識に指でなぞりながら言った。

「隣の部屋からでもよく聞こえるぜ？ 先輩が怒ってる声。音が悪いとか拍を数えろとか……。ま、喋る機会がないからよく分かんねえけどな」

「だけど、ドウコ先輩とシオン先輩ってすつごく仲がいいんだろ？ それなのに何でさつさと次のコンマス選びなんて始めちゃったんだらう？」

アンソニーが茶色の大きな瞳をぐるりと回転させて呟く。

「普通、友達じゃなかったら、その場を宥めるのが一番近い親友の役目だろう？ 喧嘩してたわけでもなさそうだし……」

「しかも本番一週間前だしな……まあ、団長として、その場は次善の策をとっておいて、後でシオン先輩を説得しに行くつも



りだという可能性もあるが」

歴代最も多くの監督生を出しているファゴットの一員に相応しく、思慮深げなコメントをウォルトがつけた。

実のところ、カミュには別の心当たりがあったのだが、あの場に居たわけではない彼等にその是非を問うても意味がないので、ただ黙ってウォルトの言葉に頷いた。シオンがコンサートマスターを降りると言つたあの瞬間、童虎は確かに、唇の端に笑みを浮かべていたのだ。すぐ隣に居たカミュにしか分からない程の、微かな笑みではあつたが。

「……いずれにしても、あまり憶測や思い込みで話を広げない方がいいように思う。シオン先輩が戻つて来るにしろ、新しいコンサートマスターが本番をこなすにしろ、勝手な憶測が飛び交つていてはやりにくいだろう？ なにしろ、本番は一週間後だ……」

カミュが思わず溜息をついたとき、談話室の入口で派手な衝撃音がして、四人は弾かれたようにドアの方を振り返つた。ドアから金色の固まりが飛び出し、彼等の目を猛然と駆け去つて行く。奥の階段を駆け上がり、暫く姿を消した後、その旋風は再び彼等の元まで舞い戻り、勢い込んで尋ねた。

「カミュ！ サガがどこにいるか知つてるか?」

肩で息をしながら迫るミロの勢いに、四人は圧倒された。

「サガ先輩なら、まだローズハウスに居ると思うよ?」

「ローズハウスだつて?! たつた今まであそこに居たのに!」

「ああ、君はドウコ先輩の話を聞かずに飛び出してしまつたか

ら知らないんだな。今、ローズハウスで次のコンサートマスターの選出をやつておるんだ。ドウコ先輩の呼びかけで」

「何だつて?!」

甲高い、耳に突き刺さるようなミロの大音声談話室に響き渡り、今度こそ部屋に居た全員が暖炉の前に固まつている三年生の集団を振り返つた。最早、折角寒い思いをしてまで暖炉の前に陣取つた意味はない。

「童生! 折角シオンがチャンスくれたのに! 早く止めない……!」

「待つた、ミロ、チャンスつてどういふことだ?」

再び走り出そうとしたミロの腕を捉えて、カミュが早口に尋ねた。あの時、シオンを追つて八角堂を飛び出したミロのことを、上級生達は勿論、カミュでさえすっかり失念していたのだ。臍を曲げたコンサートマスターに、入りたての新人生が太刀打ち出来る訳がない。門前払いを食らうのが堰の山と、誰もが気にも止めなかつた。

それがどうだろう。ミロは既にシオンとコンタクトをとり、何かしら解決の糸口を掴んで来たのだ。上級生が次善の策を模索している間に!

「シオン先輩と、話をしたのか?」

「そうだよー! あの後、直ぐに。セカンドヴァイオリン全員が、まともに聞けるレヴェルになるなら、シオンは戻つて来るつて言つた。期限は来週の木曜日だ。オレ、このことをサガに伝えに行つて来る!」

ミロはカミュの手を振り切り、入つて来た時と同じドアから再び全速力で駆け出して行つた。未だ衝撃から立ち直れないカミュの隣で、マックスが小さく口笛を鳴らす。

「……やつぱり、弾ける奴は度胸がある、つてことか？ あのシオン先輩相手にやゝやるぜ……」

「でもミロが一番弾けなかつたつて話を聞いたよう？ それがきつかけで、シオン先輩がキレて、セカンドの監督不足つてことでサガ先輩がひどく怒られたつて……」

「サガ先輩が？」

「うん、で、ミロがシオン先輩に食つてかかつたらしい。しかも、サガ先輩を責める前に自分の監督責任はどうなんだとか何とか、爆弾発言をしたつて。勿論、文句はまともに弾けるようになってから言えつて怒られたらしいけど。」

「……曲がつた事が嫌いだからな……ミロ……でも、相手が例え先輩でも庇うところがやつぱりミロだよな……」

三人は一樣に互いの顔を見合わせ、常に洗練された振舞と言動の主であるセカンドヴァイオリンのパートリーダーを思った。彼等としてサガが責められれば何か助けになりたいと願うに違いないのだが——思うことと行動との間に何の躊躇いもないのが、ミロのミロたる由縁である。

「……ミロは、サガ先輩のことを特別に尊敬しているようだから……」

半ば独言のように、カミュが呟いた。呆れ驚く三人の横で、カミュは全く別のことを考えていた。ミロは、心の底からサガ・

チエトウィンドという一人の人間が大好きなのだ。サガの為ならば、ミロはどんな骨も折るのであろうし、大抵の事ならば、自分を犠牲にすることも厭わないであらう。ことによると、その他の人間の都合すら関係ないのかも知れない。その情熱の激しさ、一途さに、圧倒される。

そうして今回も結局、誰よりも早くシオンにコンタクトを取り、条件付き復帰の約束を取り付けた。シオンに怒られたから何だというのだ、と、まるでミロの声が聞こえるようだ。大切なことはこの状況を打破することであつて、間に合わせの代役を選んでいる場合ではないだろう、と。

その情熱は完全に無私であり、彼が心酔する上級生に気に入られようとか、認めてもらおう、などという下心は全くない……。

「……まあ、それは見ればわかるけど……先輩としては、最下級生に庇われるというのどうかと思うよ。サガ先輩だから、あまりそういう些事には捕われなさそうだけど、普通は気を悪くするんじゃないか？ トップがパート員に庇われるというのは」

ウォルトの言葉にその他の二人がそれぞれに賛同し、カミュも苦笑しつつ頷いた。

私は、どうすればいいだろうか。

サガは、明かりの消えた部屋の出窓に腰掛け、遠く街頭の向うに広がる黒い森を眺めていた。

怒濤のような一日が終わり、明日からの修羅場に備えなければならぬというのに、一向に睡気は訪れない。いざれ眠れぬのなら気の済むまで考え事をしよう、と、森の向うに広がる修道院の一時課の鐘を聞きながら、こうして既に一時間近くも座り込んでいる。

剥き出しのつま先が冷たく凍え、痛みを感じたので、サガは出窓の上に両足を抱え込んだ。

童虎の呼び出しの用件は、新しいコンサートマスターの選出だった。サガはまず自分がシオンに交渉するから、それまで待つて欲しい旨を主張したが、交渉と平行して選出も行わなければならない、と一言のもとに却下された。選ばれたのは、次代のコンサートマスターであるロナルド・リックだった。突然の指名に恐縮し、怯えるロナルドに、サガは深く同情した。

この時期に、最上級生をコンサートマスターに指名してしまつたら、多分シオンはもう戻つて来ない。シオンにも、彼の後釜に対する遠慮があるだろう。誰もがそれを分かっているからこその人選だったが、一週間前にオーケストラの要役

を指名されてしまつた人間の緊張、そして最上級生を差し置いてトップに座る者の胃の痛みは、想像するにあまりある。

なんとか、シオンを呼び戻すことを胸に誓い、すっかり日の落ちた石畳をローズハウスからスミスハウスへと戻る途中、反対側から駆け上がってきたミロに出会った。ミロはスミスハウスに戻る間もどかしく、サガに驚きの事実を告げた。曰く、条件付きでシオンが戻つて来てくれるかも知れない、と。

声を弾ませるミロに、本当によかった、と、笑顔で応えながら、サガの胸をまず去来したのは寂寥感に似た感情だった。

また、自分は何も出来なかつたのか。こんなに小さな下級生に、一番大切な仕事をさせて……。

「また、寝ないのか」

小さく頭上から振つて来た囁き声に、サガは顔を上げた。アイオロスが、片手に毛布を持つて、上からサガを見下ろしていた。

「考えるのは構わないが、冷えるぞ。これ被つとけ」

ありがとう、と応えた声は、小さく掠れている。サガが思う以上に、彼の体は既に冷えきつて固くなつていた。油の回らない機械のように、ぎこちなく毛布を受け取つたサガにアイオロスは一つ溜息をつき、同じように出窓に腰掛けた。

「……で、何をそんなに悩んでるんだ？」

「……色々と……。考えても仕方のないこともあれば、明日か

ら直ぐに行動に移らなければならぬ決断もある。どうせ眠れないから、今晩一晩くらい存分に考えてもいいかと思つてね。君は？ 矢張り眠れないのか？」

「そりゃあ……こんなチャンスに眠る馬鹿はいないだろう？」

アイオロスはそのままサガを窓の棧に押し付けて、仰向いたサガの唇にゆつくりと長いキスをした。同室に眠るあと二人のうちどちらかが身じろぎをしたら離れよう、と決めたのに、どちらも音を立てる気配はなく、サガの冷えきった手足にほんのりと暖かみが戻つた頃、アイオロスは漸く唇を放して笑つた。

「随分と上手くなつたじゃないか。お前やつぱり物覚えがいいな」

「……今のは勿論、貸し2つ分くらいにはなつたのだろうね？」

「冗談。毛布持つて来てやつただろう？ これはその礼」

アイオロスはサガと同じように窓の棧に腰掛け、毛布の裾をひっぱつて自分の足に掛けた。

「どうせ、またミロに先を越されたかと思つていじけてるんだろ。あのチビ、考えない分だけ行動は非常識に早い」

押し殺した、愉しくて仕方がない、といったアイオロスの笑い声が部屋に流れた。サガは、出窓の端に膝を折り曲げ、足先をアイオロスの体の下に敷き黙つて暖を取っていた。そのサガの首筋に、温かく乾いたアイオロスの手が伸ばされた。撫でられ、引き寄せられ、もう一度唇を合せる。丹念にサガの口内を暖めたアイオロスの舌は、やがてサガの衷に小さく

隠れていた違和感を刺激する言葉を音にした。

「なあ……、臍を曲げた御大がそう簡単に折れるとは思わなかつたが……キレたシオンに対するドウコのものわかりの良さ、シオンのキレつぶりの良さ、十人分に胡散臭いぜ？ 今回の一件」

「つまり君は、シオンがわざと降板劇を演じたと言いたいのか？ 我々の危機感を煽るために」

「それ以外に何が考えられる？ あの目立ちたがり屋が、本番直前に一番美味しいポストを諦めたりするもんかよ」

ひそひそと、小さな会話は続く。シユラが煩わしそうに寝返りを打ち、二人は更に近づいて声を潜めた。

「……たとえそうだとしても、セカンドヴァイオリンがもう少しまでもならない限り、先輩は戻つて来ないよ。ミロは、四年生の個人練習に付き合おうと申し出てくれたんだ。きつとやりにくいだろうとは思うけれど、今は彼に任せるしかない……私は、いよいよ、六年生の三人と真剣に向かい合わなければならぬからね」

全く不甲斐ないパートナーダーだな、と呟いて、サガは自分を笑つた。どうせやらねばならないのなら、もつと早くから行動を起こせば良かったのだ。その優柔不断さが、シオンの怒りを買ひ、結局ミロにも大きな負担を強いることになつてしまつたのだから。

「……さういうのも、有りだろ。リーダーとして、先頭で引つ張つて行くだけが戦略じゃないさ。お前が臍抜けだから、ミロがやる気を出した。結果オーライだ。……勿論、俺はそんな役目

はご免だな」

ぼつりと、アイオロスが呟いた。アイオロスから見れば、優柔不断を絵に描いたような己の行動など評価の対象にもならないと思ひ込んでいたサガは、その意外に肯定的な言葉に驚いて目を見開いた。

「……だが、あの六年のアホどもをねじ伏せるのはお前の役目だ。こればかりは、お前が鉄槌をくれてやらない限り取まらない。俺だつたら呼び出して根性鍛え直してやるが、お前にはお前のやり方があるだろうから任せろ。——覚えとけよ、あのクズどもにもドタマきてるのはお前だけじゃないんだ」

#### 4. The last week before the regular concert

月曜日。

朝一番の数学の授業に、ミロは五分の遅刻をした。

教官のエドウィン・ポルツは息を切らせて駆け込んで来た少年の足音に「遅いぞ」と一言釘を刺し、次いでその少年の顔を見て絶句した。

「……具合でも悪いのかね？ フェアファックス」

彼が見たその少年の顔色は紙のように白く、唇は紫色にひび割れていた。青い大きな腫の周りには、二重三重の隈がくつきりと縁取られている。普段から凹凸のある顔立ちで、見る角度によつては隈があるように見えることもあるのだが、今のそれは明らかに少年の肌刻まれたものだ。

「……いえ、ちよつと寝不足なだけです。……大丈夫です」

応えたミロの声は若干かすれ、年若い教官の不安を更に煽り立てた。

「……本当かね？ 無理はいかんぞ？」

「本当です」

ミロはやや力ない足取りで、前方の空き席へ向かった。と、真ん中辺りの列を過ぎた時、列の端に座っていたアイオリアが横へひとつずれて、ミロの為の席を作つてやった。

「何やつてたんだよ？ トイレに行つたつきり戻つて来ないで腹でも壊したのか？」

「うん……ちよつと……実は、トイレの中で知らない間に数分寝てた」

「……なんだよそれ……」

呆れて溜息をつくアイオリアの脇腹を、更に隣のエドマント・ハウがつつく。

「ミロ、昨日毛布被つて明け方まで何かやつてたからな。どうせなら、ずつと起きてりやよかつたのに」

「無理だよ、ミロはおとこの夜も徹夜したんだから……」

更に横からウイリアム・バンキンの吹きが続き、最後に「授業中！」というマイケル・ガーネットの不機嫌な声が被さる。

ミロは首を竦め、黙つて席についた。

寝不足の理由は、土曜の夜からの徹夜である。なんとかシオンを納得させられるレヴェルを達成するために、ミロは消灯後も布団を被つて懐中電灯で楽譜を照らし、暗譜のやりなおしをしたのだ。昨日の日曜日は、カミュからメトロノームを借り、なんとか全楽章を一人で弾き切るところまでこぎつけた。勿論休符も含め、である。

それでもなおかつ昨夜眠れなかったのは、一学年上のサイモンとベンジャミンの練習に付き合うため、スコアの読み直しをしていたからだ。シオンから借りたテープを聞きながら、真面目にスコアを読んでみると、如何にサガが他のパートに神経を配りながら弾いているかがよく分かる。同じ旋律を弾くパートと入りがずれることなどは絶対にないし、ファーストヴァイオリンとの連携も全く自然で無理がない。時折情熱に任せてテンポが遅れたり走つたりするファーストと、テンポのペースを築くコントラバスとの間で齟齬が生じると、巧みにファーストのテンポを引き寄せて上手くペースに乗せようとする。同じように弦楽器の中音域を守るヴィオラと協調して、弦全体のまとまりを生み出しているのはセカンドヴァイオリンだった。

それほどまでに優秀なパートリーダーに、誰一人としてまともについて行けていないのだ。

サガの意図を理解することもなく、コピーのようにただサガの音をなぞるばかりの自分の音に、ミロは苛立った。

こんなザマじゃ、だめだ。

自分だけじゃない、他のメンバーにも、自分達に与えられた音符を理解し、オーケストラの中での役割を理解してもらわなければ……。

改めてシオンの条件の厳しさを思い知り、ミロは見えた前途の多難さと焦りから来る緊張のあまり、また昨夜も徹夜してしまったのだ。

「……従つて、このとき変数Xは……」

教壇では、ポルツ教授が方程式の基礎に関する講義をしている。教室は、鉛筆を走らせてノートをとる音で充満している。その中で一向にノートをとろうとしないミロに、アイオリアが途中で気付いて怪訝な眼差しを向けたが、ミロはそんな友人の眼差しにも気付くもしない。

……とにかく、自分の手の届く四年生だけでも、何が何でも及第点を得られるレヴェルに引き上げよう。四年生が出来るようになれば、五六年生も恥ずかしくなつてもう少し真面目に取り組むだろうから。

まずは、ベンジャミンとサイモンの初心者一人組を捕まえなくては。昼食のときに彼等のハウスを尋ねてみようか。ムウとイブンは経験者でそこそこ弾けるが、なんとかこの二人も練習に巻き込める方法はないだろうか。あるいは、パツヘルベルの練習をしたいと持ちかければ、もしかしたら誘いに

乗ってくれるかもしれない――

「……ミロ！ おい！ ミロ！」

声と同時に頭に引き響くような痛みが走り、ミロはびつくりして両目を見開いた。ぼやけた視界に、鉛筆と消しゴムのちらかった机が見えた。額の皮がつっぱってちぎれそうだし、いつも煩く目の前にちらつく巻き毛が見えない。

「いつて――！ 放せよ！」

怒鳴った瞬間、髪を掴んで吊り上げられていた力がぶつりと途切れ、ミロの体は前のめりにつんのめった。恨みを込めて後ろを振り返ると、すっかり呆れ顔のアイオリアが見下ろしていた。

「お前が道を塞いでるからだ。…授業終わったぞ」

「え？ もう？ オレ、何にも書いてない」

「だろうな。その分だとお前、軒かきそうになって俺に殴られたことも覚えてないだろ」

「……覚えてない……、あ…のさ、リア、ノート見せて……」

ミロが上目遣いにアイオリアを見ると、アイオリアは大きく両腕を組み直し、ミロの背後に現れた赤毛の少年の方に顎をしゃくって言った。

「自分のケツは自分で拭え、と言つてやりたいところだが、俺が見せなくてもどうせカミュが見せるからな。ま、理由ありだつてんなら、話によっちゃ俺も協力してやる」

放課後、ミロが借りた練習室に集まった面々は、オーケストラの枠をやや超えた不思議なアンサンブルになっていた。

ヴァイオリンはミロの他に第四学年のムウ、イブン、ベンジャミン、サイモンの四人。チェンバロ、オルガンにカミュ。アイオリアは選択音楽でとっているトランペット。このあたりまではよいとして、低音がないのは弾き辛いというのでハウが趣味のエレキベースを持ち込み、ウイリアムはマラカスを持ち込んでそんなものは要らないと却下され、楽譜は読めるが楽器の苦手なマイケルと組んでトライアングルを手に入れた。

「それで、本当にパッヘルベルをやるんですか？」

当初明らかにこの場にそぐわない三年生三人を見て、怪訝な表情を隠さなかつたムウが聞いた。

「パッヘルベルも、まあ、やってもいいとは思いますが、折角集まったのだからサン＝サーンスの練習をしてからでいいんじゃないですか？ この間随分怒られたことすし」

「そうだな。また明日の練習で一人弾きさせられないとも限らないし……」

イブンが至極常識的に賛同する。この時間までミロと共に個人練習をやっていたベンジャミンとサイモンにも、勿論異論はない。次いでイブンは、本日のエキストラの方に視線を向けた。

「で、エドマント・ハウだったっけ？ 君はどのくらい弾けるんだい？ サン||サーンスのベースは弾けるのかな」

「いや、なにしろ今日初めて楽譜見るんで。弾けるところだけ参加じゃ駄目っすか？」

「それでも結構ですよ。何もないよりはいいでしょう。アイオリアはたしか、プライマリスクールからトランペットはやっているのでしたよね？ 君の兄上の話によれば」

「一応……ただ、オーケストラのトランペットは吹いたことないんで、どのくらい出来るか分かりませんが」

意外に上の学年の経験者二人が、積極的に事を運んでくれていることにミロは驚き、次いで安堵した。この分なら、自分が音頭をとらなくとも、ムウとイブンが仕切ってくれるかもしれない。だが全員の配置が決まり、いよいよ音を出す段階になると、ムウが待ち構えていたように、全員をくると見渡して言った。

「で、誰が音頭をとりますか？」

ミロを除く九人の視線が、ミロに集中する。ミロは、ごくりと唾を飲み込んだ。

「……じゃ、俺がやります」

隣の部屋で始まった不思議な合奏練習に耳を傾け、サガは唇の端に淡く笑みを浮かべた。

随分と奇妙なバランスのアンサンブルだが、洗刺とした活気があつて良い。ミロのチェックは結構厳しく、アンサンブルはかなり小刻みに止められ、修正を受けていた。

練習室の扉が開き、三つの人影が入つて来た。サガは背筋を正し、それまでの微笑みを消して、いつになく厳しい表情で来訪者を見話めた。

「来て下さつて、有り難うございます。先輩方」

入つて来たのは、セカンドヴァイオリンの六年生、チャールズ、ケリー、ゲオルグの三人である。そのあまりに自然なキングス・イングリッシュに、三人の眉は一樣に引き皺つた。

「……来なきやクビだつたのはお前だろ」

「交渉をするために、です。話し合いのテーブルについて頂く為に、敢無く申し上げたまでです」

チャールズの苛立ちを含んだ返答に、サガは臆せず「どうぞ」と椅子を勧め、三人はその言葉を無視した。

「俺達は忙しいんだ。さつさと用件を言え」

チャールズが、サガの方も見ずに吐き捨てる。サガは、さりと何でもないことのように言つた。

「セカンドヴァイオリンパートの、トップの選出です」

一瞬、三人の間の空気が固まった。実のところ、彼等はサガが纏まらないパートに手を焼き、自らトップを降りると宣言する日を密かに待ち続けて来たのだ。貴族だからといって誰もが従うと思つたら大間違いだ、というのが彼等の主張であり、三人で示し合わせてわざと悉くサガの方針に背き、サ



ガが疲労するのを待つていた。だが、想像以上にサガは粘り強かった。最早交代劇はないと諦めかけたところに、今日の呼び出しである。さては先日のシオンの叱責が効いたかと、チャールズは内心で手を打ったが、顔に出してはふてくされた不機嫌顔のまま、言った。

「この時期にトップ交代か？　そういうことはもつと早く言えよ。こつちも、トップをやるとなったらそれなりに準備がいるんだ」

「何故？　この時期だからやるのです。本番一週間前ともなれば、パートの上級生は誰がトップ席についても問題ないレヴェルになっている筈でしょう。現に、ファーストヴァイオリンは次代のコンサートマスターを選出した。だからセカンドも希望する者全員に等しい課題を与えて、その中で最も優秀であった人物をトップに任命すればよい。……もともと私は、このようなオーディションを経ずにトップを引き受けるのは気が進まなかったのです。だから、正しい選考過程を経て、今度こそ、あなた方にも納得して頂けるトップになりたいのです」

一気に最後まで言葉を續けて、サガは初めてチャールズの瞳を真正面から睨み据えた。

「昨日までの貴方になら、私は勝てる自信がある。トップが入れ替わるかどうかは、貴方次第です。チャールズ」

チャールズの顔が怒りに紅潮し、ぎり、と、盛大な歯軋りが漏れた。サガは普段容姿も秀麗気も優美なだけに、こつし

て本気で睨み付けると壮絶に恐ろしくも迫力のある表情になる。チャールズが歯を食いしばったまま次の言葉を発せずにいるので、代わりにケリーが奮然と吼えた。

「チエトウインド！　少しは弁えろ、上級生に対して生意気だぞー！」

「貴方も候補として立候補しますか？」  
「はぐらかすな！　年上に対する礼儀つてものを——」

「立候補しないのなら、」  
ケリーの言葉を途中で遮り、サガはその厳しい視線をケリーに向けた。

「お戻りいただいて結構です。話は済みました」

「この野郎——！」  
ケリーは激昂した。もともと、三人の中ではケリーが最も

沸騰しやすい性格である。ケリーが前に進み出てサガの胸倉を掴もうとしたその時、横合いから別の腕が伸びてケリーの腕を抑えた。ゲオルグが、サガの胸倉に手が届くその一歩手

前で、待ったをかけたのだ。

「ゲオルグ！」  
「暴力はやめろ、ケリー」

ゲオルグは早口に言い、ドアの上方に備え付けられた防犯カメラをその視線で示した。練習中密室になる練習室は、その全てに防犯カメラが備え付けられているのだ。サガは明らかに、制裁の名のもとに暴力を振るわれる可能性も考えてここを会合場所にしたのだろう。

三人の中では比較的沸点の低いゲオルグは、むしろこれまで大人しい下級生と高を括っていたサガの豹変ぶりに、恐怖を感じ始めていた。ここまで強気に出るのは、何か裏があるのではないか。このやりとりも全てオーケストラの幹部に盗聴されていて、こちらが怒りにまかせて失態を犯すのを待っているのではないか。

と、その時、不意に、チャールズが声を立てて笑った。そのヒステリックなまでに大袈裟な笑い声に、残る二人の六年生は慌てて後ろを振り返り、まだ笑い続けている友人を見詰めた。

サガは、ただ一言も相手を罵ることなく、もつとも効果的にチャールズの自尊心を打ち砕いた。その気になればパート員を首にも出来るトップが、敢えて勝負を挑み、勝つてみせると言う。トップの権限を笠に着て脅しをかけるくらいのこととは彼等の想像の範囲内だったが、現実の言動の面憎さはその想像の及ぶところではない。

だが、チャールズはやがて笑いをおさめると真つすぐにサガを睨み返した。その両眼には狂気の色はなく、強い確信と、復讐の炎が燃えていた。

「面白い。受けて立ってやる。明日の合奏、より多くミスした方が負けだ。俺が負けたら、何でもお前の言う事聞いてやる。だが、お前が負けたら、今日大口叩いたことをたつぷり後悔させてやるから覚悟しろ」

コンサートマスターが降板し、急ごしらえの代理コンマスであるロナルドが初めて指揮者の左に座った火曜日、オーケストラは異様な高揚感に沸き立っていた。期待の新人生ミロがシオンと一騎打ちで譲歩を引き出して来たという噂は口から口へと伝わり、既に殆どの人間が知っている。中にはこのままロナルドのコンマスで本番に乗つたらどうかと半ば冗談半ば本気で囁く者もいたが、殆どの人間はもう一度楽譜をさらい直し、なんとかシオンの聞きに来る木曜日の『逆オーディション』に好演奏が出来るよう努力を始めていた。

ロナルドは、緊張した面持ちを隠さないものの、先週に比べると大分表情が和らいでいる。シオンが戻つて来てくれる可能性に、心底期待しているといった雰囲気だ。ヴィオラは若干緊張し、どうしても遅れがちな早いパッセージをさらう音で充滿している。チェロは相変わらず雑多な雰囲気だが、珍しくトップのニコラスが背後を振り返っていくつか指示を与えていた。管楽器は、常なら全く違ふ曲の旋律をさらう音が三つ四つは聞こえるものだが、流星に今日はサン＝サーンの音しか聞こえて来ない。

そんな彼等が、信頼を込めて視線を注ぐ場所が、セカンドのトップ席だった。コンサートマスターのロナルドは、今日初めてトップ席に座る身であり、アンサンブルとなると少々

頼るに心もとない。しかし、サガはこの一年実際にセカンドを率いてアンサンブルを作つて来た要であり、常にセカンド以外のパートの音を聞いていることも既に他のトップには知れるところだつた。

だが、そのセカンドのトップ席を含む第一ブルトで、今日、もう一つのオーディションが行われることは誰も知らなかつた。ケリーとゲオルグは、前日の自信たっぷりなチャールズの言動に驚き、練習前にチャールズの袖を引いて囁いた。「大丈夫なのか？ あんな約束して……。あいつは絶対にミスしないぜ？」

だが、チャールズは昨日の自信を微塵も失わず、言つた。「そりゃ、いつも通りならな。だが、予想外の事態が起きたときに、あのガリ勉がどこまでやれるかが見物さ。まあ見てろよ。俺にも、あの憎らしい優等生に勝るところはあるんだぜ？」

チャールズは一言、ミスのカウント忘れるなよ、と残して去り、ケリーとゲオルグは顔を見合せてその後ろに従つた。彼等は勿論、サガのペナルティカウントをチャールズのそれよりも三倍は厳しく取るつもりだったが、チャールズ本人も何か必勝の策を考えているらしいと知つて安堵したのだ。

ロナルドの、チューニングを始めるAの音が響く。直前まで指揮者のスコアを準備していたサガは急いで席に戻り、既に譜面台にチャールズの楽譜が乗せられているのを見て、声をかける。

「自分の譜面を使いたいですか？」

「ああ、そつしてもらえると有難いね。何力所か指番号振つてあるんだ」

指番号とは、どの音をどの指で押さえるかを記したもので、初心者には時折音符そのものよりも重要な情報となる。最初から経験者だつたチャールズが、未だに指番号を用いていることにサガは内心驚いたが、顔には出さずに、ではそちらを使いましょう、と頷いて腰を下ろした。

指揮者が七分遅れでホールに到着し、慌ただしくシオンの欠席の報告がなされた後、合奏が始まつた。ロナルドはよく健闘し、ファーストヴァイオリンも後ろから初心者のコンマスを助けたが、第一楽章の終盤で管楽器との掛け合いに遅れた。サガはすかさずテンポを引き戻し、ヴァイオリン以上の上部三弦を率いて管との掛け合いに乗せた。全パートのトップの視線がサガに集まり、セカンドのトップを中心にアンサンブルが纏まろうとしていた矢先だつた。

チャールズが、譜めくりのために左手を伸ばした。捲られた先のページに視線を落とす。一瞬、サガの弓が止まつた。

……これは……！！

明らかに、サガの記憶とは異なる音符の羅列が、その先に続いていた。

記憶を頼りに、正しい音を引き続ける。隣を見ると、チャールズも全く動ぜずにサン＝サンズを弾きつづけ、その合間に、ちらりと不敵な視線がサガの顔を撫でた。

……そうか。

サガは、チャールズの自信の根拠を漸く理解した。恐らく、チャールズは暗譜しなければ弾けない人間なのだ。全曲を暗譜しているから、こんな途中からブラームスの交響曲に継ぎ合わされた楽譜でも全く動じない。チャールズは、ミスの数で勝負をつける、と言った。途中でサガの記憶が途切れれば、十中八九、落とした音符の数でサガが負ける。

急に精彩を欠いたサガの運弓を訝しみつつ背後から見詰めていたミロは、やがて、奇妙な事に気付いた。トップサイドに座るチャールズが、いつまでたつても譜めくりをしないのだ。サガは自分の譜面のあちらこちらにスコアのコピーを貼付けていたりするので、他のパート員と譜面をめくる場所が違ったりする。その事には今更驚きもしないが、いくらなんでも譜めくりの頻度が少なすぎると思われた。

ミロは前に座るムウとベンジャミンの間から、じつと最前列の譜面台におかれた楽譜を見詰めた。ニア・ソリーの開けた大自然の中で育ったミロは眼が良く、遠くの細かな文字でも比較的良好に見分ける事が出来る。短い休みの間にじつと眼をこらすと、見覚えのある旋律が一瞬見えたような気がした。

……あれ、ブラームスの二番じゃないのか?!

思わず、入りを忘れて今日のトップサイドのチャールズを凝視した。思い込みや印象で人を疑うのはよくないことだが、チャールズの陰謀以外の可能性など全く思い浮かばなかった。

ミロは彼等の間で現在進行中のオーディションの事を知らなかったが、これがサガの予期しない事態であったことは、切味の悪くなつた運弓を見れば一目瞭然だ。

咄嗟に自分の楽譜を足下から拾い上げ、ミロは夢中で前列のムウの背中をつついた。「何ですか」と小声で振り返るムウに、サガを指し示し、無言で楽譜を押し付ける。ムウは不機嫌な顔をしながらも楽譜を引き取り、折しも訪れた長めの休符の合間を狙って最前列のサガに差し出した。

サガは、後ろから回つて来た思いがけない贈り物に、驚いて背後を振り返った。ミロが、両目をこぼれ落ちそうなほど見開いて、心配げにこちらを見ている。使え、とその眼差しが必死に訴えている。

厳しく引き締められていたサガの口元が、思わず柔らかく緩んだ。一列とぼして最後列にいるミロの位置から、よくぞ譜面が違っていることに気付いたものだ、と思う。サガは微笑み、ミロの眼差しを僅かに頷いて受け止めた。そうして、ミロから送られてきた楽譜を、譜面台の上ではなく、足の部分に立てかけた。

驚いたのは、チャールズだった。何故サガは、折角送られて来たまともな楽譜を拒否したのか？ 楽譜が差し出されたとき、チャールズの憎しみは一時的にサガ本人ではなく、「余計なことをした金髪のチビ」に降り注いだ。だが、その熱も、その次のサガの行動で一瞬にして引いた。

こいつ、正面から受けて立つつもりだ。

まさか全曲、このまま楽譜を見ないで弾き切るつもりなのか？

カンカンカン、と、指揮棒が指揮台を叩く音が響く。チャールズははっと我に返り、正面を見た。指揮者がやり直しを命じた。再度弦と管との掛け合いがずれ、今度は復帰できなかったためだ。

「二三小節目、ダブル・バーからもう一度」

一斉に譜面をめくる音が響き、全員が楽器を構え直す。サガは平然としている。一二三小節目のダブル・バーが記憶のどの部分に相当しているのか、全て頭に入っているとういうように。

果たして、サガは指揮棒の振り下ろしと同時に、正確に一二三小節目の最初の二重和音を響かせた。その姿には、先刻までの迷いの影はない。呆気にとられたチャールズは、まるまる一小節分、入りを逃した。流石に、小節数や練習記号の位置までは覚えていなかったからだ。

思わずサガの横顔を凝視すると、その眼差しはファースト、チェロ、コントラバスのトップを巡回した後、一瞬、チャールズの元へ戻つて来た。

勝負のことなど、微塵も考えていない。譜面を挿げ替えるという悪意が存在したことすら、忘れ去つてしまっているかのように。

……こいつは、本物の音楽バカだ……。

誰が見ても、今この瞬間の音に全神経を集中しているその

眼差しに、チャールズは底知れない脱力感に襲われた。

これまで、この学年一の優等生をバカと貶した人間はいないが、奴が音楽バカであることは、中傷でも何でもなく、紛れもない事実だ、と。

途切れることなく、合奏は進む。本蚕五日前の合奏練習は、既に通し練習で全体のバランスを考える時期にきている。

全ての音を暗譜し、練習番号の場所まで記憶していると見えるサガは、二度と動揺を見せることはなかった。

練習終了後、楽譜庫の戸締まりのため最後まで残ったサガを、楽器庫の出口で待ち受ける人影があった。人影に気づき、やや表情を引き締めたサガに、待ち人は一言ぼつりと問いかけた。

「……お前の勝ちだ。何か一つ望みを言え」

ふてくされた表情を隠そうともせず、壁によりかかつて立つチャールズの言葉だった。

いつも一緒にいるケリーとゲオルグの姿はない。八角堂は既に人影もまばらで、普段あまり見ない組み合わせの二人を数人がちらちらと振り返つたが、誰も近づいて来る者はなかった。

サガは、意外にすんなりと己の敗北を認めたチャールズに内心驚いた。カウントするまでもなく、今日サガはただ一つのミスも犯さなかった。ケリーは何度か練習番号がわからず

に落ちたので、サガのカウントでは自らの勝ちということになる。だが審判はケリー、ゲオルグの二人であつたし、もともと彼らの人間性をあまり信用してはなかつたこともあつて、何かしら文句をつけて引き分けくらいには持ち込む算段だろうと考えていたからだ。

「何でもよいのですか？」

「ああ。……俺にできることならな」

サガは暫く沈黙し、それからまつすぐにチャールズの目を見て言つた。

「……では、今年度二年、ファーストに戻り、最後まで一緒に演奏すると約束して下さい。途中で辞めたりせずに」

「……なんだそれは」

「意味が分からなければそれでいい。でも、もし思い当たることがあるなら、思いとどまつてほしい、というだけです」

一瞬、チャールズは驚いたような表情をした。そして、それから、急に意地の悪い笑みを口の端に浮かべた。

「……ふん、そう簡単にこれまでの恨みは晴らせないつてか？」  
「違います。あなたはファーストに必要な人材だからです。セカンドではなく」

今度こそ、チャールズは驚きをその表情に固めた。サガの言葉は決して皮肉ではなく、落ち着いて涼やかに澄んでいた。

「……チャールズ。貴方は、もしかして、楽譜を暗譜しなければヴァイオリンを弾けないのではありませんか？」  
チャールズは固く唇を結んだまま答えない。その沈黙を肯

定と受け取り、サガは続けた。

「そうだとすれば、貴方のこれまでの行動が理解できる。サンⅡサーンスは、暗譜するにはあまりにも膨大な曲です。旋律の多いファーストヴァイオリンならともかく、セカンドでは尚更です。貴方に対する先輩の評は、どれも弾けるのに練習しないとこのばかりだった。……でも、本当は、スクールに上がる迄に学んでいた曲の長さ、オーケストラの交響曲の長さの違いが障害となつて、暗譜するまでは実力を発揮出来なかつた、というのが正しいのではないですか？」

勿論、ごくたまに、膨大な数の音符を暗譜することが得意な人間もいる。例えば、ミロ・フェアファックスのよつに。だが、ミロはかなり特殊な例だとサガは考えていた。サガを含め、普通の人間ならば、学年が上がるにつれてそのような努力に割ける時間は激減し、より「手を抜いている」と思われても仕方のない状況に追い込まれることは必至だった。

「今日、貴方はほとんど全ての音符を暗譜していた。二、三音程の甘いところは確かにあつたけれど、音にも勢いがあつて最上学年に引けを取らない演奏だった。……その特質は、常にかパートとの連携を要求されるセカンドより、むしろ華やかに旋律を歌わせるファーストで生かされるべきです」

「だが、お前は完璧に暗譜してただろう！ それも練習番号の位置まで！ それとも、お前は特別だと自慢したいのか？」  
思わずチャールズは声を荒げた。それはどうも鼻屑目に聞いても卑屈にしか響かない言葉だったが、それを繕う労力を削

けるほど、彼は冷静ではなかった。

「暗譜なんて、していません。曲を耳で覚えていただけです。他のパートの音があれば、自分が何を弾けばよいのかは分かれます。練習番号は、止められるところは毎回同じような所ばかりだから覚えていただけです。何も他のパートの音がないうところで、突然練習番号を言われても弾けません」

そうして、サガは一言ぼつりと言った。

それは、自分がセカンドのトップだったから、嫌でも身に付いた能力なのだ、と。

暫く、チャールズはサガから目を反らし、沈黙を守っていた。その反らした視線の向こうで、決して今気づいたわけではない、ずつと昔から明らかだった真実に、今初めてチャールズは向き合っていた。すなわち、彼が反発し、壊してしまいたかったものは、少なくともサガの存在そのものではなかったのだ、と。

窓の向こうに夕闇が迫り、いつまでたつても八角堂の鍵が戻らないことに不審を抱いた管理人が訪れる頃、チャールズは漸く組んでいた腕を解き、サガの方を見て言った。

「……演奏会後のことは、悪いが約束出来ない。だが少なくとも今度の日曜日までは、俺にできることはしよう。ケリーとゲオルグにも交渉しておく」

木曜日。八角堂はこれまでになく緊張した雰囲気に含まれていた。各自、練習開始の三十分前には集合し、いつもの三倍のスピードで椅子並べや譜面台の準備を終え、不得意なパッセージの練習を始めた。セカンドの四年生達は楽譜を広げ、ミロに書き込まれた注意書きの最終チェックに余念がない。いつもは時間ぎりぎりに現れて当然のように後輩の用意した椅子に座り、喋つてばかりいる六年生三人組でさえ、今日は大人しくサン＝サーンズを練習している。

シオンの引導は、少なくとも八年生三人には効いたのか。

ミロは、その光景に感動を覚え、今日もトップ席に座るサガに視線を投げた。だが、そのサガは、どこか心配げな面持ちで、八角堂のドアを見つめている。

こんな時、何か普通に話しかけ、相手の緊張をほぐすような話題のひとつでも提供出来ればよいとミロは思うのだが、実際には近づくことすら叶いそうにない。菌痒い思いでじりじりとサガの横顔を見つめていると、後ろから肩を叩かれて呼び止められた。振り返ると、ファゴットのマコーマックとトロンボーンのアイスマンが並んで立っていた。

「……で、ここだけの話だが、ミロ」

と、決して小さくはない巨体を無理に小さく屈めて、アイスマンが言った。

「シオンは何時来るんだ？ 本当に来るのか？」

「でもさ、ブレイン先生にはシオンは欠席してるだけだと言っ

てあるだろ？ ……奴が現れたのにロナルドがトップに座つてゐるつてのは無理があるよなあ」

「いつそ、隣のアンサンブル室からこつそり聞いてもらつて、それで戻るかどうか判断させるつてのはどうだ？」

ミロの返事を待たずひそひそ話を始めた二人を見て、ミロは溜め息をついた。皆、不安なのだ。だが、シオンが本当に現れるかなど本人以外には分からないし、指揮者のミスター・ブレインがトップの交代を訝しもうがミロの知つた事ではない。今一番胃を痛めているに違いないサガの緊張をほぐす努力をするのはやぶさかではないが、残念ながら今彼等の相手をしている時間はミロにはない。それなので、ミロはまだひそひそ話を続けている異様に目立つ二人に小声で言つた。

「来るとは言つてましたけど、何時かは知りません。あの、オレ、準備がありますから、行つてもいいですか？」

返事がないので、さつさとその場を後にし、壁ぎわに置いた自分の楽器ケースの方に歩み出す。暫くして背後から、「あれ、ミロは？」という声が聞こえたが、ミロは聞こえなかつたことにしてそのまま壁際へ寄つた。

祖父の形見のヴァイオリンを取り出し、肩当てをつける。立ち上がりつて一度構え、肩当ての位置を確認して、何気なく窓の外を見る。とそのとき、窓の外に、灰汁色の髪の見覚えのある人影を見た。

シオンだ……！

ミロの白い頬に、緊張と興奮の緋い交ぜになつた赤みがぼつ

と差した。人影は、窓の下に佇んだまま、いつまでたつても音楽棟の入り口に入らうとしない。ミロは焦れ、視線を窓に置いたまま身を翻し、楽器をケースに置いてすぐ脇のドアに向かつて駆け出した。駆け出そうとしたが、その体は何か大きな柔らかな壁に遮られて、急停止を余儀なくされた。

何か、優しい匂いがする……。

背中もあつたかい……。

「失礼、ミロ」

落ちて着いた、綺麗な発音が頭上から降つてきて、ミロはぎょつとして顔を上げた。

「大丈夫かな？」

先ほどまでセカンドのトップ席にいた筈のサガが、ミロの体をしっかりと抱きとめて微笑つている。ミロの思考は硬直し、脈拍は瞬時に倍ほどにもなつた。口の中は干上がり、全身の毛穴から冷汗が吹き出たが、今見た光景を忘れず報告出来たことは、いつそ奇跡と言つてよいほどのものだった。

「すみません！ あの……シオンがそこに……！」

サガは黙つて人差し指を口元にやり、静かに、というジェスチャーを見せると、両腕で抱きとめていたミロを解放し、何気ない風を装つて窓を開けた。

「黙つて……シオン先輩はちゃんと聴いてくれてるよ。皆には言わない方がいい。音楽に集中できないからね……。此処まで来てくれたのなら、必ず時が来たら上がつてきてくれる」

サガは、昨日のうちに、シオンと話をしていたのだ。サガ



が自分の非力を認め、どうか再びコンサートマスターの席に戻って我々を助けてほしい、と懇願した時、シオンは言った。

明日、一人の観客として、合奏を聴かせてもらおう、と。

そうして、良い後輩を揃まえて来たな、と笑った。

「そうはいっても、少し発破をかけておく必要があるかな。皆にも、——先輩にも。」

サガは、くると身を翻し、大きく息を吸い込むと、彼にしては珍しくよく通る声を上げた。

「皆さん、シオン先輩が、休憩後に来られるそうです——」

一瞬、広い八角堂はしんと静まり返り、次の瞬間、ざわりと団の空気が波立った。これまで、噂ばかりだったシオンの出現を、セカンドのトップであるチェトウインドが公言したので。期待は嫌が上にも高まり、全員にびりつとした緊張が走った。

これって……。

そのあまりの鮮やかさに、ミロは思う。これって、もしかして、外のシオンにもわざと聞こえるように言っていないか？

「……先輩も、咳阿切って出て行った手前、何かきつかけがないと入りづらいだろうからね」

くすりと笑って目を細めたサガに、ミロは正真正銘の目眩を感じた。

サガって……サガって、こういう人だったんだ……

指揮者のブレイン教授が到着し、チューニングが始まる。

後半、シオンが来たら最高の演奏を聴かせるのだと張り切っている団員は、既に気力も十分だ。ブレイン教授が「今日はどうでもいいねえ」と目を細めて連発する中、団員自身も驚く熱演で前半は幕を閉じ、いよいよシオンが期待通りに現れた時、八角堂ははち切れんばかりの緊張感と期待感に溢れていた。

シオンは、その無言の圧力の中をゆったりと泳ぐようにしてセカンドの最前列に近づき、思わず立つて出迎えたサガの肩を軽く一つ叩いた。それから、その前を通り過ぎ、やはり立ち上がって頬を紅潮させているロナルドに、一言訊いた。

「付け焼き刃にしては、良い演奏だった。それにしても随分と居心地悪そうだが、またそこでやるかね？」

ロナルドは泣きそうな表情で首を大きく横に振り、ミロは思わず立ち上がってガッツポーズを決め、管楽器が一斉にはおん、ぴろぴろ、と歓待の意を表明した。そして馴染んだ席にシオンが収まった後半、漸く一つにまとまった弦楽器はノリで幕進する管楽器に猛攻をかけ、今度は指揮者に「まだ本番じゃないんだから、とつときなさい」を連発させ、音楽棟の管理人から「窓は閉めて練習するように」とのお小言を貰ったのだった。

かくして、全団員を緊張の渦に叩き込み、火事場の底力を発揮させるといふシオンと童虎の目論見は的を得て、団の演奏レベルは飛躍的に向上した。アイオロスやサガを始め、上級生の数人は途中からこれが画策であることに感づいており、後でこつそりと恨み言を言いに行つた者もいたが、シオンに「改善しなければ本気で降りるつもりだった」と一言で返され、その場に平伏したのであつた。

なお、このとき、丁度外を通りかかつたヘッドマスター及びOB会のメンバーが、本番当日揃つて中央の一番良い席に陣取り、その結果この大オーケストラへの助成金が三割積み増しされたことは、団員も知らない後日談である……。

## Philoque

「びつくりしたねえ、いやあ、びつくりしたねえ！」

レストラン・ホールの一角で、指揮者及び大オーケストラ顧問でもあるマエストロ・ブレインの上機嫌な笑い声が響く。周りを囲むのは、団長のドウコ、コンサートマスターのシオン、金管セクションリーダーのワイズマン、木管セクションリーダーのマコーマック、そして副団長のスチュアートの代わりに引つ張られて来たサガである。シオンがすかさずマエストロのグラスにワインを継ぎ、ワイズマンに目配せを送る。ワイズマンは、承知とばかり、進み出て声を上げる。

「これも又、我がマエストロのお陰ですよ——さあ、乾杯！」  
自分のビールジョッキをブレインのワイングラスにかち合わせ、一気に煽ると、ブレインも覚束ない足取りで進み出て、一息でワイングラスを空にする。歓声が上がリ、今度はドウコがマエストロのグラスを酒で満たす。

大風の末に訪れたサン＝サーンスの本番は、大盛況のうち幕を閉じた。百年を超える歴史を持つ彼等のオーケストラは、

観客も七割が卒業生及び関係者の家族だ。多少身軀で評価に甘い点は否めないものの、一般に耳は肥えていて駄目なもの無理に誉める悪癖はない。

その観客から、熱狂的なスタンディング・オベーションを浴びた。特に、二階のオルガン席から小さな少年が立ち上がりお辞儀をした時には、割れんばかりの拍手にブラボーの声が重なって一時收拾がつかなくなりかけたほどだ。マエストロは感激のあまり涙を流し、シオンに肩を叩かれながら舞台を退場した。そこから恒例の打ち上げコンパが行われる。このレストラン・ホールまで、マエストロの涙腺は緩みっぱなしであった。

さて、このたった一人の教官、マエストロ・ブレインの周りに団の重鎮が集まっているのには理由がある。表向きの理由はマエストロをもてなすのに新入りのペーペーをあてがう訳にはいかなからだが、裏の理由は勿論異なる。

ここ、イギリスでは、十八歳未満は禁酒ということになっている。

十八歳というと、上級第六学年だ。つまり、最上級生は法的にも飲酒が認められており、従って学内に専用のバーも持っている。だが勿論他の学年は禁じられているし、外に買いに行っても普通は売ってくれない。高学年になれば多少大目に見てもらえる部分はあるものの、プレップを出たばかりの三年生などはまず無理である。

そうは言っても、折角の打ち上げにスパークリング・ワイ

ンを舐めることも出来ないのでは、味気ないことこの上ない。そこで毎年、まず教官を数人がかりで酔い潰すのが最上級生、特に幹部役員の仕事になるのだった。

教官にだけ飲ますわけにもいかないので、誰か酒豪が付き合わねばならない。毎年、管楽器のセクションリーダーには、アルコールに対するある程度以上の適性が求められる——というの、嘘のような本当の話である。

「いやあ、感動したよ！ 一体、今週何があったのかね？ 僕は木曜日からプロのオーケストラを振っているのかと思つたよ！」

「まあ、本気を出せばこんなものですよ。これも全て、マエストロの日頃の指導の賜物です」

しれつとシオンが言い、周囲の恨めし気な視線を盛大に浴びた。ついでに唯一今回の降板劇の裏を承知していたドウコにも「なんとかしろよ」の視線が集中したが、勿論当人達は微塵も動じない。大分呂律が回らなくなってきたマエストロは彼等の寒い空気に気付く筈もなく、顔を真っ赤にして大らかに笑い、大人しく隣で控えていたサガにグラスを手渡した。

「いやいや、サンサンは難しいからねえ！ 正直、僕は本番で大崩壊しても不思議じゃないと思つてたんだよ。セカンドも最上級生がいらないのによく頑張った！ 先週迄はどうなることかと思つただけねえ。さ、飲みたまえ！」

「いえ、マエストロ、私はまだ十五歳ですから……」

「まあまあ！ 少しだけならいいだろう。アルコールの経験

は？」

「あります、とサガが答えると、マエストロは嬉しそうにシオンの抱えていたボトルを引き取り、サガのグラスになみなみと注いだ。

「若いセカンド・トップに乾杯！」

「乾杯！」

「マコーマックがちらりとスチュアートに視線を送り、親指を立ててOKサインを出した。解禁の合図である。スチュアートは待っていましたとばかりジョッキを掲げ、コントラバスのメンバーに向かって声を張り上げた。

「では、我がコントラバスに乾杯！」

「乾杯！イイ！」

「よし！次はチェロに行くぞお！」

会場は、騒然となった。毎年三年生は、ここでアルコールの洗礼を受けるのだ。もつとも、十三歳にもなれば、飲料水が手に入りにかかった歴史的背景も手伝って、半数くらいはビール程度の飲酒の経験がある。中にはこの年になるまで一滴のアルコールも口にしたことのない純粹培養もいるが、そういう初心者にはグラス半分程度のスパークリングワインで止めさせておく、という配慮もまた彼等の美しき伝統であった。急病が出て彼等の楽園が閉ざされては元も子もないからだ。

「コントラバスの嵐はあつという間に全パートを網羅し、十分後には全員が大なり小なりアルコールの恩恵にあずかることになった。その間、コントラバスパートは勿論全ての乾杯

に付き合おうのであるが、無論この伝統的習慣がアイオロスのコントラバスへの一層の忠誠心を煽ったことは想像に難くない。

「よっしゃもう一巡だ！五年生以上限定！行くぞ！」

「了解！」

さて、アルコールが廻り、陽気になると楽器を取り出すのが管楽器属の習性である。弦楽器の面々は「音程が狂う」と飲酒後の演奏は辞退する傾向があるが、連中は陽気に音外しも息切れも吹き飛ばす。例に漏れず、今年もいくつかの即興アンサンブルが「ガイナーヌ・剣の舞・空き缶パージョン」だの「3分でわかるベーターヴェン交響曲全集」だのと怪しいアレンジを披露する中、セカンドヴァイオリン十有志による「パッヘルベルのカノン」は正統派の好演として高く評価された。残念ながら六年生の三人は不参加だったが、それでもホルルの後ろの方で真面目に耳を傾ける彼等の姿に、サガは安堵と共に幾許かの淋しさを覚えた。

「もう少し、良い関係を築けたかもしれないなかつた、と。」

「アイオロスが聞けば「馬鹿か」と一言で片付けられるか、「ふん」と薄ら笑いで流されそうな感傷だったが、様々な苦勞も過ぎてしまえば大したことではなかったように思え、自分のやりようがもう少し上手ければ、とつい考えても詮無いことを思ってしまうのだ。

演奏を終えて、サガがそんな感傷に浸っている合間に、団員は更に血中アルコール濃度を増していた。ミロはとうとう

コントラバスにつかまり、スチュアートに絡まれて内心困惑していた。

「よ、ミロ！ お手柄だったな！ やっぱりお前はコントラバスだ！」

ばんばんと背中を叩かれ、先程無理矢理飲まされたスパークリングワインの匂いに咽せる。実は、ミロはアルコールが得意ではない。注がれたのはほんの一インチ程度のワインだったが、それでもこれまでの飲酒最高記録だ。

スチュアートの上機嫌は、構わず続く。

「いや、サガを庇って立ち上がったところなんか、さながら姫君を守るナイトだったぞ！ 見事シオンに粉砕されたが、まあ奴に勝つにはもうちつと修行が必要だな。……で、どうだ？ お姫様からお礼のキスは貰ったのか？ 木曜日には抱っこされてたようだが」

ミロのサガに対する特異なりアクシオンは既に団員に広く知れるところであつて、特に最上級生からは、憧れのパートナーダーに対する新入生の初心な反応として微笑ましく見守られてきた。その眼差しに気付いていないのは、当のミロだけである。スチュアートとしては、もう一度この可愛い下級生が真っ赤になる姿を見たかったのだが、彼の思惑は百八十度外れた。ミロはその台詞を聞くや否や、アルコールで赤く染めていた頬を蒼白にして、声を限りに叫んだのだ。

「サガは、姫じゃない!!」

一瞬、ホールはしんと静まり返った。ミロの同級生、ヴィ

オラのアンソニーなどは、バイキングのソーセージをトングスで挿んだまま、その場で硬直している。

「サガは姫なんかじゃない……なんでそんな事言うんだ……？ サガは、オレなんかいなくなつたつて、十分やつていけるよ？ オレが余計なことしただけで、サガを姫なんて言うのは間違つてるよ……」

ミロの大きな瞳が、じわりと潤んだ。九月からこちら、散々女の子扱いされて傷ついてきたミロにとつて、「姫」の一言は最大の侮辱だった。この一週間、サガの為に出来る事なら何でもしようとして、ミロは文字通り寝食を削り、全精力を注ぎ込んできた。だが、それは、同時にサガの活躍の場を奪うことでもあったのだ。そんな当たり前の事にも気付かず、そのためにサガが最上級生から「姫」の烙印を押されていたのかと思うと、胸が潰れるほど悲しくて、悔しくて身の置き所がなかった。

じつと掌を握りしめ、涙が零れないように眼に力を込める。おいミロ、冗談だよ、と、スチュアートの慌てた声がかかる。ミロは無言で首を縦に振った。

……スチュアートに、悪意がないのは分かつてるんだ。

ただ、ほんの冗談でも、サガが頼りなく思われたんだと思うと悲しくて……。

俯いて、もう暫く眼の乾くのを待つうちに、優しい温もりがふわりと肩に触れた。

「ミロ」

先刻までマエストロ・ブレインの相手をしてきた筈の人物の手に、ミロの心臓は跳ね上がった。

「ミロ、今日の演奏会が成功したのは、他の誰でもない、君のお陰だよ。私も、セカンドヴァイオリンも、君が来てくれて漸く息を吹き返したんだ。その事を心から幸せに思うし、君をコントラバスパートから奪ってしまったことを本当に申し訳なく思う」

ミロは、ゆつくりと顔を上げた。本当は、そのまま後ろを向いて猛ダッシュで逃げたかったが、肩を掴まれているので動けなかった。恐る恐る視線を上げると、まだ少し涙でぼやけた視界の中に、柔らかに微笑むサガが居た。

ああ……サガって、笑うと本当に綺麗だな……

ぼやけていたのが、良かったのかもしれない。その瞬間、緊張の糸がぶつり途切れ、ミロは緩慢にそのサガの笑顔を見詰めた。

「君からは本当に色々なことを学ばせてもらったよ。思ったことをその場ではつきりと主張できる勇氣や、直ぐに行動に移せる行動力、何よりもそこに注ぎ込む熱意といったものを。私の周りには、そういう美点を持った人が多いけれど、君はその中でも群を抜いているよ。……どうして、そんなに情熱を注げるんだらう？」

何か、サガが自分のことをベタ誉めしている声が聞こえる……ミロの思考は、先刻までの嵐のような感情の起伏からすっかり遠ざかり、ぼんやりとサガの言葉を遠くに聞いていた。

サガに誉められるのは嬉しいけれど、群を抜いている、というのは多分泣きそうな顔をしていた自分への慰めだろう。でも最後の一言には、そんな社交辞令を超えた真摯な響きがあった、ミロは思わず、それは、と考えた。

それは……

「だって、あなたのことが好きだから……」

その瞬間、優しく微笑んでいたサガの瞳が、ちよつとびつくりしたように、目開かれた。

え……つと……

オレ、今、何か言ったっけ……？

「うわっ！ 上げえ！ ミロ！ サガ先輩に告っちゃった!!」

突如、トロンボーンの三年生、マックス・グルーバーが歓声を上げ、それを合図に物凄い口笛の嵐が来襲した。ミロの声は決して大きくはなかったのだが、何分、全員が息を殺して彼等のやり取りを聞いていたので、一番壁際でへたりかかっていた人間にまで聞こえてしまったのだ。ミロの口が、はつきりと、「Because I love you」と言うのを。

「いいぞー！ ミロ！ 男らしいぞー！」

「もういい！ 今日飲め！ 飲んで潰れろ！ ありゃあ、俺達平民には手の届かない、崖っぷちの花だぞー——」

「え？ え？」

ミロの小さな体はあつと言う間に上級生の管楽器連中に取

り囲まれ、もみくちやになつた。正面に見えていたサガの姿も、人だかりに隠されて全く見えない。未だ事態が把握出来ていないミロは、サガの姿が視界から消える直前、その白皙の頬にほんのりと赤みが差したのを見た。

そうか。頭で考えたつもりだったけど、言っちゃったんだ。うつつすら頬を染めたサガは、いつもよりずっと血色が良く見えて、とても綺麗に見えた。

……もしかして、イヤってわけじゃなかったのかな？

もう少しサガの反応をじっくり見たいという気もしたが、既に人垣の中は無法地帯と化し、抜け出すことなど叶いそうにもない。そうこうしているうちに、ミロは再度アルコールの洗礼を受け、丁度グラス一杯分のワインを呑けたところで、そのままふつりと無意識の海に沈んだのだった。

こうして、大オーケストラの歴史に残る大騒動は幕を閉じた。後に、「奇跡の五年間」と団史に刻まれる五年間の、これが最初の年である。サン＝サーンスで一躍知名度を上げた大オーケストラは、続く四年間、次々に打ち上げられる華やかなリスト達の活躍に沸き、既に名声を得た室内管弦楽団に肩を並べ得るオーケストラとして成長を遂げるのである。

さて、ミロが潰された後、次の標的となつたのは団で初の

オルガニストとなつたカミュだった。こちらは、上級生が唸るほどアルコールに耐性があり、早くも将来の幹部候補として注目された。宴会終了後、僅かな「生き残り組」として会場の後始末を任されたカミュに、童虎は「お前さんなら、すぐにでも団長になれるな」と誇らしげに語り、それに対するにこやかなカミュの返答を聞いて絶句したのだった。

「……とんでもありませんよ。僕には、例え団員を煽るための演技とはいえ、本番一週間前にコンサートマスターのストライキを仕掛けるような胆力はありませんから。」





ある降誕節 (Side vision of AIOLOS)

コンドームなら駅の公衆トイレにある自販機で手軽に買えるけれど……。

アイオロス・ウィンセント・エインズワースは、丁度胸の高さにずらりと並んだ色とりどりのプラスチックボトルの前で、軽く右足を投げ出し立っていた。冷えた手は、擦り切れたジーンズのポケットに両方とも突っ込んでいる。

店には数人の男が居るが、お互い目を合わせないで、肌だけでその存在を嗅ぎ取り合っていた。

天上と壁にある数本の蛍光灯はピンクで、商品のラベルを安っぽく見せる。

アイオロスは首を左へ傾け、目を細めて壁際の棚の一群に繰り返し視線を走らせた。

ストロベリー

バナナ

マンゴー

キウイ

ミント、

無臭

無色

ピンク

グリーン

蛍光ブラック

……

ボトルの形も、ラベルも様々で、アイオロスはどれを手にするかしばし黙考した。が、最初の一本に手が出れば、後は勢いがついた。取替え引替え手の中で転がし、暫し首を傾げて目的に見合う物を探し続ける。

先日、土壇場になってコンマスが降板すると宣言し、揉めに揉めた百数十回目のスクール・オーケストラの定期演奏会が無事終了した。

蓋を開けて見れば、結局コンサート・マスターの席には傲然とした態度が実に様になる、シオン・メルベリ・ハーシエルが腰掛け、軍団長さながらに弦楽部隊を率いて管パートに殴り込むような覇気を飛ばしていた。

アイオロスと同学年でセカンド・バイオリンのトップを請け負った、サガ・エセルバート・チエトウインドも理性的に善戦していたが、極めてパッションに溢れる熱い『オルガン付き』になった感はない。

サン・サーンス作曲、『オルガン付き』と称される交響曲第三番ハ短調OP. 七八、各楽章二部構成の四十分弱の作品を弾き切った弦楽器パートの面々はぐったりとし、そのうち半数は魂が半分抜け出たような顔をしていた。その、触れれば

ポロリと崩れ落ちそうな、人間の形した灰のオブジェはアイオロスの記憶に新しい。

その後、授業の無くなつた者から順に冬期休暇に入り、今、アイオロスの寄宿する部屋にはアンドリユー・シーファとサガ・チエトウインドしか居ない。

もう一人の住人、シユラ・コーツは演奏会終了後、早々に寮を後にした。

冬期休暇は間に降誕祭が入り、試験勉強の為に机に嘯り付いている一部の人間の他は、家族の元に帰るのが普通だ。アンドリユー・シーファも、明日の昼の列車で故郷に戻る予定だった。

だが、アイオロスとサガ・チエトウインドはもう暫く寮に残る。

降誕祭前夜、スクールが在地する街の教会で、毎年行われる真夜中のミサに楽器を持って臨時参加する為だ。

その深夜、典礼にそつて賛美の歌とシャルバンティエのミサ曲、またコレツリのクリスマス協奏曲が演奏される。

演奏するのは、教会に付属する社会人オーケストラだが、メンバーは高齢で楽器の編成も不均等だった。そこで、いつの頃からかアイオロス等の所属するスクール・オーケストラやクワイヤが、教会の依頼を受けて有志の生徒をミサに送り出すようになっていた。

教会音楽に興味のある者や、所謂『物好き』、または真面目な信者でもない限り、生徒は家族の下に帰還する。アイオロ

スもこれまでは休暇に入れば稲妻のようなスピードで、彼の愛する刺激に溢れるロンドンに帰郷したものだ。

だが、今年は違つた。

次々に里帰りを始める落ち着かない寮で、アイオロスはあつた機会をうかがつていた。

「お前は直ぐに帰るのか？」

と、サガ・チエトウインドに尋ねた十二月初め、サガ・チエトウインドはアイオロスの琥珀色の瞳を真っ直ぐに見つめ返した。

「真夜中のミサに出ないか？」

アイオロスが誘うと、サガ・チエトウインドは、ぱつと表情を明るくして自分も出ることをアイオロスに約束した。

古い伝統の中に生きるシュローズベリ伯爵の嫡子にとつて降誕祭を家族や一族で過ごすことは、太陽が東から昇るのと同じように当たり前の事では変えてはならない理法だったが、サガ・チエトウインドはそれをアイオロスに告げることなく、数日後には現シュローズベリ伯爵の許可を取り付けていた。

そして、アイオロス・エインズワースは十二月一八日木曜日、二十一時を回るとの時間に、ロンドンにはソーホー地区の、俗に言う『アダルト・ショップ』にて性交に必要と思われる物品を漁っているのだつた。

コンドームであれば、たとえ女性用の化粧室でもコインを入れて手に入れる事が出来る。駅の公衆手洗所には大抵そんな自販機が設置されているイギリス。事前用の避妊ピル、交

渉後に服用する。ヒルも薬局に行けば処方箋無しに手に入る。

が、今回アイオロスが関係を持ちたい相手は避妊の心配は要らない。滞りなく全ての行程を済ませる為には何が必要か。アイオロスは考え、出した結論が潤滑剤だった。

クリームがいいのか、液状がいいのか、泡状の物がいいのか。二十分程時間を掛けて、それぞれのキャッチフレーズを吟味した結果、取敢えず今回の購入はクリームとローションに決めて、香りのきつくないもの、色の付かない物を選んだ。

香りには、相手の好みもあるだろうし、色が寝具に残ると後が厄介なのは目に見えている。

パブリックに入る前、同級生の少女と同衾した時、相手が処女であったため彼女の両親が帰宅するまでに随分慌てて色々な処置をした。その事を、アイオロスは教訓として記憶している。

今、定めている相手には、処女膜などありはしないが、それでも事後の煩雑は一つでも少ない方がいい。特に、初めて相手の体に触れる時は、現実感など、遠い所に投げ捨てておくに限る。

キャッシュヤーの前に行き、紙幣とコインで料金を支払うと、アイオロスは細い階段を上って地上に向かう。

僅かな壁面には、豊満な胸を露にした女性や、黒い皮のボンテージ・ファッションに身を包み笑顔を向ける男性の写真で溢れかえっていた。

建物の一階部分は、本屋だ。

写真集や雑誌が数え切れないほど詰まれ、棚に押し込まれている。アイオロスは、商品の間を練り歩き、二、三の雑誌写真集を手にとると、あるコーナーに行き素早く並ぶ背表紙を走査した。

ここでも幾つかの本を手に取りページをばらばらとめくり、時には数分内容を読んだりもした。

が、結局アイオロスは、いつも購入している月間の雑誌を一部購入し、オックスフォード・サーカスからチェリングクロスへ向かったのだった。

アイオロスが、スクールの敷地内に侵入したのは深夜に程近くなつてからだつた。

パキパキと乾いた音を立てる足音。顔の周りを漂う白い息。全てが煩わしかったが、十二月のこの時期それらを人間の手で振り払うことは不可能だ。

先月、ミロが幽霊に遭遇したとして話題になつた森の横を擦り抜け、アイオロスはスミス・ハウスに向かった。耳に当たる夜気がチリチリとした痛みを誘う。

スミス・ハウスは、地下一階を含む五階建ての古めかしいレンガ造りの建物だつた。蔦が幾重にも絡むジュディ・ハウスとは違い、真つ直ぐな壁がすつきりと暗い夜に向かつて立っている。

部屋によつては、木立が直ぐ傍にあつたりして生徒の脱走に一役買つたりするのだが、生憎今年のアイオロスの部屋にはそんな恩寵はなかつた。

アイオロスは、辿り着いた窓の下で、森をかすめた際に拾つてきた木屑を軽く投げ上げた。

少しして三階の真つ暗な窓に、ぼうつとした灯りが出現した。窓枠が徐々に持ち上がり、小さな白い顔が覗き消えた。そしてすぐに、その奥からすると一本のロープが下り、暫くしてアイオロスのつま先にとすん、と蛇のように横たわつた。

アイオロスは、数度そのロープを引くと、音もなく綱のぼりを始め数秒後には窓の中に消えていった。

「何処に行つていたんだ？」

アイオロスが窓から入つてくるのを助け、静かに窓枠を下ろした終えたサガ・チェトウィンドが懐中電灯の明かりを頼りにアイオロスに尋ねた。

アイオロスは、簡単に『ロンドン』と告げると、背負つていたリュックの中から冷えたポテトと白身魚のフライを取り出し、アンドリユー・シீファと分け合つた。

懐中電灯を掲げて立ち竦むサガ・チェトウィンドに、アンドリユー・シீファが摘んでいた白身魚のフライを勧めたが、サガ・チェトウィンドは柔らかにそれを断つた。

アイオロスが、アンドリユー・シீファを相手に、クリスマスに浮かれるロンドンの闇を話して聞かせている。それを、

サガ・チェトウィンドは寝台に腰掛ほんやりと眺めていた。窓から入つてきた脱走キングのアイオロスは、帰つてから一度もサガ・チェトウィンドの顔を見ていない。

何かあつたのか？

アンドリユー・シீファとのやり取りの中で、何かその片鱗が窺えないものかと、サガ・チェトウィンドは黙つて二人の少年のやり取りを見守つていたが、深夜の差し入れを食べべ尽くし、アイオロスが、持ち帰つた雑誌を嫌がるアンドリユー・シீファの枕の下に入れようと攻防を繰り広げた頃には、抑制堪らず声を出した。

「アイオロス、今日、顔合わせだつて知つていただらう？」と。アイオロスは、押さえ付けていたアンドリユー・シீファの腕を離すと、サガ・チェトウィンドを振り返り、肩を竦めて見せた。

「お前とシオンが居れば問題ないだらう？」

「さう言う訳にはいかないだらう……」

眉を蹙めたサガに、『でも、お前がうまく誤魔化したんだらう？』と、もう一度肩を竦めて見せて、アイオロスは寝る仕度を始めた。

今年の深夜のミサは例年になく華やかなメンバーが集まつた。

サガ・チェトウィンドは間違ひなくスクール・オーケストラ一のバイオリンの腕前であつたし、そのサガ・チェトウィンドが帰郷を遅らせてミサに参加すると聞いた最上級生のシ

オン・ハーシエルも受験を控えた身にも拘らず参加を決めた。

シオンが参加を決めた事で、バイオリンのムウ・アリソン、トランプットのコリンズ、オーガストも参加を忝儀なくされた。また、最下級生のバイオリン、ミロ・フェアファックスは全くの好奇心から。パーカッションのカミュ・パロウは、クワイヤとの掛け持ちで参加する。

そして、当のアイオロスは、ただ単に、人の少なくなる寮にサガ・チエトウィンと共に居残れる事実には気持ち尻馬に乗った。

だから、何かと自分の頭を押さえにかかる元コンマスのシオン・ハーシエルとの接触は避けられるものであれば避けたいというのが、サガ・チエトウィンには明かさな本音の一つだ。

シオン・ハーシエルの持つ東洋人独特の海を越えたアルカイック・スマイルが、アイオロスは、実のところ苦手だった。

峻厳なシオン・ハーシエルの懐は決して狭くはないが、頑なに従順であることを拒絶する後輩の秘め事を嗅ぎ付けたなら、洗い浚い吐き出させようとする事にどんな躊躇いも感じない人間だ。アイオロスも容易く吐き出ししたり、嗅ぎ取らせたりするような真似は決してしないと自信があったが、敵は老獪で海千山千の華僑の御曹司。本意ながら、よく言う所の色恋沙汰に浮かれている自分ではどんな尻尾を出すか知れない。この浮ついた気持ちがあるがもう少し地上に近付くまで、シオン・ハーシエルと彼の親友の懐に飛び込む真似は遠慮願う。

これが、アイオロス・エインズワースの目下の行動の一つの基盤となっている。

一方、アイオロスの浮つきの原因であるサガ・チエトウィンドは、まともに取り合つて貰えなかつた議題に溜息を一つ着く事で無理矢理見切りをつけ、自分のベッドへ潜り込んだ。今はまだ食いがれない。アンドリユー・シーファがいるのだから。けれど、明日、二人きりになれたなら、きつと聞こう。そう有めて隣のベッドに居るアイオロス・エインズワースの事を頭から閉め出した。

翌日は薄曇りで、アイオロス等三人は、スミス・ハウスに残るミロ・フェアファックス、カミュ・パロウ、ポール・リッジウェイなどの下級生と朝食を取つた。

アイオロスは、憚ることなく後輩に、昨夜の蛮行を披露し、ミロ・フェアファックスから心服と憧れの眼差しを一杯に受けていた。

賑やかな朝食の後、アンドリユー・シーファの荷造りを混ぜ返しながら手伝つたアイオロスは、サガ・チエトウィンドと共にスクールの門まで彼を見送り、そしてスミス・ハウスに向かつて歩き始めた。

ついで二人は、少し早い昼食を取つた。

会話は、アンドリユー・シーファが居なくなつてから何故

か長く続かない。

ゆつくりと食事を進めるサガ・チェトウィンドを待ち、アイオロスが食堂を出たのは一時半を回っていた。

パタン、と勢いよく食堂の扉を開き飛び込んだミロ・フェアファックスが、椅子を引いて立ち上がった二人の姿を見て慌ててトレイの上に食事を載せて席に着くなり掻き込み始めた。カミュ・バローウがそれをやんわりと嗜める。

午後からは、ミサに参加する学生が自由に練習出来るように部屋が予約されている。サガが既に食事を終えている事を見て取ったミロ・フェアファックスは、自らの食事を終えるのが遅くなればなる程、バイオリンを弾くサガを見る時間が少なくなると思ったのだろう。

サガ・チェトウィンドの小さな崇拜者ミロ・フェアファックスは、その敬慕を隠すところなく万人に曝け出している。

ミロ・フェアファックスは、食い入るようにサガ・チェトウィンドがバイオリンを弾くその姿に見入る。彼の言葉の一言でも漏らすまいと全身で、大きな青い瞳までも耳に変えてサガ・チェトウィンドの僅かな言葉を、距離も雑音ものともせず拾い上げる。

しかしながら、個人的にサガ・チェトウィンドから親しく接しられると、ミロ・フェアファックスは、頬に止まらず全身を紅潮させ言葉が返せなくなる。

明らかにサガ・チェトウィンドを意識しすぎた彼の態度は、暴き立てられた当初は、オーケストラの心無い者達から悪意

ある冷やかしの対象となっていたが、ミロ・フェアファックスの余りの一途さに、今ではそれは公認の片思いとして楽団の中に定着しつつある。

その一方で、アイオロスとサガ・チェトウィンドの相愛は、誰にも気付かれないまま三週間が過ぎようとしていた。

音楽棟に向かうアイオロスの背を、黙ってサガ・チェトウィンドは追った。

昨日から自分の顔を見ないアイオロスに心細さと、不安を与えられる事に対する不満を覚えて微かに胸が痛んでいた。二人きりになれば問い質そうと構えていても、アイオロスは上手にそれを避けた。今もすたすたとサガ・チェトウィンドの先を歩き、とても話しかけられる雰囲気ではない。

やがてとうとう音楽棟に到着し、楽器庫の鍵をサガ・チェトウィンドは取り出し、錠を外した。

十一月三十日に互いに告白し、十二月に入ってからはこの楽器庫の中で何度も唇を合わせた。

しかし、アイオロスは、今日はさつきと大きなコントラバスを担ぐと練習場に向かった。

サガ・チェトウィンドの中で疑問は膨れ上がる一方だったが、アイオロスは膨れ上がっている感情に平気な顔をして蓋をして見せる事に心血を注いでいた。

結局この日の練習で、アイオロスはシオン・ハーシエルとサガ・チェトウィンドの弦の掛け合いを尻目に、管のコリソ

ズノーガストと談笑したり、もとコントラパスの後輩、ミロ・フェアファックスに乞われてベース・パートを弾き彼の練習に付き合ったりで時間を過した。

夕食は、朝より一人かけた面子で取った。アイオロスは、専ら後輩の会話に口を挟むことに熱心な素振りを見せていた。

サガ・チエトウィンドは晚餐の席で見せる笑顔を惜しむ事はなかつたが、心の中では、部屋に帰ればきつとアイオロスの不可解な態度について尋ねようと繰り返し自分に言い聞かせる事で一杯だった。

食事が終わわり、年下の少年に誘われたゲームを断り、アイオロスは席を立つた。

サガ・チエトウィンドもその後が続いた。

部屋のドアを開け、電気のスイッチを入れるアイオロスの背に、サガ・チエトウィンドが息を吸った。

が、アイオロスは素知らぬ顔で、てきぱきと腕を伸ばし、あつという間にシャワーの仕度を済ませ、再び部屋を後にしてしまつた。

三十分もした頃、アイオロスはやつと部屋に戻つた。

普段、十分程度で済ませてしまふ事を考えると、破格の時間だった。アイオロス自身も、その事にこそ、ぼゆい思いを感じていたので、部屋への歩みでその擡げた感情をねじ伏せていた。

だから、サガ・チエトウィンドが冷たい沈黙の中、じつと待つていた人の姿を見た時、それはあまりに何時もと同じア

イオロス・エインズワースの姿だった。

アイオロスは言つた。

「お前は？　またシャワー浴びないのか？」と。

サガ・チエトウィンドはゆつくりと、だがじつとアイオロスの瞳を見て唇を開いた。

「あとで浴びるよ。そのまえに、君に聞きたい事があるんだ。アイオロス、君は昨日一日、外出届も出さずに何処に行つていたんだ？」

アイオロスは、ホントに知りたい？　と、少し呆れるような表情を作つてサガ・チエトウィンドを見たが、サガ・チエトウィンドの意志は翻らなかつた。

アイオロスは、軽く息を吐くと、昨晚購入して来たローションのボトルとクリームの入つた小さな紙箱を自分のベッドの上に広げた。その二つは、いささか乱暴にベッドに放り出され、古いスプリングにボボン、と小さく数度跳ねた。

サガ・チエトウィンドは、緑の瞳を見開いて眼下に広げられた商品に視線を固定した。じつと見つめるだけで、手を伸ばさうともしない姿に、アイオロスが説明をしようかと口を動かしかけた時、サガの手がゆつくりと女性の裸体の描かれたプラスチックボトルに伸びた。

サガ・チエトウィンドの静かな瞳が、まじまじと、丁寧にそのボトルに表記された広告文句や使用方法の細かいアルファベットを追つた。

そして、ゆるゆるとサガ・チエトウィンドの白い顔は薄紅



色に染まり始め、プラスチックボトルを持つ指先までもが色付いた。その動揺を見て、アイオロスの心は逆に平常を取り戻した。

「それを買いは昨日はロンドンまで行って来た。他にも色々あったけど、お前、もつとフレージャーな奴の方が良かった？」  
 サガ・チエトウィンドは、アイオロスの質問には答えず、短くシャワーに行く旨だけ呟くように口にして部屋から去った。それだけ言うのが、精一杯だった。

残されたアイオロスは、まずは先手を取ったことに安堵してベッドにダイブした。

どれ程待っただろう。アイオロスが、思わずサガ・チエトウィンドの逃走の可能性を疑い始めた頃になって、やっと彼は部屋に戻った。

アイオロスは、それまでのじれた思いをおくびにも出さず、ベッドに怠惰に寝そべり女性の半裸が溢れる雑誌をめくり、のんびりと『随分長かったな』とだけ言った。その言葉で、サガ・チエトウィンドが居た堪れない思いをする事は承知していたが、もうアイオロスの胸の内、駆け引きは始まっていた。

サガ・チエトウィンドの移動する足音が、次いで陶器の鳴る小さな音がしてアイオロスの背に控えめな言葉が降った。

「お茶を、淹れてくるよ」と。

「お茶なんて飲むの？」

アイオロスは、相変わらず興味は雑誌にあるといった態度

でサガ・チエトウィンドに返事を返した。

数泊後、困惑を含む声音で、小さくサガ・チエトウィンドはアイオロスに再度尋ねた。

「要らない？」と。

サガ・チエトウィンドは、何でもいい。想像する行為に及ぶ前に一呼吸置きたい、そう思っていた。

アイオロスは、サガ・チエトウィンドの希望する緩衝行為を、サガ・チエトウィンドが公に口にしなかった事を隠れ蓑に、綺麗に無視して見せた。

「俺は別に咽喉渴いていないからいいけど？」

サガ・チエトウィンドは、黙って茶器を棚に戻した。そんな音が、アイオロスの耳に届いた。そして、スプリングの軋む音がして、アイオロスは左側にこれまでなかった熱を感じた。

サガ・チエトウィンドが、アイオロスの左隣にある窓際の自分のベッドに腰掛けたのだ。

アイオロスは、見る真似をしていた雑誌を閉じた。

体を捻ってサガ・チエトウィンドを見上げると、悪戯っぽく笑って問い掛けた。

「こっちに来ないのか？ それとも俺が行く？」

「私が行くよ」

サガ・チエトウィンドは、にこりともせずアイオロスにベッドの縁に移動した。アイオロスは苦笑を漏らすと、悠々とサガ・チエトウィンドの右腕を取り彼の体を自分の上に引き倒した。そして、腰と銀色のまだ湿った頭に腕を回して深々

とキスをした。

緩慢なキスの合間に、アイオロスは小さく笑った。

「久しぶりにキスした気がする」と。

「しょつ中してたじゃないか、強引に」

サガ・チエトウィンが、微かに触れ合う距離まで唇を話して答えた。囁く言葉と共に吐息が薄い唇の皮を刺激する。アイオロスは微笑んで答えた。

「思いっ切り出来たわけじゃないだろう？」

アイオロスは、するりと立ち上がると部屋のみかりを消し、サガに『蠟燭貸して』と言った。アイオロスの指す蠟燭とは、先月の末、アイオロスがサガに贈った蠟燭の事だ。

『サガに似ていると思つて』と、購入した蠟燭は、無色のガラスコップの中に、泡立つ透明な樹脂を水に見立て深紅の薔薇の蕾を数個閉じ込めた、その上に、乳白色の蠟を厚い氷のようにコップに満たしたものだ。

水を張った皿の上に、灯りを燈したコップを置くと、アイオロスとサガ・チエトウィンはお互いを見詰め合い、抱き締め合った。そして、アイオロスはサガを抱きしめたまま、ベッドに彼を横たえた。

一切の警戒もなく、自分に体を預けるサガ・チエトウィンドをすっかり抱き込んで、アイオロスは熱心に口付けた。

時折、息継ぎにサガ・チエトウィンが唇を斜めに外す。

今はアイオロスが、その奥にある白い歯や歯茎に舌を沿わせても怯えて逃げを打つこともない。三週間前、初めて今と

同じように、ベッドの上でお互いを抱きしめながらキスした時とは大違いだな、とアイオロスは思う。

そのうちに、サガ・チエトウィンドの長い指がアイオロスの頭に届き、何度も彼の真つ直ぐな、けれど柔らかく細い髪を梳いては撫で付け始める。

その行為一つで、どれだけ自分がサガ・チエトウィンだから愛しまれているか、アイオロスには響く。だから、言いようのない高揚感のまま、サガ・チエトウィンドの耳や項に唇を寄せ、果ては体を反転させて組み敷き、首筋を辿つて肩口に顔を埋めた。

それは、紛れもなく、アイオロスの計画では『いい感じ』で進行する状況であり、なんとしてもこの流れを維持して、波に乗つてサガ・チエトウィンドを彼の愛する『常識』の国から引き離してしまいたい重要な一瞬だった。

だが、サガ・チエトウィンドの本能か好奇心か、判別はつかないがアイオロスの理想とする酔い心地とは決して相容れない何かが、無情にその流れを止めた。

サガ・チエトウィンドはひとつ溜息をつき、アイオロスの頬に軽く唇を触れてからわずかに身を起こした。

「ごめん、遮つて申し訳ないのだけれど……その……君の買つて来たローションはどうやって使った？」

この一言で、アイオロスはサガ・チエトウィンが決して酔いに身を任せていた訳ではない事に気付いた。

正直な所、こういった冷や水はかなりアイオロスの気に食

わなない行為の一つだったので、彼はにつこり笑つてサガ・チエトウィンドに向き合つた。

「微にいり、細にいり聞きたいか？ それとも大雑把な説明が？」

「いや、大体のところでもいい……」

赤くなりながら答えたサガ・チエトウィンドを、アイオロス は目を細めて見やつた。

「……目的は一緒だよな？」

「……ごめん……実のところ、何をどうするのかよくわからないんだ……」

サガ・チエトウィンドは済まなきさそうに言つた。

だが、どんなに済まなく思われてもお膳立てした雰囲気というものは、一度壊されたら中々面倒なものだと知るアイオロスの機嫌は、ピリツと引き曇つた。もちろんそれを表立たせるような真似はしなかつたが、サガ・チエトウィンドの少ない欠点の中の上位三手指に入る事だな、とは考へた。

「……俺はお前とセックスするつもりなんだけどう？ 違つた？」

アイオロスはとほけて答へた。

「うん……だから、その……セックスの方法が……」

もう、サガ・チエトウィンドはアイオロスの瞳を見返せず、声だけで精一杯の返事を返す。

「じゃあ、俺が教へたら、お前はOKな訳？」

「嫌だとは決して思つていないよ……ただちよつと……何が起るかわからないというのは……」

言い淀んだ恋人に、アイオロスは幾分じれてきつぱりと言葉返した。

「お前の服を脱がせて体中触るし、キスする。それからお互い射精する。これでいいか？」

アイオロスの言葉の強さにサガ・チエトウィンドは最初の問いかけに対する返答を諦めた。

サガ・チエトウィンドは、アイオロスの購入して来たローションの使い道について尋ねたのだが、アイオロスがサガの質問に気を悪くしている事は明らかだった。

それで、諦めて、最後の問いを口にした。

「……わかつた……勿論、君も脱ぐんだらう？」

「脱ぐよ、勿論、物分りのいいお姫様」

アイオロスは、あまりにも聞に相応しくない問いかけの報復に、サガ・チエトウィンドの自尊心に響く言葉をわざと口にした。

予想通り、下から脱む緑の硬度が硬く冷えた熱を伝えてくる。

そして、アイオロスが口の端を上げてにやりと笑うや否や、彼の髪はサガ・チエトウィンドの手に絡み取られ、唇を捉えられた。

頭を抱く両手の主に、アイオロスはキスの主導権を任せ、彼自身は恋人の体から余刃な布を取り除く事に没頭した。

ボタンを外し、脇腹を撫で、三週間前に敏感に反応したと記憶する箇所をまた探る。

ズボンの下に手を潜り込ませて腹筋を撫でると、そつと白

体が離れようとした。それを右手で抱き抱え、上半身でサガ・チエトウィンドの体を押さえ付けながら、左手でゆつくりと下着とズボン、両方を脱がせに掛かる。

サガ・チエトウィンドのきよつとしたような反応が伝わった。体を起こしてそれらを取り去ろうと、アイオロスが身を起こしかけた時、一旦は外されたサガ・チエトウィンドの腕がアイオロスの首に強く巻きついた。

病人のようにベッドに寝かせられ、体を起こしたアイオロスに恭しく服を取られるなど、サガ・チエトウィンドには羞恥心でぞつとする行為でしかない。

仕方なく、アイオロスは左腕を精一杯伸ばしてゴムを押し下げた。途中、サガの臀部に引つかかかった布は、彼が僅かに腰を上げてくれたことで回避したが、腕だけでは限界がある。

アイオロスは、そつと右腕に力を入れると下半身を浮かし、サガの足の間に入り込んだ。そして、足の裏を下ろしかけた衣服の口引つけると、そのまま一気に足を伸ばし、要はズボンと下着を蹴り飛ばした。

アイオロスは、大きく息を吸い込み、サガの首や頬や肩にキスを降らせ、手の平で腰を撫でつけながら、それとなくサガの性器に体を押し付け刺激を送った。

サガの剥き出された皮膚は温かく、普段は冷たい手が熱気を帯びてアイオロスのTシャツの中に潜り込んで来た。

アイオロスはサガの頬にキスを一つ落とすと、笑いながらサガの腕を剥がし、自分の首に回させた。そして、不服そう

な緑の、けれど小さな炎の灯りしかない部屋の中では暗く光るばかりの瞳を見つめて、優しくその目元に口付けると、左耳に囁いた。

「あまり余計な事を考えずに、最初は俺に任せてくれ。滅多にないけれど、怪我をする場合もあるから。極力力を抜いて。それだけは注意しててくれ」と。

サガは、小さく頷く事で了承の意を表し、時に息をコントロールして自分の体をなんとか操ろうと努力した。

熱に浮かされれば緊張し、中々意のままにならない体ではあつたが、なるべくアイオロスが満足出来るようにという心遣いは常に頭の片隅に置いていた。

アイオロスは、ゆつくりと十一月の熱狂を辿り、サガの体を寝具に押し付けながら唇で舐めたり、舌で擦ったり、歯で小さく噛んだりした。

小さな乳首をそつやつと刺激していると、サガはゆつたりと体で呼吸し、アイオロスの頭を何度も撫でた。それが嬉しくて、手と口とそれぞれで両方を煽っていると、サガの両足が緩やかに、アイオロスを間に挟んだまま持ち上がり、アイオロスの上半身を締め付け始める。

鳩尾に触れるサガの性器が形を変えていた。

アイオロスは、ベッドの脇に手を伸ばすと、一枚のバスタオルを手にし、半分に畳んでサガの腰の下に敷きこんだ。そして、サガの腰を抱き上げていた腕にさらに力を入れて、サ

ガの体をベッドの上部に移動させるように促した。そうして、上半身をヘッドボードに寄りかからせるようにして改めてサガの下半身を覗き込む。

サガの形を変え始めた性器は、自分の物と比べると細く、陰毛は頭髮よりもさらに薄い色素しか与えられていない。暖味な闇の中でそれは白としか見えない。

睨丸は両方とも綺麗に形が揃いに並んでいる。足の付け根には足を広げているための深い筋が走り、自分に比べて筋肉の付き方が随分薄いということも分かった。

脛も、細かく産毛のような毛が生え揃っているだけで、しかも色が薄いのであまり男臭さを感じさせない。

「…何を見ているんだ」

サガ・チエトウイン드의掠れた声がアイオロスを現実引き戻した。

「下半身。男の性器なんてまじまじ見たの始めてかも」

アイオロスは、我知らずそんな言葉を呟っていた。サガ・チエトウイン드의頭髮よりずっとくるくると巻いている陰毛を指先で払いながら陰茎と陰囊の間の皮膚を数度押しして感触を確認した。

サガ・チエトウイン드의性器は女子の、半分粘膜が飛び出した不可思議な形と異なり、性交の狂熱を感じさせない。

「アイオリアのはそういえば見たことあつたか…ガキの頃」

「…自分のを見ればいいじゃないか。多分君の方が立派だと思っただけだ…」

どこか子供じみた事を言い出したサガ・チエトウイン드가可笑しかった。それで笑いながら言った。

「セックスするのに自分の生殖器みて恍惚としてたらバカだろう?」

「…でも、人のを眺めて綺麗なものでもないような気がする…」

「さうか?」

アイオロスは短く返して、そつとサガの性器にキスをした。アイオロスは、サガの体が小さく跳ね上がったのを見定めてから、今度はそつと男茎の先端や、陰囊の部分を舐めた。

皮膚は薄く、熱かった。

「アイオロス…それはちよつと……」

僅かに焦りを含んだ声音が首にかかり、アイオロスの鼻先にサガの手が差し込まれようとしていた。

「なんで? 気持ちよくない?」

アイオロスは、あつげらんとした言葉調子でこの行為が全くおかしな行動でないことを言外に響かせた。こつこつと、常識で丸め込まれるような流れに、サガ・チエトウインドは極めて立場が弱く、対抗する知識は少な過ぎた。

「…あまり綺麗な場所ではないし…舐めるのはどうかと…勿論さちんと洗ったけど……」

サガは、なんとか自分の持ち得る常識と不安を口にするが、一言で片付けられた。

「じゃ、問題ない」

アイオロスは、当然のことにサガ・チエトウインド

の性器を銜え、ゆつくりと舌で舐めさすった。

サガは、小さく呻くと、やがて諦めたように大人しくアイオロスの行為に従い、両手をアイオロスの頭に寄せると焦茶の髪を梳き始めた。

静かに時間は流れ、アイオロスの熱も、サガの熱もそこかしこに籠り互いの体を締め付けた。アイオロスが、口を性器から離すとそつと呟いた。

サガ・チエトウィンドは、乞われたままに、体を屈め、アイオロスの背中を抱き込んだ。冷たく外気に晒されていた性器が再度温かなものに包まれて、もう一度アイオロスの口内に引き込まれた事を知る。

黙つてアイオロスの背中を抱いていると、深く深くどんどんと引き込まれ、一体何をするつもりなのか、漠然とした不安に襲われる。

恐らく、一杯に含まれたのだろう頃、サガは自分の性器が強く吸われた事を、体が跳ねた後に知った。

アイオロスは、一杯に含んだサガの性器を思い切りよく吸い上げ、柔らかく嘯みしだき、口の中で転がした。サガが声を上げた事が嬉しく、右手をサガの腰から外し、太股を抱え込むようにして下からサガの股間に伸ばし、陰囊を握りこんだ。背中にしがみつくとサガの力が心地良かった。

それ程長い間刺激を与えていた訳ではない。けれど、サガの性器は明らかに終着を迎えようとして強張った。先走りの液を舐め取りながら、丁寧に刺激の密度を上げた。自分との

この交渉に、どんな嫌悪も躊躇も残しなくなくて、アイオロスはサガの快感を追い上げた。

すると、今まで甘く緩むような声を上げていたサガ・チエトウィンドの声が変わった。

声は、大きくはなかつたが、切羽詰り、アイオロスの背を暖めていた体を跳ね上げて、彼の肩に手を突っ張り引き剥がしに掛かった。

「だめだ……！ 離し……！」

ん。分かつた。気にしなくていい。出しちゃつていいから……半分、含んだまま、アイオロスは返事し、それからまたサガに一度目の射精を行わせる事に没頭した。

一分もしない内に、サガ・チエトウィンドは菌軋りし、短く呻いて全身を硬くして射精した。

だらん、と覆いかぶさる体を持ち上げて、ヘッドボードに持たせかけると、呆然とした表情のサガ・チエトウィンドがいた。

目の際には涙が溜まっていたが、気が高ぶつた為と解釈したアイオロスは、ゆつくりとタオルで汗ばんだ額と一緒に涙も拭つてやった。

サガの、首や、肩、背骨に湧き出した汗も同じようにして拭うと、アイオロスは、ずつと着たままだったTシャツとズボンを脱ぎ捨てて床に落とした。

未だに動転しているようなサガの上に覆いかぶさり、また何度も接吻を送った。漸く焦点の合ってきたサガが、呟いた。

「……めん……」  
あまりにも悄然としている様子に、アイオロスは尋ねた。

「何が？」

「……飲んだのか？」

会話が囁合つていない。アイオロスは眉根にしわを寄せた。

「……病気になる方がいいけど……」

アイオロスは吹き出した。

「みんな普通にやっついているよ」

そう言つて、サガの冷えてきた頬に軽くキスをした。サガは、そんなアイオロスの面頬を挟み、アイオロスに深く口付けた。

歯列や歯茎を舐めてくるサガの口付けに、アイオロスはくすくす笑いながら従つた。そして、体をずらしてサガをしわくちやになり始めた寝台に押し付けると熱狂的に、サガの体と自分の体を様々に角度を変えて密着させた。

十一月に、中途半端にしかお互いの素肌を知り得なかつた空洞を埋めるように、初めて何も身に着けない体どうしでお互いの皮膚に触れ合つた。

露になった性器がお互いの体のあちこちに触れる事も気にならなかつたし、荒い息が耳元に届くことも構わなかつた。寧ろ、相手が自分の体になつていている事を性器の勃起や、汗や、漏れる声、上がつていく息使いで知り、それが自分自身へのとてつもない充足感になつて帰つてくる、その始めての感覚を貪つた。

アイオロスは、サガの腰の下でくしゃくしゃに丸まつたバ

スタオルを伸ばすと、サガをうつ伏せに返した。

「暴れるなよ」

鼻に響いた鈍痛を思い出して、アイオロスは少し笑いながら耳に囁み付く。

サガは、大人しくアイオロスに背中を預けた。頸椎から腰椎まで、何度も撫でられたり微かな口付けを与えられたりするうちに、サガは強張りを手放し、信頼と愛情の元に無防備な自分の体をアイオロスに差し出した。

間もなく、サガが時折バスタオルに股間を擦り付けるような仕草を見せ始めた事に気付いたアイオロスは、サガの体が十分に緩んでいる事を確認し、サガの腰周りにつしりと手を添えた。

そしてサガの臀部をそつと押し開き、初めて見る光景に息を呑んだ。

それは、随分と女性の股関節部位に比べて簡素だった。

肛門の周りには窄んだ皺が集まる他にもない。女性では陰唇（大陰唇・小陰唇）・陰核などの外部生殖器官が並ぶ場所には何も無く、さらりとした皮膚だけが見える。そしてその奥に、陰囊と陰茎の影。不思議なものを見る心持に首を捻つてみる。

サガ・チエトウインドが、途切れた所作に首を捻つてアイオロスの姿を確認した。アイオロスは、その表情に苦笑を漏らすと、銀の頭髪を数度撫でてサガの腰を片腕で抱きこむようにして抱え上げると、サガを膝立ちにさせた。そして、自分の足を大きく開くことで、その外側にあるサガの足も開か

せた。

けれど、そんな姿勢を取らせても、睦の変わりに使おうとする器官は隠れて見えない。もう一度、アイオロスは力を込めて双丘を押し開き、キスをした。

サガの体が一瞬で緊張したのが分かったが、本来の目的がこういう事なのでいままさら止める気分にはなれなかった。

それなので、左手でサガの陰囊を掴んで揉みながら、サガの背中や項に繰り返し唇で刺激を送りながら、サガの肩に力を掛け囁いた。

「……めん。暫くこのまま肩を落として居られる？」と。

サガ・チェトウィンドは、何十秒間か沈黙し、ようよう肯定の返事を一言口にした。

そのいじらしさに、アイオロスは何度もサガの銀色の髪を撫でた。

サガは、片頬をシートに押し付け、肩を沈ませる。静かな瞳が、曖昧な闇の向こうを見つめて揺れた。

一方、広げた狭間に、アイオロスは唇を寄せ、舐めたり舌先で突付いたり、周囲に朱を散らせたりしてうろろうと狙う地の周りを巡った。

サガは変わらずひっそりとしていた。その体はずつと緩やかなままだったので、アイオロスは少なからずサガも心地良さを落ち着いて味わっているのだと考えた。だから、軽い悪戯のような気持ちで上半身を伸ばし、銀髪の被さる右耳を微かに撫で、黙ったままの顔を操ろうとした。

瞬時、アイオロスの左腕がサガの右手に捉えられた。

サガ・チェトウィンドは、反射のような素早さで、弦楽器の中で一番太い弦を押さえる左手を掴んだ。指先を強く握り締める指は冷たく、何より決して離さないという一心がこもっていた。

それで、アイオロスは初めてサガ・チェトウィンドが快感に体を解放していた訳ではなかったことに気付いた。

「握っていたいのか？」

アイオロスが驚きで幾分固くなった声で尋ねると、サガ・チェトウィンドは抱え込んだ指にキスする事で精一杯の返事を返した。

「肩が冷えるから、これ、掛けとくぞ」

アイオロスは、ずつと前に蹴り落した自分のバスロープをサガの上半身あてがった。

そして、片手で器用にボトルの蓋を回し開けた。ボトルの胸を持ち、谷間から僅かに離れた位置で口を下にする。

思っていたよりずつと強い腰の液体だった。すうつと、透明に尾を引き、ぎりぎりまで伸びるとぼとんと落下した。

サガの腰が揺れた。アイオロスは、どんとどんと下に伝う重い液体を救い上げようとしてその冷たさに驚いた。

「……めん！冷たかった……」

咄嗟に言葉が口をついて出た。サガ・チェトウィンドは、小さく大丈夫と返したが、驚かしてしまつた事がアイオロス



には痛かった。

アイオロスは、片手で何度も重力に従おうとする液体を押し上げ、窄まった場所の周囲を濡らした。アイオロスの手の平も、ぬるぬるとした液体だらけになった。

試しに、人差し指を差し入れてみようかと垂直に押し立ててみる。

窄み込んだ陰門は、その入り口でアイオロスの指に薄く纏わり付いた液状物質全てをこそぎ落した。アイオロスの指先は、ほんの一瞬味わった乾いた内部の粘膜にカツンとぶつかり、慌てて逃げた。握られた指に痛みを感じた。

サガ・チエトウィンドの体は、怯えていた。

言葉で言われなくても、分かる。

アイオロスは、努めて平素の口調で

「冷たいけど、我慢しろ」

とサガの壁を見つめる瞳に話しかけ、濡れた手に構う事無くポトルを掴み、ぐつと指に力を入れた。

ほとほと糊のような透明な液が降り、その殆どは蟻の道を伝い、陰囊を回り込み陰茎にまで流れ着いた。

アイオロスは、流れを作る筋に何度も手の平を添え、オイルを皮膚に撫で付けるように、間接部位の谷底に液体を塗り込んだ。纏わりつく液体が、体温と等しくなった時、アイオロスは広げたそれを再度掻き集め一点に集中させた。

親指の腹で、丸く円を描くように肛門の周りを宥め、時に軽くその周囲を押しながら中心にむけて親指を滑らす。丹念に

真剣に、アイオロスはサガ・チエトウィンドの皮膚や、その奥に潜む筋肉の張りに神経を集中させた。

沈黙の中で、全てが進んだ。

何度円を描いたか。カーブを描きながら中心に下りるアイオロスの指が、すつ、と僅かに沈んだ。

「痛かったか？」

注意深く尋ねたアイオロスに、サガは否定を返した。

アイオロスは、再びポトルを傾けた。指が沈んだ分だけそこにローションを塗り込める。

何回繰り返せばいいのか、どこまで繰り返せばいいのか、そんな答えは立ち読みした本の何処にも書いてはなかった。ただ、相手の状態が、変わるかわからないか、それだけだ。

アイオロスは、人差し指と中指で押し広げた間に、親指でローションを運ぶ。

入りそうな気がした。

だが、粗暴な人間だとは思われたくない。

アイオロスは、何度も引き返した親指を、そつと入り口から下ろした。

爪、半分程が潜り込んだ。

サガの押し返す動きに合わせて、指を引いた。そして、さらにローションを指に絡め、もう一度潜り込む。今度は、第一間接まで穴に落ちた。

サガは何も言わない。

まるで、波打ち際の海のようにだ、とアイオロスは思った。

波が海へ去る時、砂浜に立つ足は引き寄せられるように沈んでいく。サガの窄みは、内側を濡らした分だけ、アイオロスを受け入れた。

節ひとつ分の深さを液体で潤す。

指を回しながら沈んで行く。

コツを挿んだ。

アイオロスは、微かに笑みを浮かべて事を進めた。肩から力が抜けたのが自分でも感じられ、可笑しくて仕方が無い。今の今まで、確かにアイオロス自身も、何かを恐れていたのだ。

アイオロスは、サガの肛門の入り口に親指を当てが、端母指外転筋に自らの恥骨を押し当てゆつくりと圧した。

サガの背筋が小さく痙攣したが、ゆつくりと仰け反った銀色の頭にアイオロスの注意は霧散した。

ゆるゆると親指はサガの体の中に消えていた。アイオロスは、満足の笑みを零した。

余った四本の指でサガの陰囊を探り、揉んだ。サガの内腿が汗ばむのを感じた。前立腺という言葉の思い出し、当てずっぽうに親指の腹で内部を押し弄るうちに、サガがアイオロスの左手を両腕で抱え込み縮こまった。

もう、大丈夫。

そんな言葉がアイオロスの頭に響いた。アイオロスは、指を取ったまま、伸び上がり、サガの耳元で囁いた。

「気持ちいいだろうっ。」

敏感な耳珠、耳甲介、そして外自道にまで舌を差し入れると、

サガはただ頷いた。

その間も前立腺と信じる箇所を撫で続ける。アイオロスは、笑いながらサガに左腕を開放してくれるように頼んだ。

アイオロスは、サガの下半身に自分の下半身もびたりとく

つつけたまま背を伸ばすと、コンドームの袋を破いた。一枚目は亀頭のみ被せ、二枚目を陰茎全部を包むように手の平で転がしながら被せる。そしてその作業の最中、サガが無意識に行つたのである行為に、目が釘付けになった。

サガは、肩を起こし、左手の平で上半身を支えると、そつと右手で汗ばんだ額や頬に纏わりつく髪を払っていた。撓る背骨の白い稜線に、手の動きに、開かれた足の角度に、猛烈なセックスへの要求をアイオロスは感ぜた。

ぞわぞわとする気持ちを悟られないように、精一杯アイオロスは普段と同じ声でサガの名を呼んだ。サガは、また黙って肩を落としてくれた。

再度ローションを、己の性器と受け皿に塗りたくつて、アイオロスはサガの腰に手を添えた。

過去に何度か見た事がある女性性器と比べ、今から自分が入れようとする場所は、なんと心もとなく小さいことだろう。

アイオロスは、亀頭の先端をサガの肛門の中心にピタリと合わせ右手を添え木代わりにして沈み込みとうとした。

しかし、そこは、びくともしなかった。

先ほどまで、確かに親指を全て入れる程解けていた筈なのに。「サガ、力を入れるな」

アイオロスは眉間に皺を寄せて呟いた。

サガは何も答えず、状態も変わらなかつた。

「サガ！」

焦れたアイオロスは、つい強い口調で相手の名前を呼んでしまつた。謝ることも、引くことも出来ない。

目の前が真っ赤になるような思いで、アイオロスは腰をサガの狭間に押し付けた。うわつ、とも、うーつともつかない呻き声がサガの口から漏れたようだった。

けれど、亀頭の部分はなんとか収まる。四方八方から押し出そうとする強い圧迫感がアイオロスの性器を締め付けた。

とにかく、もう少し進みこまなければどうすることも出来ない。そう思ったアイオロスが、更に深くサガ・チエトウィンドの体に潜り込みとした途端、叫び声が上がつた。

何が痛くて、何が駄目なのか、アイオロスにはさっぱりだった。さつきは確かに、今サガ・チエトウィンドが拒否した奥まで指は入つていったのだから。

腰を上げたままで何度も「Please」という単語を口にするサガチエトウィンドに、アイオロスの体は急速に冷えていった。

突き飛ばされる方がまだましだ、と言葉にならない感情がそんな信号を脳に送る。

これは、合意のほうではなかつたのか？

アイオロスは、息を細く吐き出しつつ、亀頭を注意深くサガの体から引き抜いた。そして、妥協して数度性器を抜き吐きさせた。溜息が口をついた。

気が付くと、サガ・チエトウィンドはベッドに伏したまま泣いていた。

レイプした訳じゃないのに、と一瞬不満の感情で鳩尾が固くなりかけたが、アイオロスはその感情を手放し、平静を欠いたサガに体全部で覆い被さり、唇や指、足まで使つて彼を宥めた。

結局その日は、アイオロスはまた最初からサガの狭間を緩めに掛かつたが、亀頭より半インチばかり深く沈める事が出来たに止まつた。

二度、お互いに射精し、ぐつたりとしたサガの体をアイオロスは、タオルに用意していたポットのお湯を染み込ませ、全身を拭つてやつた。

擦り寄つてくるサガの体をしつかりと抱き留めてやつて、アイオロスはサガ・チエトウィンドと共に眠りに落ちた。

翌日、早朝のうちにアイオロスは目を覚まし、昨夜床に蹴飛ばしておいた不道徳に濡れたタオルをかき集め、ランドリールに行つた。

そして、そこで初めて気がついた。サガの下に敷き込んでいたバスタオルに沁みるローションがうつすらピンク色をしている。サガの恐怖心のみが先走り支障になつたと、心の隅では思わない訳ではなかつたアイオロスは、暫し反省した。

処女膜を破つたように、鮮血で染められたわけではなかったが、痛みは確かに存在したのだ。

ランドリーの窓を開けてキャメルに火をつけ深く吸い込んだ。冷静に行っていたようで、自分も頭に血が上っていた、と今なら思えた。

洗濯終了を告げるビープ音が耳に刺さった。

アイオロスは、乱暴に蓋を開けると、乾燥機に湿った物体を次々投げ入れた。

三階の部屋に戻ると、サガ・チエトウインドがぼんやりと目を開けていた。

「どうした？ まだ寝ていいぞ？ 練習は午後からだろう？」

アイオロスが低く囁きながらサガの額から頭部を撫でると、サガはその手を取って囁き返した。

「君は？」

「俺は目が覚めたから起きるよ」

「それじゃあ、私も起きる」

「寝てろよ」

「嫌だ」

「添い寝してやるから、お姫様」

「絶対に起きる」

サガは、アイオロスの手をほうり投げて上半身を起こしにかかった。しかし、それはアイオロスがサガの唇に接吻をした事で中途に終わった。

深く口付けながらサガをもう一度枕に押し付け、アイオロスは甘く囁いた。

「今晚、またやりたいんだ。お前が嫌になつてなきや、だが……」  
サガは、ほんなりと笑むと自分からアイオロスに深く口付けた。

アイオロスの口内を、サガ・チエトウインドの舌が静かに蠢動しあちらこちらを舐めた。そして唇を離すと、アイオロスの鼻の頭に軽くキスを贈り艶やかに笑いながら言い切った。  
「でも煙草は体によくはないよ。煙草の匂いがするキスはしたくないな」

初めて見るサガのなんとも強気できつぱりとした笑顔に、一瞬アイオロスは言葉を失い、プライマリー・スクールの男の子のような返事しか出来なかった。

「……うがいはしてきたぞ？」

「うがいはしてきてないよ」

「じゃあ、歯も磨いてくるよ」

「肺に脂が溜まるのがまずいんだよ？ 歯磨きくらいで体の中まではきれいにならないだろう？」

アイオロスは、無言でサガ・チエトウインドの頭を枕に押し付け、狸寝入りを決めた。

結局、アイオロスは毎晩サガ・チエトウインドを裸にして

セックスを仕掛けた。土曜の晩は前日の復習を。日曜の晩はサガ・チエトウインドが自分の性器に手を伸ばしてきたのを防ぎながら。

そして、月曜の晩、やつとアイオロスとサガ・チエトウインドは彼らが思い描くところのセックスに成功した。

その日は、何故か最初から全てがスムーズだった。アイオロスの親指は難なくサガの肛門に入り込み、尚且つ余裕があった。

人差し指と中指を揃えて差し込んだ時も、中手骨と其節骨を繋ぐ関節まで入り込んだし、何より、一本ずつ増やしていった指のうち、親指を除く四本を窄めて入れた時、その関節まで飲み込むようにしてサガの体は一気に開いた。

今まで、どれだけ奥に進もうとしても固い壁で塞がれていた通路が、柔らかく暖かくアイオロスの指に纏わりついた。魚の尾鰭の様に中で指をはためかすと、サガは、痛みのためではない悲鳴を上げた。

そして、とうとう、サガはアイオロスの性器を全て受け入れた。中は広く、洞だった。アイオロスがその事を伝えると、サガは分からないと首を振った。ゆつくりと大きく門を出入りするうちに、サガの内壁がアイオロスの性器に忍び寄り包み込み始めた。

その温かく湿った苗床を耕すように掘り続ける内に、アイオロスは根に絡まり、縛り付けられ放種した。

それは、サガ・チエトウインドの射精にも繋がり、暫く二

人はその幸福感にお互いを固く抱き締め合った。

サガ・チエトウインドの足は、アイオロスの右足を絡めて彼が自分から離れていくのを禁止した。アイオロスは目を細め、つい先刻まで自分の生殖器を埋めていた場所を指で探った。閉じきららず半開きのままの門は、アイオロスの指の動きを受け止めた。

サガ・チエトウインドは、体をずり上げてアイオロスが陰門に触れるのを助けた。そして、体をかえされるまで、アイオロスの頭部に愛撫とキスを繰り返して捧げた。

火曜日晩は、前夜の行為でサガ・チエトウインドが裂傷を負ったため、アイオロスがサガ・チエトウインドの性器に悪戯をするような事に終始した。向かい合って抱き合い、アイオロスの大きな手の平が二人分の性器を刺激し射精に導いた。その間、キスをしたり、足を相手の体にくるくると引っかけまわしたり、些細ななぞなぞを出し合ったりした。

最後の晩は水曜日だった。真夜中のミサを終え、その後の明け方まで教会に残るオケの面々を後にして、二人は早足で手を繋いで帰った。明け方までお互いの体を弄り回し、とうとうサガ・チエトウインドがどんなにされても吐精する体力が尽きたと白状しても、アイオロスはサガの体を離そうとしなかった。そして、鳥の鳴き声が部屋に飛び込んできた時、アイオロスは常なら決して考えられないような事を口にした。「お前、帰らなきゃいいのに」と。

子供じみた感傷だと、アイオロスも感じていたが、こうして何日も裸で同じ毛布に包まって寝ていると、こんな言葉も聞き逃してもらえないような気になるのだ。

サガ・チエトウィンドは微笑み、幼い子供をあやすようにアイオロスの焦茶の髪を撫でた。

「すぐに戻つて来るよ……その為にも、きちんと帰つて父の機嫌をとつておかないとね……」

「ふーん……」

父親の機嫌を取るなど、考えた事もないアイオロスは、サガが家族に払う細々とした心遣いの根底が分からず曖昧に返事をした。

「早く帰らなくてもいい身分になりたいな……」

そんなアイオロスに気付かず、サガ・チエトウィンドはさやかな望みを呟き、アイオロスに口付けた。

「甘く、長い口付けを終えて、アイオロスは直ぐ目の前に横たわるサガ・チエトウィンドの銀色の頭髪を何度も撫でて言った。

「お前、髪伸ばせよ」と。

「どうして？」

サガ・チエトウィンドは突然出された発注に純真な疑問を口にした。

「似合うし、俺はお前の髪好きだからな。長いと嬉しい」

そう言つて、アイオロスはサガの頭頂に唇を押し当てた。

もう一つの理由を知られたら、きっとサガは髪を短く切つ

てしまふに違いないと思ひながら。

十二月二十五日、早朝。サガ・チエトウィンドはアイオロスに見送られて駅にいた。

言いたい事は沢山あつたが、結局互いの冬の間の健康と来年の授業予想などといった話題しか口に出来なかつた。

こんな別れ方を何処かでした覚えがあるとぼんやり思つたアイオロスは、それが先月の自分の誕生日であつた事を思い出して失笑した。

「帰るのは何日だっけ？」

アイオロスが聞いた。

「十六日辺りには帰れると思つ」

「電車に乗る前に一人で電話掛けられる？」

サガ・チエトウィンドは二重の当てこすりを受けている事に気付いて笑つた。

一つは先月の誕生日。もう一つは……入学した当時、彼は寮の電話の掛け方が分からなかつた。

「掛け方がわからないから、ロンドンまで迎えに来てくれたら嬉しいな」

サガ・チエトウィンドはにつこりと笑つて返し、アイオロスは軍配が相手に上がったことを感じ、それを気持ちよく思

つた。

額を打ち合わせ、アイオロスは、ポケットから小さな包みを取り出すとサガの手に握りこませた。

「メリー・クリスマス。プレゼントだ。無くすなよ？ 一人の時にこつそり見ろ」

「今は？」

「構わないぜ」

アイオロスはにやりと笑った。サガの手に転がり出てきたのは、銀のリングが三つ、三角形の形に溶接されたものだった。怪訝な表情でそれを手の平で転がすサガに、アイオロスは噴出し笑い転げた。

一九八六年十二月十八日。

アイオロス・エインズワースは、一本のローションと、一チューブのクリームと、雑誌を一冊。それから、レギュラーサイズのトリプルリングを一つ、購入した。

サガ・チエトウィンドが、『コックリング』と言う物の存在を知るの、もつと、ずつとずつと後の話である。

そして、その「ずつと後の話」で、サガ・チエトウィンドが大事している寄木細工の小箱に、大切に仕舞われた銀色の輪細工を発見したアイオロス・ヴィンセント・エインズワー

ス氏は、六フィート十五インチを超える長身が折れんばかりにして笑うのである。

ハッピー・クリスマス……！





ある降誕節 (Side vision of Saga)

「お前は直ぐに帰るのか？」

アイオロスが、真つすぐにサガを見つめて訊いた。

何故そんな事を問うのか、理由を探りかねているサガに、アイオロスは再び真剣な眼差しで告げた。

「真夜中のミサに出ないか？」

それが、サガにとつて忘れ得ぬ休暇の始まりとなつた。

「次！ ヴァイオリンは何人いますか！ ヴァイオリン希望の方、手を上げて！」

十二月十八日、木曜日。クリスマスを目前に控えたその日の午後、小さな街の教会は、普段滅多に訪れることのない若者達の来訪を受けてひととき賑わっていた。全真制服を着用したその少年たちは、この街の誇る十六世紀から続くパブリック・スクールの学生達であり、皆めいめに自分の楽器を抱えている。教会の一室、コヒーロームに集められた彼等の間には、この街に古くから住む信者達の姿もあつた。彼等はこの小さいが由緒正しい教会付属のアマチュアオーケストラの団員であり、毎年クリスマススの真夜中、降誕祭のミサで演奏を行う習慣になつ

ていた。

熱意があつても、人が集まらねば何事も始まらぬオーケストラの常で、この教会付属のアマチュア・オーケストラも常に団員の高齢化と楽器編成のアンバランスに悩んでいた。それゆえ、彼等がパブリック・スクールのオーケストラと聖歌隊に救援を頼むようになったのも、自然の成り行きだった。最初にこのような派遣が行われたのがいつだったか、記録には残されていない。だが、互いに得るものの大きさを悟つた後は、パブリック・スクールの側も積極的にこれらの行事に参加するようになり、寮の規則もそれに合わせて二十五日までの滞在を積極的に認めるよう改善されたのだつた。

かくして、今このコヒーロームには有志として集まつたスクール・オーケストラの面々がいる。中には、必ずしも自分の意志でここへ来たわけではない者も居たが、とくに不満そうな顔はなく、これから始まるオリエンテーションに皆真剣に耳を傾けていた。

サガは手を挙げ、若い司祭の呼ぶ声に応えた。ヴァイオリンからは、サガの他に、先日までコンサートマスターだったシオン・ハーシエル、新しいコンサートマスターのロナルド・リック、シオンと幼なじみのムウ・アリストン、イベント好きのホセ・ナルバエス、それから期待の新人生ミロ・フェアファックスがいる。例年の参加者数から考えると凡そ五割増しである上、今年はプログラムの中の一曲、コレルリのクリスマス協奏曲のソロをパブリック・スクール側が受け持つことになつ

ていた。毎年ソロを弾いていた教会オーケストラのコンサートマスターが腕を怪我したため、急遽配役変更となったものだ。上がった手のカウントを済ませ、手に持った紙にその数を書き付けた司祭は、至極上機嫌な笑顔を言った。

「では、スクールオーケストラの皆さんと教会オケのメンバーで話し合つて、後ほどパート分けを行つて下さい。それから、今年は通奏低音パートがスクールオーケストラからも参加すると訊いたのですが、どなたですか？」

コーヒールームに集う若者を見渡し、再度尋ねる。

「コントラバスの……ええと、アイオロス・エインズワースさんですね！ どちらにおられますか？」

熱意溢れる司祭の呼びかけに、応える声はない。

気まずい沈黙が、スクール・オーケストラの面々の間を流れた。彼等は互いに顔を見合わせ、最後に、誰からともなくアイオロスの同室であるサガに視線を集中させた。

サガは、ごくり、と唾を飲み込んだ。そのような眼差しを向けられたところで、彼もまたアイオロスの所在など知らなかったからだ。

昨日、アイオロスは確かに、今日の午後三時から打ち合わせがあることをコントラバスの指定席で聞いていた。今日の昼にも、確かに食堂に居た。それなのに、その後彼は不意に姿を消し、三時五十分現在、約束の集合時間を既に小一時間過ぎているというのにまだ姿を現さない。

一体、アイオロスはどどういうつもりなのか。

そもそも、このミサへの出場にサガを誘つたのはアイオロスではないか。

「あの……すみません。エインズワースは、ご実家の急用で、今ロンドンに……」

事実を語るにはあまりにも本日のアイオロスに対する情報が少ない、サガは仕方なく急場凌ぎの言い訳をした。そもそも、このような有様ではアイオロスが本当にミサに出るつもりなのかどうかも怪しい。他人を引き込んでおいて自分だけ参加を取りやめるような真似をする悪癖はないとサガは信じているが、アイオロスと会つたこともない教会オーケストラの面々はそうは思わないだろう。

シオンが、針のような眼差しで、サガを睨んだ。嘘をついたな、と、その視線は語っていた。

「どうですか……うちにはコントラバスがないので、楽器とバス椅子をご用意いただけると聞きました。また次回の練習で伺うことにします。それでは、今後の練習日程です……」

司祭が少し残念そうに、しかしアイオロスの参加を微塵も疑うことなく、次の話題に移行した。サガが白板に書き出された練習日程をノートに書き取っている間に、シオン・ハーシエルは音もなくサガに近づき、その肩をつついた。

「何がなんでも、次回は首に縄をつけて引つ張つて来ねばなるまいな。本当は何処にいる？」

小声で、サガにだけ聞こえるように尋ねた声に、サガはわ

からない、と首を振る。

「昼までは確かに居たのですが、その後見失つてしまつて」

「全くふざけた奴だ。確信犯だな。とにかく、この期に及んで降板は許さぬと、重々伝えておけ。あいつはやりかねん」

何しろ、ありとあらゆる学科のサポータージュを一度は敢行し、七つのハウスの中でもっとも厳しいと言われるハウスマスターの監視の目をかいくぐつて脱走を繰り返す脱走キングの異名をとるアイオロスのこと、シオンの彼に対する信頼の二文字は、地に落ちるどころか地下にめり込んでいる。サガは司祭に気付かれぬように溜息をつき、わかりました、とだけ答えてノートに書かれた練習日程の一覧をじつと見つめた。

十二月二十日の土曜日、二十一日の日曜日、二十三日の火曜日と、二十四日の夜のステージ・リハーサル。

その二十四の文字を見て、サガは僅かに眉を寄せた。

本来ならば、二十四日を家の外で過ごすなど、考えられないことだった。

サガの実家、シュローズベリ伯領は、古い修道院を抱える中世からの街を抱えており、父もまた厳格なクリスチャンだった。クリスマス・イブには、相続の無用な争いを起こさぬようアメリカへの留学を余儀なくされた双子の弟・カノンも戻り、一年の互いの生活を報告し合う。両親や兄弟と早くに離れ、特にサガには寂しさを隠さなかったカノンも、最近ではアメリカでの自由な生活を笑顔を交えて報告してくれるようになったが、この日が家族にとって特別な日であることは

今も変わらない。

その大切なクリスマス・イブに実家に帰れないと言つた時、電話の向こうの父の声は怒気をほらみ、こう告げた。

「……つまりお前は、年に一度の家族の団欒を犠牲にしても、教会での奉仕がしたいというのだな？」

サガは、二十五日の午後の正餐会には必ず帰り、授業が始まるまでは家で過ごすことを固く誓い、漸く居残りの許可を取り付けたのだった。

これらの顛末は、勿論アイオロスには告げていない。彼は恐縮する姿は見たくなかったし、何よりも、サガ自身がアイオロスと過ごすクリスマス・イブを楽しみにしていたからだつた。

だが、アイオロスは本当に、真夜中のミサに参加する気があるのだろうか。

もしも、自分を誘い出すただけにそのような口実を使つたのなら——それは、サガにとつても悲しいことだった。

結局その日、アイオロスは教会に現れず、寮に戻り夕食の時間が過ぎても、消灯時刻を回つても、寮に戻つて来なかつた。何かあつたのではないかと気を揉み、三十分ごとにベッドから起き出しては窓の外を確かめる作業を続けていたサガは、十二時を過ぎて漸く窓から帰寮したアイオロスにほつとし、次いで事の次第を正そうとアイオロスに話しかけた。しかし、アイオロスは何故かまともにサガの話に取り合ふ様子もなく、アンドリュウ・シーファとふざけ合つた挙げ句、ただの一度

もまともにはサガの顔を見ないまま自分のベッドに潜り込んでしまった。アンドリューは、明日の午前中、実家に戻る。ならば、明日の夜はこの部屋でアイオロスと二人きりになれる。それはサガにとつて、ずっと以前から楽しみにしていた時間に違いなかったが、この午後の顛末を訊かぬままにしておく訳にもいかず、楽しみの前に随分と重い壁が出来てしまったように、サガには思われた。

翌日、スクール・オーケストラの中での合奏練習に、アイオロスは珍しく譜読みを済ませて参加していた。入学当時、音符の読めない状態で入団してきたアイオロスの読譜能力は当初決して高くなかったが、一通りの技術が身に付いた段階で彼は初見で合奏に乗ることを覚え、そのスリル感を楽しむようになった。従つて、初めての合奏練習ではまず練習をして来ないのが彼の通例であり、今回もそのように予想して疑わなかったサガは、最初から間違える事もなく堂々と引き続けるアイオロスに驚きと共に安堵を覚えた。

矢張り、ミサには共に出るつもりでいるのだ、と。

その日は初回にしては合奏も順調に進んだので、サガは昨夜より幾分か柔らかい口調で、昨日のアイオロスの行動につ

いて尋ねようとした。

一度目。休憩時間中にコントラバスを訪ねたところ、遅れてやって来たトランペットのコーリン・オーガストにアイオロスの注意が逸れ、問いかけの機会を逸する。

二度目。練習終了後、再度コントラバスを訪ねるが、丁度横を通りかかったミロ・フェアファックスをアイオロスが呼び止め、サガの訪問は完全に無視される。

三度目。食事の時間にアイオロスを誘おうとするが、アイオロスはさつさとミロやカミュ・バロウの居るテーブルについてしまい、再度質問の機会を逸する。

アイオロスのサガに対する無関心は、既に昨日からまともにサガの顔を見ようとしないうところから明らかで、一日が終わる頃にはサガはすっかり胸の裡に重苦しい鬱屈を抱えていた。

最初は約束をすっぱかしたアイオロスに対する不満が勝っていたが、こうも徹底的に避けられると、自分が何かアイオロスの気に障るようなことをしたのではないか、という気分になつてくる。アイオロスは自分と顔を合わせたくなくて、会合にも現れなかったのではないか。だとしたら、自分はいつそれほどアイオロスの気に障るようなことをしたのだろうか。

いくら考えてもそのような己の失敗には思い当たらず、またこのような屈折はアイオロスの性格にも合わない事だと思ふと、ますます訳がわからなくなる。

そんなわけで、練習が終わり、食事の時間が終わり、部屋に帰るなりさつさとシャワー室へ消えたアイオロスを三十分以上も待った後、漸く口を開く頃には、サガの神経は既に不満や苛立ち、悲しみといった負の感情で疲れきっていた。

シャワーを浴び、さっぱりした様子のアイオロスが、そんなサガの鬱屈にもまるで気付かぬ様子で聞いた。

「お前は？ まだシャワー浴びないのか？」

サガは、あまりにこちらの状態を感じせぬアイオロスの物言いに、一挙に固まった鵞尾を宥めつつ、ゆつくりと自分では冷静と思える口調で言った。

「……あとで浴びるよ。そのまえに、君に聞きたい事があるんだ。……アイオロス、君は昨日一日、外出届も出さずに何処に行っていたんだ？」

ここではぐらかしたら許さない。そう、強い覚悟を眼差しに乗せて見詰め返してはみたが、アイオロスは一向に悪びれる様子もない。むしろ、呆れたような表情で「ホントに知りたい？」などと訊いて来たので、サガは勿論、と強い口調で言い切った。

訊きたい事は、まだいくらかもある。

ひとつひとつ、洗いざらい話してもらおう。そう思つて次の言葉待つと、アイオロスは何を思ったか、黒く塗られた紙袋の中からサガが見た事もないような商品を二つ、ベッドの上に転がしてみせた。

その商品はいずれも、派手なプラスチックのパッケージに

つまれ、明らかにかがわしい雰囲気のアプリントがなされていた。中身の一つは無色透明の液体、もう一つは白いクリームに見える。手前に転がって来た液体のボトルを手にとり、サガは「LOVELUTION」と書かれたボトルの説明を読んだ。

曰く、

一、不感症に悩む女性の為の潤滑剤として

一、普段と違ったプレイを楽しみたい大人のカップルのアイテムとして

一、男性の勃起不全対策に

一、原料は海藻と水ベースで、舐めても安心

……

サガは知らなかったが、それは所謂、性交に用いる潤滑剤と呼ばれるものだった。

存在は知らずとも、どのような機会に使用するかは理解できる。理解した途端、サガの全身は羞恥に熱くなり、頬ばかりか指先までもが薄く色づいた。

アイオロスは、一瞬、そんなサガの反応を楽しむような笑顔を一ひらめかせ、先を続けた。

「それを買いに昨日はロンドンまで行つて来た。他にも色々あったけど、お前、もつとフレイバーな奴の方が良かった？」

言葉つきは問いの形であっても、内容は二人で共に使うのだという明白なメッセージに他ならない。サガの頭は真っ白になった。

サガは既に、十一月のアイオロスの誕生日の時点で、かな

りきわどいところまでアイオロスの体に触れている。

その後互いに人目を忍んでキスを交わすような間柄であったから、このような事態は当然予測していたし、ここに二人だけで泊まる六日の間には、ひと月前よりも進んだ関係になることを期待してもいい。

だが、まさか、こんなに早くアイオロスが行動を起こすとは考えてもみなかったのだ。

サガは、数秒の間働きを止めていた思考を漸く働かせ、今何が必要かを考えた。「いくつも」あった筈の問いただしたい事柄は、今の衝撃で掻き消えてしまったし、最も彼を悩ませたアイオロスの要領の理由も、最早自明だった。

成程、昨夜からこの夜の計画を練っていたのでは、人前でまともに話せる筈もない…。

それ以前に、そもそも打ち合わせをすっぱかして性交の道具を漁りに行くなどという態度が間違っているのだが、あまりに鮮やかに出し抜かれた敗北感が、その点を追求する気力を削いでしまっていた。

つまり、真夜中のミサに誘った本当の目的は、それまでの夜にあつたということなのだ。

顔を上げれば、罪悪感の欠片もなく、むしろ思惑通りサガを驚かせて誇らしげですらあるアイオロスの表情がある。

サガは先刻まで鷓尾を固めていた鬱屈を再度思い起こそうとして、その笑顔に遂に屈服した口を知った。

本来なら怒るべき場面であるのに、どうして自分はこんな

にも欲びを感じているのか？

嫌われたわけではないと知って…。

サガは軽く頭を振り、一言「シャワーを浴びて来る」と呟くと、バスタオルと着替えを持ってシャワールームに向かった。

何を、何処まで洗い立てればよいのか、とにかく頭が混乱して落ち着かない。

二度、頭からつま先まで石鹸を泡立てて洗った後、サガは冷たい水を頭から被った。

そのぞつとするような冷水の衝撃で、漸く浮ついた精神が基底の位置に落ち着いた。

…とにかく、部屋に戻ったら、少しアイオロスと話をしよう。なにしろ、勢いでこのような流れになってしまったものの、自分にはこれからの行動が何一つ分かっていないのだから…。

シャワーのカランを止め、バスタオルをとり、丁寧に髪の手を拭き取る。その無意識に相手を意識した行動に気がつき、サガの手が一瞬止まった。

冷水を浴びて、淡く桜色に色づいた両手を眺める。ざくりと、心臓の鼓動が波打った。

…本当に、これから、抱き合うのか。同性である、アイオロスと。

一瞬、ひやりと背筋を走った悪寒を、サガは無視した。抱き合うといつても、同性ではどのみち大したことなど出来は

しないのだ。二人で行う、マスタペーシジョン。互いに相手を心地よくさせられれば、それでいい。

サガは、彼の十五年間の人生で常にそうしてきたように、これからの夜に平常心を持つて臨もうとしていた。アイオロスが、そのサガの自制心こそを剥ぎ取るために、様々に準備を整えているとも知らず。

部屋に戻ると、アイオロスはのんびりとベッドに寝そべり、彼が愛読しているブレイボーイの雑誌を広げていた。アイオロスは濡れた髪をタオルで拭うサガに視線を投げもせず、一言「随分長かつたな」とだけ言った。

長かつたのは君も同じじゃないか、と、普段は十分でシャワールームから戻つて来るアイオロスが今日は三十分かけたことを思い出す。しかし時計を見れば既にこの部屋を出てから小一時間が過ぎており、サガは今更ながらシャワールームで悶々としていた自分自身に羞恥した。

「お茶を、淹れてくるよ」

サガは、部屋に戻る道すがら、考えておいた台詞を口にした。とにかく、このまま同衾するにはまだ心の準備が整っていないかつたし、何よりもこの気まずい息詰まるような雰囲気は何とかしたい。だが、アイオロスは、サガのそんな希望をあつさりと言で一蹴した。

「お茶なんて飲むの？」と。

まさかこのようなささやかな提案すら容れてもらえないとは思つてもみなかつたサガは、その場に硬直した。

「要らない？」

「俺は別に咽喉乾いてないからいいけど？」

実のところ、アイオロスにはサガの魂胆が読めており、サガの頭を冷静にさせる暇を与えないのは彼の作戦の一つもある。だが、既にアイオロスのペースに乗せられているサガには、わざと人を居たたまれない思いに追い込んで楽しんでるアイオロスの余裕としか映らない。

雑誌のページを繰るばかりで一向にこちらの状態に頓着する様子がないアイオロスに、サガは溜息をつき、仕方なく手にとつたカップとポットを棚に戻した。

自分一人で飲んでも、余計に息詰まるだけだ。

覚悟を決め、アイオロスの向かいの自分のベッドに腰を下ろす。

体の芯に、じわりと小さな熱が生まれた。

アイオロスが、漸く広げていた雑誌を綴じ、サガの方を見た。「こつちに来ないのか？ それとも俺が行く？」

「私が行くよ」

せめて、自分が普段眠る場所で抱き合うことだけは勘弁願いたい。そう思い、サガはアイオロスの寝そべっているベッドの淵に静かに腰掛けた。

アイオロスの手がするりと伸び、サガの腕を掴んだ。そしてそのまま、寝そべっている自分の体の上に引き倒す形でサ



ガの体を抱きとめ、深いキスをした。

一度触れてしまえば、居心地の悪い思いも何も消し飛んでしまう。

アイオロスのキスに応えながら、サガはそのことにいつそ驚いた。

最初、色気も何もないところから始めようとしていたかに見えたアイオロスは、サガの体がキスに緩んだのを見ると、身を起こして部屋の明かりを落とし、「蠟燭貸して」とサガを振り返った。サガは、アイオロスから十一月に送られた蠟燭を窓辺に飾っている。葦の蕾を閉じ込めたその蠟燭を、シユラなどは少女趣味だと嫌そうに評したのだが、サガはその透き通った感じが気に入っていた。サガが頷くと、アイオロスはそれを更に水を張った皿の上に乗せ、火を灯した。

ふわりと、温かなオレンジ色の光が広がり、その光はベツドの上で向き合ったサガとアイオロスの顔の上に深い陰影を作った。

先刻までの、少し人を食ったような笑みは消え去り、二日間まともにサガの方を見ることもなかったアイオロスの瞳が、直撃な眼差しでサガを見つめている。

二人は、どちらからともなく近づき、誰に気兼ねすることもなく固く抱き締め合った。

アイオロスが、そととサガの体を自分の方へ引き倒した。与えられたキスは甘く、暫し、その感触に陶然としながら、アイオロスのまつすぐな髪にサガの指が潜り込む。慈しみを

込めて撫で付ける間に、アイオロスはさっさとサガの夜着の襟元のボタンを外し、体を入れ替えてサガの四肢を組み敷き、喉元から肩にまでキスを散らし始めた。

ふと、これまで考えないようになっている疑問が、サガの脳裏に点滅した。

あのローションとクリームは、一体何の為にあるのだろうか？  
 実のところ、級友達が影で噂するように、サガは性行為について全く無知識というわけではなかった。子供はコウノトリが運んでくる訳ではないこともプライマリスクールの第三学年に上がる頃には知っていたし、異性との性交の手順なら、精通があつた時に一通り執事から正しく教わって、女性の体についても同級生よりよく知っているくらいのものであつた。それゆえ、ローションの最初の使用目的が「不感症に悩む女性のための潤滑剤」であるという一文の意図を、サガはほぼ正確に理解していた。文字どおり、ローションは結合部のための潤滑剤なのだ。だが、男性である自分達には、結合する部分などないではないか。

しかし、わざわざミーティングをサポータージュしてまで、ロンドンへ出向いて買い求めたものならば、必ず重要な役割があるに違いない……。

ひとつ気になると他事に集中力を割けないのがサガの性格であり、これから始まる行為に自分も積極的に関わるつもりでいたこともあつて、サガは手順を確認した。遮って申し訳ないが、あのローションはどうやって使うのか、と。

アイオロスの眉が一瞬不機嫌に寄り、それから、わざとらしい笑みがつこりと口元に浮かんだ。

「微に入り、細にいり聞きたいか？ それとも大雑把な説明が？」

「いや、大体のところでいい。」

アイオロスが説明の時間を面倒がつていることが明らかに見て取れたので、思わず声を落として返す。

「…目的は一緒だよな？」

「…ごめん…実のところ、何をどうするのかよくわからないんだ…」

「…俺はお前とセックスするつもりなんだけど？ 違った？」

それで分かるくらいなら、わざわざ行為を途中で遮ってまで質問したりなどしない。だが、サガはそれで分からない自分が知識不足なのだ、暗にアイオロスが責めているのだと感した。実のところ、同級生でも具体的な同性性交の手順を知っている者などほとんどいなかったのだが、サガはまた自分の知識が足りないのだと思ひ込んだ。

足りないものをそのままにしておくのは気分が悪い。だが、これから自分の身に起こることを話すのだと思うと、何とも恥ずかしくて顔を上げていられない。サガは俯き、小さな声で漸く呟いた。

「うん…だから、その…セックスの方法が…」

アイオロスは、そのサガの躊躇いを、この期に及んでサガがアイオロスとの関係を躊躇したのだと勘違いしたようだっ

た。

「じゃあ、俺が教えたら、お前はOKな訳？」

「嫌だとは決して思っていないよ。…ただちょっと…何が起るかわからないというの……」

サガは、決して、の所に力を込めて言った。本当に、体の関係をもつことにはもう躊躇いはないのだ。ただ、アイオロスの知識に届かぬまま、受け身でこの夜を過ごすのはまだほんの少し怖い。それは飾らぬサガの本心だったが、アイオロスはそんなサガの怯えをたつた一言で封じた。

「お前の服を脱がせて体中触るし、キスする。それからお互い射精する。これでいいか？」

先程までの雰囲気とは打って変わって、色気の欠片もないきつぱりとした返答に、サガの心はしぼんだ。

…これは、聞いても無駄だ。

アイオロスには、サガに手順や計画といったものを隠しながら事を進めようとする傾向があつて、例えばロンドンへ遊びに出るような時にその傾向が顕著になる。彼は何事もリードするのが好きであつて、逆にこの前の誕生日の時のように他人にリードされると居心地悪そうな表情をする。サガはそんなアイオロスの性格を理解していたし、彼自身前知識を持たずにびつくり箱のように驚かされることを楽しんでもいたが、こんな時にはその性格が少々恨めしくもなるのだ。どうせ聞いても口を割らないと悟つたサガは、最後に、ひとつだけ質問をした。

「…わかった。…勿論、君も脱ぐんだろ？」

わざわざ聞いたのは、お前の服を脱がせて、というところに僅かなひつかかりを感じたからだ。服くらい自分で脱げるし、「お互い服を脱いで」と言わなかったことが気になる。自分だけ脱がされて弄り回されるのは勘弁願いたい。

アイオロスは、少々意地の悪い笑い方をした。

「脱ぐよ、勿論。物分りのいいお姫様」

そよぐ蠟燭の明かりの中に、長く人影が伸びていた。

サガは、その壁にそって流れる影を見つめ、それから目を閉じた。

影の形は、体をベッドのヘッドボードにもたせかけ、膝をゆるく立てている人影と、ベッドの上に俯せたもう一つの人影からなっている。その姿が、自分の目から直接見える視界よりもより鮮明に、今の自分がおかれていた状況を自覚させるものだったからだ。

アイオロスは、サガの広げた脚の間に入り込んで、先刻からしげしげとサガの性器を見つめていた。

「…何を見ているんだ」

数十秒が過ぎ、依然として動かないアイオロスに、サガはついに口を開いた。

「下半身。男の性器なんてまじまじ見たの初めてかも」

返答したというよりは、思わず零れてしまった本心のよくな吹きが戻って来る。先刻まで、相手を酔わせることに集中していた熱は何処かへ消え去り、今、サガが見下ろしているのは一人の純粋な好奇心に駆られた少年の姿だ。

「アイオリアのはそういえば見たことがあったか…ガキの頃」

「…自分の見ればいいじゃないか。多分君の方が立派だと思っけれど…」

物珍しい、という意味では確かにその通りであり、好奇心をそそられる気持ちも理解出来ないではなかったが、物心つく以前から徹底した紳士教育を施されて来たサガにとつて、剥き出しの、しかも形を変えつつある性器を凝視されるのはどうにも我慢出来ないことだった。大体、アイオロスは何故まだ服を着たままなのか、と、先刻から気になっていたことが不満に感じられる。男性器を観察したいのなら、アイオロスも脱げばいいのだ。彼の体格なら、きつとそれなりに立派なものを持つているだろうに。

自分より体のしつかりしたアイオロスに対する気後れもあって、多少卑屈な返答をしたら、アイオロスは声を立てて笑いながら言った。

「セックスするのに自分の生殖器みて恍惚としてたらバカだろっ？」

今現在も決して恍惚とした表情ではないアイオロスに、サガはますます屈折した。

「…でも、人のを眺めて綺麗なものでもないような気がする…」

「そうか？」

アイオロスは、好奇心に任せていた集中力を再び己の意志のもとに戻し、そつと羽で触れるようなキスをサガの陰茎に贈った。思いもかけなかったアイオロスの行動に、サガの体は一瞬で硬直し、背筋は跳ね上がった。

次いで、湿った感触が亀頭と陰囊を伝い、何故アイオロスがこの姿勢を取らせたのかを知る。

「アイオロス…それはちよつと……」

流石に行き過ぎのような気がして、サガはアイオロスの口元に右手を押し込み、アイオロスの唇を指先で塞いだ。

互いに触るのは予想の範囲だったが、これは、顔を近づけて見るものではない。ましてや、口で触れるものでは決してない、と、サガの十五年間に培われた「常識」は告げていたからだ。

「なんで？ 気持ちよくない？」

アイオロスは、そんなサガの動揺には全く頓着しない様子で訊いた。何が不都合なのか、と言わんばかりだ。

「…あまり綺麗な場所ではないし…舐めるのはどうかと…勿論きちんと洗ったけれど……」

この場合、サガが本当に言いたかったのは前半の二言である。最後の一言は、既に性器に口をつけてしまったアイオロスへの配慮で口にしたに過ぎない。だが、アイオロスは最後の一言のみを重視した。

「じゃ、問題ない」

今度こそ、アイオロスが口内にサガの性器を含み、何の躊躇いもなく舌でさすり始めたのを感じ、サガは説得をあきらめて再び背をヘッドボードに預けた。

暖かい感触は、思いの他、サガのこれまで殆ど使われることのなかった性感を刺激した。それは確かに、「気持ちのよい」感触だった。羞恥心や気後れといった感情が、その快感に酔うことの邪魔をしなければ。サガは、アイオロスにここまで行為をさせている事を申し訳なく思い、次いでその申し訳なさを、次には自分がアイオロスに対して同じことをするのだと誓うことで漸く宥めた。柔らかいアイオロスの髪を梳きながら、与えられる刺激に酔うことに集中し始めた頃、アイオロスが顔を上げ、そつと一言呟いた。「抱き締めて」と。

サガは腕を伸ばし、アイオロスのきれいに反った背中を抱き込んだ。

ふわりと、やさしい熱が、アイオロスの背中の上に体を伏せたサガの頬を暖めた。

何も喋らない、静かな時間がゆっくり流れ、ただ互いの息遣いがより近くに聞こえるようになった頃、サガは急に全身に走ったこれまでとは比べ物にならない強い衝撃に体を跳ね上げた。

こんな感覚は、全く初めてだった。

自分で精を処理した経験が、全くないわけではない。だが、抜くのと吸われるのでは訳が違う。あまりに唐突に全身を駆け抜けた衝撃は、サガの閉じられていた喉を突き破り、サ

が本人でさえ聞いたこともないような掠れたフルセットを生んだ。

アイオロスは、サガの反応に満足したように、より強い刺激を口に含んだ性器に加え続けた。急に加速度を増した刺激の密度に、サガの精神は混乱し、甘い声に潤んだ吐息をはきつつも、快楽の海へ飲まれまいとアイオロスの背中にしがみつくと腕に力を込めた。

息詰まり、体内に快楽が溢れる程、このまま加速し続けることに戸惑いを覚える。

きつと、もう先走りは溢れている筈だ、と。

もういいから、やめてくれ。そう何度も言おうとするのに、何故か声が出なかった。そして、そのことにサガは尚更混乱した。

頭の中は、依然として羞恥心やアイオロスに対する申し訳なきで溢れかえっている。それなのに、何故自分の体はあさましくもこの刺激が持続することを願ってしまうのか、と。

アイオロスの熱の籠った愛撫は続き、ついに、何も考えられなくなった時、サガは臨界が訪れたことを知った。

その瞬間、別の恐怖がサガの理性を呼び覚ました。

このままでは、アイオロスの口内に射精してしまう。それだけは、絶対に回避しなくては。

漸く、制止の叫びが荒く波打つ吐息の合間から溢れた。

「……だめだ…… 離し……」

言葉は既に文章の体をなさず、いくつかの単語を並べるの

がやつとの有様だったが、サガはこれまでアイオロスの背に回していた手を肩に置いて逆に突っ張ることで、本気で解放を望んでいることをアイオロスに伝えた。

だが、アイオロスの腕の力は緩まなかった。

「ん。分かった。気にしなくていい。出しちゃっていいから……」

一瞬、サガは何を言われたのか分からずに、混乱した。

気にしなくていい、とはどういうことだ？ 出してかまわない、とは、このまま、彼の口の中に射精しろ、と？

ぞつとするような恐怖が、サガの背筋を走破した。

それだけは、絶対に駄目だ。人間として、排泄物が通る道

から出て来たものを他人に飲ませるなど、絶対に許されない。

サガは、何度もアイオロスの体を引き剥がそうとし、その度に、陰囊を握るアイオロスの巧みな愛撫に遭って挫折した。

抵抗は、長くは続かず、アイオロスがサガの性器を強く吸ったことで終わりを告げた。

意識が真っ白になるような衝撃の後、サガは短く呻き、自分が人として許されないと思っていた事をしてしまったことを知った。

どうしよう……本当に、やつてしまった……！

全身を冷たい後悔が駆け抜けた。自分が畜生にも劣る存在であるように思えてならなかった。幼い頃から、常に自制を

と叩き込まれて来たサガにとつて、肉欲に敗北したという事

実は、アイオロスの許しを得ていたとしても受け入れがたい

ものだった。

「精液の成分は何だったのだろうか。」

アイオロスは吐き出そうともしないが、飲んでしまつて本  
当に大丈夫なのだろうか。

もし、尿道に細菌が溜まつていて、そのためにアイオロス  
が病気にでもなつてしまつたら……

考えれば考えるほど、恐ろしい可能性しか思い当たらない。

アイオロスは、そんなサガの心中に構わず、脱力したサガ  
の体をタオルで拭い、同時に目の端に浮かんだ涙も拭つた。  
汗の始末が済んだ後、これまで着ていたシャツとズボンを脱ぎ、  
まだ放心したままのサガの体に覆い被さる。冷えた体に、ア  
イオロスの肌の感触と温かな熱を感じて、サガはそのしつか  
りとした体躯を受け止め、腕を背に絡ませた。

「……めん……」

漸く、小さな声が喉をついた。

「何が？」

「……飲んだのか？」

アイオロスが、密着させていた体を少し持ち上げ、怪訝な  
表情でサガを見下ろした。

「……病気になるなればいいけれど……」

アイオロスは、サガの返答に不意をつかれたようだった。  
少し熱を帯びて潤んでいた瞳を見開き、遠慮容赦なく吹き出  
した。

「みんな普通にやっっているよ」

「本当に？」

「本当に」

アイオロスにしてみれば、勉強も出来、医学の知識も年相  
応以上に蓄えているサガが、性病にでも侵されていなければ  
全く無害の行為をそのように恐れる事が可笑しくてたまらな  
かつたのだ。

急にサガが可愛らしく思えて、アイオロスは殊更力を込め  
てサガを抱き締めた。サガは、せめてアイオロスの口内に残つ  
た精液を全て引き受けるつもりで、アイオロスの唇にいつに  
ない深さで口づけた。

独特の青臭い匂いと苦みが、サガの舌に絡んだ。

初めて全身で触れるアイオロスの肌が、熱い。

その熱や、肌の感触や、耳元で聞こえる吐息と、ふわりと  
密度を増したアイオロスの匂いが、サガの自制心を再びはぎ  
取り始めた。

十一月には、薄い衣服を隔てて抱き合つた。その厚さなど、  
取るにたらないものであつたはずなのに。

今こうして全身で感じているものとの差は、なんと大きい  
ことか。

何故、人が衣服を脱いで抱き合うのか、この瞬間、分かつ  
たような気がした。

これまで、理性の象徴、人間としての文化の証であつた「衣  
服」が、実は大変無粋なものであつたことを知り、サガはそ  
の事実の重さを感じつと嘔み締めた。

存分に互いの肌を貪り合い、お互いの肌の温度までが等しくなつたころ、アイオロスは背に回されたサガの腕を解き、サガの体を俯せに返して、やや笑いを含んだ声で言った。「暴れるなよ」

耳を咬む囁きに、先日アイオロスが実はしたたかに鼻を打つていたらしいことを思い出す。少しきまりの悪い思いで、「わかった」とはにかむと、アイオロスはひとつサガの目元にキスをくれた。

実のところ、この時点で、サガはアイオロスの口にした「怪我」の可能性について、アイオロスが怪我をする心配以外全く考えていなかつた。アイオロスが自分を傷つけることなどあり得ないという信頼は、彼にとつて今更意識する必要もないほど自明のことだつた。それなので、サガは反射ではねる自分の体を如何にコントロールするかという一事だけに集中した。そもそも、どこかに緊張が残っているから跳ねるのだ。そう気付いた時、彼は最後に残っていた「何がおこるかかわからない」という警戒心を捨てた。

絶対に、大丈夫。

頭ではわかりきっていることを、体の隅々にまで行き渡らせるには、それなりに意志が必要なのだと思つた。

背中に触れる湿つた唇の感触を楽しんだ。「次は何処へ落ち

て来るだろう？」と先を焦る心を押しとどめて、今与えられている刺激を受け止めることに専心した。ぴたりと背後に覆い被さつたアイオロスの体から伝わる温度、湿つた皮膚の感触、大切なものを慈しむような手の動き、さういつたものの変化を追い、それをただ享受する自分を認めた。実のところ、サガにはまだ、アイオロスから受け取るばかりの今のこの状況に対する遠慮がある。だが、そのお返しはもう少し自分がこゝういつた行為に慣れるまで待つてもらおう、とさう決めた。やさしい甘い刺激にうつとりとして、そんな思考も霞みかけていたときのことだつた。

不意に、アイオロスはサガの上に覆い被さつていた体を起こし、何を思つたか、サガの臀部に手をあててその手を左右に開いた。

ふと、緩んでいた思考が醒まされた。そこにあるものが何かに気付いたからだ。

性器を口に含まれた時と同じ困惑が、サガの意識をより覚醒させた。

不浄、という言葉は、決して好きではない。

だが、そう感じる事自体が、実はもつとも「不浄」を意識している、という事なのかも知れない。

アイオロスが「問題ない」と言つた通り、いつもより更に時間をかけて洗い立てた体に、衛生面での「不浄」な部分か

あり得る筈もない。それでも、アダムとイブが最初に隠す事を覚えた場所を殊更に凝視されることには、戸惑いを感じるのだ。自分の陰部が誰かより劣っていて恥ずかしい、とか、そういうコンプレックスを持っているわけではない。ただ、どうしても美しい場所とは思えないのだ。そして、そのような美しくもない場所を好きな相手に見せたくない、と感じてしまう。

つい不安げに頭を起こし、アイオロスを振り返ったサガの頭を、アイオロスは苦笑をこぼしつつ撫で、最後にその頭を再びシーツの上を下ろすよう促した。そうして、宥められたサガが困惑しつつも再び体の力を抜いたとき、アイオロスは一気にサガの腰を抱え上げ、開いた足の間に入り込み、自分の足を使ってサガの足を広げ、欠伸をする猫のような膝立ちの姿勢を取らせた。

理由の分からない不安が、サガの意識の制止を振り切って全身を走った。そのことを申し訳なく思い、遅まきながら逆立った自分の神経を宥めようとした時、アイオロスが更に警戒心を煽るような行動をとった。

アイオロスは、サガが不浄とみなした場所にキスをしたのだ。何かが、サガの意識の境界で剥がれ落ちた。その剥落の向こうに、ずっと不審に思っていたものの全ての答えが有る。誤った憶測のヴェールが全て取り除かれた時、サガの心臓は激し

い緊張と恐怖で極度に縮こまり、胸が痛むほどの強迫を打った。

何故、アイオロスがわざわざロンドンまで遠出をして、性交用のローションを買って来たのか。

何故、彼は「セックスをしたい」と言ったのか。

男性同士の「セックス」とは、異性と行うセックスとは全く異なつたものになるはずだ。そのことを、サガはアイオロスと想い通じて以来、ただの一度も疑つたことはなかった。何しろ子供はできないし、そもそもつながる部分がないのだから。だから、アイオロスが「服を脱がせて、全身にキスをして、お互い射精する」と言つた時、それは十一月の延長で、あの時出来なかつた射精行為を加えたものに過ぎないと考えていたのだ。

だが、今漸く気付いた。確かに、ひとつだけ、体内につながる場所がある、と。

今まで気付かなかつたことが迂闊と言えば、否定のしようもない。だが、サガにとって、全身の中でもっとも不浄とされる場所、男性にとつて最もデリケートな器官を挿入することなど考えもつかないことだった。あまつさえ、アイオロスの陰茎はその身長に見合う立派なものであったから、そんなものを人の肛門に挿し込もうなどと考える発想が、既に彼



の理解の範疇を超えていた。

アイオロスが、緊張で反り返った背にキスをした。片手はサガの性器に伸ばしたまま、項にキスをし、肩や耳元にキスをし——最後に、柔らかい力ではあったが、確固たる意志を持つて、浮き上がったサガの肩をシャツに押し付けた。

「……めん。暫くこのまま肩を落として居られる？」

その言葉で、サガは、アイオロスが生半可なことではこの行為を止めるつもりがないことを知った。

もし、嫌だと言ったら——

ふと、そんな考えがサガの脳裏を過った。

どうしても嫌だと言えば、アイオロスは無理強いはいはしないに違いない。だが、最早自分のことを恋人とは認めないだろう。彼は紳士的に笑い、注意深く彼の中の最も深い部分から自分の存在を外すだろう。

お互いどこまで近づけるか、今模索している。

アイオロスが何故自分の精を飲んでしまったのか、今なら分かる。

アイオロスは、密度の濃い関係を望んでいる——自分がこれまで想像していたよりもずっと。

数十秒の沈黙の後で、サガは漸く肯定の言葉を口にした。

口の中は乾き、眩きは掠れてやっとアイオロスの耳に届く声にしかならなかったが、浮き上がってしまっていた肩を無理矢理意志の力で沈め全身の力を抜くことで恭順の意を示した。覚悟した上はアイオロスにも楽しんで貰いたかったし、どうしても拭えない恐怖もあからさまに見せたくはなかった。たとえ見え透いた強がりだとしても。

アイオロスは、サガの考える最悪の事態、即ちいきなり性器を押し込むようなことはせず、暫く彼が女性器の代わりに使おうとしている場所にキスを送り続けた。普段なら堪え難い羞恥を引き起こすはずのその行為も、今のサガには有難い緩衝だった。とにかく、その時が来る前に、少しでも自分の体を緩めておかねばならないのだ。戸惑いながらも気楽に快楽を楽しんでいた先刻までと違い、サガは必死だった。

これから、どれだけの時間、一人で孤独な戦いをすればいいのか。

体を緩めようと努力するほどせり上がってくる不安に、心臓の鼓動がまた加速されかけた時、アイオロスの手がサガの髪から耳に触れ、頬を撫でた。

意志の力で、制止する間もなかった。サガの手は持ち主の命令を待たずに素早く動き、アイオロスの左手を固く握りしめた。

「握っていたいのか？」

アイオロスが、手を止めて囁いた。その声の固さに、サガはアイオロスもまた緊張している事を知った。

：一人で、不安と戦うことはないのだ。

声があつて出ないなら、せめて手を繋いでいたい。言葉がなくとも、気持ちが届くように。

サガは返事の代わりに、アイオロスの手を握り返した。アイオロスは、ひとつだけ、困つたような溜息をつき、「肩が冷えるから」とサガの上半身にバスローブをかけた。緊張で冷えた肩が少し暖まり、胃の奥に暖かみが戻る。

アイオロスが足下の方を振り返つた。質量感のある布の向こうで、何事かが進んでいる。まるで手術室のようだ、と色気の欠片もない思考が、なるべくアイオロスの意に添うようにと願うサガの努力に水を差す。とその時、冷たいとも痛いともつかない刺激が臀部の狭間を伝ひ、サガは「瞬身を凍めた。」と「めん！冷たかった……」

アイオロスの焦つた声で、あれは冷たいものだつたのだと知り、サガはほとと肩の力を抜いた。なんとか、大丈夫、と言葉を返し、すつかり硬直してしまつている自分の体をほぐすため、緩慢に身じろぎした。

生まれて初めて触れるローションの感覚は、これまでにサガが触れたどんなものとも似ていなかった。卵の白身よりはさらりとして、乾きは遅い。油のように皮膚の摩擦を減らすというよりは、粘膜で覆う事で滑りをよくする類いのものらしい。

こういったものを使うのであれば、腸の内壁を擦って傷つけるようなことはないのかも知れない、と安堵しかけた時、

アイオロスが人差し指を垂直に立て、サガの体の内部に潜り込んで来た。

言いようのない異物感に、一気に神経が凝つた。

痛みは、思つたほどにはない。だが、異物感が激しい。入口の部分は特に、アイオロスが恐る恐る滑り込ませた指の感触、内壁を擦る皮膚のざらつきや、爪のなめらかさがはつきりと感じ取れるほどに敏感で、とても大きな塊など受け入れられそうにない。

サガはこれからの行為に暗澹とした不安を覚えた。

：本当に、アイオロスの考えるような「セックス」は可能なのだろうか？

彼は何か、大袈裟に描かれたボルノ小説の類いを読んで勘違いしてしまつたのではないだろうか……？

一瞬、そんな疑いが脳裏を過つたが、アイオロスは「冷たいけど我慢しろ」と呟いたのみで、サガの動揺に構う事なく先を続けた。そしてその確固たるアイオロスの意志が、サガの浮き上がりかけた肩を再びシーツの上へと押し戻した。

考えてみれば、アイオロスが、こんな危険な行為を、正しい前知識なしに要求するはずがないのだ、と。

こういつた点に関し、サガのアイオロスに対する信頼は絶大であり、それは常に未知への恐怖を凌駕するものだった。

アイオロスは再度ローションのボトルを取り、今度は臀部の狭間だけでなくサガの性器や内股にまで伸ばした。一度肛門の周辺から手が離れば、それは決して不快なものではな

く、サガは再度アイオロスの愛撫に身を任せてそのなめらかな感触に酔った。警戒しては感じるものも感じられないと、既にアイオロスとの少ない経験から学んでいたからだ。

人肌に暖められたローションが再度窪みの回りに集められ、アイオロスが円を描くように親指で窪みの回りを撫でた。漸く弄られる事に慣れて来たその器官は、じわじわと集められたローションを飲み込み、その窪みの淵に強く押し当てられた親指の腹を僅かに飲み込んだ。

「痛かったか？」  
アイオロスが、今度は落ち着いた声で、サガの気を落ち着けるように聞いた。

「大丈夫。多分、ローションが効いているのだと思う……」  
若干弱々しくはあったが、今度はきちんとサガの喉から声が溢れた。ローションの効果は絶大で、先刻は淵に触れるだけでも不快なざらつきを感じていた入口が、じんわりと熱を持ってアイオロスの指を受け止めていた。

アイオロスは「わかった」とサガに預けた左手に力を含め、再びサガの体の内部をローションで湿すことに集中した。静かに、ひそめた息の中で事は進み、ついに親指の爪の先ほどが穴に潜り込んだ。

我慢出来ない程ではない。

そう、サガは感じた。

アイオロスの地道な作業は続く。寄せては返す波のような刺激を、体が受け入れていくのを感じる。人間の感覚は、同

じ刺激の繰り返しに對し慣れを生じる。不快感は徐々に薄まり、アイオロスの体の一部を自分の体内に受け入れているのだという意識が、快感を呼び覚まし始めた。

小さく、吐息が、アイオロスの指の潜る動きに合わせて零れた。

アイオロスは一瞬、シーツに頬を押し付けたままのサガの横顔を見やり、それからまたローションを手にとつてサガの上に注いだ。

どれだけ、そんな作業を繰り返しただろうか。すっかり親指の根元までが隠れるようになったころ、アイオロスは膝立ちになり、親指を自分の腰で押して深くサガの体内に押し込んだ。異物感より、親指の向こうに触れたアイオロスの腰の熱さと圧迫感に圧倒され、サガはびりりと背筋を緊張させて、僅かに頭を後ろに仰け反らせた。

これ以上近づけない距離にアイオロスが居る。その事実を思うことで、暫し異物感を忘れることの出来る自分に驚く。

アイオロスが、残る四本の指でサガの性を宥め、埋め込んだ親指を蠢かせた。一度侵入を許した入口は特に不快を訴えることなく、じんわりとせつないような感覚を引き起こし、サガは握っていたアイオロスの手を両腕で抱え込んで抱きしめた。

「気持ちいいだろう？」

アイオロスが囁きと共にサガの耳を舐めた。耳はサガの最も弱い器官のひとつで、特に耳元での囁きやキスは頭の働き

を全てを止めるほどの影響力を持つていたから、「この感覚はなんなのか」を考え始めていたサガの思考はそこで中断され、彼は素直にひとつ領いた。実のところは、気持ちいいのは刺激を受けている性器やキスを受ける耳、圧力を感じる前立腺であつて、親指を受け入れている部位そのものではなかつたのだが、自分の感覚に対する解析も止めてしまつたので、最早サガ自身にもその違いはわからなかつた。

アイオロスが、ほつとしたように笑つた。沈黙の中、確かに凝つていた空気が和らぎ、サガはまたひとつ小さな息をついた。アイオロスに「手を離してもいいか」と訊かれ、抱え込んでいた腕を離す。もう大丈夫だと、この時確かにサガもそう思つた。

アイオロスがサガの体に覆い被さつていた体を起こし、埋め込んでいた親指も引き抜いた。背後で何か袋を破る音が聞こえ、アイオロスが何事かを準備している気配がした。その間ほんの数秒——彼がサガの体から離れ、サガの性器に送りつけていた刺激を止めたのはほんの僅かな時間だつたというのに、一度親指を抜かれた窪みは、急速にまた再び異物のない状態に慣れていつた。ただ待つてゐるのがいたたまれなくなつて、サガは僅かに体を起こし、頬や額にはりつく髪を払つた。余計な事は考えるまい、と思つてしたことだつたが、それは却つて、来る次の衝撃への覚悟を自分に促しただけだつた。アイオロスがコンドームを被せた彼の性器を窪みにあててがい、強く圧力をかけた。

先刻の親指とはあまりに違う感触に、サガは目を目開いた。これは、無理だ……

そう感じた自分を、サガは認めた。

目で見ると、肌で感じるのは全く違う。明らかに、受け入れる側と挿入する側の大きさの単位が違つているのだ。

「サガ、力を入れるな」

アイオロスが、先刻とは打つて変わつて切羽詰まつた声を上げた。余裕を失つて焦れたその声は、自分の事で精一杯になりかけていたサガの神経に突き刺さり、焦りを生んだ。

焦れて当然だ。アイオロスは既に、一時間以上も堪えてゐるのだから。

なんとかしてやりたい、という気持ちはあつたが、無理なものはどうにもならなかつた。

「サガ！」

苛立ちを含んだアイオロスの声が背後から降り掛かつて来た。その声に非難めいたものを感じ、サガが思わず身を竦めた瞬間、その衝撃はやつて来た。

ほんの一瞬、サガが痛くとも待つてくれとも言う間もなく、アイオロスの性器が入口を一気に押し開いた。反射的に強張り侵入者を拒絶しようとした入口は、その力に負けて裂け、脳髓に引き撃つような痛みを運んだ。幸いにもそこでアイオロスが一度腰を止めたので、サガは悲鳴の混じつたような荒い息をつきながら、なんとか力を抜こうと努力した。努力はしたが、全力で異物を追い出そうとする下腹の筋肉はもはや

彼の命令を訊かず、呼吸は苦しさに浅くなる一方だった。

一方、性器の先だけを強烈な力で締め付けられたアイオロスも決して楽な状態ではなかった。体内に荒れ狂う熱をこれまで押さえて来た彼の忍耐も限界に達し、アイオロスはサガの腰を捉えて更に奥へと進み込もうとした。

サガの脳裏で何かが弾けた。

入口の怪我は、恐らく大したことはない。所詮外から見える部分であり、皮の一部が裂けたに過ぎない。だから、この程度の痛みは堪えるつもりでいたし、それが少々増しても音を上げるつもりはなかった。

だが、アイオロスの先端が突いたのは、もつと致命的な部分だった。強い力で侵入しようとしたアイオロスの亀頭は、腸の内部に収まる環状の括約筋に阻まれ、更にそれを力で突破しようとした。

腰から腹部全体に広がる強烈な痛みが、サガの危機感を目覚めさせた。

これ以上はだめだ。この筋肉を切つたら大変なことになる。最早どう努力しても快感とは相容れない痛みと、それを上回る恐怖に駆られて、サガは叫び声を上げた。

「痛い……痛い……っ……！ 駄目……………」

アイオロスの動きが止まる。困つたようにサガの横顔を見つめるアイオロスに、サガは大きく首を振り、「ごめんとと幾度も頼んだ。

アイオロスが細く息を吐き、それからまだ固く立つたまま

の彼の性器をサガの中から引き抜いた。急速に遠ざかった圧迫感に息をつき、サガがベッドの上にくずれおちた時、サガはアイオロスが自分で自分の精を処理し、小さく呻くのを聞いた。

言いやうのない悲しさが、サガの胸を締め付けた。

散々よくしてもらつたのに、自分には結局何も出来なかつたということ、アイオロスがやってくれたように、自分だつてアイオロスの射精を手伝うつもりでいたのに、そんな手出しすらできなかったということ。

それは平静を失つたサガの涙腺を直撃し、アイオロスは暫し不発に終わつた自分の性欲を宥めるより先にサガの高ぶつた神経を宥めなくてはならなかつた。

「最初から上手くいくわけがない。気にするな」

何度も耳元に囁き、髪を撫でる手を取り、サガは暫くして落ちて着いてから尋ねた。「本当に、慣れれば出来るものなのか」と。

「何故出来ないと思う？」

アイオロスが、ほんの少し意外そうに、笑みを含みながら訊いた。

「……ひつかかるんだ……入口はまだいいけれど、奥が……どうすればあれを無くせるのか、わからない」

「だけどゲイの奴等はやつてるんだから、絶対に出来ないってことはないさ」

「本当に？」

「…お前、本当に知らないのか？」

からかいたを通り越して呆れたようなアイオロスの口調に、サガはそれ以上の質問を止めた。…どうやら、本当に肛門を使った性交は存在するらしい、と。

「…アイオロス。」

漸く落ちて着いてきたアイオロスの呼吸を耳元で聞きながら、サガは言った。

「…何？」

「…その…もう一度試してみてもいいかな…？ また駄目かもしれないけど…」

アイオロスが体を起こしてまじまじとサガの顔を見つめた。

「いや…また駄目だったら君が苦しいだけか…それならまだこうしている方がいいか…？」

アイオロスの背中に回した腕を、背筋に沿ってすべらせる。そのまま腰から脚のラインを撫でるサガの手を取って口づけ、アイオロスは言った。

「お姫様…千里の道も一歩からつてね。余計な事考えずに、今晚は大人しくお眠り下さい」

「でも……」

「…駄目かもしれない、つて考えないと約束するなら、今もう一回試してもいい」

先刻痛い敗北を味わったばかりで失敗を考えるなどは、なかなか難しい条件だったが、サガは覚悟して頷いた。

世界で初めてのことをやろうとしている訳ではないのなら、

自分達にも出来ないはずはない、と。

サガはアイオロスの首に腕を巻き付け、ぴつたりと体を合わせて、アイオロスのやや苦笑を浮かべた唇に深く口付けた。

翌日、サガはシオンとのソロ合わせに三分遅刻した。結局昨夜の二度目の挑戦は最初と同じ結果に終わり、最初の時よりも更に重い敗北感を引きずって眠りについた。朝はそれなりに早く起きたのだが、アイオロスにもう少し寝ているとベッドに押し付けられ、結局ベッドから起き上がったのは約束の時間の一時間前だった。それからシャワーを浴び、体を拭いて鏡を覗き込んだところで首筋についた赤い痕に気付き、冷やしたり隠したりする間に時間が来てしまったのだ。

髪の毛も生乾きのまま現れたサガに、シオンは怪訝な視線を向けた。

「珍しいな。寝坊か？」

「ええ…ちよつと。」

サガは、シオンの視線を避けてきつさとヴァイオリンの準備を始めた。

「何から始めますか？」

「まずはアレグロからだな。あれが決まらないと話にならない」

弓に松脂をこすりつけながら、シオンがサガの横顔を伺い見る。當日頃、このもの静かな後輩は澄み切った印象を第三

者に与えるものだったが、今日は如何にも慌てて現れたような身なりが現すように、何かが異なっているように感じるのだ。

シオンは暫くサガの様子を眺め、それからその考えを頭の隅に追いやつた。彼にとつて、今重要なのはこの技術で己に勝る後輩との掛け合いにどうやって勝利するか、であつた。

「調弦は四四〇だ。チェンバロが入るからな。テンポ百二十。」  
「はい」

シオンの合図で、サガはコレリリのクリスマス協奏曲最初のアレグロのセカンド・ソロヴァイオリンのパートを弾き始めた。この曲は二手に分かれたソロヴァイオリンが交互に交唱のような掛け合いを行う、かなり動きの激しい曲だ。どちらがメインという区別はなく、同等の主張と技術力を要求される。シオンのヴァイオリンはかなりアグレッシブで、サガは技術力では負けていないものの常に押され気味であつた。

シオンが先に入る。一拍遅れて、サガがその後を追う。

入り方がまだ甘いと、シオンの厳しい要求が飛ぶ。

後半に向かつて走つていいる、と、サガも負けずにやり返す。楽器を持つた時のサガは普段より遠慮容赦がなく、厳しい応酬の中で昨夜のアイオロスとの情事も忘れかけていたところのことだつた。

練習も一息つき、持つてきたペットボトルの水を口に含んだ時、シオンが何気なく訊いた。

「ところで、あの馬鹿は昨日ちゃんと帰つて来たのか?」

一瞬、表情が凍り付いたのが、サガ自身にも自覚出来た。

予想もしなかつたタイムリングで尋ねられ、表情を繕う暇がなかつた。

「え……ええ、夜遅くに。」

「しょうがないな……全く。これまで全く参加する気配もなかつたくせに、どういう風の吹き回しかと思つてみれば……これで今日の練習まともに弾かなかつたら吊るし上げてくれるわ。ところで、奴は今日の合奏には来るのだろうか?」

「ええ、そのはずです」

言い終えて、サガは小さく息を吐いた。じわりと体の芯に灯つた熱を、無理矢理ねじ伏せた。

アイオロスと今のようない関係になる以前は、気持ちのけじめをつけることなど雑作もないことだと思つていた。特に音楽に関わつていいる間は。それが今、アイオロスの話題を振られるだけで、こんなにも動揺するものだと思ひ知らされた。

一時間後、合奏が始まつた時に、アイオロスの姿を見ながら平静を保てるだろうか。

自分の意のままにならない体を恨めしく思いつつ、もはや水を飲む気も失せて、手に取つたペットボトルを腕にしまふ。

僅かに目を伏せ、何かを考え込むようなサガの横顔に、シオンは先刻の違和感を思ひ出した。ああ、と思ひ当たる。何かしら、サガの肌がいつもより潤つていいるように感じられるのだ。

……もともと、造形の整つた顔立ちではあるが。

それにしても、この少女のような肌の輝きはどうかしたことか、

と思う。

そういえば、先刻のヴァイオリンの音色も些かいつもより艶やかだったような気がする。

シオンは注意深くサガの表情を探り、既に時を逸してしまつたことを知つた。先刻一瞬見えたサガの動揺は跡形もなく消え去り、今は常日頃と同じ澄み切つた空気が辺りに漂うのみだ。その一瞬の乱れを招いたキーワードがアイオロスであつたことを思い、シオンは僅かに眉を寄せた。

：確かに、エインズワースの面倒見は悪くないが。

シオンの目には、サガのアイオロスへの依存が、遂に間違つた恋心に形を変えたもののように見えたのだ。

「…チエトウインド、」

思わず口にしてしまつて、シオンはその先に続く言葉がないうことに気付いた。…まさか、エインズワースの事が好きなのかと尋ねる訳にもいくまい。それなので、シオンは急遽話題を変えた。

「なんでしよう?」

「我々が引退した後の話だ……」

事実上、最上級生の団での活動は先日の演奏会で最後ということになつてゐる。シオンもまた、既に宴会の席で次代のコンサートマスターを任命し、練習室倉庫の鍵の受け渡しも済ませていた。

「コンサートマスターのロナルド・リック、団長のウィリアム・ボストン、いずれも優秀な人材だ。だが、それでもなお、オー

ケストラの中心となるのはチエトウインド、お前とエインズワースになるだろう、というのが、我々の学年のほぼ全員の影響だ」

「そんな……」

「買いかぶつているつもりはない。事実を述べたまでのことだ」シオンはサガの表情を探りつつ、かねてから告げようと思つていた一事を述べた。サガに起こつたアイオロスへの気持ちの変化に歯止めをかけるにも、一度いい機会だと思えた。

「上の学年がいる状態で精神的に団を率いて行かねばならない状況は辛かるう。だが、お前達に頑張つてもらうしかない。我々もそうだった。——だからこそ、エインズワースには昨日のようなことをしてもらつては困るし、お前も相棒が怠げようとしたら喝を入れてやつてくれなければ困る。…お前も、ここに入つて来た時からは見違えるようになった。もう、エインズワースに文句の一つも言えていい立場だろう?」

お前にエインズワースの手綱をとつて貰わねば困るのだと、シオンはサガの肩を叩き、サガはいつになく改まった様子のシオンの言葉に畏まつて頷くしかなかった。内心で、あのアイオロスにどうやって手綱を取り付けなければならないのか、と途方に暮れながら。



冬期休暇に入つてもなおスクールに残り続ける有志たちの練習は、いつもより華やいだ雰囲気の中で行われた。まずソロヴァイオリン2本の華麗な掛け合いがその場にいるメンバーを魅了したし、例年ならば参加数ゼロの低弦パートにアイオロスが居て張りのある音でしっかりと通奏低音を支えている。おまけにカミュによるチェンバロパートもつくとなれば、本番が行われる教会のオーケストラの助けを借りなくても良いくらいのものだった。シオンの危惧は杞憂に終わり、アイオロスは至極真面目に自分のパートを練習して現れた。常ならばなにかと上の学年につつかかり（アイオロスに言わせればつかかっているのではなくからかっているに過ぎないのだが）自分の存在の主張を忘れないアイオロスの、いっになく神妙な姿にシオンが疑問を抱きかけた頃、練習は終了し、アイオロスは食事の誘いも断つて自室に戻つて行つた。

サガは、シオンの要求につき合つて曲についての細かい打ち合わせを行い、アイオロスよりは一時間ほど遅くまで居残っていたが、矢張りシオンとドウコからの食事の誘いを断つて部屋に戻つた。少々空腹感はあるが、何かを口に入れる気にはなれず、鞆に残つていた水を飲み干してそのままシャワールームに向かつた。

シオンには申し訳ないが、こうして他の事を気にする事なくアイオロスのことを考えていられるのは幸せだった。日中、つとめて考えないように努力してきただけに、二人だけで過ごせる夜が本当に待ち遠しかった。一方で、これからの時間

に対する不安もあった。今日は、自分はアイオロスを受け入れることが出来るだろうか？ 昨日裂けた傷は、ほぼ塞がっているものの、触ればまだ痛い。既に裂けている部分は仕方がないとして、これ以上傷を広げない事が肝要だが、可能かどうか。

サガの頭の中ではなかなかこういつた行為が色気を伴つたものにならず、それがアイオロスの不満を買っていることを重々承知していたが、昨夜の経験で色気や雰囲気だけではどうにもならないことがある事をサガは学んでいた。痛みと快感に競合し得る——痛みがそれほど酷くなければ、もしくは快感が刺激に慣れてしまえば、しかし、痛みが先に勝つてしまつた場合は別だ。その時には、よい雰囲気も快感も吹き飛んでしまう。そして、自分の器官、特に内臓が壊されることへの恐怖は、決して快感とは相容れない。

なんとか、あまり痛みを感じず、甘い気分が冷めないうちに挿入を済ませてしまふ方法はないものか、と、ぬるめのシャワーを浴びながら考えるうちに、アイオロスが迎えに来た。既に一時間近くもシャワー室に籠っていたらしい。アイオロスは半ば笑い、半ば呆れながら、しつとり水気を呑んで重くなつた恋人の髪にキスをした。二人はその後、昨夜の失敗を取り戻すべく努力したが、結局その夜も昨夜と同じ処でつつかかり、失敗に終わつた。

彼等が漸く最後までセックスに成功したのは、普段食事の誘いは滅多に断らないアイオロスの定時帰寮が一部の人間から不審がられるようになった月曜日の夜のことである。その日サガは、ある一つの試みをアイオロスに秘密で行っていた。三日間裸で抱き合っているのに、大きな進展がみられなかったことが、サガにこの行動を起こさせる決意を促した。

昼間、サガはいつものようにシオンとのソロ合わせのためにアイオロスより早く寮を出、しかしすぐに練習室には向かわずに売店の薬局に向かった。暫く迷って手に取ったのは、一回分の個別包装になった浣腸薬だった。本当は下剤が欲しかったのだが、内服薬の類いは校医の処方箋がなければ買えなかったのだ。

小さな紙袋に包まれた薬を右手に、左肩にはヴァイオリンを担いで、サガはひとつ溜息をついた。気は進まないが、仕方がない。色気とは対極にあるような準備だが、これ以上アイオロスを焦らせるのはあまりにも気の毒だった。サガはせめて、行為の最中に弾みで粗相をしようかもしれないという恐怖だけでも取り除き、十分に体の力を抜けるようにしておこうと決めたのだ。

せめてアイオロスが、彼がサガにするような慰めをサガがアイオロスに対して行う事を許せば、これほど申し訳なく思う必要もなかったかも知れない。だがアイオロスは、サガに

対し、彼の性器を口に含むことはおろか、手で慰めることも許そうとはしなかった。結果、常に受け取るばかりになってしまふ己の不甲斐なさに、サガの忍耐も既に限界に達していた。不都合のない体に対し薬を使うことはやや躊躇われたが、それでもし体が十分に緩み、問題の突破口が開けるのなら、試してみる価値のあることだった。

ソロ合わせから合奏に入るまでの小一時間の間に、昔乳母の助けをかりて使った経験があるばかりの薬を体内に注入した。幸い、効果は思つたより早く現れ、合奏が始まる頃には腹痛からも解放されて普段通りの演奏が出来るようになった。シオンだけが、頻繁に手洗いに通うサガに体調を尋ねたが、合奏時間ぎりぎりに現れたアイオロスに気取られた様子は見られなかった。

夜、アイオロスのベッドに行く前に浴びたシャワー室で、恐る恐る自分の肛門に指を差し入れてみた。ローションの助けを借りずに挿入するのはかなり不快感がきつく、辛い作業ではあったが、三日間の努力の賜物で人差し指一本くらいは押し込めるようになっていた。なるべく入口を広げ、指の届く範囲で内部を洗った。長く続く腸のほんの一部に対し、洗浄の真似事をしたに過ぎないが、今のサガに出来る努力は精々ここまだった。

アイオロスは、これまでとは打って変わって容易に開いたサガの体に驚いたようだった。サガ自身、心配の種を取り除いただけでこれほどまで自分の体が変わると思つてもみな

かった。初めからサガを悩ませ続けた入口付近での不快感、特に排泄感に似た感覚は、絶対に粗相することはないという安心感のお陰ですぐに忘れることが出来た。指を四本押し込まれた時にも、再び裂けた傷の痛みを上回る快感を体の奥で感じ、堪え切れず小さな悲鳴を上げた。そして緊張する体と心とを懸命に宥めつつ、ゆっくりと分け入って来る圧力に体を開くうちに、あれほどまで外部からの侵入を強固に拒んでいた腸内の括約筋がなくなっていることを、アイオロスの咬きによって知らされた。

「…空洞だ……」

ただ痛みがないというだけで、それほど大きく変わったと思っただけで、感動よりは呆然とした色の強いアイオロスのその声に驚いた。

「今、全部入ってるんだけど…分かる？」

サガは、わからない、と首を振った。腹部と脊髄への圧迫感はあるが、中に入ってしまったえば痛覚も触覚も存在しなかったのだ。

「空洞」という言葉に含められた失意にサガが気付く前に、アイオロスはサガの腰に手を添えて抜き差しを始めた。その刺激は波のようにサガの体の芯に伝播し、もつと強く相手の存在を感じたいという欲求に変わった。背後に聞こえるアイオロスの息が、次第に何かを堪えるようなものに代わり、サガの性器に送り続けていた手による愛撫が止まりがちになってきた。自分の快感を保持しておくことは体を開いておく為

に最も重要なことであつたので、サガはアイオロスの手を自分の性器から外し、代わりに自分の手で慰めた。

アイオロスが小さく呻き、漸くサガの中で己の精を解放した。その瞬間、サガは自分の努力が報われたことを知った。

ロマンチックでも夢見心地でもなかったが、好きな相手に快感を与えられたことの幸福感はたとえようもなかった。

まだ荒く息をついているアイオロスにキスを送り続け、息が止まる程固く抱き締める。アイオロスも同じ強さでサガを抱き締め返した。

結局その日はもう一度交わり、互いに固く抱き合つたままで眠りについた。

翌日。

サガはアイオロスの隣から起き上がるうとして、自分の体の異変に気付いた。

体を起こし、腰に圧力がかかると鈍痛が走るのだ。我慢出来ないほどの痛みではなかったが、腰掛ける時に一瞬、ぎこちない動きになってしまうのは避けようもない。

「ん？ どうした？」

難しい顔で考え込んだサガを、アイオロスの眠そうな声が正気付かせた。

「アイオロス。」

「何？」

「……めん……。今日は無理だ」

「怪我したのか？」

アイオロスが、毛布を撥ね除けて起き上がった。見た事もないようなアイオロスの真剣な表情に、却ってサガの方が慌てた。

「いや、大した事はないと思うけれど……中が痛い。大事をとって、ちよつと今晚は休ませたいんだ」

入口の裂傷もかなり広がってきたし、と内心で付け加えて、サガはアイオロスを見上げた。アイオロスは何を思ったか、サガの額に手をあてて熱を計るような仕草をし、「ちよつと見せてみる」とサガの上掛けをはぎとって陰脣の傷を調べた。「目に見えるような傷はないけど……軟膏でも塗っておくか？」

「大丈夫だよ。一日休めば多分よくなると思う」

サガは笑つて腕の力で起き上がり、そのまますんとんとベツドの横に立つた。

幸いなことに、立っている分には問題なさそうだ。

問題は、今日の練習をどうやり過すか、だった。正直なところ、腰に力を込められないので背骨にも力が入らない。こんな有様でシオンに気付かれないレヴエルの演奏が出来るものか、どうか、甚だ心もとない。

シオンは、サガと最初の合わせをやった日、即ちアイオロスとサガが初めて同衾した日の翌日から、何かを感じているようにサガには思えた。自意識過剰と言つてしまえばそれ

までだが、あの日、エインズワースの手綱をとれと言つたシオンの眼差しから、単なる後輩への提言以上のものをサガは感じたのだ。

色恋にかまけている場台ではない。

そう、組織の規律に厳しい元コンサートマスターが喝を入れてるように聞こえた。

公私混同はしないことに自信を持っていた筈のサガが、この四日間でその自信に大きな揺らぎを生じている。

自信がなくなれば、自然と、公衆の面前でのアイオロスとの会話は少なくなる。クリスマス・イヴの前日、サガとアイオロスの間柄がどこかよそよそしくなつたと訝るメンバーを尻目に、サガはどうにか及第点のソロをこなし、休み時間の間も立って過ごした。途中一度だけコントラバスに立ち寄り、曲の打ち合わせをする格好でアイオロスと話しながら、傍目にはわからないほど僅かにアイオロスの肩に寄りかかった。アイオロスはほんの一瞬意外そうにサガを眺め下ろし、メンバーの目から見えない角度でサガの腰を支えた。

明日は本番だな、と、アイオロスが呟いた。

サガは頷き、今度こそ本当に引退するシオンを見た。

明日は、このスクールでシオンと合わせられる最後の舞白だ。そして同時に、アイオロスと初めて共に過すクリスマスでもある。

どちらかが優先されるべきものでもないし、どちらも片手間に出来る事ではない。

きちんとけじめをつけて、それぞれに全力で取り組もう、と、サガは静かに胸に誓った。

初めて教区外で過ごすクリスマス・イブは、サガに新鮮な感動を与えた。

サガの出身地であるシュローズベリ地方は、ロンドンから電車で北上すること約一時間、平均気温もロンドンより低く、住民の気質は真面目で寡黙、といったところだ。一方、このケント州は、イギリスの中でも最も気候の温暖な一画にあり、明るい太陽の光をふんだんに浴びているせいか陽気な人間が多い。そんな彼等が集まるイブの夜が厳肅な雰囲気になる筈もなく、集まる地元の中高年夫妻の中には、喜びのために上気しているか、晚餐のワインを過ぎたのか分からないような顔もあった。

サガは、演奏会でも着なかつた燕尾服をこの日のために実家から取り寄せてあつた。シオンが燕尾で出るというので、それに揃える形で頼んだものだが、実家の人間と離れたところでこれを着用するには少々良心が傷んだ。本来ならば、この燕尾はイブの日のクリスマス・ディナーで一家揃つて着ている筈なのだ。父の不機嫌な顔と、それを宥める母の優

しい微笑み、アメリカから帰国しているはずのカノンのむくれた顔が容易に想像出来る。

夕方からぼつぼつと集まつたメンバーは、簡単なリハーサルを済ませ、真夜中に始まる降誕祭のミサに備える。教会のミサに出席したことがないというミロ・フェアファックスは、スニーカーにジーンズといったおおよそクリスマス・ミサに相応しくない格好で現れ、リハーサル後シオンの服装チェックに引つかかつて頭ごなしに怒鳴られた。本番前で気が立っているシオンの神経を逆撫でしたことは半ば不注意、半ば不運といったところだったが、アイオロスがその言い様にかちんと来てミロを擁護したために話は更に大きく膨れ上がった。

「大体、お前もなつとらん！ズボンはまだしも、パンクまがいの皮ブーツにその毛玉付きセーターは何だ！」

とシオンが怒鳴り返せば、

「これの何処がパンクだ！大体、服装は自由だと神父さんは言つただろうが！」

とアイオロスが食つて掛かる。最早、周囲の人間の口を挟める状態ではなく、話の発端となつたミロなどはただおろろと先輩一人の応酬を見守るのみだ。

「この世界に燕尾服のソリストの後ろにスニーカーだのジーンズだのよれよれの毛糸編み着て控える奏者が居るというのだこの愚か者がっ！」

「燕尾着るのはアンタの勝手だろ？人の服装にまでケチつけんなよ！」

「教会のミサを何だと心得ている！」

「アンタの独善より太つ腹だと思つてるね！」

「お前達コントラバスのセンスほど悪趣味ではないわ！」

コントラバス、と一括りにされた事、決して悪趣味と言われる程ではない己のセンスを貶されたことに腹を立て、アイオロスが白いハンカチを差したシオンの胸元めがけて自分の松脂を投げつけた。コントラバスの松脂は、比較的柔らかく粘りが強いので、アイオロスとしては白い松脂型のスタンブが美しくブラシ掛けされた燕尾の襟につくことを願っていたのだが、それは固いガラスかプラスチックの樹脂タイルに当たったかのように殆ど痕跡を残さず、教会の床に碎けて散った。「ふふん、その程度の埃が簡単に着くような安物は着ておらんわ」

決して安くはない松脂ひとつを屑箱行きの運命に叩き込んだアイオロスを余裕の笑みで眺めやり、シオンが愉しそうに続ける。

「折角美しく磨き上げられた聖堂を汚すとは何事。すぐに掃除したまえ」

「教会のミサに敬意を払うあんたの為に、奉仕の機会をくれてやったまでだ。ミロ！ 来いっ！」

奮然とアイオロスは踵を返し、ミロの小さなセーターの襟を掴んで足音も荒く教会を出て行った。数十秒後、お前がしっかりと手綱を取らないのが悪いのだ、等等、サガに文句を垂れるシオンの説教をかき消す勢いで教会の外からアイオロスの

絶叫が聞こえたが、その場にいた楽団員達は暫し顔を見合わせ、何も訊かなかつた振りをして、再び楽譜の確認作業に没頭して行つたのだつた。

一時間後、漸くアイオロスの巻き散らした松脂の欠片を拾い終えたサガは、ミロを伴つて現れたアイオロスの姿に、一瞬周囲の人間の存在を忘れて見落れた。

アイオロスは、髪をムースで後ろに流し、黒シャツに黒ネクタイ、オニキスのタイピン・カフスに黒革靴という全身黒づくめの姿で現れた。一歩間違えばマフィアになりかねない外見を、焦げ茶色の真つすぐな髪と左腕に抱えられたベースが救っている。弓を左手の小指に引っかけ、ピチカートで弦の張りを確かめる姿は、既に何年も舞台上に立つている堂々たるジャズのベーシストのようだ。

問題は、…どう考えても、この今日の出で立ちがアイオロスの趣味ではないことだつた。

黒革靴はともかく、黒カッターシャツやネクタイ、カフスは絶対にアイオロスの持ち物ではないと断言出来る。

サガは、面白くもない表情でバス椅子に腰掛けているアイオロスに歩み寄り、そつと耳打ちした。

「アイオロス…、その格好、とてもよく似合っているけれど、そのシャツとネクタイ、シユラのクローゼットで見かけたよ

うな気がするんだが……」

「似合ってる？　これが？！」

アイオロスは片方の眉をつり上げて、横から耳打ちしたサガを睨んだ。

「私はよく似合っていると思うよ？　髪を上げると随分大人びた雰囲気になるし……先刻の着古したタートルよりはずつといいと思う。ただ、それが君のものではないというだけで」

「ああ、ムかついたからシユラのクローゼットを漁ってやった」  
お前のもひっくり返したんだが、細すぎて首が閉まらなかつたんだ、と悪びれもなく返すアイオロスに、サガは僅かながら目眩を感じた。……休み明け、シユラの冷たい怒りが部屋を吹き荒れることになるだろうが、やってしまったことは仕方がない。このあたり、アイオロスの行動にはシオンとのやり取りで溜まった鬱憤をシユラをからかうことで晴らそうという計算が働いていて、わざとやっているだけにサガには、どうにもしようのないことだった。精々、シオンに要求されて仕方なく借りた、と誤摩化すしかないだろう。とはいえ、普段は決して見る事の出来ないアイオロスの大人びた姿を思いがけなく見ることが出来て、サガの心は内心弾んでいた。

ミロは、何やらカミュにしきりに頭を下げている。いつもはウェーブの強い髪をまとまり悪く跳ねさせている後輩が、アイオロスと同じように髪を後ろに撫で付け、白いカッターシャツに紺色のネクタイを締めている。常日頃、あの見事な金髪のお陰で可愛らしく見られてしまうミロだったが、こう

して髪をオールバックにすると、流石に少年らしく見えた。

「ミロが謝っているのは、あれも借り物だからかい？」

笑いながら尋ねたサガに、アイオロスはまだ無然としたままの表情で返した。

「あの野郎、持ち合わせがないなら直接シオンに言えばいいものを、ここを出た後でズボンもシャツもないと抜かしやがった。仕方がないから、ズボンは制服で、カッターシャツは適当に使えそうなものを漁ったというわけだ。最初はアイオリアのクローゼットを漁ったんだが、あいつは背も高いガタイも悪くないからな。カミュのは丈は長いが、幅は細かつたんで何とか使えた」

「君もミロも、少しこういつた場に着られるものを揃えた方がいいかも知れないな。……勿体ないよ。折角一人とも似合うのに」  
サガは明るく笑い、アイオロスの不機嫌をあつざりと無視した。アイオロスはサガが改まった格好をするのをやや複雑な心境で眺めているふしがあつたが、サガの方はアイオロスの正装を眺めるのが好きだった。本人が恥ずかしがるため、滅多に拝む事が出来ないだけに、こういつた機会は貴重だった。「本番十分前です。オーケストラ、聖歌隊の方は準備してください」

ステージマネージャー兼指揮者をつとめる神父が号令をかけ、演奏者全員が各々の定位置に移動し始めた。

カミュは今回、オーケストラではなく聖歌隊として参加していた。先刻カミュとミロのやり取りを面白くなきさそうに眺

めていたポールと組んで、いくつかのソロを歌う。カミュは衣装は教会聖歌隊と同じ白いケープであり、聖歌隊席にポールと二人で並んだ姿は既に堂々たるソリストとしての貫禄を漂わせている。サガは彼の愛器を取り出し、弓の毛に薄く樹脂を塗ってひとつ深呼吸をした。プログラムの最初は、「クリスマス協奏曲」だ。この曲の最後はバストラレで、キリストの誕生を祝う美しくも穏やかな八分の六拍子で幕を閉じる。最後まで弾ききったところで、丁度真夜中の十二時、深夜の降誕祭のミサがシャルパンティエの「真夜中のミサ曲」を用いつつ執り行われる、という寸法だ。

ソリストの定位置に立ち、背後のセカンドヴァイオリンを振り返ると、ミロが既に楽器を携え、顔をきつと上げてこちらを見ていた。

今日ミロが見なくてはならない人物は、ソリストである自分ではなく、セカンドヴァイオリンのトップなのだ。

サガは苦笑し、視線だけでミロにセカンドのトップ席を指し示した。

シオンが、準備を終え、ファーストヴァイオリンの前に立つ。その堂々とした姿に、サガも口元に浮かべていた笑みを消し、シオンの方を向き直る。彼の技量は、決して侮れない。本番にアドリブをやらかすくらい、朝飯前といったところなのだ。そのシオンのソロを丁度拮抗するレベルで迎え撃つべく、精神を集中させる。アイオロスは以前、「相手が先輩だからといって腰を引くな」と言ったが、この六日間の練習の成果はどうか。

心が、クリスマスに相応しく、静かに落ち着いた。サガは一度だけ、アイオロスを見た。

アイオロスは、バス椅子に腰掛けてコントラバスを肩にもたせかけ、やつてしまえと言わんばかりに親指を立てて下を向けてみせた。

成程、この偉大な先輩を送り出すには、全力で迎え撃つのが一番の餞かも知れない。

サガは頷き、再び顔を正面に向けた。

聖堂の明かりが落とされる。

これから、ミサの最初に待降節の間灯りつづけた蠟燭の光を会衆全員が分け合うまで、教会は暗闇に包まれる。キリストの誕生という「光」が生まれる前の闇を体験するためだ。オーケストラ席には、楽譜を見るためのペンライトがあり、その薄明かりが演奏者達の顔を淡く照らし出している。

神父が指揮棒をとり、拍の合図を出した。

弓いっぽいに引ききつた最初の一言が、会衆の頭上を超え、聖堂いっぽいに響き渡る。

サガは、全てを忘れ、この一瞬を紡ぐ音の響宴に没頭した。

「まあ、お前にしちや、随分と男らしい演奏だったよ」



期待していたものとは随分と方向の異なったコメントに、サガは困ったような笑みをアイオロスに向けた。

男らしい、とはどういう意味か。それ以前に、では普段はどんな演奏をしているというのか。

「…それだけ…かな？」

「他になんかあるか？」

横向きに横たわり、アイオロスの腕に首を預けて枕に頬をつけたまま尋ねると、アイオロスは面倒臭そうにそう答えた。

「お前のヴァイオリン、それ以外に欠けてるところがないかな」

全力で弾ききったミサの後、アイオロスとサガは朝まで一緒にキリストの誕生を祝いましょう、と声をかけてきた神父の誘いを鄭重に断り、二人で寮に戻ってきた。元々翌日早くに実家に帰る予定のサガはともかく、タダ酒を飲まないで帰るアイオロスに、シオンや聴衆として参加した童虎、その他のヴァイオリンの面々も驚愕したが、アイオロスは自分も朝が早い旨のみ告げてさっさと帰って来てしまった。なにしろ、二人でいられる時間は、残り明け方までの数時間しかないのだ。アイオロスは朝までサガの体を離すつもりはなかったし、サガもまた、今晚は腰が痛いのが切れたのという不都合は全て保留の棚に放り上げて、体力の続く限りアイオロスと交わるつもりでいた。

結局、途中でどうとうサガが降参の白旗を振る羽目になったが、その後もこうして向かい合つてとりとめのない会話を

続けている。お互い、眠気は感じていたが、眠って起きればそのときは別れの時間だと思つと、時間が勿体なくて眠れずにいた。

「それ以外に欠けているところがないなんて、あり得ないだろう？」

サガは不眠の瞳をアイオロスに向け、アイオロスは困ったように苦し紛れのコメントをした。

「コントラバス弾きのコメントより、同じヴァイオリン弾きのコメントの方が的を得てるだろうが。シオンは何て言つたんだ？」

アイオロスは、ミサが終わつた後、シオンがサガの肩を叩き、何事かを伝えていたのを見ていた。随分と晴れやかな顔だったから、きつとサガはよい評価を貰つたのだろう。そう思つてサガの瞳を覗き込むと、その瞳はふと和らいで、何処か遠くを見つめるような眼差しになった。

「…最高の褒め言葉を貰つたよ。私にとつて、だけれど」

アイオロスは、一瞬目の前の自分の存在を忘れたサガに、肩を擡めた。

「俺からも褒め言葉欲しいか？」

「さっきのとは違うのか」

「違うよ」

アイオロスがサガの肩を引き寄せ、耳元に小さく囁く。サガの頬が、見る間に羞恥に染まつた。

「それは、ヴァイオリンのこととは違うじゃないか…」

アイオロスはくつくつと笑つてサガの頬や額にひとしきりキスをし、それから、急につまらなそうに瞳を伏せて、言つた。  
「お前、帰らなさいいいのに」と。

サガは、あまりに素直に自分に向けられたアイオロスの、子供のような不満に、思わず口元を綻ばせた。

「すぐに戻つて来るよ…その為にも、きちんと帰つて父の機嫌をとつておかないとね…」

「ふーん…」

アイオロスはまだ納得いかない様子で、サガの銀色の髪を弄つている。常日頃決して他人には見せない素の部分が愛おしくして、サガもまた素直な感情を口にし、長く甘いキスを贈つた。

「早く帰らなくてもいい身分になりたいな…」

本当に、いつかそんな日が来るのだろうか。漠然とした未来は、まだ遠く霞んだままだ。

アイオロスはゆつたりとサガのキスを身を任せていたが、二人の唇がやがて離れると、サガの柔らかい銀の髪を何度も梳きながら言つた。

「お前、髪伸ばせよ」

「どうして？」

「似合うし、俺はお前の髪好きだからな。長いと嬉しい」

どうして似合うと分かるのか、若干の疑問も湧かないではなかったが、あまりに幼い子供のようなアイオロスの希望を聞かされた後だったため、サガはこの言葉もまたそんなアイ

オロスの小さな希望の一つだと思ひ込んだ。そして、小さな子供をあやすような感覚で、素直に「わかった」と頷いたのだつた。

一九八六年、十二月。

降誕祭を間近に控えた六日間の休暇は、こうしてサガにとつて一生涯忘れ得ぬものとなつた。

シオンは、オーケストラを引退する最後の舞台で、サガにこう言つた。

「漸く、蛹が解つたな」と。

そして、初めてお前の本気を聴いた、と笑つた。

その夜明け、アイオロスは六日間を共にした恋人を、奇しくも「ゆつくりと羽化する蝶のように」綺麗だったと誉めるのである。

それは、六日間で漸く一通りの交わりをこなせるようになって恋人に対する賞賛と、僅かなからかいを含んだ替辞だった。

サガが、アイオロスの最後の希望の本当の意味を知るのは、それから数年が過ぎて後のことである。

アイオロスの長髪に対する執着が、単純に彼の好きなロックバンドの延長だと思ひ込んでいたサガは、行為の最中に髪

を払う姿を気に入ったというアイオロスの真意を知って愕然とし、それから暫くアイオロスの前では髪を束ねて解かぬ生活が続いたのだった。



ある  
失恋

「突撃！」

鋭い号令が中庭に面した石廊に響いた。

ぱたぱたつ、という乾いた足音が響き、数人の通行人を追い越して突風のように駆け行く少年が二人。

背の高い少年が、アイオリア・エインズワース。頭一つ小さい少年が、ミロ・フェアアックスだ。

彼らは目標物に向かって、意味の無い雄叫びを上げて突進した。

アイオリアが、ピシャンツとぶち当たるような勢いでターゲットの胴体に抱き付きその腕の動きを止めた。ミロは、バシッツと恐ろしい程の脚力で飛び上がり、勇ましく両手を頭上で打ち合わせた。

「バンッ！」

鋭い破裂音、周囲の人間は、皆一様に振り返った。

そして、目の前をゴム風船の爆発現場にされたアイオロス・エインズワースは罵声を上げた。

「何するんだ！ この……」

きゅるきゅるきゅるるる。

独特、かつ奇妙に高く、可愛らしい声がアイオロスの口から

出た。

「やった！ 成功！」

ミロとアイオリアは叫び上がった。

ちらつとミロの目の端に、アイオロスの隣に居たサガが、目を見開き咄嗟に口元を覆う姿が見えた。

ダーローツ、とアイオロスから逃げ出して廊下を曲がる時、もう一度後ろを振り返ると、サガは依然として俯き、肩まで揺らしていた。

ミロの頭にはもう一度「成功」と言う言葉が浮び、胸の奥が温かくなった。そして、ついでに気も緩んだ結果、二つ年上のアイオロスにしっかりと首根っこを捕まえられて宙ぶらりんになった。

「百メートル十秒三七をなめんなよ……」

アイオロスがニーツと笑ってミロの顔を覗きこむ。

速い！ オレなんて十二秒台がやつとなのに……

ミロは綺麗な真つ青の瞳を真ん丸にして、また一つ増えたアイオロスに対する敬服の思いを心の中の引き出しにそっとしまった。

さて新年初めての化学の授業で、フリッツ教授はいつも二ユーイヤー実験と称して教科書の進行とは関係のない、娯楽性の強い実験を第二学年の生徒に披露する。

近年教授のお気に入りには、酸素とヘリウムガスの混合物をビニルテントに入れて、その中で声を出したり、楽器の音を

出したりして気体を伝わる「音」という性質を体感する実験だった。

最初に、教授は声とはどのようにして伝わるのかを説明する。声帯が震えて音を出し、その空気の震動が耳まで届く様子を、目に見えるようにロープを波打たせて再現してみせた。そして、音による空気の震動は、低い音と高い音では変化すること。空気は低い音は大きく、高い音は細かく震動することなどを簡単に説明し、第一の実験ではステンレスの洗面器に黒いビニルを張り、その上に塩を撒いて空気の震動が変化する様子を生徒達にその目で確認させた。洗面器の側で音を出すことでビニルが震動し、音の高低によつて塩の粒が様々な模様を描くのだ。

そして、メインの実験は、空気より軽い気体や重い気体の中で声や楽器の音の変化について。

登山用のテントの骨組みを利用した透明なビニルの『声変わりハウス』が教室に用意されていた。中は、空気よりも軽いヘリウムガス（正確には、純粋なヘリウムガスのみでは窒息してしまうので、ヘリウムと酸素の混合気体）で満たされている。この中に生徒が入り新聞を朗読する。ヘリウムガスは空気よりも比重が軽いため、気体が速く震えて音や声が高くなる。アヒルのようなになった生徒の声に、テントの外にいる生徒達は大笑する、という具合だった。

そして幾つかのグループに分かれてこの『声変わりテント』に入り、ひとしきり声の変化を楽しんだ後、吹奏器・管楽器・

打楽器それぞれ、ヘリウムガス中での音の変化も実験する。すると管楽器だけが何だか調子の外れた高い音になってしまふ、この理由を次の授業までにレポートとして提出するようフリッツ教授は課題を出す。

最後に、空気より比重の重いクリプトンという、これも無害の気体を満たした中でボーイ・ソプラノのポール・リッジウェイに一曲喉を披露させ、その声がまるでコードをゆつくり回転させた時のような低い声に変わることを確認して授業は終了した。

ミロは、先年のクリスマス・ミサで聞き覚えたボールの美しい声が低いゆつたりとした声に変化したのを目の当たりにし、いつか自分の声もあんな風に声変わりして低くなるのだろうか、と思つた。

授業が終わつた後、希望者に実験に使つた気体が配られる。ヘリウムガスを含んだ風船はぶかぶかと浮いて、クリプトンは全く浮かばない。

ミロとアイオリアは希望者の殺到するヘリウム入りをなんとか手にして、一路アイオロスを目指して構内を走り回つた、というのが先的一幕のあらましだ。

#### 閑話休題

ミロが捕まつた事で、自動的にアイオリアも捕まり、二人はアイオロスに昼食を奢らされた。

寮の食堂で食べる食事に料金は発生しないが、構内にある

レストランで食べるにはお金が必要だ。アイオロスは、弟と馴染みの後輩に一番高い肉料理を注文し、今しがたの奇襲の代価とした。このあたり、アイオロスは容赦しない少年だった。

レストラン・ホールは、パーティーや全校生徒での年に数回ある会食にも使用される、ゴシック建築の色を濃く残した大ホールだ。普段は教授や教官、校内の職員の利用が多い。また、予約をすれば生徒の希望にそった料理も提供するので、小さなバースデー・パーティーや、打ち上げなどに利用されていた。

ミロ達は、寮の明るい雰囲気のレストランとは別の、石壁と高い天井に囲まれた教会のようなこのホールの奥方でナイフとホークを動かしていた。と、石柱の影から化学のフリッツ教授が顔を出し、にこやかにアイオロスの隣に座った。

フリッツ教授は中肉中背、薄い頭髪、いつもパリッとした白衣を背広の上に羽織り、眼鏡の奥の褐色の瞳がどんな時でも柔しそうにきらきらしている。シェークスピアが大の気に入りで、時々芝居がかつた物言いをし、トレッドマークは白衣の向こうに結ぶ派手なネクタイだ。毎日変わるそのネクタイを、生徒達は日々数えるのだが、一体何百本あるのか、誰も正確な数字をはじき出した者がいない。教授に聞いても分からないというので恐らく誰も知らないままこれからもずっとスクールの名物として数え続けられるのだろう。

化学の授業で優秀な成績を修めた者には、一年の終わり、特別にフリッツ教授お見立ての品のないネクタイが進呈され

る。これも生徒には人気で、毎年学年末が近付くと、一度はその予想に少年達の会話が賑わう。

ミロとアイオリアが交互にここに居る訳をサニー・プロフエッサーに説明すると、教授はカラカラと笑って隣のアイオロスの背を軽く叩いて言った。

「君はボンベごと持って行こうとしたね」

ミロとアイオリアはびつくりし、次に笑った。アイオロスも教授も笑った。でも、笑い終わった後、ミロは何だか少しだけ、気落ちした。

敵わない……そんな気持ちで湧いたのだ。何に敵わないのかは、はつきりしなかつたのだけれど……

「フェアファックス、何好き嫌いしてんだ？」

アイオロスがミロの事を姓で呼ぶのは、真面目な話か、からかって遊ぶ時か、どちらかだった。ミロは、ふつと顔を上げ、アイオロスの視線の先に気付き、しまった、と思った。

無意識のうちに皿の片隅へ、綺麗に肉だけより分けていたのだ。アイオロスの皿を見ると、すでに彼の皿には殆ど物が乗っていない。ミロは、慌てて肉を一欠けら口の中に放り込んだ。

「そんな事してるからお前、そんなにチビなんだぞ？」

アイオロスが金色の頭を小突いた。それから、避けてあつた肉の半分を食べ、残りを全部食べるようにと言った。コントラパスを教えてくれた時もそうだったが、アイオロスはかなりはつきりとレベルの高い事を要求する。けれど、その要



求を満たすための出発点は、いつも相手のレベルを考えて指示す。いきなり全部を食べられるようになればと言わないのだ。半分からでいい、と言ってくる。

敵わないけど、やつぱりこの人大好きだ。

ミロの先ほど感じた気持ちの落下は、パラシュートがポンツと開いたように底にたどり着く前にふわふわと浮いた。

なんでかな…。同じ好きでも、アイオロスには平気で話しかけられるし、結構皮肉や体当たりのコミュニケーションも取れる…。

なのに…。

ミロの脳裏に、いつも優しく微笑んでいて、楽器を持つと滅茶苦茶格好いい銀色の少年の事が頭に浮かんだ。彼はいつもアイオロスの傍にいる。

サガにはどうしても駄目だ。

浮かんだ映像を、目を閉じてふるふると頭を振る事で追い払った。

話しかけることからがもう出来ない。そうしなければならぬ時は、足が逃げ出したくてもうずうずする。実際、話し終わったら全速力でその場を走って逃げる…。自分でもイヤになるのだが…。

誰かに相談したい。

突然遠い目をした後輩に、アイオロスはそのブルー・アイズの前で手を振った。

ロスじゃ駄目だ。きつと笑われて、オレが平気で話せるよ

うになるまで帰ってくんな、とかなんとか言ってる絶対サガと話をさせるようにするに決まってる。アイオリアは、そんなにサガを知ってる訳じゃないし…。

あ。

ミロの頭に、真つ赤な髪と、独特の雰囲気を持つ大人びた同級生の事が浮かんだ。

カミュ・ルーファス・バーロウ。清廉としたアルトと、オルガンとピアノを弾くオケのメンバーにして、同寮の少年。彼になら打ち明けられそうな気がした。とにかくいつも落ち着いていて、その上公正に物事を見て判断しようとするから頼りになる。

オレは、いつつやつちやつちから考えるけど、あいつは考えてから行動するみたいだし…。

四ヶ月ちよつと、化学の授業やオケ、その他の場面でミロはカミュをそういう少年だと見当していた。

考えれば考える程いい思い付きのように感じられ、一旦考えが浮かぶと食事の事などころりと忘れ、さらにその思考を進み続ける。次の授業、なんだっけ？ いつカミュに話しかけられる？

そわそわしだしたミロに、アイオロスの後十分で昼休み終わりだぞ、という声が響いた。

ああ、もう！ 絶対時間少ないよ！ 食事の。こんな時間じゃ物を飲み込んでるだけじゃないか。

ミロが思わず口走ると、アイオリアとアイオロス両方に、

「お前が遅過ぎるんだ」

と、声を揃えて言われた。咄嗟弁解しようとして口を開くと、もう喋るなと二人分の拳骨が頭に届いた。

ボンボンボン、人よりちよつと音が高いからつて気安く頭叩くなよなつ。

仕方なく、声帯を使うことを諦め、ミロは水でなんとか肉を胃に流し込んだ。

その日の夜、寮の談話室で、ミロは早速カミュを捕まえた。平日はお互い授業のレポートがあるので週末に空いている時間ないかと聞いてみると、今週末はもう約束があるとカミュは答えた。じゃ、次の土曜日、二月七日は空いてるか？とミロが畳み掛ければ、カミュは、ちよつと驚いた顔をして、それから何故か楽しそうに笑って言った。

「何？ 去年の約束を果たしてくれるの？」と。  
約束ってなんだ？

ミロは頭の中で、カミュと自分の間に交わされた過去の会話を急ピッチでめぐり、該当することがない事にうろたえた。話を聞いてみると去年の九月、偶然カミュが一人でピアノを弾いているのを見たから今度は君が何か弾けと言われた事だった。

ころつと、忘れてたよ…そんな事…。

以外と根に持つ、と言いつつになつた言葉を慌てて飲み込んで、ミロは代わりに記憶力がいい、と相手を褒めた。カミ

ユは一言、ずつと楽しみにしていたんだよ、と言つて笑つた。

ミロは、なんとなく子供扱いされている風なのを皮膚で感じ口を尖らせた。

「何弾けばいいんだよ？」

自分より頭一つは背の高い同級生に、ミロは上目遣いで尋ねた。カミュは、暫く考えてから言つた。

「パッハの無伴奏は？」

うっわ！ パッハかよう？

ミロは、目を見開いた。

なんか、こいつ、オレの事買いかぶつてないか？ サガならともかく、オレのパッハなんて聞いてどうすんだよ…。

ミロは、頭を抱えそうになつたが、約束は約束だと背骨に力を入れて踏み止まつた。それに、自分の話を聞いてもらうのだ。何がしか相手の要求を呑むという行為は妥当だと思われる。観念して『そのかわり…』と言いつつ掛けた時、談話室の向こうからポール・リッジウェイが歩いてきてカミュの袖を引いた。

「ルーファス、明日、歴史のレポートがあるだろ？ 一緒にやろうよ」

クリスマスホリデーからグンと背を伸ばしてきたポールは、さりげなくミロの事を早下ろし、無視した…。金糸の巻き毛で、入学した当時はミロと同じくらいの背丈の少年だったが、今はもうすっかりミロの事を見下ろすようになつて居る。

華奢でボーイ・ソプラノやつている所為か、普段の声も軽

くて響きがいい。去年の真夜中のミサで、実際にポールが歌っているのを聞いたミロは、今ではポールに対して少なからぬ尊敬の念を抱いているので、身に覚えの無い敵意をぶつけられるのは、心の中にひやつとした風が走るようで悲しかった。本当に綺麗で、隙が無くて、凄く良かった。

これ程歌いこなす少年が同年なのだと思うと、自分の未熟さに焦りを覚える。自分にも、他の同級生が持つ程の何か特別な才能(タレント)はあるのだろうか？と。

ポールは凄い奴だ。そう思つて、出来れば懇意にしたいと考えるのに、何故か、入学した当初からミロはポールには好かれてない。特に、仲良くなれたら絶対に近くでまた歌声を聞きたいと思っただけに、今の状況には無念の思いが強い。

ああ、今度の土曜にその事もカミュに聞いてみよう。

ミロがくるくると思考する間に、ポールはぐいぐいカミュを引っ張つて行つた。ミロも諦めて体の向きを変え、アイオリア達の居る部屋へ戻つた。

そのかわり、カミュの歌を聞かせて欲しい。そう伝えたかつたのに……。ポールの冷たい拒絶感に圧されて言葉が続かなかつた。

話しかけようとしても、はなつから拒絶されるのつて、なかなか辛い。部屋に帰つてからアイオリアにそうこぼすミロに、横からマイケル・ガーネットが、人と人とのコミュニケーションと言つた。ミロはがっちり捕まつた。

悪い奴じゃないんだけど、話が、長い……。

マイケルの話は、ミロがそろそろ消灯時間だと言つまで続き、しめくくり、週末になったら本を一冊紹介すると申し出された。自分のテリトリー以外の本をこうやって紹介してもらえるのは有難いが、今週末はメンデルの自伝を読もうと思つていたし、バツハもさらわなければいけない。

ミロは、こつそりマイケルに気付かれないようにため息をついた。

駆け足で二月七日はやつてきた。

第四学年は仮装ダンスの女役を決める騒ぎで持ちきりだ。この学校は、遊びも力一杯、勉強も力一杯といった校風で、またそれに見合うようにハウス・マスターや教官もクールにイカれている。

寮の中に貼られた「必勝！ スミス・ハウス二連覇！」の文字は、間違いなくミロ達のハウスマスター、ベネット氏のものだ。

ミロは込み上げてくる笑いを口の端に表示させ、スミス・ハウスから飛び出した。

外には雪こそ残っていないものの、きりりと冷たく、頬には空気がチリチリと突き刺さつた。

大切なバイオリンを両手に抱え、駆け足で音楽棟の練習室

に到着し、幾つもある練習室の予約ボードから自分の名前と部屋番号を確認し、鍵を受け取って部屋に入った。

空調を軽くかけて、大きく肩を振る。手を組んで、手首の柔軟体操。首回し、足回しを行い、深呼吸してからそととバイオリン・ケースを開ける。

大切な楽器だった。

ミロの母方の曽祖父の形見だ。

ミロの母はイタリア人。音楽の好きな一家の末娘だ。フィレンツェ郊外の大地主で、地元の間で知らぬ者なしといった家系だった。曽祖父の代までは外洋船で貿易を手がけていた。その曽祖父が、南イタリア、クレモナで、ストラディバリだと言われて喜んで購入したのがこの楽器だった。けれど、鱈皮のケースに収められた黄味の強いニスに覆われた貴婦人は、もちろん稀代の名器であるはずもなく。おまけに百年以上も誰も引かずに糸も切れたままだったのを、めぐり合わせでミロは手にした。

四歳の時から傍にあり、九つでやつと弾けるようになった。お金に換算される楽器の価値ではない。ミロは、彼の基盤といえる価値観でもってこの楽器を心底大事にしていた。

カミュが現れるまで二十分ほど、ミロは念入りに曲をさらった。

選んだ曲は、Johann Sebastian Bach の Sonatas & Partitasだ。世に言う無伴奏。チェロもあるが、ミロは無論バイオリンの無伴奏だ。

この中ではバルテータ二番のシャコンヌが特に有名だが、今のミロではまだ届かない。それで今回は、ソナタ一番のプレストを弾くことにした。二分と少しの短い曲だが、ヴィヴァルディの影響を強く受けたこの作品は、バイオリンからはじけるような喜びを引き出してくれる曲で、ミロがまだパブリックに上がる前に教えを受けていたバイオリン教師に、荒さはあるものとにかく元気がいいね、と褒められた課題曲でもあった。

久しぶりに弾いてみると、カウントや音程の甘い箇所が山ほど耳について、いつになく熱心にさらった。

カミュは、これで納得してくれるだろうか？

がっかりされたら……と想像するとミロの鳩尾はしこし固くなった。

ミロは、アイオリアを始めとする同室の少年達や気の合う同級生達とは別に、もつとゆつくりとした時間で少しずつ知っていたカミュという少年を心から尊敬していたので、なんとか失望させないで済ませいのだ。カミュは、選択授業でサガの伴奏も引き受けている。

あの人と比べられたら……。

きゅつと唇を引き締めて時計を見上げると、そろそろ約束の時間だった。

と、すぐにノックの音が響いた。

「すげ。時間ぴったり」

ミロは防音の厚い扉を引いてカミュを招き入れた。カミュ

は首をドアから覗かせた姿勢で譜面台の上に置かれた楽譜を  
みとめ、そこに真っ黒に書き込まれた注意書きを見て感嘆の  
声を上げた。

「練習してくれんだ。嬉しいな」

「ちゃんと練習はしたけど、期待して聞くなよな」

ミロは、微笑んで立つカミュにわざとぶつきらぼうに答えて  
バイオリンを肩に引っ掛けた。

目を伏せて心の中でカウントを繰り返す。

まだだ、まだ早い。

カミュの視線を意識して上がる肩を、深呼吸して、下げる。

意識を、楽器と掴み取りたい音だけに集中させ、拍の流れ  
を掴んだ。

ひょいっと、その目に見えない流れに飛び乗り、ミロは暫  
しカミュの存在を忘れて音を狩り続けた。

と、微笑んでいたカミュの視線が、すつと真剣味を帯びて  
ミロの操るバイオリンに集まった。カミュは、オーケストラ  
で弾くミロの音を知っている。ミロは知らないが、それなりに  
幼い頃から音楽に親しみ養った耳と、オーケストラの一番  
後ろで出番を待つ間に全員の音を聞くことの出来る立場とが  
あれば、ミロほどに際立った音を出す奏者の音色を聞き分け  
ることなど造作もないことだった。だから、カミュはミロの  
音を知っていると思っていた。しかし、今ミロが奏でている  
音は、そのカミュの知っている音とはあまりにも違っていた。

これが、ミロの本来の音長。

カミュはそう納得し、その類稀な音楽性に舌を巻いた。

バッハは、奏者を映す鏡と言われる。ヴィヴァルディやク  
ライスラーなどの所謂バイオリン定番の小曲ではなく、敢え  
て難しいと評されるバッハを希望したのは、ミロという人間  
の自身を知りたかったからだ。何を美しいと感じ、何を大切  
に思うのか。バッハを弾けば否応にも現れてしまうその人間  
性を知りたかったからだ。

そして今、耳に届くミロのバッハは、カミュに改めてバッ  
ハの美しき、偉大さを教えるに足る、洗刺として銜いのない、  
美しいバッハだった。

本当のミロは、オーケストラで弾く人間ではないのだろう  
な…。

カミュは、ミロがオーケストラに入団してから、薄々と感  
じていた印象を新たにした。ミロは、集団に混じろうとすると、  
自分の音を殺してしまう。そして、ミロが気付いているか否  
かは定かではないが、その音は完全に彼のパートリーダーで  
あるサガ・チエトウィンドの音をトレースしたものであった。

ミロは一気に引ききり、バイオリンを下ろした。無防備に  
集中した姿を曝け出した事がなんとなく気恥ずかしく、ため  
息を一つ付いてからしめ面でカミュを見やった。

カミュは、*Bravo* と実に自然にフランス語を発し、小さな  
拍手をミロに贈った。

あまりにもストレートな賞賛に、気恥ずかしくて、どうし  
て応えたらいいのか分からず、ミロは、バイオリンを抱えて

じりじりと後退した。

肩をしかめて、訳がわからない、と自分を凝視するミロに、カミュは緩く微笑んだま言った。

「オケの時と随分音が違うね」

音が違う？ 同じ楽器で同じ人間が弾いているのに？

ミロはますます分からなくなつたカミュの言葉に一層困惑したが、どうやら失望させなかつた様子に肩の力は徐々に抜けていたつた。そして、ようよう「これでいいか」とカミュに確認した。

「勿論！ 有難う。すてく良かったよ。ただ…びつくりしたんだ。普段のオケでの音と全然違うから。オケでは、わざとサガ先輩の音を真似ているのかい？」

「？ 真似…？」

ミロはしきりに首を捻つて考えた。

どう考えてもサガと自分の音は違つている。そもそも、違つているからこそどうしたらあんな風に弾けるのかと悩む自分がいるのだから。

「真似が出来れば苦労はしない…つていうか、そりゃあの人みたいに弾けたらいいなつて思つてはいるけれど…」

すでに四ヶ月、サガと組んでいるカミュが自分の音を聞き分けられない筈がない。オケの音と全然違うというのは、サガという指標がないとやっぱり自分の音はまだまだ甘いのだろう、とそう思つた。

先年、シオンに手痛く指摘された事実はミロにとつてまだ

記憶に新しく、努力がきつと足りないのだろうと自然ため息が漏れた。

カミュは、目に見えて沈んだミロの様子に驚き、それから自分の言葉が足りなかつたことを理解した。

「違うよ、ミロ。君の音は君だけのものだ。サガ先輩は確かに上手だけれど、それを真似ても君の音楽にはならないだろう？ 勿論、オーケストラでは集団行動を要求されるから、パートの中で音を揃えるという必要はあるかもしれないけど、それを意識して、君はサガ先輩の音を真似ているのか、と、そう訊いたつもりだつたんだ」

「そりゃ真似るよ。だつて、ああいうふうに弾きたいんだから…。それに、オレが弾きたいとおりに弾いたら、絶対誰とも合わないよ。結構いい加減に弾いてるからさ…」

「でも、音色まで真似る必要はないだろう？」

ミロはカミュの言う意味が分からず黙つた。そして、たつぷり一分は黙つてから聞いた。

「音色、似てる？」

「似てる…？と思う。いや、さつきまではそんなに感じなかつたけど、今君の無伴奏の音を聞いたら、オケでの音はものすごくサガ先輩の影響を受けているんだな、つて…」

「影響を受けるのは悪いことかな？」

「そうは思わないけれど…普通は、あそこまで近くは真似られないよ」

「…でも、近付きたいんだ。真似、がしたいわけじゃない。

「……近付きたいんだ」

ミロはそう言って一呼吸置いた。

「サガに声を掛けられると、なんて返事をしたらいいのかわからない。オレは、サガの事が好きだよ。だから、少しでも自分の事を好きで居てくれたらいいのに、と思う。でも、サガが何が好きで何が嫌いなのか、オレは知らないから……サガの傍に、一歩でも近付きたい。」

そう思うんだ」

その足がかりに出来るもの、今は音楽しか思いつかない。同じように音を出して、旋律を追っていけば、少しはその人が、何が好きでどんな風に考えるのか見えてくるんじゃないだろうか、ミロはいつの間にか本題に入っていた話題で、精一杯自分の思いを言葉にして形にしてみた。

一方カミュは、暫く、どう返事をしてよいか分からずに黙り込んだ。

ミロがサガの熱烈な信奉者であることは、既にオーケストラの誰もが知っている。だがあの時、サガの事を「好きだ」と叫んだミロのその言葉を、これほど切羽詰ったものだと理解した人間が何人居ただろうか。恥ずかしながら、カミュもまた、少々熱の入ったファン心理だろうとしか認識していなかったのだ。

サガの音に寄り添い、人間関係やその他様々なブレッシヤーに晒されていたサガを支えるように鳴り続けていたミロの音。

それが、ミロの偽りない気持ちだったと、どうして今まで気付かなかつたのだろう。

「前に言ったかもしれないけど、サガ先輩は君のことを高く買っているし、信頼もしていると思うよ。だけど、君のサガ先輩に対する気持ちというのは、そういう関係では築けないものだと、そういうことなのかな？」

「……オレも、サガの事は信頼してるよ？ ……ああ…、問題はただ単に、オレがサガとまともに話せないだけな気がしてきた…。何でだと思っ？」

ミロは、考えた末にどこかあつげらんとした表情でカミュを見た。

何で、といわれても、と咄嗟に投げ返そうとした言葉を無理矢理飲み込んで、カミュはまじまじとミロを見つめ返した。…てつきり、恋愛相談を受けるのだとばかり覚悟していたものの結末がこれか、と思うと、脱力を禁じえない。ミロとは既に五ヶ月の付き合いになるが、このへんの距離感はまだに掴めず、いつも変わらぬミロの本気にかミュは戸惑いを覚えることしばしばだった。

しかし、取り敢えず、今のミロの関心は如何にサガと普通に話すか、ということであるらしい。

カミュは暫し考え、彼なりの結論を出した。

「…問題は、君がサガ先輩と喋ることに慣れていないからじゃないのか？ 折角それだけ弾けるんだから、例えばサガ先輩をデュエットに誘って、話す機会や共通の話題を増やすとか…」

カミュの言葉を聞いて、ミロの頭は一瞬真っ白になった。

普通に話すこともままならないのに、デュエットなんて！ あんなの、会話するよりも恥ずかしいじゃないか！ それに、弾けると言っても自分のレベルではまだまだサガと対等に對峙するには時間が足りていないようにも思う。

ミロは、失礼にならないように気をつけながらカミュの言葉是否定した。

「……いや…デュエット、とかは…その、行き過ぎ…って言うか…。ほら、別にロスとはデュエットなんかしなくつたつて普通に話してるだろ？ そんな風になりたいんだ」

「でも、現状ではそれが出来ないから、僕に相談なんて持ちかけたんだらう？」

「うん…。だからさ…、何でだと思おう？ カミュみたいに冷静に見たら理由が分かるかもしれないだろ？ 理由が分かれば対処もできるんじゃないのか？」

理由なんて…、とまたダイレクトに返しそうになった言葉を唇の直前で止めて、カミュはため息を飲み込んだ。

本気で、ミロは理由が分かれば対処できると思ってるのだらうか。もしかしてミロは、自分がサガに寄せる思いが通常の憧れの範囲を大幅に超えていることに気付いていないのだらうか。

それは、君がサガ先輩のことを好きだからだらう、などと書いてみたところで、ミロはあつさり肯定するだけに違いない。そしてそのことが、相手と上手く喋れないことの最大

の原因であることなど、気付きもしないのだらう。

カミュはもう一度自分の言葉の海を探り、もつともこの場合適切だろうと彼が考える返答をした。

「理由のあることなら、確かに対処できるかもしれないね。でも、君の場合、サガ先輩と上手く喋れないという事実が、むしろ君がサガ先輩をそれほど好きだということを証明している、ということだと思ふ。原因と結果が、君が考えるものと逆なんじゃないか？」

「好きなら、その沢山の分だけ話し掛けたり出来るんだと思つてた…」

ミロは、カミュの言葉に小さく呟いた。

「オレ、結構誰かの事を好きになつたら自分からどんどん話しかけるようにしてたし、実際さうだったんだけど…」

最後の言葉は小さく窄まつて消えていった。それが出来るなら恋愛感情ではないだらう、とカミュは思い、その後でそんな偉そうな口をきく自分自身にも恋愛体験などないことに気付く。

自分も、誰かを好きになる日がきたら、こんな風に悩むのかもしれない。

さう思うと、小さくしよげかえつたミロが気の毒に思えた。カミュは、大きくひとつ息をつき、強いて明るい調子でミロに尋ねた。

「まだ練習室の予約時間は三十分くらい余っているだろ？ 折角だから、何か弾かないか？ 簡単な伴奏なら出来るよ？」



カミュは、ミロの気分転換を手伝うつもりでそう訊ねたのだ。しかし、結果は思わぬ方向へと流れていった。

ミロの小さな顔が、パツと跳ね上がった。そもそも、サガの事を相談したくてカミュを頼んだが、バイオリンを聞かせて欲しいと言われた。それじゃあ、そのかわりに歌を聞かせて欲しいと、あの日はそう言いたかったのだ。

「歌！歌うたってくれよ！こないだの！あれ、凄く綺麗だった！」

こないだの、というのは、ミロがカミュ・バロウの歌声を初めて聴いた真夜中のミサでの聖歌の事だった。ポール・リッジウェイのソプラノとカミュのアルトは、高い教会の天井をゆつくりと螺旋状に絡み合いながら立ち昇り、ミロのまだ薄くて小さい胸を締め付け、涙腺を刺激した。

期待全開の眼差しで見つめられて、カミュは一瞬言葉に詰まった。まさか、歌、といわれるとは思わなかったのだ。

正直、あまりプライベートな場で歌うのは気が進まない。昔から、カミュはそうだった。ポールなどは自信満々で美声を他人に披露するが、カミュは誰かと一緒に歌うか、教会での聖務日課の一部として歌うのが常だった。カミュが主に対旋律を受け持つアルトであったことも大きい。彼自身、一人で歌うのはどうも気恥ずかしいところがあって、請われても容易には容れず、大人達をがっかりさせたこともしばしばあった。

そしてその傾向は、ある事件を境により顕著になる。その

事件より後、カミュは所属している合唱団以外では歌わなくなった。彼の興味は既に幼い頃から学んでいたピアノと、パブリックスクールで新たに始めたオーケストラに移っており、地域の合唱団で「あのボーイ・アルトの」カミュ・バロウだと指差されることを居心地悪く感じるようになっていた。

それなので、カミュはミロに一言言った。

「僕はアルトだから、一人では歌えないよ」

「じゃ、オレ、ソプラノの部分弾くよ」

何の躊躇いもなく返答したミロの笑顔に、カミュは再び言葉を失った。

…なんとか、あまり気が進まないのだということをもミロに分かつてもらう方法はないものか。

まだミロとの付き合いが浅いカミュは、ミロにはそんな小手先の言葉など通用しないという事実をよく理解していなかった。

「バイオリンで弾かれてもよく分からないよ。歌じゃなくて、ピアノじゃ駄目かな？」

「え？なんで？だって、お前、暗譜して歌ってるわけだろ？そんなに一人で歌うのつて難しい？」

「アルトっていうのは、一人で歌うものじゃないから……」

カミュは溜息をつき、成程、ミロが気ままに弾いたらオーケストラとは合わないであろうことを理解した。

「……わかったよ。降参。白状する。実は、あまり一人で歌うのは好きじゃない」

「……じゃ、一緒に歌う？ でも、オレ、歌は全滅駄目だぞ？」

「悪いけど、音程の悪いソプラノには合わせられないよ？」

これで引き下がってくれ、と言外に念じながら、カミュはにつこり笑った。

「だから、ピアノで手を打ってくれたら嬉しいんだけど」

ミロは気を悪くした風もなく暫し黙考していた。そして、顔を上げるとト嬢に尋ねた。

「じゃあ、もし、オレがポールとかに頼んで一緒に歌ってもらえるように準備したら歌ってくれる？」

今度こそ、カミュは盛大に溜息をついた。普通、ここまではつきり「ピアノにしてくれ」と頼んでいるものを、食い下がらるものだろうか？

「……イヤだ、といえは君は納得してくれるのかな……」

もはや、言い逃れはきかない。カミュは漸く覚悟した。ミロは、真摯に尋ねてきた。どうしても話さねば納得しないというのなら、この少年に話してみてもいい。どうして自分が歌から遠ざかってしまったのか、その理由を。

カミュは笑みで誤魔化していた眼差しを真剣なものに変えて、パイオリンを持ったまま立っているミロを見上げた。

ミロは、カミュの表情が変わったことに気がついた。気付いたが、自分がそれ程カミュに対して悪い事をしていてという自覚も持てなかつたので、再度注意深く確認してみた。

「それは、歌う事自体がイヤだつて事？ それとも、歌うのは好きだけれど、今歌うのがイヤだつて事？」

ミロには、教会で歌っていたカミュが致し方なく歌っていたようにはどうしても思えなかつた。そこまで考えてみて、漸く納得出来る答えに突き当たつた。

「それとも、歌は教会でしか歌わないことにしていた？ だつたらしつこく言つてごめん」

ミロはぺこりと頭を下げた。

いきなり謝られて、カミュは慌てた。ミロが最後にたどりに着いた結論は、大体に於いて正しい。だから、その通りだと頷いてしまえばこの話題はこれで終わる。だが、気がつけば、カミュは再度口を開いていた。

結局、誰かに話を聞いて欲しかったのかも知れない。そして、どうせ聞かせるなら、この素直な感性を持った少年がいいと、どこかで思つたのかも知れない。

「歌うこと自体が嫌だというわけじゃない……ただ、歌をやつて、その周りの人間関係に振り回されるうちに、あまり歌にいい印象を持てなくなつてしまつた、というのが正しいかな……」

正直、今は合唱団以外で歌おうとしても、咽喉に嫌な気分がつかえて上手く声が出ないんだ、とカミュは呟いて、小さく笑つた。

今度はミロが、カミュのその小さな笑顔に慌てる番だつた。誰にだつて「普通だつたら」とか「そんなことごとくぐらい」

で括られてしまうような平凡な事象の裏に、鋭い痛みを感じたものを持つている。

誰かは、髪を触られることが服に泥を付けられるよりイヤ

かもしれない。誰かは、高いところから飛び降りるのは平気でも他の人は違う。誰かはにんじんが嫌いでもまた誰かはにんじんが大好きだったりする。

世界は、そんな事で溢れている。

それを、自分は知っているはずなのにすぐに忘れる…。

あんなに上手に歌うのだ、きつと歌うことはそんなに骨の折れる事ではないのだろう。手品のように、手を開けばカミュ・バローウの声は溢れてくる。そう思っていたのだ。きちんとお願ひすれば、ちよつとはもつたいぶるような気持ちでも動いてくれるかもしれない。そう思っていた。

けれど、「歌う事は嫌いじゃない」のに「咽喉に嫌な気分がつかえて上手く声が出ない」なんて、どんなにイヤな事だろう。いや、そういう事情を無理矢理口を割らせてしまった自分は、なんて無神経でバカなんだろう。最後の最後まで笑顔で対応してくれた同級生の優しさが痛い。一体自分はこの学校に来てから何回、何人の人間に謝っているんだろう…。

カミュ・バローウに謝るのもこれが始めてではないはずだ。でも、本当に悪かったって思っているんだ。唇を噛み締めて、どうかこの後悔が伝わりますように、とカミュの赤い瞳を見つめて言葉を吐いた。

「……ごめん。オレ、鈍くて…」

「いや、最初からちゃんと言わなかった僕も悪いんだよ。本当は、それほど拘るほどのことでもないだろう。背中から刃物で脅されて歌えといわれればきつと歌うだろうし、い

つまでも逃げ腰になつてるのが良くないのかもしれない。…ただ、どのみち、声は多分あと半年足らずで出なくなるからね…。ちよつと、その努力をサボっているだけなんだ」

「あと半年？」

ミロは呆然としてカミュを見た。それは全く予想していなかった言葉だったからだ。

「あと半年で声変わり、つてこと？」

「この分だと、多分…」

「なんでそんなにあつさり言えるんだ？ それで、あと半年しかないって、ただその日を待つだけなのか？ 努力をサボつてるって自覚があるのに、それで後悔しないのか？」

心底わからない、といった様子のミロの言葉は、あまりにストレートで、カミュが言い訳で築いた壁をあつさり貫通し、その奥に隠していた後ろめたさにすとんと突き刺さった。僅かでもその言葉に椰揄の色が混じっていたならば、その矢は、カミュが己をごまかし続けた理屈の網を抜けることも適わなかつたに違いない。だが、ほんの一瞬、カミュさえ、「何故なのだろう？」と思わせたミロの素朴な疑問が、その矢の貫通を許した。隠していた後ろめたさを暴かれたカミュの心は、ごく普通の人間が感じるように、不快を感じた。

「だって、半年しかないものを、努力しても仕方ないだろう？」

一生に関わる事なら、真剣に考える価値もあるけれど。その分、将来につながるものに力を注いだ方がいいじゃないか。少し肩をすくめるようにして言葉を口にしたカミュを見て、

ミロの心の中に、何かがカツと灯った。

「なんで？ 半年しかないから、今しか努力できないんじゃないか！ 自分の好きな事は一生に関わるんじゃないのか？ お前、声変わりしたら歌が嫌いになるわけじゃないだろ？ だったら、アルト歌える『今』、歌って楽しめなかつたら悲しいじゃないか！」

ミロは一気にまくし立てた。

先に自分を無神経だと責めた気持ちとはどこかに打ちやり、例えカミュの心に良く響かなくても、なんとかカミュにどうせあと半年しかないのだからなどと諦めて欲しくなかつた。その一心で言葉を口にした。

人の意志や心をひっくり返すことは、並々のことでは出来ない。精一杯やったからといって伝えなかつたように伝わるわけではない。それでも……。

「お前のアルト、凄く、本当に凄く良かったよ？ ただ綺麗に歌えてたっていうんじゃない、カミュが大切に、大切に……言葉とか、神様とか、綺麗なものとかそういったものを大切に歌っているって分かつたから言っているんだ。凄く、綺麗な顔して歌っていたよ。上手く歌えて、その事が得意で歌っているって訳じゃないみたいだったから……」

ミロは上手く言えないもどかしさに、唇を噛み締めた。くしやくしやくの髪の中に片手を突っ込み懸命にカミュに分かつてもらふための言葉を捜す。

「……カミュは、そんなにオレみたいに感情的じゃないだろ？」

いつもうまくコントロールしてる。凄くと思うよ。尊敬してる。でも、それだけじゃあんな顔しないじゃないか。歌つてるときのカミュは、とつても自然に、幸せそうに息してたよ。そういうのを、どうしてそんなに簡単に手放そうとするのか、出来るって言うのかが分かんないよ……」

カミュは、今度こそ本当に絶句した。

先刻、反射のように沸き起こった不快感は萎んで消え失せた。ただただミロが突如表に現した透明な熱に驚く。

ミロの言葉は、あまりに正論で、下手な理屈を差し込む隙もない。

カミュは、己のもつとも得意とするロジックで、ミロに負けたことを認めた。だが、正論とは常に冷やかな眼差しをもつて迎えられるのだと信じていたカミュにとつて、ミロから放出された熱が決して不快をもたらさなかつた事、正論が正しく人の感情を捻じ曲げずに受け入れられ得るものだという発見は、足元を掴われ返す言葉のない今の状態よりも、何十倍もの重みを持っていた。

「何故……君は、人のことにそんなに情熱を持って関れるんだ……？」

思わず、負け惜しみでも何でもない素朴な疑問を呟いた。言つてしまつた後で、卑屈に聞こえたかもしれない、と後悔したが、ミロは氣にした様子ではなかつた。

「関つてないよ。関るって言うのは相手が許してくれた時に初めて出来るもんだろ？ だから、オレは今、一生懸命お願い

してゐんだ」

ミロはばちくりと目を瞬かせた。

「お願いつてのは、普通、一生懸命にならないか……？」とも付け加える。

カミュは、己の認識が間違つていたことを理解した。

……卑屈になど聞こえるはずもない。

ミロには、彼の目の前にいるマイナス思考に陥つている人間を更生させてやろうなどという野望は微塵もなく、ただ、彼の美しいと感じたものを守ろうとしただけなのだ。

ああ、そうか、とカミュは思った。

先刻の、ミロのバツハ。何故、あんなにも澄み切つて、明るく美しかったのか。

「……わかつたよ。……今すぐに、というわけにはいかないけど、声変わりする前に一度君には披露しよう。ポールあたりに手伝つてもらつて」

それを聞き、ミロは大き破顔した。

それから二日後の晩だった。

翌日の授業準備を、就寝時間二十一時になつて始めたミロは、懐中電灯の明かりで使い古したバイオリンの弦を張り替えようとしていた。二段ベッドの下にいるアイオリアが、明日の朝にやれ、という言葉も、一度気になると落ち着かないミロ

には届かなかつた。

両足の間に華奢な楽器を挟み、第四弦から一本一本順番に張替え、指先で小さくはじいて大体の調弦を終える。

けれど、どうしたことか、今晚は弦を張り替えた時に鳴る独特の息吹を吹き返したような音の張りが無い。

首を傾げてまじまじと「ちび助」と呼んでいる楽器を覗き込むと、表板のど真ん中、指板の下から真っ直ぐに走る線が見えた。

こんな所に木目などあつただろうか？

ミロは指を伸ばしてその筋を辿ろうとした。

ペコッ

バイオリンの表板が軽く沈んだ。

ドクンッ、とミロの頭蓋骨が血管に圧される。

恐る恐る筋の片側だけに指をあて、徐々に力を込めて触れてみた。

指の触れた左側半分の板は沈み、右側の板と段差が生じる。その隙間に、f字孔からしか覗けないはずの、バイオリンの洞が黒く広がつていた。

ドスンッ！

ミロは二段ベッドから飛び降りた。頭に雷光の如く赤毛の同級生の姿が浮かんだ。扉に駆け寄り飛び出すと、隣の部屋に駆け込んだ。

「カミュー」

と、ミロは叫んだ。消灯していた部屋の中に、パツと小さな電燈が灯る。扉から一番近くにいたジョセフ・パーマーが枕元にある明かりをつけたのだ。

黄色つぼい薄明かりの中に、ミロは真つ青を通り越して真つ白になって立ちすくんでいた。

「どうしたんだ？ こんな時間に……」

カミューは、半ば夢におちかけていた意識を覚ましながらかぼんやりとした明かりの中のミロを見た。パジャマに裸足でかけてきたらしいミロは、片手に、彼の愛器を握り、隣部屋の全員をたたき起こしたその声で、彼にとつての緊急事態を告げた。

「どうしよう！ バイオリンが、壊れたんだ！」

開け放したドアに立ち竦み、ミロは声を振り絞つた。震えるのは声のみに止まらず、歯を食いしばる事でどうにか戦慄きに蓋をしているような状態だ。

カミューは暫しその言葉の意味を辿り、それから僅かに眉を蹙めた。

……一体ミロは、消灯時刻も過ぎた暗い自室で何をしていたのだろうか。そして、既に就寝した隣部屋の全員を叩き起こしてまで、楽器屋など開いているはずもないこの時刻に何をしようというのか。

疑問は数々浮かんだが、口に出しては「まあ、落ち着け」とのみ言った。

「とりあえず、部屋の外に出よう。皆の邪魔になる」

ベッドの上から部屋の外を指差され、ミロは起こしてしまつた隣部屋の学友達に謝罪の言葉を述べることにすら思いつかず、ぎぎぎぎぎぎ……とまるで油の切れたロケットのように回れ右をして廊下に出た。考えなしな大声で安らかな睡眠を邪魔されたポール・リッジウェイのミロへ心象は、彼の大事にしているカミュー・パロウを動かした事でさらに悪くしたが、今のミロにはもちろん認知出来ない。

廊下には、レンズの部分に布を巻き、光量を落とした懐中電灯を持ったアイオリアをはじめ、ミロと同室の少年達がパジャマに毛布や上着を羽織つて集まつていた。

「どうしたんだよ、ミロ」

アイオリアが幾分叱責を孕んだ口調で立ち竦むミロに詰め寄つたが、ミロの舌は動かなかつた。ミロの心の中は「どうしよう」という単語で溢れ返り、駄目かもしれない、いや大丈夫だ、そんな予想の嵐波に浮かぶ小船のようにぎくぎくと揺れていた。暗い緊張でぎりぎり縮む心地在が首と肩にまで上り詰め、がっちり固めて視界も狭まる。

カミュー・パロウが、ひよい、とミロのバイオリンを取り上げ、アイオリアの持つ懐中電灯の光にかざして呟いた。

「ひよつとして、これのことか？」

カミューの指差す先に、ぱつぱつ割れた表板の溝があった。

ミロは、猛然と首を立てに振つた。頼む！ どうか、なんでもない「傷」だつて言つてくれ！ 膨れ上がった祈りを歯

を食い縛ることで押さえ込んで、ミロは落ち着いた様子の同級生を見上げた。

カミュは溜息をつき、上がってしまったていた肩を落とした。

楽器庫に仕舞うことも嫌がり、大切に大切にしているミロの愛器だ。気持ちは分からなくもないが……

「……ミロ。気持ちはわかるけれど、これは今騒いでもどうにもならないし、明日まで待ったからといって状況が悪化するとも思えない。明日楽器庫に持っていくしかないんじゃないか？」

ミロは、今まで懸命に堪えていた不安を言葉に代えて、叫ぶように言った。

「だって、明日は、平日じゃないか……！ それに、オレ、ここいらの楽器屋なんて知らないよ！」

平日に学校の外へは行けない。なんとか許可が出たとしても、この街の楽器屋などミロには見当もつかない。急いで、余計な不安まで飛び出してしまわないように、常に無い早口でびしやりと言つてのけると、ミロは再びカミュをじつと見上げた。「十時まで待てるなら、ロンドンの弦楽器専門店に持つていったほうがいいと思うけど……サガ先輩あたりなら、このあたりの弦楽器を修理できる店を知っているかもしれないよ。」

すっかり息が上がってしまったミロに、カミュはゆっくりと言葉を出した。それは、ミロの頭が少しでも冷える事を願つてのことだったが、残念な事に結果は反映されなかった。

ミロの耳は、『サガ先輩』という言葉が聞こえや否や全ての音を遮断し、カミュの心尽くしの言葉が終わる頃には、『サガな

らなんとかしてくれる』と変換され、体が動いていた。

三階目指して駆け上がるミロの背に、「ちよつと待て」と言い掛けたカミュの言葉は、虚しく空中に霧散した。

ラグビー部での連日の基礎体力づくりへとへとになつているアイオリアは、カミュをちらつと横目で見ると。

「あそこまで付き合つていられるか」と嘯いた。カミュに、返す言葉はなかった。

一方ミロは、一段抜かしに階段を駆け上り、踊場を過ぎ、更に駆け上がつて三・四号室を目指した。

バイオリンが、生き物ではない事は分かっている。しかし、今のミロにとっては一分一秒でも処置が遅れば冷たくなり、二度と弾くことができなくなるような、そんな不安で一杯だった。

ミロはプレートに三・四と掘り込まれた扉の前で、ノックをした。第五学年の消灯時間は二・三時となっている。起きてははずだ。だのにドアノブは動かない。ミロはもう一度ノックしようとして、どんと強張る腕を無理矢理折り曲げた。と、その時、小さな音を立てながらドアが引かれた。

「あれ、ミロじゃないか。どうしたんだい？」

スクール・オーケストラのヴィオリスト、アンドリュウ・シーファが、只ならぬ出で立ちのミロに驚きながら柔らかに尋ねた。ミロの学年はとつくと消灯しているはずなのだ。それなのに、ミロときたらバジャマ一枚で素足のまま、左手に

楽器を握り締めて立っている。しかも顔は今にも泣き出しそうだった。

「あの、済みません。サガ先輩に会えますか？」

ミロが、色のない唇でアンドリュウにサガへの面会を請う。けれど心の中は、このいつもどこかのんびりとしている先輩に悪態をついていた。人の顔を驚いてまじまじと見ている時間があつたら、どうしてすぐにサガを呼んでくれないのだ、と。か細く、泣き出しそうな細い声を聞いて、翌日提出するレポートの点検をしていたサガは驚いてドアに寄つた。驚いてと言つても、それは端から見れば十分に落ち着いた振る舞いだったのだが。

「私は、ここにいますよ」

サガのいつもと変わらない顔がアンドリュウの頭の後ろから現れた。

ミロは、緩みそうになつた口元と膝に力を入れて、自分のバイオリンに起こつた異変を早口に喋つた。

一通りミロから話を聞き終えたサガは、後輩の手に握られたバイオリンを受け取り、やや真面目な眼差しでその割れた表板を見つめた。それからその輝に指を押し当て、表板の弾力を確かめて、小さく、これなら、と呟いた。

「多分、私の知っている街の弦楽器屋で治せると思うよ。勿論他の店でも直せると思うけれど。ただ、君にとつてかけがえない楽器のようだから、出来れば多少なりと付き合ひのある店で直したほうがいいだろうね。」

それから、ミロにバイオリンを返し、「ロンドンまで出かける予定は？」と尋ねた。

「ミロは今度は首を横に振つた。」

「そうか。ロンドンに、私がよく行く腕のいい弦楽器職人の店があるのだけれど……」

ミロのは、今まで味わつたことの無い類の葛藤を胸に感じた。街の楽器屋でも直せるとサガは言つた。一刻も速く直してやるなら街の楽器屋だ。けれど、本当に、本当にこの楽器は自分にとつて大切なのだ。どこかそのへんの楽器屋で適当に直してもらつて自分は後悔しないだろうか？ ロンドンにある楽器屋なんて、きつと有名な楽器屋に違いない。そんな所に自分の楽器を持つていくなんて贅沢だろうか？ 見てもらうのなら、サガが「腕がいい」という店に持つて行きたい。でも、自分がロンドンに行く予定がないというだけで、そのチャンスが潰れてしまうのはイヤだ。

「ミロは、自分でも厚かましいと思う望みを口にしようになつた。」

サガに、連れて行つてもらうことは出来ないだろうか？

ちくり、と先とは別の不安がミロの心を刺す。いや、それは出来ないだろう。サガが自分の為に時間を割く必要はどこにもないし、お荷物にはなりたくない。

「場所を教えて下さい。今度の土曜日に一人で行つて来ます。……それから、もし、わかつたらいいんですけど、どのくらいお金があればいいのか、それも教えて貰えませんか？」



ミロの頬は、いつの間にか真っ赤に染まっていた。あまりにも費用がかかるようだと、折角サガに紹介してもらつても利用できない可能性がある。二月の夜、寒いはずなのにミロの手の平にはじつとりと汗が滲んでいた。

そのとき、ミロとは異なり足音を立てずにゆつくりと階段を上がつてきたカミュが、ミロの背後に立つた。カミュはミロの肩を小さく小突き、ロンドンなら僕も行くよ、と小声で囁いた。

ミロはぱつとカミュを振り返り、思わぬ助つ人の出現に心の底からほつとして「ありがとう」と短くも深い感謝の念を込めた囁きを笑顔と共に返した。

なにしろミロは、自他共に認める方向音痴だ。一人で行くと言いつつたものの、果たして本当に辿り着けるのか自信がなかったのだ。

サガは、どうしたものか、と小さな二人の後輩を見た。ロンドン近郊で育つたカミュと一緒に行くなら、ロンドンの地理に困ることはないだろう。問題は、彼の知る楽器屋が、紹介者なしの客を受け付けないことだった。そして、今週末の土曜日、世に言うパレンタインデーに、サガにはロンドンに出かける予定があつた…。

サガの背後には、野次馬のように上背をきかせて頭上からミロのバイオリンを覗き込むアイオロスの姿がある。サガは、そのアイオロスが手を置く肩に圧力がこもつたのを感じた。ぐい、と肩の骨を掴んだそれは、若干サガの体をアイオロス

のほうに引き戻すような動きをした。

止めておけ、という合図か。

サガは、アイオロスの言わんとするところを薄々悟つていが、泣きそうな表情でバイオリンを凝視しているミロを見ていると、いたたまれない気持ちになつてついに言つてしまつた。

「いや…その店は、紹介がないと入れないんだ。私でよかつたら、紹介するよ。今度の土曜日に、丁度ロンドンに出るつもりだったから。予算は…多分、百ポンド程度だと思ふ」

途端に掴まれた肩にぎりと痛みが走つたが、これは致し方ないというべきかもしれない。

今度の土曜日、サガはアイオロスと二人で映画を見に行く予定になつていた。

ミロは今度こそ全身の力を抜くと、深く息を吐いた。後ろに控えていたカミュが笑いながら数度肩を叩き喜びを共感してくれていた。

「消灯五分前」

とうとう今まで一言も口を挟まなかつたどころか、顔も見せないでいるチェリストのシユラ・コーツの低く響きのある声が、扉口で固まつている少年達の耳に届いた。

年少の二人は、深々と頭を下げ、カミュが遅い訪問を丁寧な詫びてその場を去る。抜き足差し足で階段を下りる時、ミロは改めてカミュにお礼を言つた。

「ありがとう。あと、うるさくしてごめん」

カミュは、くすりと笑つて今度の土曜、憧れの先輩とロンドンまで出掛けられてよかつたねと言葉を返した。すると、ミロは、一瞬立ち止まり、今気が付いた……と呟くや、真つ赤になつたまま、それから一言も口を利かなかつた。

約束の二月十四日土曜日。ミロとカミュは約束した九時に音楽棟の前に少し驚いて立つていた。

約束していたのはサガ・チェトウインドのはずだつたが、何故かそこにはコントラバス奏者のアイオロス・エインズワースも居て、背中に巨大なビートルを担いでいた。

ミロは純粹にアイオロスも一緒にロンドンに行く事を知り喜んだが、カミュはどこかあさつての方向を見ていつものからかい調子を振るわない先輩に疑問を抱いた。そして、もう一人の先輩であるサガも伸びてきた髪がわずらわしいのか、仕切りと襟元に手を伸ばしている。

天気はどんよりとして、低く灰色の雲の中に太陽はうすくまり、顔を見せていない。薄暗い冬の光の中、四人はバスに乗り、列車を乗り継いでロンドンに向かつた。

途中、徐々にアイオロスは普段の調子を取り戻しミロをおもちゃにし始め、サガと会話をするのはもつぱらカミュ、と

いう組み合わせが成立する様子を聴く察したカミュは、事ある毎にミロを自分たちの会話に入れようと試みるのだが、アイオロスのつつこみとミロ自身の逃げ腰な態度でついで成功しなかつた。

チェリングクロスからチューブに乗り換え、ホーボーン地区に入る。オフイス街のビルの一つにサガは二人を先導し、狭いリフトに乗り込んだ。

ぎゅうぎゅう詰めのリフトの中で、ミロはじよよに高まつてくる緊張感を、両腕に抱えた楽器を抱きしめる事でこまかした。

リフトはやがて止まり、サガの「着いたよ」という静かな声でミロは足を動かして下りた。そして立ち止まる。

そこは、ごく普通の量産型のドアが三つ並ぶ狭い通路で、とても楽器屋がある雰囲気ではない。

サガは、狭いから気を付けて、と断ると三つの扉の内、真ん中の扉に近寄つた。

扉の真ん中には小さなプレートが打ち付けてあり、そこには『バインター弦楽器工房』という文字がプレスされている。

ミロはアイオロスの楽器ケースに背中を圧され、工房の中に入った。

しゅんしゅんとお湯の沸く音が耳に響く。ぐるり見回すと、右にカウンター、左の壁にバイオリンやヴィオラがぶら下がりが、弓を陳列させたガラスケースがこじんまりと配置されている。お湯の沸く音は、カウンターからこちらが玄関広間のように

なつていてその中央に置かれた円筒型のストープがケトルを乗せているためだつた。

ここが、プロの奏者も足しげく訪れるミスター・パインターの工房だ。

荷物やコートなどをどうしたらよいか分からず、それでも好奇心一杯に周囲を窺うミロをよそに、アイオロスは玄関の脇にコントラバスを立たせると、さつさと皮のジャケット脱ぎ、カウンター前のバー・スツールに置いた。

ミロもそれを真似てダツフルコートの上に着み重ねる。ユの脱いだコートと一緒に丸い椅子の上に積み重ねる。

サガは、先ほどからカウンターの隅で小柄な男となにやら話し込み、アイオロスは玄関の左側に置かれた脇机のチラシをひらひらとめくつていた。

ミロは、小さく息を付くと隣のカミュに話しかけた。

「なんか、凄いな、ここに」

カウンターの天板とその向こうに広がるテーブル、キツチンにはあらゆるものが散らかつていた。木片、ピアノ線、馬の毛、松脂、金疋規、鉛筆、駒、ブリッジ、切れたスチール弦、紙切れ、埃、何かどろりとしたものが入った真鍮の小さなバケツ。何種類かの音叉、糸巻き、割れたスクロール、折れた指板、バイオリンの型紙、鉛筆、筆等。

「なんか、魔法使いの仕事場って感じだよな」

ミロは目まぐるしく視線を泳がせながら再度カミュに囁いた。そして、カミュの前に転がっていた松脂だらけで真っ白

になつた馬の毛に手を伸ばし、カミュにその手を叩かれた。「勝手に触つてはいけないと思つよ」

ミロは仕方なく手を下に下ろして、今見えている光景を脳裏に焼き付ける事にした。

すると、いつの間にかカウンターからこちらに移動していたこの工房の主が、アイオロスのコントラバスを覗き込み始めた。アイオロスもその後ろに神妙に立っている。

「こりゃー、ねー、力任せで弾いたでしょー」

間延びした声がミロ達の耳に届く。

「えー？ そんな力任せになんか弾いてないですよー」

アイオロスのパインターの喋り口を真似るとほけた返事が返つた。

「うーそだあー。ここ、こんなにずれちゃつてるじゃないー。力入れ過ぎー」

「うーソじゃないですつてー」

職人は、細長い棒をひよいつとどこからか持ち出すと、コントラバスのf字孔にそれを差し入れ、歯医者のように何かをひつぱつたり押したりうんうんと腕を動かしていたが、やがて屈みこんでいた背を伸ばしてアイオロスに言った。

「はい。弾いてみて」

アイオロスは寝かせてあつたコントラバスを引つ張り上げ、ぶんつとE線を弾いた。

ミロとカミュはお互い顔を咄嗟に見合つた。

音が変わつている！

もともとアイオロスの楽器は良く鳴る楽器だったが、たった四〇五分の作業で明度が倍に、古いニスを洗い落とし鮮明になった絵のようなそんな印象の音が流れ出た。

アイオロスは四弦の鳴りを確認すると、コントラバスでは一番高音域を出すE線に左手を置き、するりとシューベルトの『アヴェ・マリア』を数小節演奏した。

「そうそう、そんな風に弾いてよ。これ、いい楽器なんだからさ」

「この上なく丁寧に、優しく弾いてますって」

「ほんとかな」

工房の主は、さも可笑しそうに笑った。

「はい、じゃ、お待たせしました。楽器を見せて」

ミロは、一瞬ヒクツと飛び上がった。いつの間にかカウンターの向こうから自分の目の前にマエストロ・パインターがやつて来ていたのだ。

痩せていて、黒い髪は多分櫛をあてられていない。肌には張りがある、けれど笑い皺が深く口の周りに刻まれていて年齢不詳だ。目がぎよろりと大きい。

カエルみたいだ。

ミロは頭に浮かんだ言葉を慌てて消して、静々とケースの中からバイオリンを差し出した。

ひょいっ、とミロのバイオリンは職人の手に渡り、くるくるとの中でボールかなにかを転がしているように眺められた。

「大丈夫。直りますよ」

一瞬ミロは、何を言われたが理解できなかった。あまりにも速攻に、あまりにも軽く、自分にとつての一大事に対する結論が出たからだ。

ボカン、とするミロに、カミュが温かく「よかつたね」と言葉掛け、その言葉を聞いて、そうか直るのか……と思つたぐらいだ。

「これ、急ぎ？ 何か代わり持つて行く？」

職人は、サガを振り返つて尋ねた。

「いえ。彼には学校の楽器を暫く弾いてもらおうと思つていますから」

サガは、ミロに確認の視線を送り、ミロもそれに頷いた。

「じゃ、二週間ぐらいうちで預からせて。それにしても綺麗に割つたね」

感心するように笑つて、職人はカウンターの上部に張られた針金に、ミロのバイオリンの渦巻きを引つ掛けてぶらんと吊るした。

料金は丁度一〇〇ポンドで良いと言われ、ミロは胸を撫で下ろした。進学の祝いにフィレンツェの伯母達からもらった小遣いが全部で二二〇ポンドあった。ここで一〇〇ポンド使えば、随分と欲しかった物を諦めなくてはいけなかったが、直して貰えるのだ。こんなに有難いことはない。

ミロは、丁寧に紙幣を伸ばして染料のこびり付いた乾いた手に渡し、「二週間したら迎えに来ます」と言つて深々と頭を下げて工房を後にした。

「ほら、向うがチャンスリー・レーン駅。今居る所がここだから、まずはリンカーンズ・イン・フィールズを目指して歩くといひ……」

ビルを出た所で、サガは地図を片手にミロに場所を確認していた。なるだけ目の高さを合わせてゆつくりと丁寧に教えているつもりなのだが、ミロの顔はどんどん赤くなつていき、眉の距離も狭まつていく。不安なようだったら、もう一度二週間後に一緒に来ようか、と申し出ようとした時、ミロは分かりました、と言つてサガの手から地図を奪つてしまった。

正午のピック・ベンが響いた。

「お前ら、昼飯どいで食べるか決めてるのか？」

アイオロスがカミュとミロを振り返つて訪ねた。ミロは首を振り、カミュは決めていません、と答える。

「少し歩くけど、着いて来るか？」

ミロは喜んで頷いたが、カミュは小さな違和感を感じて始めていた。

まるで、自分とミロ、サガとアイオロスといった組み合わせで行動するのが当然のようなアイオロスの発言。もちろん学年が違ふのだ。そういう組み合わせになつてもおかしくはない。だが、あの晩はアイオロスもロンドンに行くなどという話ではなかったし、その後も聞いていない。けれど当日現れたアイオロスは、自分も行くのが当然といった風で、そればかりか最初の排他的な態度はまるで自分たちが余計なおまけだと

いった感じをうつすらと漂わせていた。また、先ほどの工房でアイオロスがアヴェ・マリアを弾く姿を見守つていた、見たこともないような優しく美しいサガの表情……。

横を歩くミロは全く気が付いていないようだが、カミュはこのメンバーでの行動に居心地の悪さを感じ始めていた。

四人は、チャンスリー・レーン駅から再びチューブに乗り、パンク駅へ。そして乗り換えてテムズを渡りロンドン・ブリッジ駅に到着した。

ロンドン・ブリッジは巨大な駅だ。地下鉄と鉄道のラインが交わり合う。人混みにはぐれそうになるミロと、大腿で歩いていつてしまうアイオロスの背中をカミュは常に視界に入れて地上に出た。

横断歩道輪を渡り、駅構から少し離れると、教会の尖塔が見えた。あれがサザーク大聖堂だよ、とサガが後輩に示し大通りに沿つて少し歩くと、赤レンガ造りの建物に、ぼつかりと口が空いていた。四角く削り貫かれた通路の上には、『バラ・マーケツト』と書かれてある。ゲートの向うからは、賑々しい喧騒が流れてくる。

ミロとカミュは顔を見合わせた。お互い顔から、あの通路の向うにわくわくしたのを感じている事を知る。

アイオロスに先導されて切通しを抜ける。その先は、人、人、の繁華だった。女性客も多いが、スーツにネクタイといったビジネススマンも多い。何処を歩いても体のどこかが他の人間にぶつかった。

ミロは、初めて見る光景に圧倒された。頬や髪ががつがつと服やバックにぶつかると、それもまったく気にならない。ピザ屋から始まって、ワインや花屋、八百屋には野菜がこんもりと積まれ、その向かいには魚屋があつた。小さなパーラーを乗せた屋台が、真鍮の深鍋をぐつぐつと煮立てている。オーガニック食品と銘打つた昇りがはためき、クーラーボックスには様々なサラダ！ ミロは必死に人混みを掻き分けて、つま先立ちして覗き込む。さわさわと血が騒ぐ。まるで、お祭りのようだ、と。

その時、何かがぐいつとミロの首を引つ張つた。

ぎよつとして振り向くと、ビートルを背負つたアイオロスがしかめ面で見下ろしていた。

「チビのくせにうちよろするな！」

背が低いのは自分のせいではないし、うちよろしたのではなく、人に流されてしまったのだ。反論したかったが、「パーロウ！ しつかり見張つとけ」というアイオロスの声に塞がれた。

「ミロ、手、繋いでおくよ」

カミュはミロの手を躊躇いなくしつかりと握り締めた。

ミロは、カミュに手を捕まれて迷子になる心配がなくなつたと感じたとき、また落ち着かなく辺りに首を回し始め、今度はサガに優しく首を前の方向に固定された。

「アイオロスが気に入りの店で食料を買うまでは大人しくしておいで」

ミロは、カミュに右手を捕まれ、後ろをサガに守られて、大人しくアイオロスの後を付いて歩くしかなかった。

混雑する道を縫うように歩き、四人は次のプロックの市場へと入つた。チーズやアルコール、お酢やドレッシングの試食・試飲コーナーを抜け、ドライフルーツやナッツを量り売りする店の前も通り過ぎた。右手に好みの具材をトッピング出来るプリトリー屋台を折れると、行列があつた。行列の先には肉の焼けるジュージューいう音と香ばしい香りが漂っている。

「アイオロスのお気に入りなんだ。ここのラムのパーカーは人気なんだよ」

ケージの中には二つの鉄板が並び、その上に掲げられた黒板には Northfield Farm とあり、パーガー・ビーフ、ラム、チキン、ポーク、三ポンド 等等。白衣を着た男性が黙々と丸いパーカーや、輪切りのオニオンを炒め、その横でこれまた白衣の女性がパンに注文の品をどんとどんと詰め込んでいく。結局、十分ほど並んでアイオロスがダブルのラムパーカー、カミュがシングルラムパーカーを買つた。

その間に、サガは通り過ぎたプリトリー屋台でチキンとサラダを挟んだプリトリーを買つた。ここの屋台もなかなか豪快で、蒸し上がった湯気を立てているチキンを大きな銀のボールの中で次々とほぐし、それを小麦粉の皮に一掴み、二掴み積み上げ、野菜やソースをさらに積み、くるくると巻いていくのだが、大抵中身が多すぎて皮が破れる。すると、店員はもう一枚皮を取り出し、それをさらに重ねて客に渡していた。ミ

口は、目を丸くして見ていた。

少年達は移動しながらトマトと豆のスープを買い、そば粉のクレープとウサギ・パイも購入し、アイオロスなど背中の巨大な楽器と食料を手に、器用にサザーク大聖堂の芝生まで辿り着いた。

そこはすでに同じように昼食を頬張る人で溢れていたが、ようやく暖房の通風孔付近のベンチに空きを見つけ、四人は腰掛けた。

ミロは、カミュのラム肉のバーガーを一口分けてもらい、自分が買ったチキンのブリトーをカミュに味見させた。年長の二人は綺麗にお互いの食事を分け合って食べた。鳩が足元集まり、ミロは脇に置いていたスープをひっくり返しそうになる。

「この後何処に行くか決めてないんだったら、コヴェント・ガーデンに行ってみろ」

お腹の落ち着いたアイオロスが、カミュに向かって言った。お金がかからずほどほどに楽しめるだろうと。カミュは、頭の中に家族と何度か訪れたことがあるロイヤル・オペラハウスとそこから伸びる通りを思い浮かべて頷いた。

ミロがスープを飲み終わるのを待ち、市場の隅に置かれたゴミ入れに紙食器を片付けると、四人はそれぞれに分かれた。

ロンドン・ブリッジを目指して歩き始めたミロを横目に、何げなくカミュは楽しかった市場を振り向いた。すると、モニュメント駅を目指して歩き出した二人の先輩の背中が見え

る。背の高い二人は、アイオロスの背負う巨大な楽器がなくとも十分カミュの視線を捕らえただろう。二人の発する雰囲気にも、カミュが違和感を覚える直前、サガの脇を自転車が擦り抜けた。アイオロスの長い腕がすりと伸びてサガの腰を引寄せた。サガは慌てて事無く笑顔でアイオロスを見上げて何か話しかけている。

これは……と、カミュは一瞬思考が停止した。オーケストラの練習でこれまで見てきた様々な、それ一つだけでは特別意味を持たないような光景の数々がカミュの頭の中を廻り、先々の光景が最後のピースをカチリと埋め込んだ。

カミュは、サガが言っていたロンドンに用事というのは、アイオロスとの用事だったのだな、とぼんやり気付いた。そして、イヤになる事に、今日が二月十四日という事も思い出した。

立ち止まったカミュに、先を行くミロから声が掛かった。

ミロは、気付いただろうか？ 慌てて駆け寄りながらミロの様子を盗み見る。特に変わった様子はない。

どうやらミロの初恋は、彼のもつとも慕う人間の存在によって悲恋に終わりそうだ……こんな事に気付いてしまっ自分の勘を、カミュは一瞬心底疎ましく思った。

三月になると、徐々に朝が早く訪れる。光の色が変わり始め、ベネット夫人がいそいそと園芸道具を手に寮の花壇で土を弄りだす。ミソザイヤスズメ、ミグパイの姿をあちらこちらで目にするようになり、芝の間に新しい緑の芽が点描のように増え始める。土の匂いが強くなり、冷たい北風とときおりふつと香る南風が行ったり来たり。風邪が流行りだすのもこの頃で、寮母のマダム・ペルリッジの仕事は格段に忙しくなる。

ライラックの芽がちろちろと黒い土の間から覗き出す頃、汗の始末を怠ったアイオリア・エインズワースが先頭を切つて風邪を引いた。それはたちまちマイケル・ガーネットにうつり、ウィリアム・パンキンがげほげほと咳き込み、エドモント・ハウの鼻水が水漏れした水道のように滴り始めても勢いは収まらなかつた。

隣部屋にも伝染し、ジョセフ・パーマーが熱を出し、カミュ・バロウも軽い咳が喉から出始めた。

週末に、三日間ベッドに縛り付けられたアイオリアをカミュが見舞うと、部屋ではマイケルがうんうん唸り、ウィリアムは憚ることなく咳き込みながらチョコレートを食べ、ハウはティッシュの山に埋もれながら終わらなかつた課題に必死で取り掛かっているところだつた。

カミュは一瞬、その部屋に入ることを躊躇し、それから自分分はもうこの菌には耐性があるはずだから大丈夫、と内心に言い聞かせ、アイオリアのベッドの脇に寄つた。

「大丈夫か？ 何か欲しいものある？」

「静寂」

アイオリアがぐつたりしながらも、きつぱりと言い切つた。華氏百十度近くまで上がったとぼやきながら、マイケルを指しながら、「あいつなんて百度いってないんだぜ？」と舌を鳴らした。

「ミロはどうした？ 見当たらなみたいだけど？」

と笑いを堪えてカミュが聞けば、

「あいつはびんびんしてる。これ買ってきた後は薬壺持つて出たつた」

アイオリアは枕元にあるペットボトルとラグビー雑誌を指し示して言つた。カミュは、今はもうすっかり熱が下がり、ただぐつたりしているだけのアイオリアに「お大事に」と言つて部屋を後にした。ミロは恐らく音楽棟に行つたのだろう。体調が万全であれば後を追いたい気もするが、今日は読書でもしていた方が良さそうだ。咽喉の奥に刺激を感じて、カミュは一日図書室で過ごす事に決めた。

てくてくて。

ミロはうきうきしながら楽器を胸の前で抱え、大きなスタイドで芝生の上を歩いていた。ところどころにレンギョウの一群がもこもこと盛り上がり、小山をなしている。長く細い緑の尻尾の間に、ちよろちよろと蕾から割れて覗く黄色に目を細めた。天気の良い日が二日三日続けば、どの枝もいちめ



んに黄金色の星を撒き散らしたようになるだろう。

ミロは、スクールの所有する敷地の外れに向かつてどんどん進んだ。そこは、広葉樹が生い茂る森だ。

アイオリアをはじめとする同室の少年達が風邪っぴきであることに加え、オケの友人であるカミュも軽い咳をしていた。穏やかな土曜の午後、何をするかと考えて、久しぶりに外でバイオリンが引きたくなったのだ。

ミロは知っていた。

春になれば緑になると人は言うけれど、実際はそれほど単純ではなく、もつと複雑で美しい。

すぐ傍にある野バラの芽に顔を近づけて見ればいい。ふつくと尖った新芽は暗紫紅色だ。また、別の植物のある芽はもつと紅かったり、黒かったり、産毛にびっしりつまれて白く輝く芽もあった。様々な植物の芽は、開ききつた葉の形が様々であるように、芽の膨れ方、色、艶も様々で、その上そんな形の芽と成長した葉の姿もさらに異なり、バリエーションの嵐だ。

ミロは、森の奥に分け入りながら、灰色の枝にふくふくと零れる新芽の展覧会に微笑み続けた。下生えの中に時折スノードロップが小さな三枚のスカートを開きミロの足音に揺れた。なんとも言えない幸福感に、ミロは目を細めながら彼の秘密の空き地を目指して歩いていった。分け入れば分け入るほど、人の手の入っていない植物の世界は噴水のように地面から沸きあがり、光の明度も新緑の葉を透けて青みが掛かる。

コデマリやヤマブキの一群が滝のように弧を描き、時折鳥が枝を揺らす音や、足元を何かが素早く走り抜ける。トカゲか、ネズミかもしれない。

息を吸い込むのに気持ちのよい季節だ。

ミロの心は彼が良いと感じるもので満たされ、それは世界に等しく存在する負に対する感覚を鈍らせた。

ミロは、気付かなかつた。彼の後を追う複数の足音に。喜びに溢れる心は、時に無防備に悪意の前に自の体を曝け出す。

バイオリンケースを横倒しになった古木に立て掛けて、ミロは軽く音階をさうらうと Amazing Grace を弾いた。一七八〇年ごろ讚美歌集に収められたこの曲を、ミロは教会で聞いたことは無い。けれど、一度耳にし、その詞の基礎を作った男、ジョン・ニュートンが、ロンドンで生まれ、幼くして母を亡くし、奴隸商船の船長となりやがて信仰に目覚め牧師となりその説教が、イギリスでの奴隸制廃止運動の種を蒔くにいたつたと知った時、単なる黒人霊歌もしくは美しい賛美歌という認識とはまた違った感慨をミロにもたらした。

Amazing Grace には六番まで歌詞がある。ミロはバイオリンで弾くのでそこから言葉は聞き取れないが、彼はいつも六番まで歌詞を囁み締めて弾く。

Amazing grace! (how sweet the sound)

That saved a wretch like me!

I once was lost, but now am found,  
Was blind, but now I see.

'Twas grace that taught my heart to fear,  
And grace my fears relieved;  
How precious did that grace appear,  
The hour I first believ'd!

Tho' many dangers, foils and snares,  
I have already come;  
'Tis grace has bro't me safe and thus far,  
And grace will lead me home.

The lord has promis'd good to me,  
His word my hope secures;  
He will my shield and portion be,  
As long as life endures.

Yes, when this flesh and heart shall fail,  
And mortal life shall cease;  
I shall possess, within the veil,  
A life of joy and peace.

The earth shall soon dissolve like snow,

The sun forbear to shin;  
But God, who call'd me here below,  
Will be forever mine.

Amazing grace…それは、明るい光がぐるり七フィートほどの空き地に注ぎ、周りを取り巻く木立や灌木の枝にぶつんと顔出すこんな静かな時間には、確かに相応しく思える言葉だった。

ミロの指は止まることを知らず、次々と彼の心の欲する旋律を弾き出した。パッヘルベルのカノン、調和の靈感、二つのバイオリンの為のソナタ、どれもミロの弾きたい速さで鳴らしたい音の場所まで、音が次の音に連鎖して流れた。それは、聴衆が居たら、ほう、と嘆息を促すか、最後まで聞きたいという欲求を胸に抱くか、そんな音だった。

やおらミロは肩からバイオリンを外した。違和感のある音が耳に届いたように感じたからだ。次いで、溶け込めないでいる気配。ゆつくりと白皙の額の肩が寄せられた。

何かが居る。

一瞬、また幽霊か？と疑ったが、そんな曖昧なものではない。もっと、明確で鮮明な、『悪意』だ。

気付いた途端、視覚にも情報飛び込んだ。生い茂る灌木のカーテンの裏に、RAIDの一件以来二度と言葉を交わすはずはないと思っていた上級生達の姿があった。

きつぱりと眉根に皺を寄せてミロはきつつく声を出した。「何

の用だ？」と。だが、彼らは、ヒューと高い口笛を一つ飛ばし、細い幹を折りながら空き地に踏み込んで来た。ミロは、一瞬、退路を確認した。数を数えれば、彼らは六人居る。

「なんだよ、もう弾かないのかよ？」

ミロは唾を飲み込んだ。頭の中がザワザワした。今までの中で、一番気持ちの悪い状態に立たされていると、肌で感じた。それに、今は何より楽器を持つている。これに傷一つも付けたくない。ちら、と楽器を守る為、にケースの位置を確認する。背中に、嫌な汗がじわりとわいた。彼らがやってくるその通り道にある低木にケースはあった。

内心の動揺を悟られないように、いつもと同じように言う。「弾かない。もう帰る」

六人は、顔を見合わせて、今言ったミロの言葉をそのまま真似て笑いあった。

「ここは、奴らのたまり場所だったのか？ それとも自分が先導したのか？ どうでもいい。今はどうでもいい。それより、奴らは今までになく、物凄く嫌な感じをしている。どうする？ このまま後ろを向いて駆け出すか？ けれど、その方向ではますます人気がない側になる。森を出るなら、奴らの脇を掠めなければ……」

ミロの、バイオリンのネックを握る手に汗が浮く。我が身だけで逃げれば残された愛器が粉々にされるのは目に見えている。そんな雰囲気は相手は醸し出している。あの脇を突つ切るには、相手がもう少し近づいてから……

ミロは瞬きもせず六人の動きを見守った。

バスケのように、一旦膝でフェイクをかけて、それで体を低くしてダツシユすれば……。ケースはダメだ。捨てていこう。

近付く第六学年の生徒達は、全く熱意のない言葉でもう少し弾いていけ、とがやがやと雑談しながら言う。下草や、小枝がパチパチと音を立てる。

今だ！

ミロは、思いつきり体を低くして右へ走り込もうとした。その勢いに、ゆつたりと構えていた六人はぎよつとして一斉にその道を塞ごうとした。その時、ミロは激しく右足に負荷を掛けて反対の左に飛ぶようにして方向を捻じ曲げた。後は、何も考えず、全力で走るだけだ。そう考えた。空き地を抜けて、後は勝手知ったる獣道を走ればいい。それが、突然、弓手の右腕を全く想像していなかった方向に引つ張られた。

肩の筋がピンツと張り、一瞬その痛みに視界が黒くなる。全部で、七人居んだ！

そう思った時には、右腕を引きづられるようにして空き地の真ん中に立たされていた。

「逃げるなんて君らしくないじゃないか？」

「逃けたんじゃない。帰るって言った」

「楽器のケースや楽譜も置いて？」

冷笑が幾重にも上がった。ミロは、唇を引き締めて辺りを睨み付けた。

「別に君を血祭りに上げようって訳じゃない。唯、世の中は公

平にあるべきだ。我々が受けたことは、君にも味わつてもらわなくちゃ不平等だろ？」

ミロは、目を見開いた。何を言っているんだ、こいつらは？公平にあるべきなら、自分の方こそこいつらには貸しが貯まっている。

「君は、随分と上級生に受けがいらしいじゃないか。こないだは、二寧にも最上学年の生徒ばかりが君の代わりに挨拶に来てくれた」

冷ややかに立つ生徒は昨年十一月に悉くミロの言葉を拒絶したナイジェリア人だった。

「私は、白人に大きな顔をされるのが大嫌いだ。いい加減白人は自分達こそが地べたを這い蹲るに相応しい人種だと気付くべきだ」

呟くように言うと、勢いよくミロの腕を放つた。その力に、ミロはよろけ、バイオリンを庇つた事で重心が安定せず踏鞴を踏んだ。その力の無い状態を、六本の腕が待ち構えて引きずり倒す。背骨を強かに打つ。自由だった両手を万歳するように伸ばし、楽器と弓を守る。肩を押さえつけられる。両足首にがつちりとした手の感触を知る。

「私自身はなんの被害にもあつていないけれど、家畜のやられたことは飼いが報復する権利があるんだ。君には、六頭分の被害を受けてもらわないとね。君たちの好きな平等にならない」

ミロは、初めて悟つた。これは、去年のRADでアイオロス

達が彼らに報復したその事をさしているのだと。

「氣候の良い季節まで待つて差上げた訳だ。君はまだ小さいからね。でも、落書きじゃ済まない事は最初に言っておくよ。何せ、六頭分だ。それ相応の恥はかいてもらうし、写真も取らせてもらうよ。全部、君達白人から教わつた事だ。こちらに非がない事は重々承知するように……」

言うのと、背の高い王者はずつと身を引いた。それを合図に、次々と空から手が伸びてミロの視界を千切る。

このままじゃ不味い。どこか、いつかチャンスがある筈だ。地面に縫い付けられながら、ミロは目まぐるしくありとあらゆる計算を始める。大人しくしておいて、こいつらが油断した隙に反撃を試みる。

隙を、探すんだ。探していると気取られないように。

ミロは、目を大きく見開いたままゆつくりと視線を動かす。色んな手が、色んな方向からミロの衣服を剥ぎ取りに掛かっていた。その嫌悪に意識を奪われないように、必死に詳細に周囲を見る。

叫ばれて人が来たら不味いから、と口に何か布を突つ込まれそうになった。これがチャンスかもしれない。その手に歯を立てようとした時、体をひっくり返され、顔を地面に押し付けられた。体の皮膚のあちこちがスースーするのは、殆ど衣服を剥ぎ取られたからかもしれない。まだ握り締め、体かとなるべく離してある楽器を思ふ。でも、離せない、と。

体を覆うものがなくても寒さを感じないのは、怒りの熱か

からだ、と分かるのに少し時間が掛かった。知らない手に素肌を弄繰り回される不快、割れるようにガンガンする頭に屈く嘲笑、腰を引き上げられ、臀部を割られた時、奥歯が不気味な音を立てた。

「何をやってるんだー!」

突然、人の声が大きく響いた。

ザツという音、目の端を横切る靴、駆け寄る人間の歩みの音が地面を伝って重く響く。背後から現れた足は、一旦は勢いを増して、振り返りもせず声も出さずに逃げた輩の後ろを追おうとした。が、その歩みは止まった。

「ミロ……」

まだうつ伏せたままで居たミロの両肩に手が掛かった。

「おい?! 大丈夫か?!」

ミロは、ぼんやり、ああこれは、アイオロスの声だ、と思つた。それで、ゆつくりと体を起こす。手を突いた指の腹や掌に、細かな石塊や落ちた枝が当たって痛いな、とゆつくり思つた。首を巡らすと、多分自分の衣服なのだろう、妙にべつたりとした感じの布があちこちに散らばっている。手を伸ばそうとして、よろめいた。

アイオロスは、放心しているように見えるミロを尻目に、長い足をスライドさせて後輩の衣類を掻き集めた。掻き集めた服を、片膝立てたミロの膝に置いてやる。そして、楽器と弓を引き取るうとして、その指の、固く握り締められた方に息を呑んだ。

「ミロ、楽器を貸せ。服を着ろ」

「……服」

緩慢に動くミロの首に、アイオロスの背中は一瞬凍えた。自分の爪を食い込ませるように、下手をしたら後輩の指から血を流させるかもしれない、そう覚悟して無理矢理ミロの指を引き剥がした。だが、それだけの力を掛けても、ミロは僅かにも痛がらなかつた。

のんびりと服に手を掛け始めたミロを直視できず、アイオロスは楽器をケースに仕舞い、散らばった楽譜を纏めて袋に突っ込んだ。片方だけ脱げた靴を履きなおい、解けた紐を結びなおそうとするミロの手を見て、アイオロスは手を出した。そんな、白く強張つた指で何が出来るものか。

ミロは終始無言で立ち上がり、差し出された楽器ケースと楽譜を詰めた袋を手にして歩き始めた。が、いくらか進まない内に下生えにつま先を取られてよろけて手を付き、そこで俯いたまま微動だにしなかつた。

アイオロスが、慌てて手を貸そうとその手に触れると、息を飲むほどその手は冷たく、その衝撃にミロの顔を確認すれば、もう、瞠目するほど顔色はなく紙のように白いばかりだった。そして、ただ見開かれた大きな青い瞳には感情が無い。

「負ふって行つてやる。捕まれるか?」

アイオロスは、ミロに広い背中を差し出し乗るよう促した。ミロは動かない。アイオロスは舌打ちをして掬い上げるようにしてミロを背中に乗せて大腿に歩き始めた。

三月は、暖房の効いていない廊下や階段は外とそれ程気温が変わらない。スミス・ハウスのエントランスから階段にかけて、暇つぶしに屯している生徒が居ないことにアイオロスはほっとし、二階の部屋を目指して一段抜かしに階段を上った。そして、弟の居る部屋でもある第三学年の五人部屋のドアを開けた。

ハウス・マスターのベネット氏の扉を叩くべきなのかもしれない。けれど、それでまたミロが医務室に運ばれたりすればいけない注目を浴びる可能性が高い。今は、それは避けたい。アイオロスは、最善とは言えないが、人目を引かない可能性の一番高い方法を選んだつもりだった。ベネット氏には、まず自分が見た事を伝える、全てはそれからだ、と。

見ると、部屋の中ではアイオリアが二段ベッドの下で壁に寄りかかりながら熱意薄く雑誌のページを捲り、ハウは真つ赤な鼻をすすり上げながら何やらペンを走らせ、最近また一段と横への成長を遂げたウィリアムが、空になったチョコレートのを掻き分け新たな駄菓子を探しながら大きな咳を連発し、マイケルがそんなウィリアムを罵りながら時折『死にそうだ』と唸っている最中だった。

一番にアイオリアが、ノックも無しに入ってきた兄に気付き、さらにその背中にある荷物にも気付いた。

「びっしょりしたんだ? ……ミロ?」

アイオロスは、ベッドから身を乗り出してきたアイオリア

を片手で制し、近付いてきたウィリアムとハウに楽器と楽譜を預けると、ひよい、と造作なくミロを二段ベッドの上に担ぎ上げた。

「お前たちの風邪がうつったんだろ。外でバテてた」

アイオロスは、さらりと真実を隠した。

「つたく! 面倒かけさせやがって!」

アイオリアが勢いよく立ち上がり、ミロの様子を覗こうとしたのを、アイオロスは再度止めた。

「寝かせておいてやれ。眠っているから」

アイオリアは、兄を見上げてその横暴な命令に文句を付けようとした。が、何時になく厳しい顔をしてそれ以上口を開こうとしない兄に、黙って掛けていた足をベッドの柵から下ろした。

ぼんやりと天上を見上げているミロの耳に、アイオロスのバイ菌だらけの部屋だ、とからかう声や、同室の友人たちのさざめくような会話、遠ざかる足音、閉まる扉の音そういつた生活音が暫く音楽のように届き、やがて消えていった。

眠いとは感じながったが、体がすうつと布団の下に落ちるような気がして、ああ、これから眠るんだな、と思い握り締めていた指の力を緩めた。

翌朝、少年達はミロの様子がなんとなくおかしい、と感じた。

風邪の具合はどうだ？ という問いに、大丈夫だ、と答える。熱はでなかつたのか、よかつたな、という声に、ありがとう、と返る。

いつもは起きた途端力いっぱい伸びをして、だれかれとも無く喋りかけ、喋つているせいでいつも人より身支度が遅れる。それなのに、今日は無言で着々と仕度をしている。まだ調子が悪いのか、とウィリアムが問えば、曖昧に頷いた。それなので、取り合えず風邪で本調子が出ないのだからという事にしてその日は過こした。

それは、入学以来、考えてみれば初めて見るミロの姿だった。一体今日、誰がミロと何言会話をしただろう。ただみんな、曖昧に、無口なミロを体調のせいとして片付けた。そんな中でカミュは、ミロの瞳の暗さに何度か心配して声を掛けたが、言葉らしい言葉を引き出す事は出来なかつた。

夕食の時間の少し前、ミロがベネット氏に呼ばれた。ミロが、このちよつとお腹は出てきたが、まだまだですらりとした姿の往年の名クォーターバックに名前を呼ばれるのは珍しいことではない。入学してから一番に君のフルネームを覚えてよ、とベネット氏が言うように、事があればその中心はミロか？ と思わせる程大小さまさまのトラブルの中にミロの名前があつた。

それなので、この晩も、カミュ以外に二、三の生徒がミロがベネット氏に呼ばれる姿を見たのだが、彼らの記憶には特に印象を残す光景にはならなかつた。

ただ、カミュだけがずつとミロの姿を追つていた。そして、ベネット氏のプライベートルームへ続くドアが開かれたとき、その中に、スミス・ハウスのチューター、フェローは言うに及ばず、ヘッド・マスターのアンソニー・ヘイド、Children Act Liaison Officer であるグラハム・フオークナーの姿を確認し、驚愕したのだった。

ミロが部屋に戻つたのは、消灯ぎりぎりの時間で、帰るなり直ぐに布団に潜り込んでしまつたと、後からカミュはアイオリアの口を通して聞いた。

二日目、流石に何かおかしい、とアイオリアやハウ、ウィリアムやマイケルが感じ、折に触れ、何かあつたのか？ と問いたです頃にはもうすっかりミロの様子は変貌しきつていた。

どんな時にも、例え本人が強く隠したいと願つてもこぼれてしまう感情を映し出していた真つ青な瞳は、冷たく色を無くし、大きくくつたくなく広げられていた唇は、びたりと閉ざされ、服はきちんと第一ボタンまで掛けられて、タイが結はれていて。

朝食や昼食、果ては夕食まで一人で食べ、今もさつさとシヤワーを浴びに行つてしまつた級友に、同室の友人達はそれぞれ困惑を口に始めた。

『どうしちゃったんだろう、ミロ』

いつもは誰がバカにしても最後まで必ず自分の話を聞き、

笑つてくれていたミロに、真つ向から冷たい一瞥を食らい口オロとするばかりのウィリアムがアイオリアに泣きついた。「なんか俺、肩に手をかけただけなのにすつげえ勢いで払われなせ」

むかついた。と、ハウが仏頂面で報告した。

「まあ、あれだよ、何か没頭する研究テーマが出来たのかもしれない」

眼鏡を拭いつつマイケルがひよい、と肩を竦めて言った。が、今まで一度も断られた事がない推鷹圖書を非常に丁寧かつ他人行儀に「興味が無いので……」と言われ、頭にはその時の光景が何度も蘇えり、それを打ち消す作業で忙しかつた。

アイオリアは黙つて腕組みをしていたが、こめかみと脇腹に青あざを拵えていた。午後の選択授業で、いつもと同じように隣の席に座り、避けられる訳と、何かあつたら相談に乗りたい、力になりたいと深い誠心を込めて動かない横顔に向けて囁きかけ、結果、やつと自分を見たと思つた親友に一言「関係ない」と言われて、血が沸点を越えた。

授業中であるのも関わらず思わず襟首を掴んで自分と無理矢理対面させようとした矢先、思いがけない強さで左から顔面に向けてプロローが飛んできた。何がなんだか判断する間もないまま、あつという間に乱闘になり、手加減の一切ない強烈な足蹴りを脇腹に受けた。

こんな喧嘩の仕方をする奴じゃない、頭が冷えた今ならそう考えるが、その時は自分も思い切り容赦なく殴りつけ、ミ

ロは簡単に壁まで飛んだ。慌てて飛び込んできた教師に引き離されたが、熱くなつている自分とは反対に、ミロが全く冷たいままで、こちらに意識を向けていない。

たんにクールというのではなく、アイオリアにとつては酷薄と言え程の苛烈さで殴られるより強烈に傷つけられた。

その後、直ぐに席を引き離され、授業後アイオリアだけが教師に訓戒を受けた。そして、最後に一言「フェアファックスは暫くそつとしておきなさい」とやんわりと窘められた。そこに食らい付いたが、どう切望しても回答を得る事は出来なかつた。

一方、カミュの方でも、『何か』があつたのだらうと推察出来ても、『何か』あつたのかは推測出来ず、思考に消化不良を起してはいた。

RADの時に感じたミロへの印象が蘇る。普段は意図せずに周囲を巻き込んで騒動を起しているミロだが、事がただのからかいや、悪戯程度のことでは済まされないうな、ミロにとつてシリアスな内容——そういう受け取り方をされた事になると、彼は他人を拒絶する傾向がある。

火曜の夕刻はスクール・オーケストラの活動がある。既にその頃合にはカミュの耳には午後の授業でアイオリアとミロが派手な喧嘩をした事が届き、朝食は愚か昼食も普段は一緒にとつている同室のメンバーと一緒にではなかつた事を感知していた。

はなからおかしいと思つて観察しているので、人より鮮明



にその奇怪さが見える。ミロは、月曜からこの方、恐らく一度も笑っていないのだ。それどころか、あからさまな感情は一切彼方に放り、自分の周りを全て無機質なものに代えてしまっているようだった。

極めつけは『音』。

この日ミロの出した音は酷いものだった。技術があつても、それを支える気配りや、自分がどんな音を出しているのかを図るある意味第三者的な視点、『音』に対する愛情、それら一切が抜け落ちると、どんなに途切れなく演奏されても、それはノイズと同義の音だとまざまざと知る。加えて、自分の壁を厚く高く築いてしまった状況では、周囲への注意も低く、走ったり、指揮者の細かな指示を見落とし全体から突出したりと散々であった。

とうとう、セカンドのトップであるサガ・チエトウィンドが中休みの時間にミロを呼び、退出を命じた。ミロは、これまであれほど意識してきた先輩の言葉に顔色一つ変えず、無言でそれを実行した。異常事だった。

そして、ミロの退出した後を、コントラバスのアイオロスが追ったことも奇異だった。結局、アイオロスは五分ほどで戻り、その姿を目に留めたサガが何か聞いたげな色を一瞬瞳に刷いたが、そのまま練習は再開し、カミュは、今回もミロの懐が一番近くまで迫って行っているのがアイオロスなのだと感じた。

なんとか、今度こそミロから言葉を引き出せないか？ カ

ミュは機会を窺っていた。

三日目になった。ミロが同室の四人と食事を取らず、一人でもくもくと食物を取り込んでいる光景をスミス・ハウスの人間が目撃するのは。

ミロの顔立ちには、本人が一向気にせず乱雑に扱っているのでその端正さが『女の子』のようだと評されるに止まっているが、実際の所ほんの一握りの人間にしか当てはまらない秀麗な容姿の所有者だ。

彼が彫像のように沈黙し造語を一筋も乱さないと聞かす異様な迫力が生じる。これ程の近寄りたがたい雰囲気も出せるのだと、彼を軽視するものにはちよつとした驚きを与えたが、殆どの人間が多かれ少なかれミロに対し好意、ないしは公平な立場の人間だったので、彼の豹変はいぶかしがられ察じられていた。

天気は、週末の晴れやかさはどこに行ったのか、冬の欠片が無い戻り、寮の食堂や談話室のストーブには再度火が入られた。寮内はセントラルヒーティングが完備されていたが、臨床心理で火が人間の心を与える効果が証明されて以降、人の集まる場所にはこうして回顧的な暖房器具が意図的に残さ

れている。肩を窄めて寮から校舎へと戻っていく昼食後の僅かな時間。

カミュは部屋の前廊下でマフラーを取りに戻ったミロと鉢合わせした。

「丁度よかった、と口にした。」

ミロはあいかわらず蒼白な顔にお面を付けているようなのっぺりとした表情をしていたが、そこは努めて気にしないように、為るべくこれまでと同じように話しかけた。

金曜の実験化学の授業で提出するレポートについての相談だった。いつもと同じように、和やかに話しかける。手にしたレポートの紙束を差し出しながら。

「結果と考察は、授業中に書いたものでいいと思う。目的と緒論を書き加えておいたけど、気に入らなかつたら直してくれるかな。実験ノートは君が持つてるから、準備と手順のところを書き加えてもらえ、もう提出できるよ。」

カミュは微笑みかけて言葉を閉じたが、ミロは、すつぱりと口元までマフラーで覆った状態で短く分かった、というような言葉を漏らしただけだった。ミロの目は、ちらともカミュも、カミュの差し出すレポートも見なかった。カミュは差し出していた腕を下げると、小さく嘆息して言った。

「ミロ、何かあったのか知らないけど、そろそろいつもの元氣な君に戻らないか？ アイオリアも、ハウも、ウィリアムやマイケルでさえ本当に君のことを心配しているよ？ 君にも何か面白くないことがあつたんだらうし、それがもしかしたら僕らのせいなのかもしれないけど、僕らにはみんな心当たりのないんだ。何か不満があるなら、言ってくれば直すよ。」

君は月曜日から、どうしてそんなに鬱屈しているんだ？」

カミュの言葉は決してミロの態度を非難するものではなく、淡く遠方を失つた居心地の悪さを含んで静かだった。

「ミロはふつと、カミュの赤茶色の瞳を見詰めて口を開いた。『いつもの元氣な君』っていう認識が違ふんじゃないのか？ こつちが『いつものオレ』だったら問題ないんだらう？」

カミュは、無遠慮なミロの冷たい口調に驚き、眉を蹙めた。「だって……今まではそんなじゃなかつただらう？ 君は僕なんかよりもずつと、明らかで前向きだつたじゃないか。本当に、一体何があつたんだ？ どんな事があつて、何を諦めてしまったのか分からないけど、今の君が本当の君だつていうんなら、学校生活なんて成り立たないよ？」

ミロは、言われた事の意味が掴めず僅かに疑問の表情を表した。

「こんな狭い敷地に、二百人以上の学生が朝から晩まで共同生活しているんだ。誰の好意も受けず、そんな風に自分の殻に閉じこもつて過ごすなんてできる訳がないじゃないか」

続いたカミュの言葉に、ミロは僅かに持った関心も失つてそつてなく返答した。

「なにが？ 言われたとおりちゃんと服を着て、無駄な騒ぎも起きず、大人しく普通にしているだけだ。これが殻に閉じこもつていてるっていうんなら、みんな大なり小なり殻に閉じこもつていてるんだ。オレだけにとかやく言うのは間違つてる」

「大人しく、普通に？」

カミュの色気が強くなつた。今のミロは普通じゃない。重々承知しているつもりだったが、これだけ周囲に不機嫌をばらまいておきながら、なお自分のことしか考えない身勝手さが、カミュには我慢ならなかつたのだ。

カミュの瞳の端に僅かに陰が浮く。

「これまでの友人に本気で殴り掛かり、否定的な態度で傷つけておきながら何が普通だ?! いつまでも自分だけが傷ついたような顔をして、自分の行動がどれだけ他人を傷つけてるか気付きもしない、そんな普通がまかり通るなら、共同生活なんて成り立たないと言ってるんだよ!」

「共同生活を成り立たせるのがそんなに大事か。勉強するために来ているんだろ。自分の事は自分で、それでいいだろ。誰に迷惑を掛ける訳じゃない。傷付けられたと思うんだつたら近付かなきゃいいんだ」

カミュは、咄嗟に言葉を失い目を見張つた。今日の前にしている人間が誰なのか再度自分に問う。しかし、その結果を加味するまもなく、次の瞬間には、本気でミロを睨み付け言い放つてた。

「…結構。そんなに言うなら、自分のことは自分でやれ。ご希望通り、二度と近つかないから安心しろ」

微動だにしない青い眼差しを強く射て、カミュは手に持っていたレポートを引き裂き、ミロの足下に叩き付けて去つた。

ミロは、床に散らばつた紙片を拾い集めるときつと部屋の屑籠の中に落とした。一片一片が揺れながら落ちる。見え隠

れする端整な筆跡に、幽かな懐慕を感じたが、それも一緒に屑箱の中に置き去りにした。

四日目の木曜。ミロはスクール・オーケストラに顔を出さなかつた。入れ替わり立ちりカミュの元に何か聞いていないか、様子はどうなのだ、と何う者が訪れる。その人数の慮外の多さにカミュは人知れず僅かな感動を覚えたが、前日の一件以来、悉くミロとの接触を絶つているし今後も接点を持ちたいと思わないことから控えめにではあるが、自分に聞いても何も回答を得られないこと、今後もしそれは変わらないことを匂わせながら言葉を返した。

何が、『誰に迷惑を掛けるわけじゃない』だ。十分に、今、ここで自分が迷惑を被つている。カミュは積もる苛立ちの全てをミロに向けた。

帰宅後、アイオリアから『自分もカツとしたのが悪かったのかもしれない』と相談を持ちかけられても、今後一切自分はミロと関わるつもりはない、ときつぱりと言いつつた。

「お前つて、一度怒らせると面倒なのな…」

アイオリアが思わず呆れた声を出したが、カミュは曲げなかつた。

「僕は十分寛容なつもりだ。でも、他人を傷つけて当然の顔ができる人間とは付き合えないし、付き合いたくもない。価値

「観が違いすぎるよ」

「でも、俺達の方でもミロを傷つけてたのかもしれないって、ちよつと思うんだよな……。誰にだつてそつとしたいって欲しい時つてあるだろうし……。兄貴がさ、あの後、一週間ぐらひは見えてみないふり出来ないのかつて、さ」

アイオリアは、ちよつと不貞腐れて「なんか知つてるみたいなんだよなあ……。でも絶対に言つてくれないんだ。口が堅いのは尊敬するけど、ちよつと意地が悪いぜ」と呟いた。

カミュは、暫く顎に拳をあててアイオリアの言葉を検討していたが、やがて落ち着いた態度で言つた。

「たとえ、何かがミロの身に起こつたんだとしても、それは僕等の知らないことだ。アイオロス先輩だけが知つてるならばなおさら。そつとしておいて欲しいならさう言えはいい。僕らが悪かつたのなら、さう主張すればいい。何もせず、いたずらに周囲に不安をばらまいて、『普通』だの『他人に迷惑をかけない』だのと口にする事自体が、僕には理解できないんだ。自分がどんな状態だつて、死守しなければならぬことがあるだろう？」

「ああ……」

アイオリアは、少しカミュを気の毒そうな目で見た。

「なんとなく……お前が普通に当たり前だと思つてる事が、ミロにはさういう縛りがないんだろ？な、きつと。お前が『死守しなきゃならない』と思つてる事つて多分あいつの『死守したい』もんと違ふんだ。俺とも違ふから、きつとさういうも

んなんだろ？な……」

アイオリアは短い頭髪をがしがしと搔いて最後に言つた。「なんにせよ、俺、お前だけは怒らせて敵に回したくないや」

五日目の金曜日化学実験では、ミロとカミュと同班の生徒が大変居心地の悪い思いをする羽目になった。

カミュは、ミロ以外には常と等しく非常に友好的であつたが、ペアのミロとは必要最小限の言葉しか交わさず、ミロはすっかり冷たい表情が板に付き、抜き身の剣を持つミカエルのようにだと囁く者も現れ始めていた。

困惑したり、流したり、意に止めなかつたり、心もとなく思つたり、十人十色の心模様の中で、一人だけ、この現状に吉兆を見出し望みに胸を押さえた少年が居た。

ポール・リッジウェイだつた。

パブリック・スクールに入学する以前から、カミュの存在に崇拜と稚気ながら独占欲を自覚していたポールだけが、一変した流れに期待を寄せた。

ポールが、人生の中で最も情熱を注いできた音楽、歌に対する惜しまぬ精勤を、カミュだけが理解出来た。カミュだけが、もつとも高みに自分の声を押し上げるアルトとして君臨した。何もかも、カミュの全てが自分の為に存在して欲しい。自分がカミュを求めるのと同じ強さで求められたい。

カミュは、あまり自身の感情を表に出さない。その籠つた熱の温もりが、時に音楽を透けてポールに伝わる。ポールは、自惚れでなく、一番にカミュを理解できているのは自分だと確信していた。自らの呼吸で、肺で、内臓で、筋肉で、心臓の鼓動で歌を歌う。体の中から誕生させる。そこに、どんな隠し事が存在できるだろう。

ただ、もてる限りの自分自身で立ち、歌うしかない。

カミュは、面倒見がいい。だから、入学してからこちらずつと問題ばかり起こしているミロ・フェアファックスの横に立てるよう自分の時間を削りてきていた。それは、カミュの道徳観や紳士的な配慮でなされているにしか過ぎず、ミロという人間が、カミュがこれまで友人として近づけていた基準内に入るとは到底見えない。そういう無駄な時間を、無神経にカミュから奪うミロが、ポールは嫌いだつた。

ところが、水曜日の午後から、一気にカミュはミロから遠ざかった。自然、カミュに最も勤勉に働きかけるポールにその時間は降り注がれた。

ポールの望みは今までにならないほど満たされ、さらに量と質を求めて加速した。自分にも、カミュにも、時間が限られてある事がある。その悲しさが、求める強さに拍車をかけた。

日曜日、いつものように聖歌隊で午前の礼拝のつとめを終

えた後で、ポールはカミュにある申込みをした。

カミュは毎週礼拝後に、教会のパイプオルガンを借りてオルガンの練習をしている。

その誰にも邪魔されず音楽に没頭できる時間に、自分を加えてもらえないか、と頼んだのだ。

「君は歌い弾きも出来るし、二人でいろんな曲に挑戦出来るよ？ 勿論オルガンの練習が終わった後で構わない。だめかな？」

ポールは、心を込めて訴えた。自分と君となら、技術レベルも釣り合うし、いろいろなレパートリーが楽しめる、と。

「これまで難しいからつてやらせてもらえなかつた曲とか、……あ！ 僕、ずっとフォーレのアヴェ・マリアをやりたいと思つてたんだ！ ルーファスとなら出来るよ！ 試してみないか？」

カミュは、この突然のポールの提案に困惑した。ポールの歌の技量は確かに優れていて、時折カミュ自身にも重い地上の柵を忘れさせる。彼が時折見せる、彼の気に入りのアルトに対する独占欲には気を塞がれることもあるが、ポールの歌は好きだつたし、聴衆がなければあの嫌な気分には捕われることもない。加えて、フォーレのアヴェ・マリアはカミュもとても好きな曲だつた。一度イエス、と言えば、今オーケストラやピアノ、その他いろいろな友人達に結びつけられている絆が、再び解かれて歌に集中してしまふそうだった。

カミュには、その一度足が地を離れば二度と戻れない吸引力が怖いのだ。ポールは自ら進んでその力に身を任せる向

きがあつたが、カミュは昔からそこに警戒心を抱いていた。

歌の翼は、いつか折れる。

それも、そう遠くない将来に……。

「オルガンの練習の後つて……君は、それまでずっと待つているつもりなのかい？」

大きな灰色の瞳を輝かせて抱負を語るポールに、カミュは、漸く一言控えぬ返答をした。あまり気乗りがしないことを分かつてくれたら、と願う一方で、自分の言葉がとてどもそうは聞こえないことに落胆する。

「僕は待つているのは全蒸構わないけど、練習を聴かれるのつてやつぱり嫌だろ？ だから、一度外へ出て、終わる頃に戻つて来るよ」

「いつも、終わる時間はまちまちなんだけど……」

「終わつてなかつたら、また外にでて、暫くしたら戻つて来る」

「そんな……大変じゃないか」

「いいんだ、僕がそうしたいんだから」

きつぱりとポールは笑い、その笑顔を真剣なものに変えて、言つた。

「お願いだ、ルーファス。……もう、あんまり時間がないんだ……」

少しうつむいて唇を噛むポールに、カミュは絶句した。

入学式の日、ポールはクラスで一番小さい生徒だった。それがこの半年でぐんぐんと身長を伸ばし、今やあと数インチでカミュやアイオリアの身長に届こうとしている。

彼等の年齢には、小さな身長は普通大きな悩みの種だ。誰もが早く大人になりたい、大きくなつて格好良くなりた、と願う。だが、ポールは違つた。小さな身長と、そこから生まれる声の奇跡を誇りに思い、少しでも長く子供でありたいと願つてきた。

何という皮肉だろう。あれほど小さな体を嫌い、大きくなりたいと願つているミロ・フェアファックスがまだ子供の体なのに、ポールの身長は本人の意に反して今も伸び続けている……。

ミロ。その言葉に、カミュの頑な思考がふと緩んだ。そういえば、先日バツハを聴かせてもらった時に、ミロと約束したのだ。声変わりする前に、ポールに手伝つてもらつて一度歌を披露する、と。

……ばかな。ミロとはもう、付き合えないのに。

カミュは眉を潜め、心に浮かんだあのときの風景を打ち消した。直後、その記憶は水曜日の変わり果てたミロの姿にすり替わり、カミュは暫くその不快感を表情に出さないう腐心しなくてはならなかつた。

ポールが目前にいるというのに、この場にはいない人間への苛立ちがつのる。よくも、あそこまで自己中心的になれる、と。それはカミュが最も嫌い、唯一軽蔑することを己に許す人種であり、出来れば姿も見たくないと願う人間の姿だった。

会えば気分が悪くなるのは分かつているので、あれ以来、ミロとは一度も顔を合せていない。だが、自分の中に存在

する。そういう負の感情を、常に意識し続けるのはなかなか辛い。そういう時、カミュは音楽に縋るのが常だった。音楽に没頭するうちに、鬱積した心の澱は洗い流され、もう少し心に余裕を持つ事が出来る。

漸く泡立つ感情を押し潰し、疲れて肩の力を抜いたとき、ふと、カミュは思った。

歌つても良いかもしれない、と。

ポールの声は、確かに、そういう負の感情を洗い流す力がある。それ以上に、カミュの心は既に水曜日からの鬱屈で疲れきっていて、今はより強くカミュを現実の世界から引き離してくれるのが必要だった。

……ひどい都合主義だな。

どこかで、ポールの情熱を利用しようとしている自分を責める声が聞こえたが、カミュにはもうその思い付きに抗う気力はなかった。

「……わかったよ。一緒にやろう。……毎週つてわけにはいかないと思うけど、オルガンは、その後に練習するよ」「本言に? ルーフアス!」

「うん。……確かに、もうあまり時間がないしね。お互いに。」

「あ……ありがとう!!」

ポールの頬にぼつと喜色が浮かび、全身からはち切れんばかりに喜びのオーラが溢れた。ポールは、両手を広げ、どこかほつとした表情で微笑むカミュを抱き締めた。

子供っぽい行動の裏には、複雑な感情と計算がある。溢れ

る想いをそのまま相手に押し付けられれば、困惑、或は拒絶の対象にもなる。だが子供のじやれ合いには誰もが寛容になる。抱き締めたカミュの確かな存在感に、ポールは陶然となった。

ルーフアスが、本当に好きだ。

そのへんの、格好だけ育つてて頭の中身は獣同然の連中と付き合うなんて、勿体無さすぎる。

僕だけが、ルーフアスの本当の声を知ってるんだ。言葉じやない、本当の、心の声を。

カミュは、自分にしがみついたまま離れないポールに初め驚いたが、やがて咄嗟に緊張して上がっていた肩を下ろし、笑いながらポールの背中を二、三度叩いた。こんなに喜んでもらえるなら、申し出を受け入れてよかった、と。彼は純粹に自分の言動が他の誰かを喜ばせたことを快く感じていて、その裏に潜むポールの計算やカミュに対する感情の温度には気づいていなかった。

二人は笑いながら離れ、オルガンの演奏台に向かった。楽譜を用意していなかったのが、その場にあつた賛美歌集をとり、所々オルガンで音を取りながら、全部で三百曲余りもあるコーラルを一番から全て歌っていた。それは、彼等の技量を考えればあまりにも平易な音列だったが、彼等は時に楽譜を逸脱し、自由に装飾や対旋律をつけ、互いに互いの技量と感性を讀みながら歌い進んでいった。

食事でも休憩も忘れて歌い続けた数時間が過ぎ、日も傾きか

けた頃、カミュは漸く賛美歌集の最後のページを譜面台の上で閉じた。肩の力が抜け、呼吸は深くなり、重く胸に凝り固まっていたものはすっかり浄化されている。改めて、自分にとつての音楽の重要性を感じた。こんなにも歌に集中した時間は久し振りで、当初気が進まなかつたのが嘘のようだった。

隣のポールを見れば、その横顔は落ち着いて自信に溢れ、他の級友達よりもずつと大人びて見える。

初めて、カミュはポールがもはや最初に出会つたころの子供ではないことに気づいた。

「ルーファス」

ポールが、遠くステンドグラスの光に眼差しを置いたまま、訊いた。

「どうして、歌を止めたの？ こんなに歌えるのに」

その声は、静かで、あたかも年上の少年の声のようにカミュの耳に響いた。

「表の理由は知つてるよ。君のいた合唱団で、ソリスト二人が君のせいで大喧嘩したって、僕も噂に聞いたもの。だけど本当は君の所為じゃない、あの二人がどっちも君を独占しようとしたんだ。みんな、君がイソップ童話のコウモリみたいで悪いみたいと言つてたけど、僕だけは違つて信じてた。……だつて、僕だつてその場にいたら、絶対に君以外のアルトとなんか組みたくないからね。」

カミュは絶句し、ただ呆然とポールの横顔を見つめた。当時、カミュの合唱団はソリスト二人が率いるそれぞれのグループ

に分かれて、真つ二つに割れていた。当初、互いの悪口を挙げつらつて何とかカミュを自分の見方に引き入れようとした両陣営は、カミュがどちらにも靡かず両者の関係を改善することにばかり執心しているのを見ると、遂にカミュ本人を排斥した。

「だけど、僕がその場にいたら、そんな喧嘩なんてさせなかつたよ。僕の方が、絶対あの二人より上だつて自信があるもの。歌で勝負しないで、くだらない喧嘩に君を巻き込むような奴らに、僕は負けない。必ず実力で、君と組めるポジションを狙つたよ」

ポールは強い口調で言い切り、こつ付け加えた。

次の機会があつたら、絶対もう一度、君と組みたい。ずつとそう思いながら、歌つてきたんだ、と。

「……だから、君と同じ学校で、同じ部屋になつたときには、本当に嬉しかった。きつと神様が、僕の願いを聞き届けてくれたんだと思つた。今でも、そう思つてるんだ。だつて、現に今、君は僕の目の前にいるんだから。……ほんとは、この声が出なくなるまで、君と一緒に舞台に立てたら思つてたけど……君が嫌なら舞台なんか立てなくてもかまわない。ただ、君と歌いたい。それだけなんだ」

そうして、一瞬次の言葉を躊躇い、それから少し震える声で言つた。「君のことが、本当に好きだ」と。

カミュは暫く、その言葉をじつと噛み締めていた。初めてこの学校にやつてきた時、ポールはまるで小さな弟のように



カミュの後ばかりを追つて来た。その姿をただ知つている人間に出会つた喜びと判じ、時に微笑ましく、時に疎ましく、いつまでも他の級友と打ち解けない彼を心配すらしていた自分は、なんと愚かだつたのだろう、と。

カミュは、何を答えればよいのか、じつと考えた。「好き」というポールの言葉は、おそらく多分にプラトニックな感情だろう。彼の好悪は常に音楽に透ける部分に向けられていたし、その音楽も宗教曲以外にはあまり情熱を示さない。生々しい関係は、むしろ音楽を穢す、と、きつとポールならそう言うだろう。

だが、たとえそうであつても、カミュにはポールの感情に応えることはできなかった。カミュは慎重に言葉を選び、それから漸く言葉を返した。

「……僕は、君の歌が好きだ。僕の知つている中では、君は一番音楽に誠実なソプラノだから。……自分でも、少しびつくりしているんだ。今迄は、あまりいい気分で声が出なかつたんだけど……今日は、本当に楽しかった。久々に、何もかも忘れて歌つたよ」

カミュはそう言つて、でも、と小さく呟いた。

「僕には、他にも大切なものが沢山ある。オーケストラも、ピアノも、沢山の友人達も……君からみたら、何て気のない中途半端な奴だと思つたろう。でも、どれも捨てられない。君が歌に全てを捧げるようには、僕は歌に全てを注げない。君が僕のことを好きだと言つてくれるようには、僕は君の事を

考えられない。……それでも……君は構わないのか？」

「構わないよ！」

突如、ポールは叫んだ。今迄正面を向いていた顔をカミュの方に向け、ほんの少し泣きそうな灰色の瞳がカミュの瞳を射抜いた。

「それだつて、ないよりはずつといひ……い！」

ざくり、とカミュの心臓が大きく鼓動した。驚いたのは、ポールの叫びの故ばかりではない。その強い意思を宿して光る瞳が、一瞬、全く別の、引き込まれそうに青い瞳を思い起こさせたからだ。

あ……………。

今、最も思い出したいくない筈の人間の顔をポールに重ねてしまつた自分に、カミュは驚愕した。

ポールとミロは、全然似ていない。顔かたちも違うし、性格も少しも似ていない。

それなのに、この必死な瞳だけは、同じなのだ。カミュに向かつて来る、自分が傷つく事も厭わない、強い瞳。

……何故、ミロなんかを思い出すんだ？ もう、彼に興味なんてないのに……………

そう考えて、カミュは再び気付いた。これまでの自分が、かなりの比重をかけて、ミロを気にかけていた事に。

「本当に……君はそれで後悔しないの？」

「絶対後悔なんてしないよ！」

何度も言っているのに、と、ポールが頬を紅潮させる。カ

ミュは漸く笑みを誘われた。

「わかった。それならまた来週、ここで続きをやる。フオーレのアヴェ・マリア、僕も好きなんだ。楽譜は君が持つているの？」

無理矢理思考をミロから引き剥がし、気持ち切り替えてポールの肩を叩く。ミロのことは、もう少し時間のある時に落ち着いて考える必要がありそうだ。泣きそうだったポールは、少し赤みの差した瞳を上げ、うんと再び頬に笑みを浮かべた。そのしなやかな強さと澄んだ明るさに、カミュの心にはほんの少し罪悪感という名のしこりが残った。

……ポールだって、十分に才能も魅力もあるのに、どうして今ミロのことなんか……

その夜、カミュはベッドに入った後も、ずっと目を開けて考え事をした。

明け方、漸くおとずれた眠りの中で見た夢は、今よりもずっと背が伸びて大人びたミロと二人で湖へ遠乗りに出かけ、非常に親密に、楽しく語り合う夢だった。

「フエアファックス」

日曜の午後十九時。真つ暗な部屋にたった一人ベッドで丸くなって過こしていたミロの耳に、静かな声が流れた。

続いて床の軋む音、足音だ。それはゆつくりと近付いて、ミロの側でビタリと止まった。

「飯も食わずにこんな暗い部屋で一人で居ると、余計滅入るぞ？」

アイオロス・エインズワースだった。

「飯、食わないのか？」

ミロは無言で頷いた。アイオロスは嘆息した。

「じゃ、せめて電気くらいつけとけ」

アイオロスは一度ミロの側から離れると、戸口に行き灯りを点けた。パツ、と部屋が明るくなり、その眩しさにアイオロス自身が目を細めた。歩いて、アイオリアのベッドに腰掛ける。

「キャプテン・ベネットに聞いたよ。うまくいつてないんだって？」

昨日の土曜、一週間前の事件の最初の報告会が開かれた。Oikhen Actの学校内事務所の担当者と、ヘッド・マスターをはじめミスハウスのハウス・マスター、セカンド・マスター、チーター、ミロが席に着いた。

Bulking。いご。

アイオロスの報告に、ハウス・マスターのベネット氏は Bulking で否定的判断した。

いじめとは、他の人に痛み、不幸、屈辱、苦しみを引き起こす、意図的な暴行として軽率な行為のことであることを定義とする。身体的な暴力やしつこい言葉による虐待もふくまれる。ハウス、クラス、食堂など社会的グループからの排除もまた、いじめである。自尊心を踏みにじったり、所有物を取り上げたり、台無しにする事もいじめと見なされる。初期の段階では、ハウスマスターがこれに対処するが、深刻なケースはヘッドマスターに連絡される。ヘッドマスターは Children Act Liaison Officer に調査を依頼し、調査を踏まえたいうで、放校も含む適切な処置が検討され実行されるのだ。

ベネット氏は、アイオロスから話を聞いた日に、すぐにヘッドマスターのアンソニー・ヘイドに報告書を提出し、調査を依頼した。連絡を受けた Children Act Liaison Officer であるグラハム・フォークナーは直ぐに事務員を数人ピックアップして被害者のミロ・フェアアックスと加害者側の生徒達の調査を開始した。

個別に面談は言うに及ばず、事件の内容は秘したまま、あらゆる角度から事の真実を追究する。

その、一週間の結果が当事者と関係者に伝えられ、ミロを除く大人たちは一様に暗い溜息をついた。相手側は全面否定し、逆に、人種差別として公に訴える、と出てこられたからだ。加害者側には、黒人が三人いる。あのナイジェリアンの取り巻き達だった。

公にされれば、彼らが主張する内容は嘘であつてもセンセ

ーショナルに、もつとも隠しておきたいプライベートな部分  
が流れるのだ。ミロ・フェアアックスが、『暴行をうけよう  
になった』と。汚名を着せようとする偽りの証言を教官に行つた。と  
アイオロスが、聖書に誓つて証言したとしても証拠がなけ  
れば断罪の決め手にはならない。誰も、ミロやアイオロスが  
偽りを言っているとは思わなかつたが、格としたり証拠がない  
うちに断罪することは、本人達が一片の罪悪感も羞恥心も持  
ち合せていないなら危険な賭けだった。処罰が決定した生  
徒らが、腹いせに事の次第をばら撒く恐れがある。

もちろん、学校側は素早く対処するつもりではあるが、何  
百人もの生徒は刺激に飢えている。人の口から口へ、何が削  
られ、何が誇張されるか：他校の例を見るまでもない。

「フェアアックス……君は、以前から君自身がからかいの  
対象にされやすい事を自覚していた。それなのに、何故そんな  
人気がないところに行くなどしたんだね。」

フェローのデイビッド・マックアリスターが白髪を短く刈  
り込んだ頭をやれやれというように振つて言つた。彼も、ミ  
ロには同情していたのだが……その言葉は、ミロの中の全てを  
凍らせた。思考も、時間も、これまでの楽しかつた思い出も  
なにもかも、暗い底の無い部屋に吸い込まれ重い鍵が掛かる。

「あの……いいですから……オレ……」

職員が目が一斉に、殆ど口を利かずに座っていたミロに注  
がれた。

「オレ、別に彼らに罰を食らわしたいとか、そういうので言つ

てるわけでも、やつてるわけでもないの……」  
 「どう言う事かな？ マックアリストワー氏は君が悪いといつて  
 いるんじゃないよ？」

慌てて Children Aid Liaison Officer であるグラハム・フオー  
 クナーはミロの顔をやさしく覗きこんだ。被害者は二通りだ。  
 相手を強く非難し屈服させるまで熱が収まらない者と、自分  
 が悪かったのだから、と心を閉ざしてしまふ者だ。先のグラ  
 ハム・フオークナーの一言はあまりに軽率だ。

「少し疲れたかな？ 休憩するかい？」

「いえ……あの、本当にいいですから。それだけです」

フオークナーは一同を見渡した。

「そ。じゃあ、今日はもう終りにしよう。疲れたね。また来  
 週経過を報告するから、それまでに何かあつたら僕や、ベネ  
 ットさんに相談しに来てくれるね。もし、君が一番話しやす  
 いのがエインズワース君だつたら彼でもいい。こんな小さな  
 こと、とか君の方で決めちゃだめだ。なんでも言つていいん  
 だよ。いいね？」

フオークナーは軽くミロの背中を元氣付けて立ち上がり、  
 温かい微笑を浮かべて部屋の外に連れ出した。

そして、部屋に帰つてから、ミロは脱力して重い体をその  
 ままベッドに沈み込ませ、アイオロスがこの部屋を訪れるま  
 でたどうとうとしながら過ごしていた。

様々な事が、心に届かない。以前は、友人や外や授業は楽  
 しいものだった。大切だと思つていた。それなのに、今はそ

の全てが煩わしい。アイオリアが心配そうに始終こちらを見  
 ている事や、カミュの怒りの表情やその後の絶交まで、全て  
 見聞きできていたが、それらが何もミロの気持ちに働きかけ  
 ない。何かが変わつたのだ、とミロは思った。そして、もう、  
 これからはずっとそこののだ、と。

「お前、十曜のオケ無断で休んだら？ サガが心配していた  
 ぞ？ 最近は食堂でもお前を見かけないってな」

アイオロスの声が、ベッドの下から聞こえた。この人は  
 こんなに静かな話し方も出来るんだな、とぼんやりトミロは  
 考えた。

「キャプテン・ベネットも心配してた。お前が、疲れてるんじ  
 やないかつてさ」

ミロの脳裏にハウスマスターやサガの顔が浮かんだ。が、  
 やはり何も感じない。

「相手に処分を求めないって言つたんだってな。なんでだ？」  
 ぼつん、とミロは今一番分かつてもらいたい言葉を口にした。

「面倒くさい」

「面倒くさくつたつて、校則は校則だ。やつて悪い事をやつた  
 ら罰せられなきゃいけないだろ。面倒くさがつてどうする」

「アンタだつて煙草吸つてるじゃないか」

「俺が煙草吸つてるのは個人の嗜好の問題。今は校則でひつか  
 かつても、あと何年かしたら法律に許可される行為なの。でも、  
 やつらのやつた事は、何年たつたつて法律も道徳も許さない  
 行為なんだよ。一緒にするな」

アイオロスは、返事が途切れたミロの寝台を見上げて息を吐いた。

「なあ、俺の親父が弁護士やつてゐるのは話したよな？ 親父が、まだ駆け出しの頃、シカゴで仕事がなくてヒーヒー言つてた時にな、ある少年犯罪の弁護を頼まれたんだ。引き受けてさ、そいつが無実を訴えて、有罪になったらどうしようつてパニックつてゐるのを見てさ、絶対的な証拠もなかったから無罪を主張したんだ。で、見事無罪の判決が下りた。

それから何年したかな。ちよつと凶悪な殺人事件が起きて、その犯人が親父に弁護を依頼した。なんでそんな奴に名指しされるのか親父は分からなかった。が会つてみてびっくりだ。そいつ、その時親父が無罪にした少年だった。

そいつがさ、親父に言つたんだな。なんであの時自分を無罪にしたんだつて。もしあの時有罪になっていたら、自分は犯罪を犯さなかつたかもしれないのにつてさ。

ふざけんなつて言つてやりたいが、少し、そいつの言つてゐる事も分かる。

犯罪の四十パーセントは重複犯だ。最初は軽い犯罪でも、どんどんエスカレートする。最初が肝心なんだよ、最初の的確な時間、方法、適量の刑罰、それがブレーキになる。

お前が、傷付いて、これ以上不愉快な思いをしたくないつて言うのも分かる気がする。

本当にやられた訳じゃないんだ、いつまでも勝手に落ち込んでゐるな、と言うこともできる。男なんだから、大したこ

とないだろうつて言うこともできる。

でも、俺が本当に言いたいののはこれだけだ。

お前が、本当でも嘘でも、奴らに関わりたくないつていうならそれを貫き通していい。だが、あいつらに自分のやつた『罪』を自覚させる事を投げないでくれ。これから先、あいつらの前に続く時間の中で、同じような、けれど取り返しのつかない傷を奴らが他の誰かにする事を防ぐ為に協力してくれ。

お前が、やつらの最後の被害者になつてくれ」

白熱灯の灯りが、揺れる事無く部屋に落ちる。真つ直ぐに光は影をつくり、見えるものをより際立たせる。

沈黙が長く続いた。

ミロも、アイオロスも、身動き一つしなかつた。少年達の枕元に置かれた各々の時計の針の音だけが、不揃いに響いた。

アイオロスが、小さく息を零して立ち上がった。ミロの体が軋んだベッドに小さく揺れた。

「飯くらい、ちゃんと食えよ。お前まだチビなんだからな」

アイオロスの温かい手が、ミロの髪をかき混ぜた。いつもと変わらない温かさに、何故かミロの目は痛くなった。

「…やつてないつて言つてるものをどうするんだよ…」

アイオロスの手が止まつた。

「いいや、お前らはやつた。つて胸張つて言うしかないだろう」「そんなことしたつて、あいつらはやつてないつて言う。堂々巡りだ。やるだけ無駄だ」

「そうだな。お前がそんないじけてちや、無駄だな」

アイオロスはゆつくりと手を動かした。

「まず、飯をちゃんと食つて、寝て、アイオリアや他のおトモダチとも今までどおり仲良く喧嘩して、走り回つて、沢山バカ笑ひして……。あいつらがふてぶてしくやつてないつて言い張るんだつたら、お前はそれ以上に堂々として、なにふざけた事いってやがる観念しろ！」と指差してやるんだな」

ミロは、黙つてアイオロスの声を聞いている。

「やられて凹む奴がいるから、やる方は付け上がるんだよ」

アイオロスの声は、とても穏かだった。

「やり返したつて変わらないじゃないか」

ずつと思つていた事を口にした。自分が、何をどう嫌だと主張しても、周囲は変わらなかつた。

「パーカ。凹まなかつたらつて言つただろう？ お前、しょつちゆうチビだとか顔のことで凹んでるじゃないか。凹んだ奴が何をどう嘯み付いてきたつて痛くも痒くもないさ」

ミロの目は、一段と痛んだ。もう喋るのは止めよう、と思つたが、止められなかつた。

「凹んだつてわかつて、なんで止めないんだよ」

「人間だからだろ？ 人間は、誰だつてどこかで誰かより強かつたり、頭よかつたり、綺麗だつりしたいのさ。それ自体は悪いことじゃない。だから、科学は進歩するし、美味しい料理は食えるし、クールな音楽も生まれる。それはもう、変わらない。お前が、お前をからかう奴らに、その人間の根本的なものを捨てると言つたつて、はいさうですか？ ごめんさい、

と捨てられるわけ無いだろう？ お前が凹まなきやいいんだよ」

「全部捨てろなんて言つてない。誰にだつて言われて嫌な事はあるだろ！ それだけを止めるつて言つてるんだ」

「だつて、お前、努力してないじゃん。」

チビがイヤだつて言う割には今も平気で食事抜いてるしよ。女の子みたいだつて言われるのはイヤだつていうくせに、真つ暗にした部屋に一人でいつまでもうじうじして。言う方だつて、嘘はいつてないつて言いたくなるだろう」

アイオロスの呆れた声に、ミロはハツとなつた。ハツとしたが、その通りだと認めるのは堪らなく嫌で、言つた。

「仕方が無いだろう！ 本当に誰とも話したくなかつたし、食べたくなかつたんだから！」

「はいはい。いくらボイコットしても無人島に居るでもなく、その気になれば食事も出来る人の声も聞こえるつてのはなかなかぬるいくつていい環境だよな」

痛烈な一言だつた。

ミロの目から、一気に涙が溢れた。

嫌な思いをさせていた事が、分からなかつたわけじゃない。気付かなかつたわけじゃない。ただ、自分の方が、もつと辛くて苦しい思いをしているんだと、アピールして優しくされなかつた。もう辛い目や、悲しい目、悔しい目を受け入れたくないと叫んでいた。

「まあ、今泣けるんだつたら大丈夫だろ。お前、そのうちデカ

クなるんだらう？」

「ア……カク、なる！」

泣きじやくりながら答える。

「まあ、後五十年もしたらどんなに可愛がつて欲しくても、女の子みたいな可愛い、なんて誰も言つちやくれないぜ。クソ爺が閨の山だ」

アイオロスのひどいコックニーに、ミロは涙を零しながら噴出した。一度笑うと、もつと涙が出て止まらなくなる。必死でゴシゴシと目をこすり、泣き止もうとするミロに、アイオロスは言った。

「泣いてみんな出しちまえ」と。

頭を柔らかく、何度も撫でながらアイオロスは円に言った。

それなので、ミロはやけつぱちになつてわんわん泣いた。

生まれて十四年、こんなに泣いた事はない程に。

「どーもすみませんでした」

月曜の朝、開口一番にミロは、アイオリア・エインスワース、エドマンド・ハウ、ウイリアム・バンキン、マイケル・ガーネットに深々と頭を下げた。

四人は互いに顔を見合わせ、恐々とミロを見た。

昨夜、食事を終えて部屋に戻つてみると、盛大に泣いているミロとそんなミロの頭を撫でているアイオロスが居て腰を抜かしそうになつたのだ。

『あ、今詰まつた配管を掃除しているだけなので気にしないように』

いつもふてぶてしい感じを漂わせているト級生が、コホン、と一つ咳払いして真面目腐つて言う様に、初めて困惑と言つて色を見て驚く。

そして、恐々シャワーを浴びに行き、泣き疲れて眠つたのか静かになつたミロを起きないように静々布団に潜り込み、今の朝がやつて来たのだ。

「それは、今まで一週間、散々俺たちを無視してきた事に対する謝罪だと思つていいんだな？」

他の三人の視線を受けて、代表としてアイオリアがミロに確認する。

「……うん……そう。不機嫌な顔たくさんして、嫌な思ひさせてごめん」

腫れぼつたい目のまま、ミロはもう一度丁寧に頭を下げた。

「自分が悪い、と思つているんだな？」

「うん。思つてる」

「……つのやろう……！ 心配かけさせやがつて！」

アイオリアがミロに掴みかかつたのを合図に、エドマンド、ウイリアムがその上に重なつた。マイケルまで、二、三秒逡巡した後、眼鏡を外して少年肉団子の上にダイブした。

「ギア！ ギアアップ！ 重い！ 重いよ！」

と叫ぶミロの声と、幾重にも少年達の笑い声が部屋に響いた。

食堂では、先週とは打って変わって柔らかな雰囲気、同室の少年達と笑いながら食事をしているミロの姿に、皆一様に驚いた。次々に、機会を掴んではそれぞれミロに話しかけ、彼の落ち着き具合を納得した。

カミュがミロと仲直りしたのは、それから三日が経った夜のことだった。一度心が決まれば誠意謝罪するミロのこと、同じハウスかつ同じサークルで三日もかかったというのは異例中の異例で、二人が仲直りしたころにはクラス的全員が普通の関係に収まっていた。遅れたのは、カミュの方が徹底的にミロに会わないよう避けていたからだ。隣には常にポールが睨みを利かせていたし、声をかけようにも常に背中しか見えないカミュを呼び止めるのは、流石のミロにも勇気が要った。

三日目、木曜日の練習後、カミュは最後まで片付けをするミロを待っていた。そうして、遅くなって申し訳ないが、出来れば仲直りしたい、と真面目くさってミロに申し込んだ。

ミロは勿論、アイオリア達にしたように盛大に謝ったが、何があつたのか、というカミュの問いにはひたすら黙秘を続けた。カミュは相変わらずのミロの黙秘癖に溜め息をつき、どうしても話せないような重大な事件が起こったのなら、あの変わりようも仕方なかったのかも知れない、と苦笑した。

「でもさ、どうして『遅くなってごめん』なんだ？ 関わるな

って言ったのオレだし、オレ、てつきりカミュはその言葉を守ってるんだと思つてただけど……」

ミロがふと気がついた疑問を口にした瞬間、カミュの頬には見る間に赤みが差した。ミロが驚いてその表情の変化をみつめるうちに、カミュは彼にしては珍しく、ひどくぶつきらぼうに叫んだ。

「君が僕の夢に出て来て余計なことをするからだよ！ おかげで、頭を切り替えるのに三日かかったんだ。…正夢になつたら困るから言つておくけど、君はあと数年で、僕の背を追いつ越して酷いナンパ男になるんだ！」

そうして、これもまたカミュには珍しく、呆気にとられたミロを残し、さつさと寮に向かって歩き出してしまったのだ。

取り残されたミロは思つた。

『数年後、カミュの背を追いつ越す』

悪くない。それは、とても悪くない未来だ、と。

一ヶ月が経った。

様々なやり取りがあつた後、核で頑なな態度を崩さなかつたナイジェリアンは、サリー州のパブリック・スクールに転



校した。他二名も学校を移った。その後は核を失い、自然とバラバラになった。

ナイジェリアンのあの均衡を失った誇り高さが、何か、彼自身の歴史やコンプレックスをカバーするために装われたものなのか、そういう教育を受け、英国に来てそれを貫いていただけなのか、結局ミロには分からなかったが、今はそれでいいと片付けた。

四月も後半に入り、来月のスピーチデイの準備にそろそろと学校が沸き立ち始める。スピーチデイは、毎年サマータームのちようど中間にあるスピーチ（学期の中休み）前におこなわれるオープンスクールの日で、一年中で最大のイベントでもある。この日は生徒らの両親や親類など日頃はなれて暮らす親族が集まり、学校の全ての施設を自由に見学して歩き、生徒の一年の学校生活の成果を体感する日だ。

生徒達の間でも、誰が来る、誰が来ない、恥ずかしいから来て欲しくない、などと家族の話題が頻繁に上るようになる。「ミロのどこはお父さんとお母さんと妹が来るのか？」

昼食に、エドマンドがミロに尋ねた。

「うん。あと、まだよく分からないけどイタリアのおじさんやおばさんも来るみたい」

「すげー。何人来んの？」

「わかんない。けど、来そうなの数えたら十人くらいにはなるかも」

「うへー。でも、お前の親類ならみんな美人っぽいからいいよなあ……俺んちのかあちゃんなんか、すっげえアスでさあ……」  
こんな会話がそこかしこで聞こえる。

ミロは、先月から、サガ・チエトウインドに誘われて乗馬クラブに入っていた。無断欠席を謝りに言った際に誘われたのだ。今も、どうしても意識しすぎて体が固くなったり、赤面したりと忙しいが、馬の背中に揺られながら会話をする時だけは割合に普通に会話が出来た。下手に視線を合わせないのがいいのかもしれない、とミロは分析している。

広い馬場の境界にはジャスマシンの生垣が長く続いている。寝ぼけ眼のまま背伸びしているような、あちらへこちらにと気ままに新芽を伸ばす鮮やかな黄緑色の蔦。これが、盛夏近く、ぼうぼうに伸びて絡まり出したら、ポランティアとして乗馬クラブのメンバーは年に一度、園芸家のハイディ・トーマス氏の指導の元、垣根の刈り込み作業を行うのだ、とある日ゆつくりと馬場を廻っているときにサガはミロに楽しそうに教えた。

「私はそれまで園芸用の鉄なんて手にした事がなかったから随分苦労した。でも、その後に素敵なアフタヌンティーがセッティングされていて、とても楽しかったよ」

につこりと微笑みながら、楽しそうにミロに話すサガを見て、ミロはじんわりと心の奥が暖かくなるのを感じた。この人には、いつもこうして笑っていて欲しい。幸せであって欲しい、と。

すつと、風が頬を撫でる。

白く、柔らかな曲線を描く頬にこの風のように触れてみたい、と思つたとき、体はもう動いていた。ミロは腕を伸ばし、並走するサガの頬に指先を伸ばしていた。

「サガは、誰が好きなのがいる？」

頬に感じた微かな接触、そのやさしい触れ方に、サガは咄嗟にアイオロスを想い体温を上げた。そして、聞こえた言葉に耳を疑う。今、彼は、なんと言つたのだろうか？ と。

ミロは、仄かに染まつた頬で自分を凝視するサガを、やはり見詰めた。

「少し、休もう」

絞り出されたサガの言葉に、初めてミロは自分がとんでもない事をしたのかもしれない、と思つた。

ジャスミンの生垣に添つて進んだ。木戸にまで辿り着く。この木戸を抜けてさらに進めば湖がある。サガは、木戸を開けて進み、馬場から見えない場所まで来ると馬から下りた。そして、花の終わつたハルニレの胸に手綱をゆるく回す。ミロも真似て同じようにした。

もしかしたら、怒られるのだろうか？ 変なこと言うなつて…。

ミロは、サガの胸中が分からず、唾を飲み込んだ。

「好きな人がいるか、という話だったね」

静かに、サガはミロに尋ねた。ミロは緊張の面持ちで頷いた。聞きたかつた事に嘘は無い。サガは、静かに答えた。一言、「…

いるよ」と。

ミロは、一瞬、そうなんだ…と納得しようとする心を奮い立たせて聞いた。

「それは、家族とか、そういうんじゃないかと…物凄く好きな人つてこと？」

「そう。君が聞いたのも、そういう意味だろうか？」

ミロは、きゆつ、と唇を噛んだ。誤魔化そうと暴れる心に必死であがらう。

「あの…」

これ以上聞くのは失礼な事なのかもしれない。けれど、知りたかつた。

「その人は、その事を知っているの？ サガが、物凄くそういう意味で好きだつて事」

サガは、少し微笑んで言つた。

「知っているよ」

「じゃあ、それは、両思いつて事？」

ミロは、目を見張つて尋ねた。

「そう。……君も、よく知つている人だよ」

サガからは、そんな熱を感じたことが無い。それに自分が知つている人間で、学校の中や、街にそんな風な人がいたと思えない。ミロは記憶を辿つた。ミズ・クレジオ。あの人は独身で、とても優秀な成績でパリ大学を卒業したときにいるけれど……その他に自分の知つている独身の女性は直ぐには浮かばない。

「全然、わからないや……」とミロが呟くと、

「君は？」

と逆に質問された。ミロは、ぐつと背骨に力を入れた。

「サガが、そういう風に、一番、特別に好きだ。だから、今まで普通に喋れなかつたり、これからも直ぐにはなおらないかもしれないけど、でも、好きだから……」とめんなさい。

今まで嫌な思いをさせていたと思けど、もう少し待つてくたさい。あと、そういう風に、物凄く好きでいてもいいですか？」背中にびつしより汗をかきながら、ミロは言い切った。達成感と羞恥心でまぜこぜになった頭でミロは二つ年上の先輩を見上げた。

サガは、先ほどまで微笑ましげにミロを見ていた眼差しと別に、少し真面目な顔でミロに聞いた。

「勿論、人が誰かを好きになるというのは自由なことだから、私に否やはないよ。けれど、私は君には同じ種類の感情を返せないから、君自身が辛い思いをするんじゃないのか？」

ミロは、一瞬考えた。

「……えっ、なのかな……？ 凄く好きだつて事も相手に伝わらなかつたら、そっちの方が悲しくないかな……。現に、サガは最初オレに嫌われてるかと思つたつて……アイオロスから聞いたし……カミュも、その態度は誤解されるつて言つていたし……誤解されるより、ちゃんと知つてもらつた方がいい」

考え考え答えたミロに、サガは微笑つた。

「……そうだね。有難う。嫌われていた訳じゃないと分かつて、

本当に嬉しいよ。」

サガの匂い立つような微笑に、ミロの顔は火が灯つたよよに赤くなつた。汗で滑る指をさらに握り締めて大地に立つ。

「それから、一つ、御願ひしてもいい、ですか？」

「どうぞう。」

「………ほつぺたに、キスさせて、くださいっ！」

サガは、一瞬だけ目を張つたが、直ぐにいつもの表情に戻ると、ミロの肩にそつと手を掛けて屈んだ。

ミロの目の前に、いつも見上げていたばかりだつた北欧の緑した瞳があつた。

ミロは、そつと目を閉じるとサガの頬に唇を寄せ『Da kinnomnatio……』と囁きキスをした。『最初の瞬間から……』と、続く言葉は、音にならなかつた。

「アイオリア！ カミュ！ ちょっと来て！」

突然、ミロにスミス・ハウスの裏庭に引きずり込まれてアイオリアとカミュは驚いた。

ミロの顔は、これまでで二人が見たことも無いほど赤かつた。

「……あのさ、オレ、今、すつげえ恥ずかしい事してきちやつたから聞いて！」

カミュとアイオリアは互いを見合つた。ミロに『恥ずかしい事』など、今更ではないのか？ とそれぞれの胸中で咬いたが、紳士的に声には出さなかつた。

ミロは、アイオリアとカミュの腕を挿んだまま一声上げた。

「今、今日、オレ、乗馬やつてるだろう？ それで、サガに、好きですつて言つて来た。どうしよう！ まだ心臓ドキドキしてる！」

アイオリアはよろめき、カミュは驚きに手で口を覆つた。ミロのあまりの興奮具合に、アイオロスとサガは別れて、ミロの申し出がサガに受理されたのかと考えたからだ。

「サガ、両思いの人がいるんだつて！ しかも、俺がほつぺたにキスしたら、唇にキスしてくれた——」

バカかお前は！ 結局振られたんじゃないかつと、アイオリアは叫び、カミュはミロから散々相談を持ちかけられていたサガに対する『好き』がその程度の事だったのか、と脱力した。

ミロは、級友たちに報告しながら、悲しさを紛らわせた。

凄く好きな人が、同じように自分を好きにはなれないと言つた。それは、とても悲しい。けれど、サガを好きになつたこと、そして、サガに両思いの相手がいると知つてもまだ自分の思いがサガにある事、精一杯の返礼をサガから貰つた事、その一々を、大切に記憶しておこう。

笑いながら、笑われながら、ともすれば涙が滲みそうになる気配を気力で吹き飛ばし、ミロは親友に喋つた。どんなに

サガが自分にとつて素晴らしい人だったかを。

その晩、スミス・ハウスに猛威を振るつた風邪に遅れること一ヶ月、ミロは高熱を出して寝込んだ。ひよいつと様子を  
見に来たアイオロスは、一言  
「ドンくさいヤツ」

とだけ言つて頭を一撫でして去つた。

もうすぐ、早咲きのライラックが香る…。



Title : THE UNRETURNED LOVE

Author : Seigi Sagame and Wakai

えいこくりょうせいものがたり

英国寮生物語 (3)

薪朝文庫

B - 5 - S



平成一七年五月三日 発行

著者 祥曲星祈  
・ 和海

発行者 高橋 鼎

発行所 無社 仔牛ともぐら舎

<http://moo-and-mole.com>  
[info@moo-and-mole.com](mailto:info@moo-and-mole.com)

定価 九八〇円

乱丁・落丁本は送料当舎負担にてお取り替え致します。

印刷・製本 緑陽社

Printed In Japan

ISBN4 - 10 - 208802-4 CO197